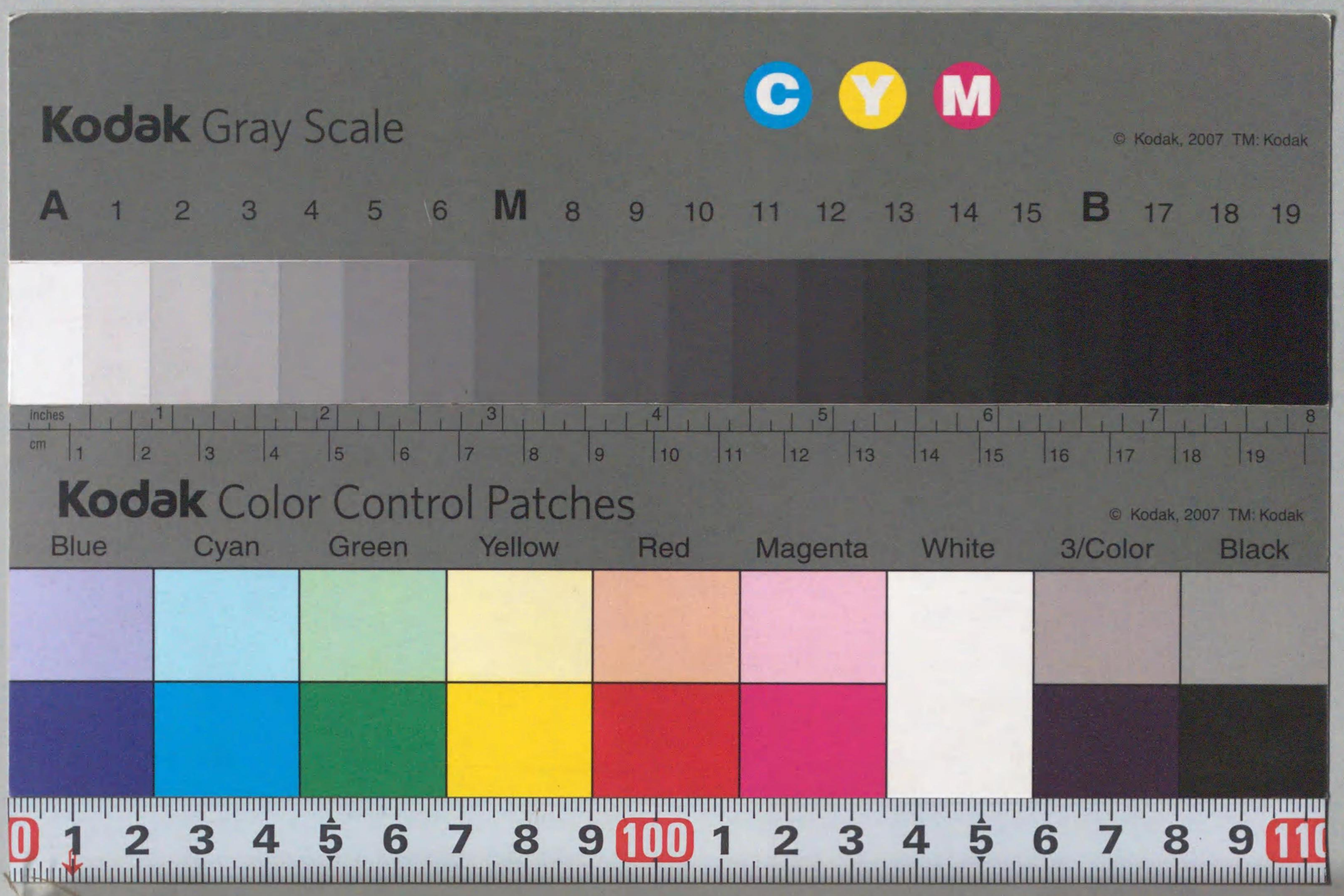

Kodak Gray Scale
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
Kodak Color Control Patches
© Kodak, 2007 TM: Kodak
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8 9 110

795.
H633t2
W

第二十一世本因坊秀甫対

大斜定石 上巻

日本棋院藏版
誠文堂新光社刊行

最近の名人本因坊秀哉師

大橋
本因坊秀哉名人の近影
國立國會
38.8.14
圖書館藏書
贈寄
瀬越憲作殿
617853

自序

曩に『名人圍碁全集』七卷を上梓して江湖の絶大なる支持を獲たのであるが、其の第一卷が世に出たのは昭和五年五月、今を距る八星霜である。爾來碁書の印行さるゝもの頗る多く、其の講述の內容、研究の對象としては布石、定石の專門的批判、手筋の解剖、死活其の他の詰物は固より進んで侵分の計算を明らかにし、或ひは新布石を論じ、手割を講ずる等、眞に微に入り細を穿つて所謂掻い處に手が届く有樣である。最早圍碁に關する限り題目は總べて盡されたかの觀がある。予の修業時代と比較し、今更乍ら隔世の感無きを得ない。

其等の碁書の大部分の版元たる誠文堂主人が予に求めるに『續名人圍碁全集』の編著を以てすること久しく、機會ある毎に予に慫慂し、寧ろ強要したのであつた。其の熱誠に動かされて予は應諾した譯であつて、前述の次第であるから何を以て內容を盛る可きかに就いては實は少からず困惑したのであるが、全集讀者多數の切望に依り先づ『大斜定石』二卷を完成し、次いで古今名局解說二卷及び予の打碁選集二卷を以て續篇に充てる事とした。就中大斜定石に就いては最も苦心したのである。是を省略すれば續篇の刊行は恐らく數年早かつたであらう。其の點、誠文堂主人の鞭達と寬容は予の私かに多とする所である。予としては大斜定石の最初の定本を纏め、正續全集を完了して積年の義務を果したる如く感じて居る次第である。

昭和十二年首夏

本因坊秀哉

凡例

一、『大斜定石』と明確に呼ばれぬ迄も、大斜走掛けの型は可成り古くから行はれて居るのであつて、大斜百變と一口に言はれる程に概括されるに至つたのは最近の事である。然して未だ定石として體系を具へるには及ばなかつた。

一、本書は組織的に研究された大斜定石の最初の定本たる事を期した。從來部分的に斷片的に所謂大斜百變が檢討され、又講述された例は絕無としないが、其の中には根本的に重大なる誤りを犯した假說に基いたものも尠くなかつた様である。本書に於いては夫れ等の謬說を一掃し、新奇を衒はず、勉めて穩健に、正確なる研究と主張に終始した。

一、大斜定石に於いて三間夾みの有る場合と無き型とは嚴に區別さる可きである。三間夾みの大斜走掛けは下卷に收める事とした。

一、原則として右上隅と左下隅とに圖を示す事は正編に倣つた。上下の方向を異にするのは研究上の習練に便した積りである。

一、●◎等の符號は特に指摘した場合以外一般にいろはの順序に從ふ可きこと正編に同じい。

一、所謂定石を以て目せられるものでなくとも興味ある變化、有益なる手筋の含まれる型は、定石と竝べて揭げた。從つて本書は通卷熟讀してこそ初めて組織的の智識が得らる可きである。

一、大斜定石は上下二卷を以て完結の豫定であるが下卷は續篇の第三卷として刊行される事になつて居る。要するに本書は高級碁人には勿論、初學者にも容易に理解さるゝやう編輯と排列には相當苦心した積りであるから其の心を以て研究し行かれたらば必ずや自得せられるものがある可しと信ずる。

大斜定石

上巻

—内容目次—

▽大斜定石の根本……一
▽手抜きの場合……二
▽黒一と竝ぶは古風……三
▽黒一と飛頂ける第一歩……八
▽黒一の尖頂けは消極的……九
▽黒一と飛頂ける型……一一
▽黒十五迄の通型……二五
▽白一と行出す……二九
▽劫争の趣向……三四
▽黒一と行出す基本型……四〇
▽黒一と約込むは權道……四〇
▽黒一と上を粘ぐ……五二
▽基本型の例外……六一
▽『嵌め手』に近きもの三種……六三
▽白一と掛けるは有力……八二
▽黒二白三共に本格的……八六
▽黒一と頂けを先にす……八七
▽黒一と下る……九〇
▽従來の謬説……九一
▽白二と約へるは無理……九三
▽白六と尖む筋……九七
▽黒三と下る新工風……一〇七
▽黒一、三と切違へる型……一二四
▽黒一と夾頂ける……一二五
▽白二と引く……一二六
▽黒一、三と綽粘ぐ型……一三八
▽白一の頂けを先にする……一四七
▽白一と切りを入れる……一五三
▽白一と行びる型……一五六
▽白の最善の努力……一七一
▽黒二と行出すが積極的……一七三
▽白一と行出す、百變の基礎……一八五

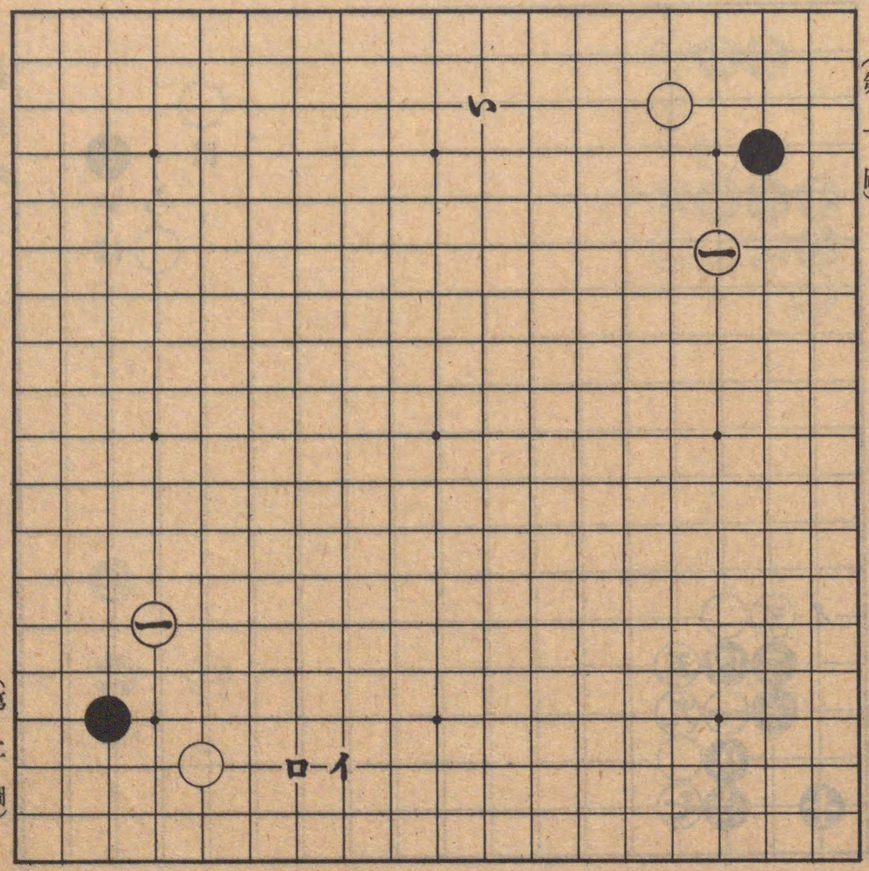
大斜定石

上巻

第一圖　小目の位置にある黒に對し小斜走掛りの白よりして一と加へる高壓を『大斜走掛け』と稱し、或は略して『大斜』とも呼びます。此の黒白三著の形を基點とする諸種の變化を一括して『大斜定石』また『大斜百變』などと總稱します。

大斜定石に黒いの三間夾みがある場合と然らざるものとあり、是は勿論嚴密に區別さるべきであつて所謂百變の場合は後者に屬します。

第二圖　黒イの二間夾みに在つては白一と大斜に掛ける例は殆ど無く少くとも定石と目さるべきではありません。黒ロの一間夾みに於いては絶無として宜しい。



（第一圖）

（第二圖）

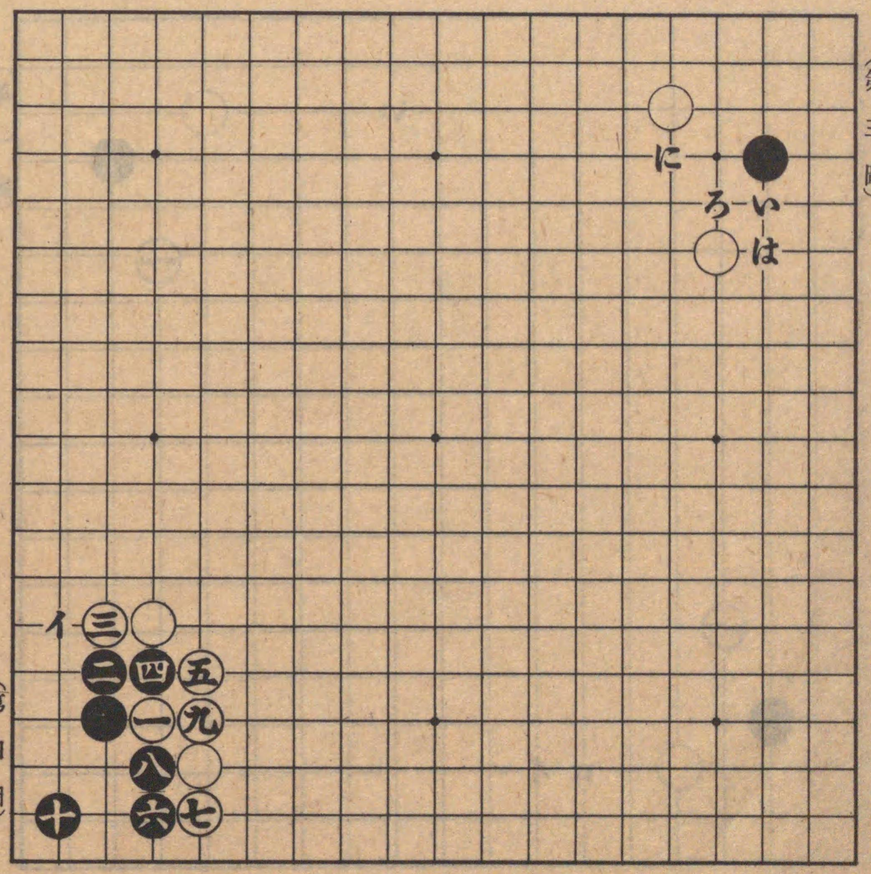
第三圖　大斜百變の岐れる所は黒**い**、**ろ**、**は**、**に**と四様の受方から出發し、他に手抜の場合があります。

四種の受方に就いては順次述べますが、先づ手を抜いた形から解決したい。

第四圖　黒が手を抜いた時、白から打つには斯く**一**と尖頂ける一手であります。

黒**四**、**六**を先後すると、卽ち**四**にて直ちに**六**に打つと白**四**と粘がれる惧れがあるので必ず**四**、**六**の手順に依るべきものとする。

黒**十**の後に白**イ**の下りが何時でも利いてゐる所に黒の不滿があつて一般に黒としては次圖に及びません。



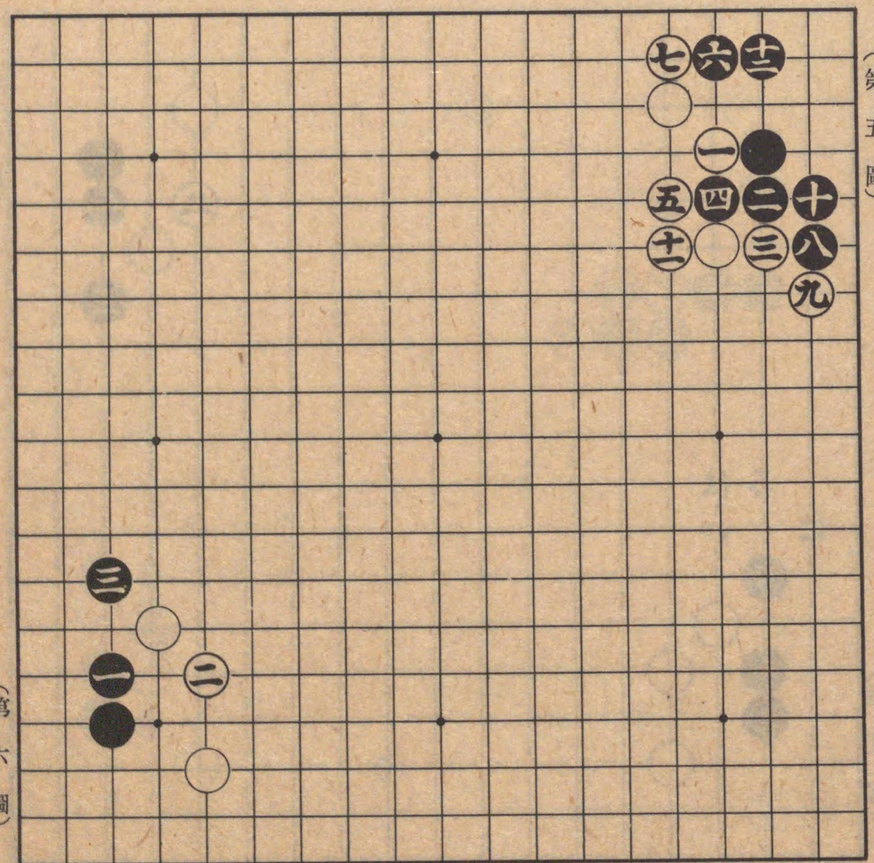
（第三圖）

（第四圖）

第五圖　黒**八**、**十**と綽粘ぐ變化。白**十一**を餘義無からしめる所に黒**四**の出を先にした效果が現れます。

黒**十二**と補つて後手である事に前圖と變りは無いが實質的には明らかに本圖が優つてゐます。但、**十一**の斷點を黒から窺ふ意味は自然失はれたのである。

第六圖　本論に入つて黒**一**の竝びから說く事とします。この**一**は頗る畏縮した形であり古風として一般に非難されますが固より絶對に排斥さるべきではない。白**二**黒**三**となり何よりも簡明なる點、所謂大斜百變の煩を避ける意味に於て今日なほ往々用ゐられる所以であります。



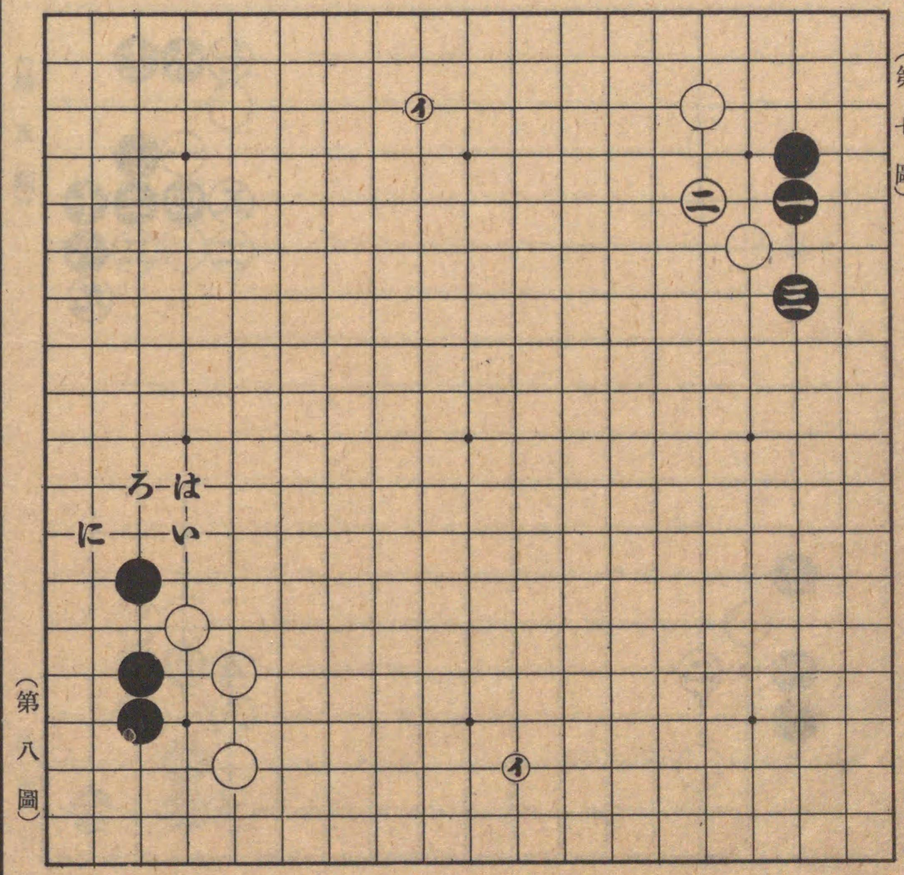
（第五圖）

（第六圖）

第七圖　白二に就いては第十一圖に示される別法がある。斯く二と尖めば黒三と飛んで一段落であります。

強ひて言へば次に白は㋑の方面に拆いて形勢を張るか、若しくは前にこの㋑方面に拆きがあるのでなければ、卽ち單に白二黒三となつた儘では大斜に掛けたのも意義を成さぬ事に注意したい。

第八圖　前に白㋑があるものとし或は㋑の拆きを新に加へて後に、白から打つにはいと更に掛けて形勢を張る、ろと詰める等ですが兩者を折衷した形の白はも考へられます。總べて形勢に依り取捨すべく、白いに對しては黒にと應ずる通型である。



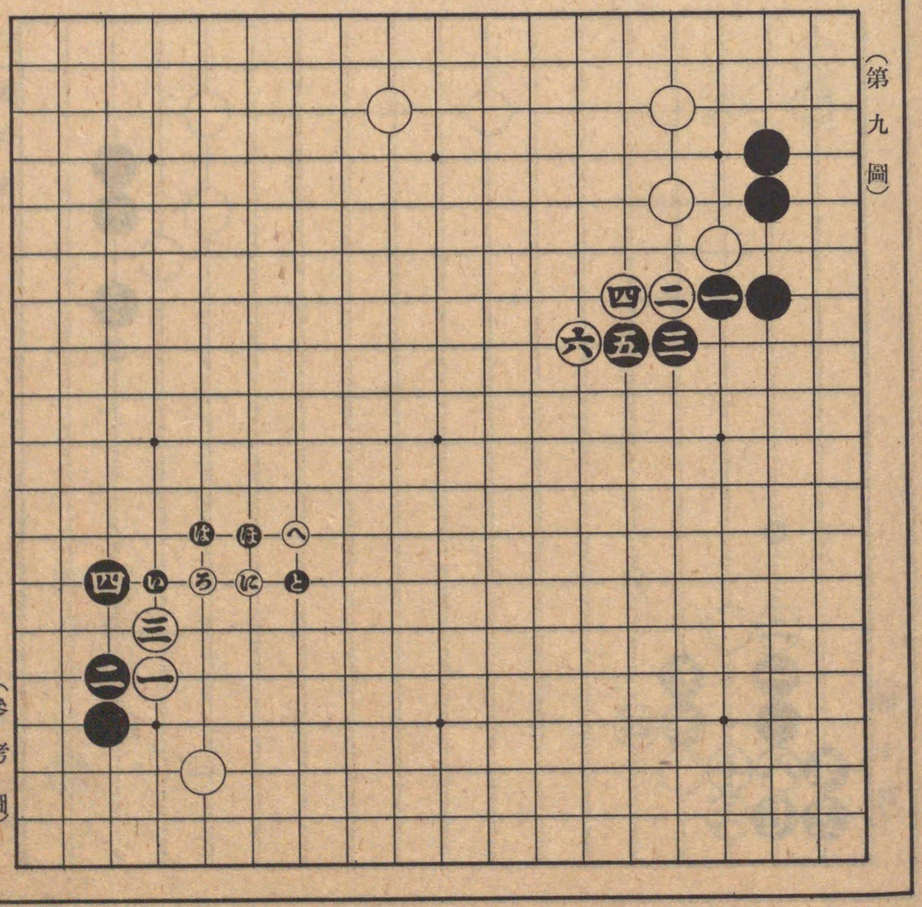
（第七圖）

（第八圖）

第九圖　第七圖に續いて黒から此處を打つものとし、斯く一、三、五と押される事を白は意としない關係が重大であります。

參考圖に於ける如く白一、三、の小斜走掛からは黒四の後、黒ゐ以下が相當嚴しく、第九圖とは白一の位置の移動より生ずる黒との切斷を白は警戒しなければなりません。白一及び三の姿が參考圖では重く虚路が詰まつてゐるに反し、その一、三に匹敵する二著が第九圖では輕い爲に白二、四、六と抵抗して何等不安を覺えぬのである。

この故に第九圖黒一は一般に成立せず此處を黒から打つには次頁參考



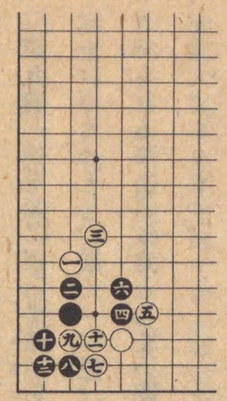
（第九圖）

（參考圖）

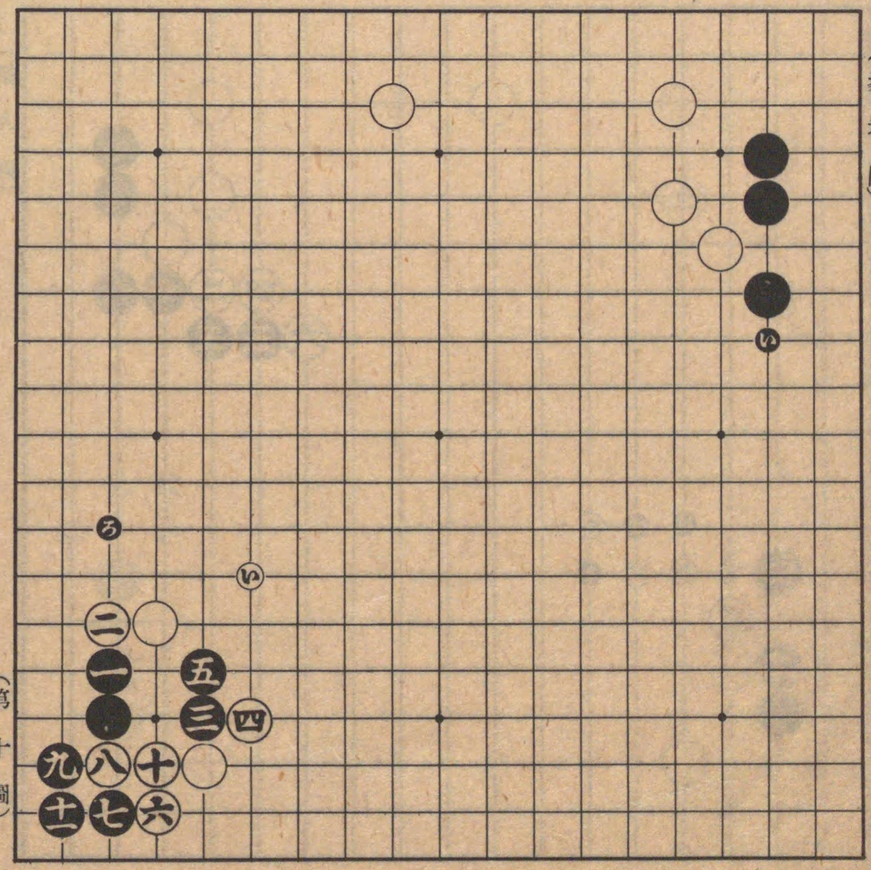
圖黑(い)の並びであるべきものとする。

第十圖　白二と約込む不合理を念の爲に指摘して置きます。本圖は次の別圖との混同に外ならない。別圖に於ける白三と本圖の大斜走掛の白との位置の差違は、本圖黑三乃至黑十一を別圖と等しく運ぶものと想定し、そこで白(い)などと打つても透かさず黑(ろ)と虚を衝かれる不備のある所にさへ現れます。

白二は重く、形としても成立せず無條件に排斥される。



（別圖）



（第十圖）

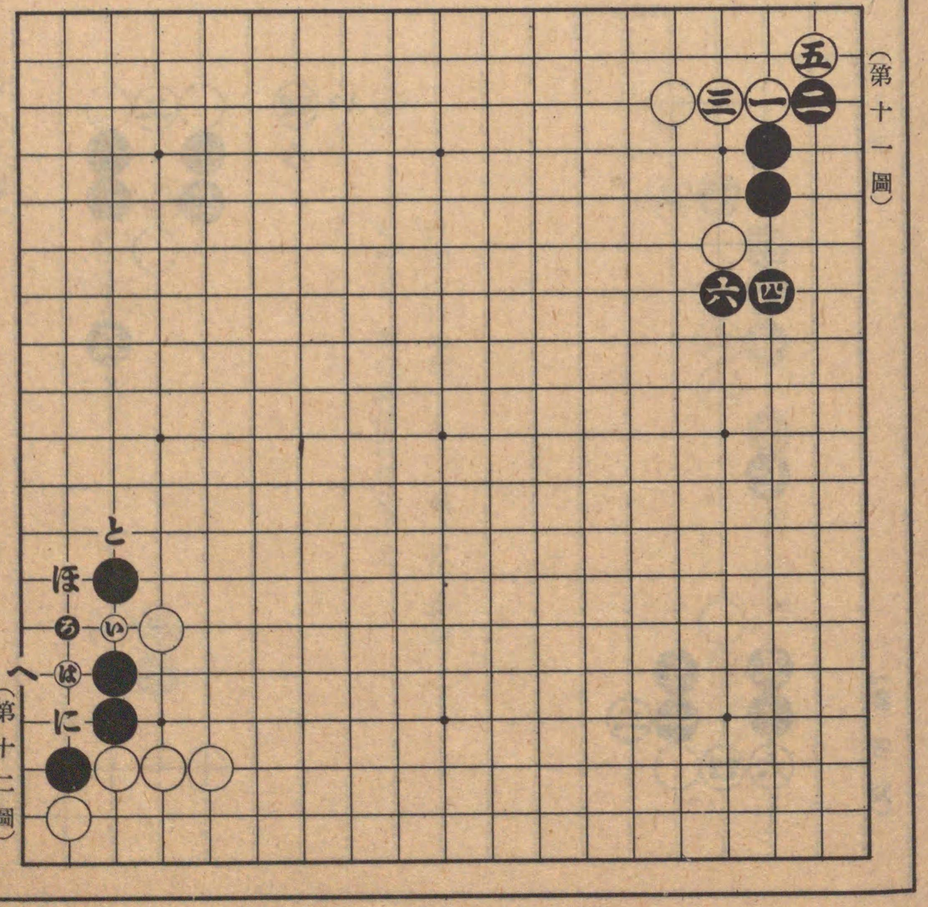
（參考圖）

第十一圖　白一と飛頂ける變化。第七圖に於ける白二の別法です。隅の實利と根據とを主とした點は初めの大斜走掛から觀れば一つの轉向ではある。

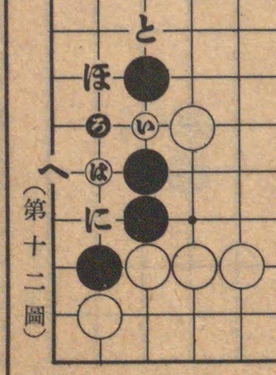
黑二の變化に第十三圖があります。黑四白五共に絶對とされる。殊に五の點を黑に讓るなどは一、三を全然無意義に歸せしめます。

黑六迄で一段落。然しこの六を保留する場合が無いではなく、それに就いては次圖に注意する。

第十二圖　白(い)黑(ろ)白(は)に次いで黑に白ほ黑へ白とのの征關係の成否に依りこの征が成立する時は前圖黑六は一般に省略し得ません。



（第十一圖）



（第十二圖）

第十三圖　黒**一**と飛頂ける事も出來ます。白**二**黒**三**共に絶對である。

白**四**を一路左の**い**に進め、また上邊左方の具合に依つては**四**にて高く**ろ**と構へる場合も無いではありませんが、黒**五**は白**四**と圖の如く在る時には斯く控へるを適切とする。

白**四**が**い**の際は黒も**五**を一路進めて**イ**が成立します。本圖は次の參考圖と區別されねばなりません。

參考圖　初め黒**一**と飛頂け白**二**と綽ねる型が後に說く樣にある。

本圖の白**二**と第十三圖に於ける白**四**の位置の異同に注意し、黒の堅きに接する本圖白**二**が黒**七**を容るすに反し第十三圖の白**四**、**い**、**ろ**等何れも參考圖の白**二**より合理的であり働きも大なる點を思ふべきであります。

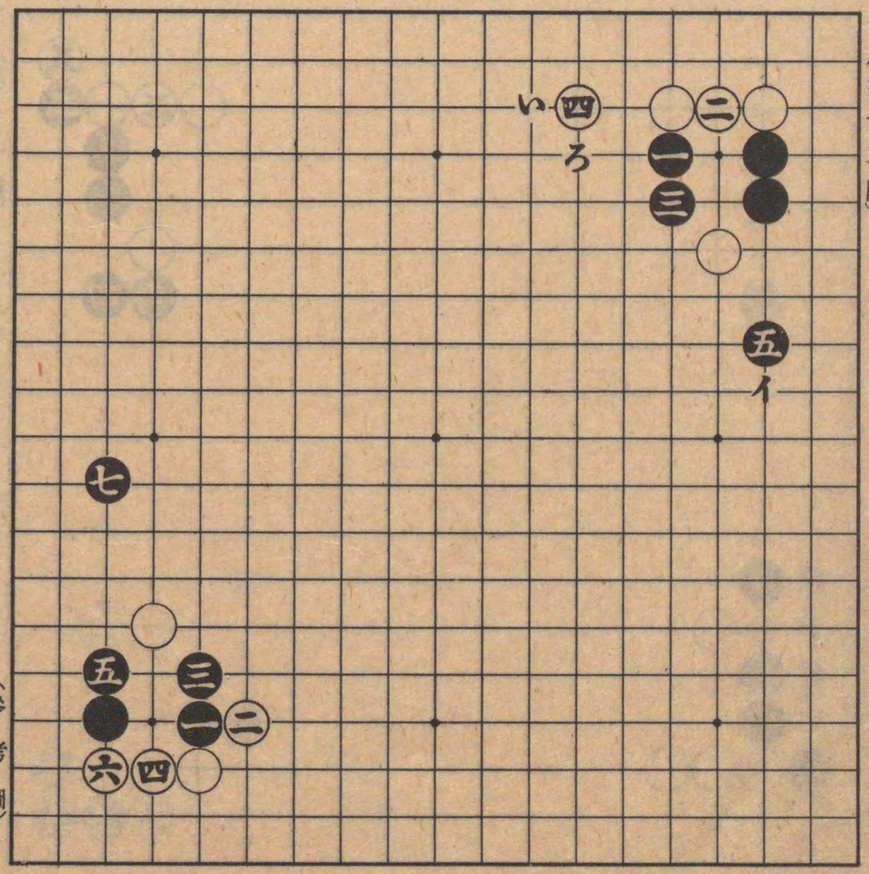
第十四圖　黒**一**と尖頂ける型。これも大斜百變の複雜を避けて簡明なる反面、消極的態度である事は否定されません。

白**二**にて**三**に下り參考圖白**一**の一間夾に歸する型は全集互先定石に詳說したから玆には省略したい。

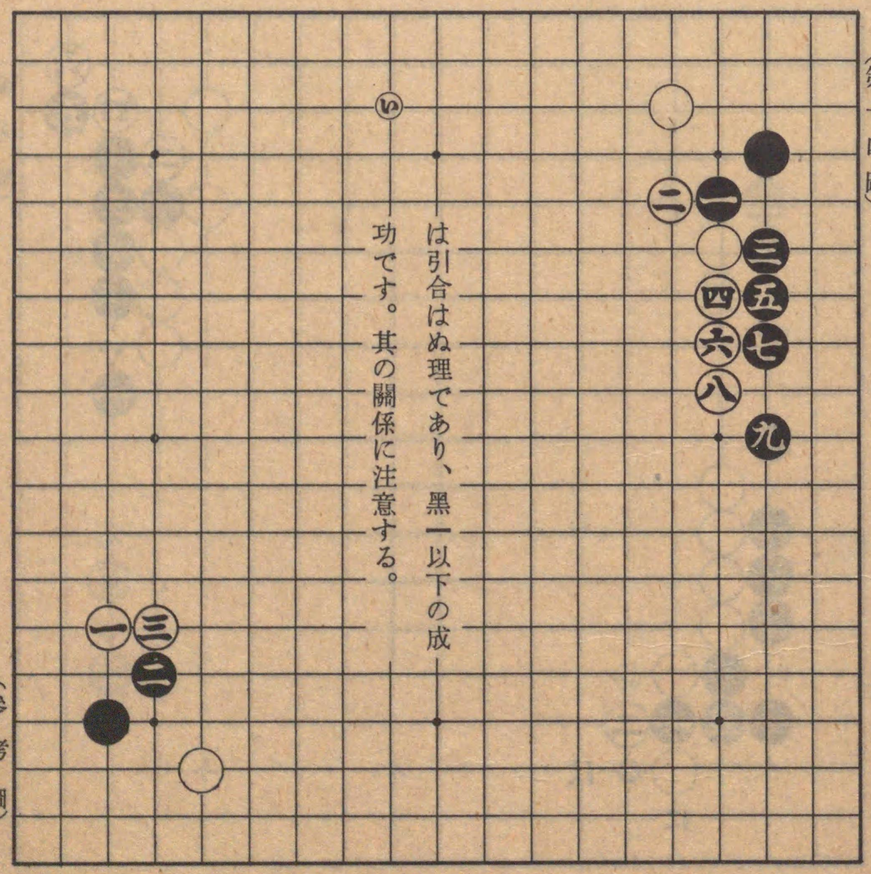
黒**三**、**五**、**七**と押して**九**と飛ぶべく次頁參考圖の誤りを警めます。

黒**九**に次いで白は**八**迄の勢力に應じ㋑と拆いて形勢を張る。㋑は必ずしもこれに限りませんが、この方面に拆く餘裕が無い場合には白も本圖

（第十三圖）



（第十四圖）

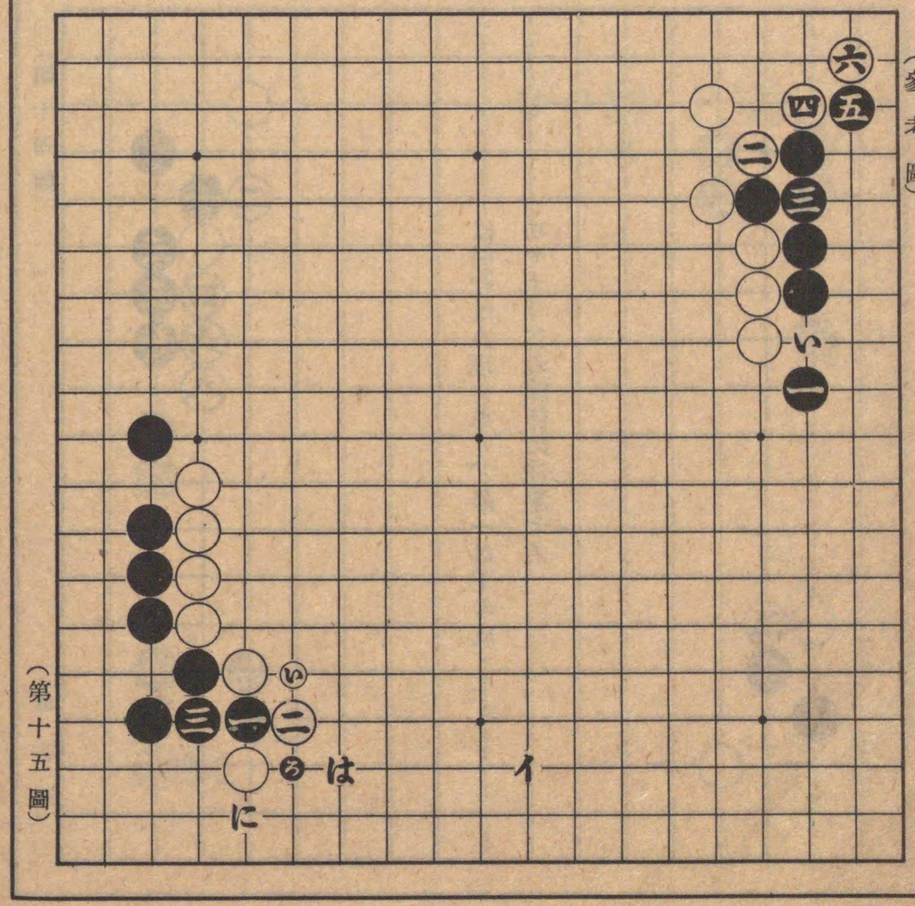


は引合はぬ理であり、黒一以下の成功です。其の關係に注意する。

參考圖　第十四圖黑七の手で誤つて斯く一の飛びを急ぐと白二、四、六と二段に約へられ、白**い**よりの出斷りを生ずるので隅に黒は小さからぬ不利を招く事となります。

第十五圖　第十四圖の後、黒一、三と綽粘いで白い黒ろと切る狙ひはあります。然しながら是は**イ**方面の白の拆きの廣狹と時機とにも左右される問題であつて、黒ろ白**は**が必然とされず、黒ろ白**に**と抵抗する可能性も存するのである。

要するに黒一、三は飽く迄も一つの狙ひたるに過ぎません。この點は黒一、三に先だち白から三の當てを急ぐべからざると同様であります。

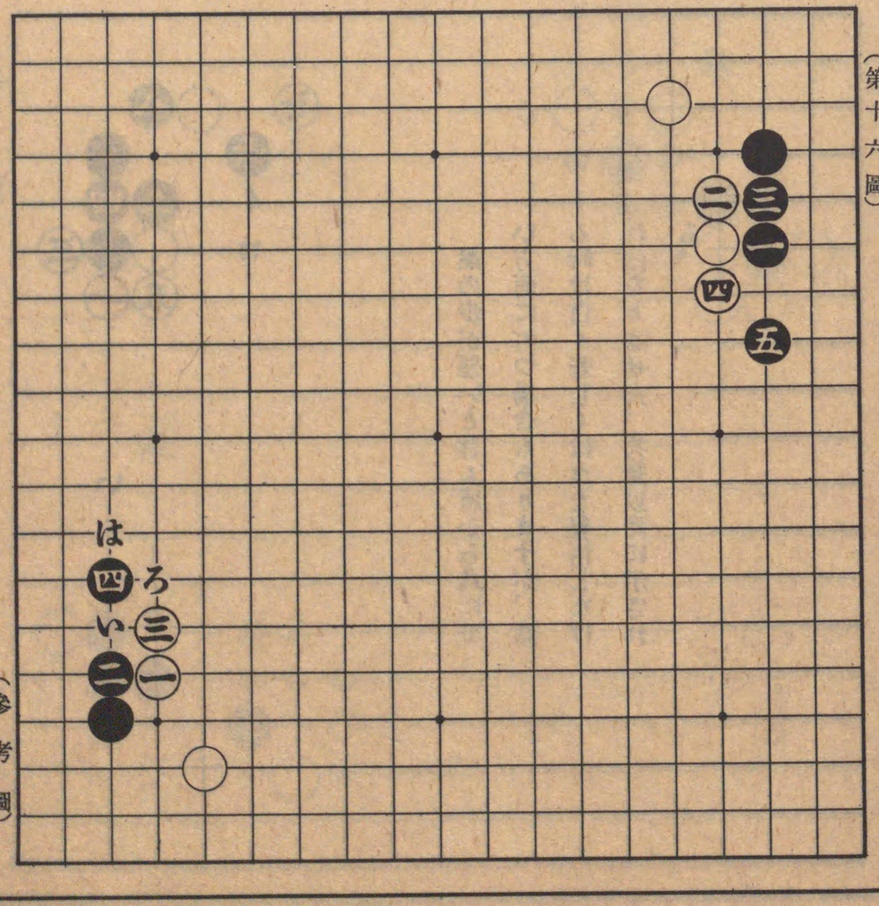


（參考圖）

（第十五圖）

第十六圖　黒一と飛頂ける型。これ亦大斜百變の煩はしさを避けた態度と觀れら本圖の如く黒五迄となれば簡明なる代りには、參考圖白一の小斜走掛に比し黒が一路多く這つてゐる所に黒の理論上の不利が免れず、白としてはそこに滿足を見出す事が出來ます。

卽ち參考圖に於いて黒二と押したる後直ちに黒四と飛び得るものを、更にこの四の手で**い**に押し白**ろ**との不利なる交換を敢てしてから**は**と飛んだのが第十六圖である。參考圖に於ける黒四から黒**ろ**の押しの嚴しさが無いだけでも第十六圖白四までの勢力の大きさが知られるであらう。



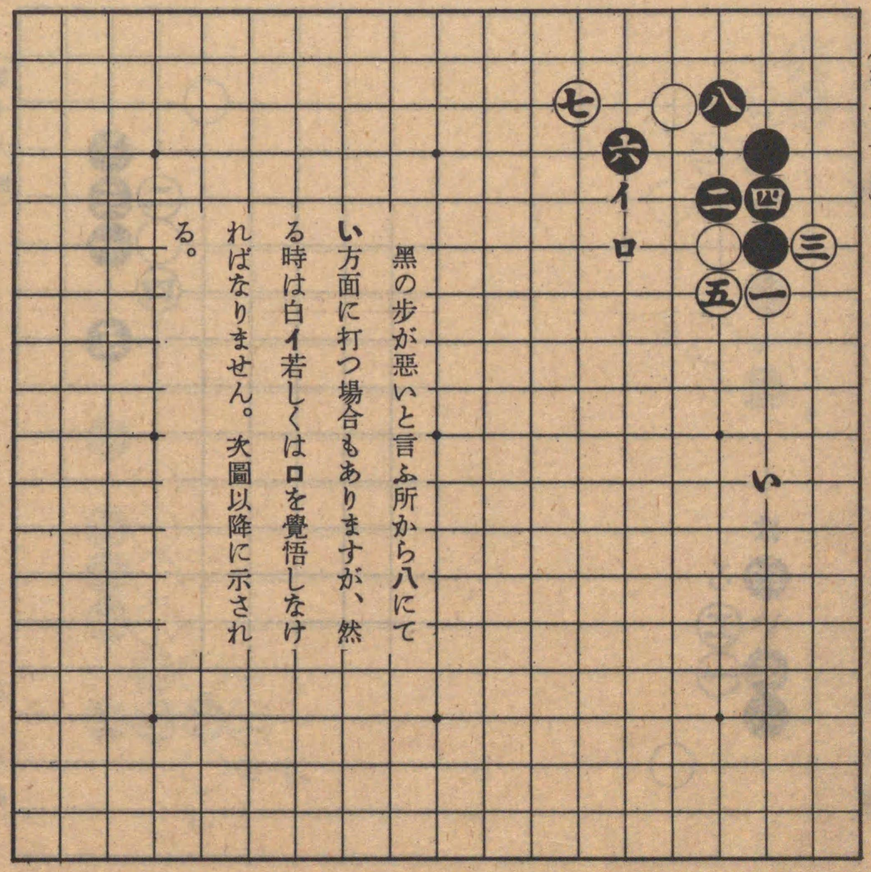
（參考圖）

（第十六圖）

第十七圖　白一と約へる變化。斯く約へるに就いては黒二の手で五を切られる可能性に關しての征關係に先づ注意しなければなりません。第二十四圖に改めて說きますが此の意味に於いては前圖黒一と飛頂ける時否初めに白が大斜走掛を行ふに當り双方に用意あるべきであります。

黒二と應ずれば白五迄は先づ必然ですがなほ第二十二圖參照。

黒六、八にて一段落です。但し黒六白七黒八に就いては夫々第十八圖以降の所說に留意を要する。此の黒八迄、一般には黒の歩が悪い結果としてあり黒四と粘いだ愚形にも其の責の一半は歸せしめられる理。



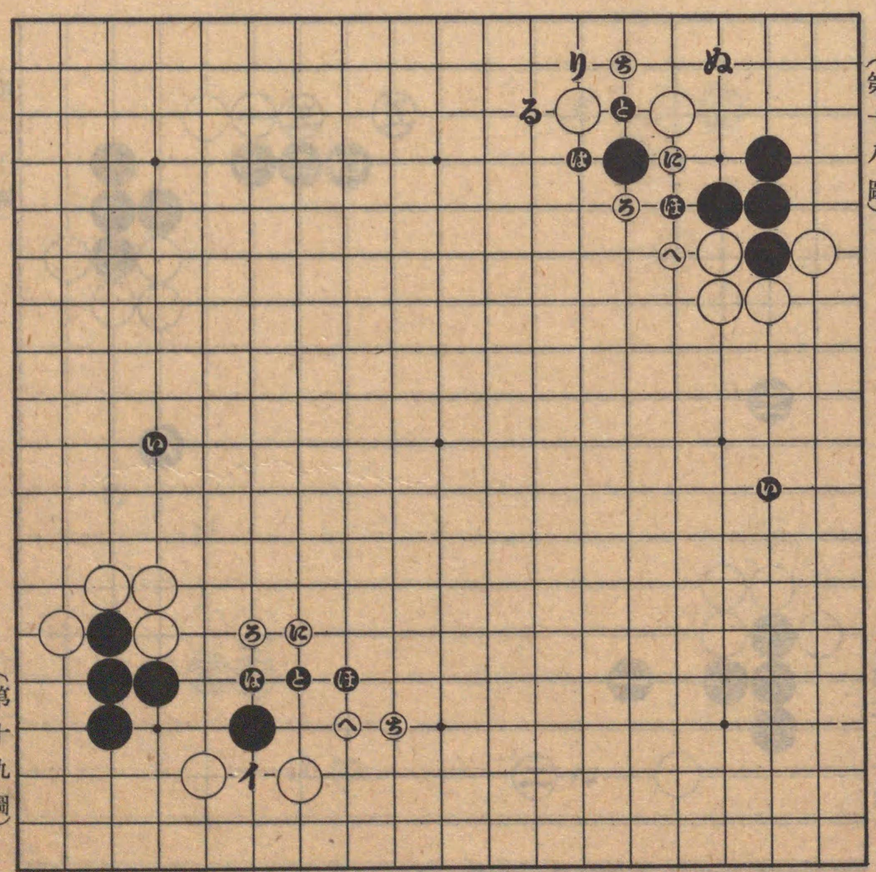
（第十七圖）

黒の歩が悪いと言ふ所から八にてい方面に打つ場合もありますが、然る時は白イ若しくはロを覺悟しなければなりません。次圖以降に示される。

第十八圖　黒いは右下隅方面の配置關係に依る事であり固より是に限らず次圖いも考へられる。

白ろを筋とします。黒はと突出して勢ひ封鎖を嫌ひ抵抗せざるを得ません。白ちに次いで黒り白ぬとなれば隅の黒は無條件で屠らるべく、黒りをるに變へるとなると既に定石の範圍を脫する。

第十九圖　この白ろも成立します。白ちを一路右に飛べば輕い姿である代りには黒イよりの出切りがあり圖のちはその出切りを防ぐけれど形の重い非難を免れぬ、と言ふやうな差です。要するに兩圖共に形勢に依る事であります。



（第十八圖）

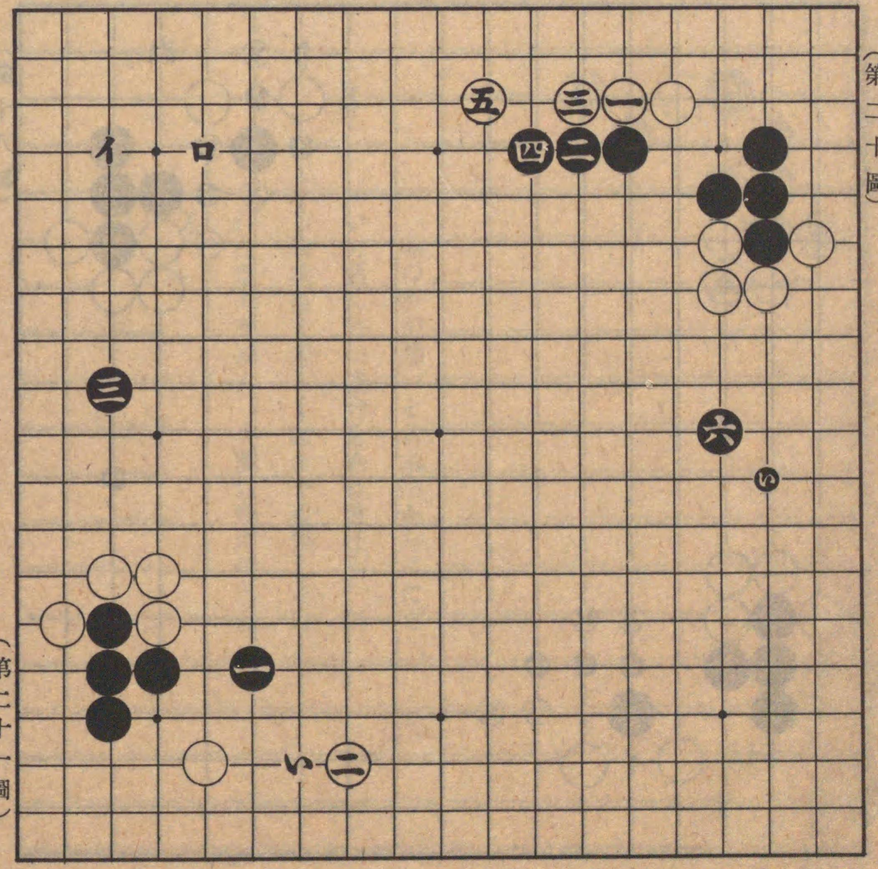
（第十九圖）

第二十圖　白一、三、五も不可能ではありません。一は勿論第十七圖に於ける白七の變化である。

黑六若しくはいの夾撃の嚴しさは右下隅方面の配置關係にも依りますが、白としては豫め覺悟せねばなりません。

第二十一圖　黑一と飛ぶ。これは第十七圖に於ける黑六の手の別法に外ならない。

白二と三との取捨は主として左上隅方面の配置如何に左右される。例へばその方面に黑イ、ロの締りでもある際に黑三を容るす事は忍びないから白二は三に拆き、黑いと變化する如きそれであります。

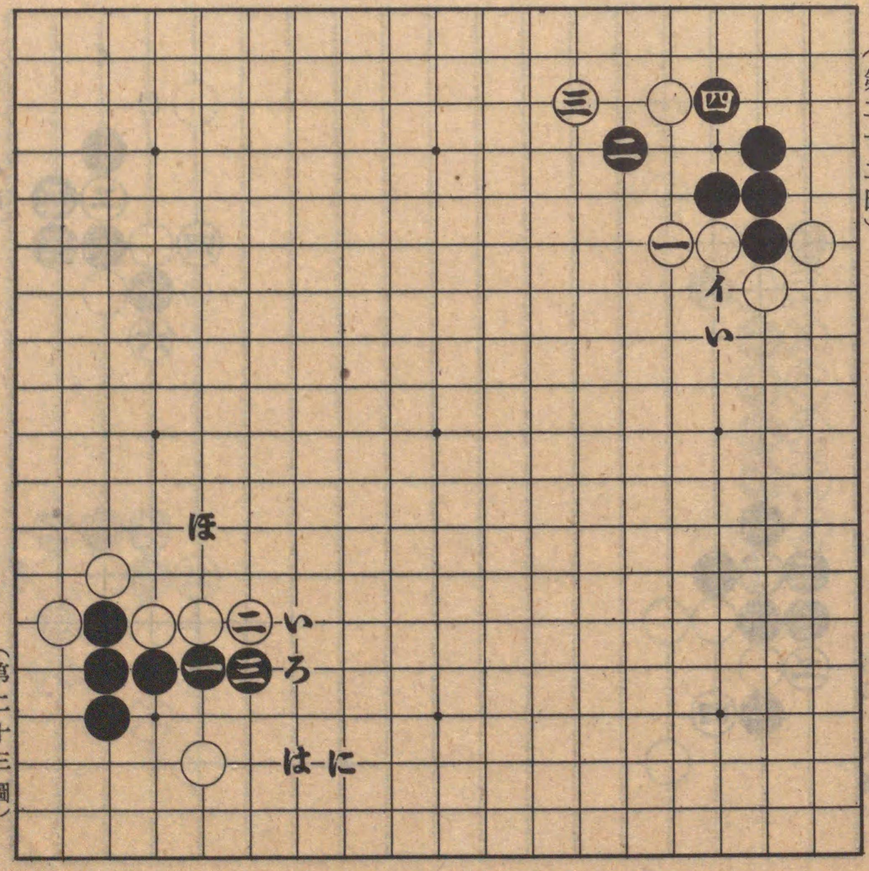


（第二十一圖）

第二十二圖　第十七圖に於ける白五にて斯く一と行びる變化も無いとは言へません。黑イと切られても白いの征が成立する場合には白一も排斥されないと考へる。

その代りには黑四に次いで白いと結局補つて置かなければならぬので一般に白一はイに粘ぐ第十七圖に及ばずと知るべきであります。

第二十三圖　前圖黑二の手で斯く一、三と押す。黑三白いと行びれば黑は猶もろを押すか若しくははと退くか、又白がいに行びる手でにに拆き黑い白ほと言ふ樣な事になるか、部分的にはそれらの經過を指摘するに留め取捨は形勢に從ひます。



（第二十二圖）

（第二十三圖）

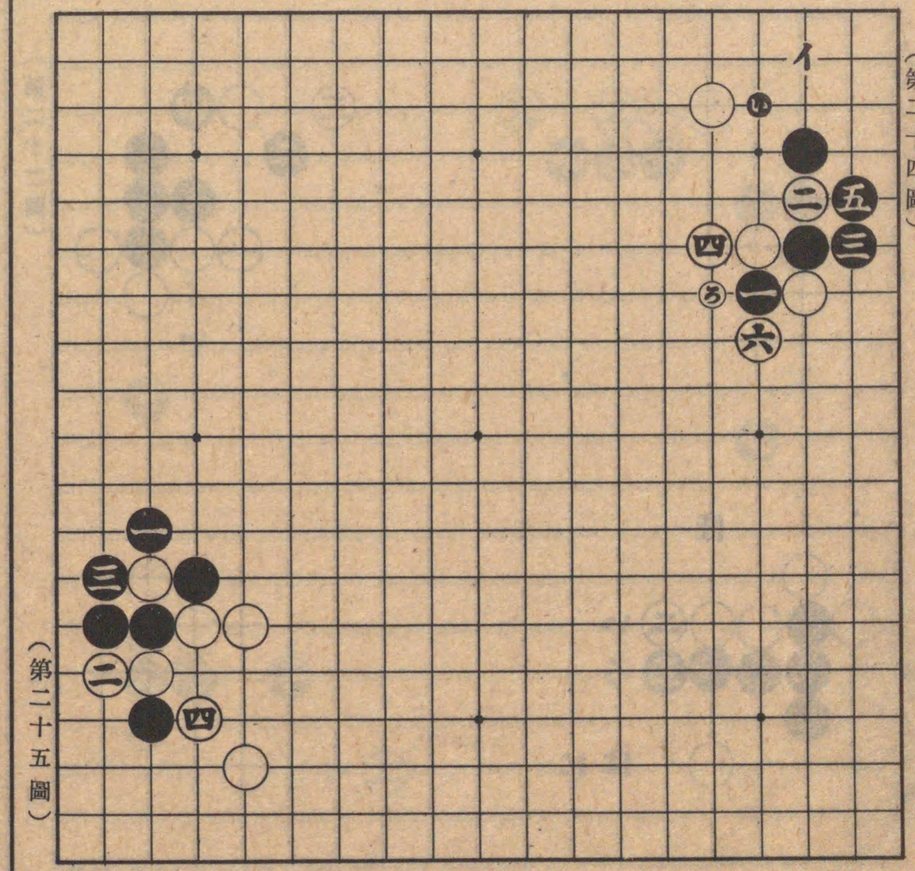
第二十四圖　黑一と切る變化。これは相當複雜であります。

白二、四は常用の手筋ですが黑五に次いで白六の征が成立する事を要する。この征關係を双方共に豫め見定むべき事に就いては既に述べた。

白六に續いて黑い白ろとなるか若しくは白から先にろに打抜き黑いと備へる事になるかですが本來黑は唯さへいに備へたいので殊に白ろが加はつた後いを怠り白イと走られる苦痛は小さくありません。

第二十五圖　前圖五の手で黑一と抱へる變化。

白二、四と平易に應じて隅の味無き地が大きく黑不利の形である。



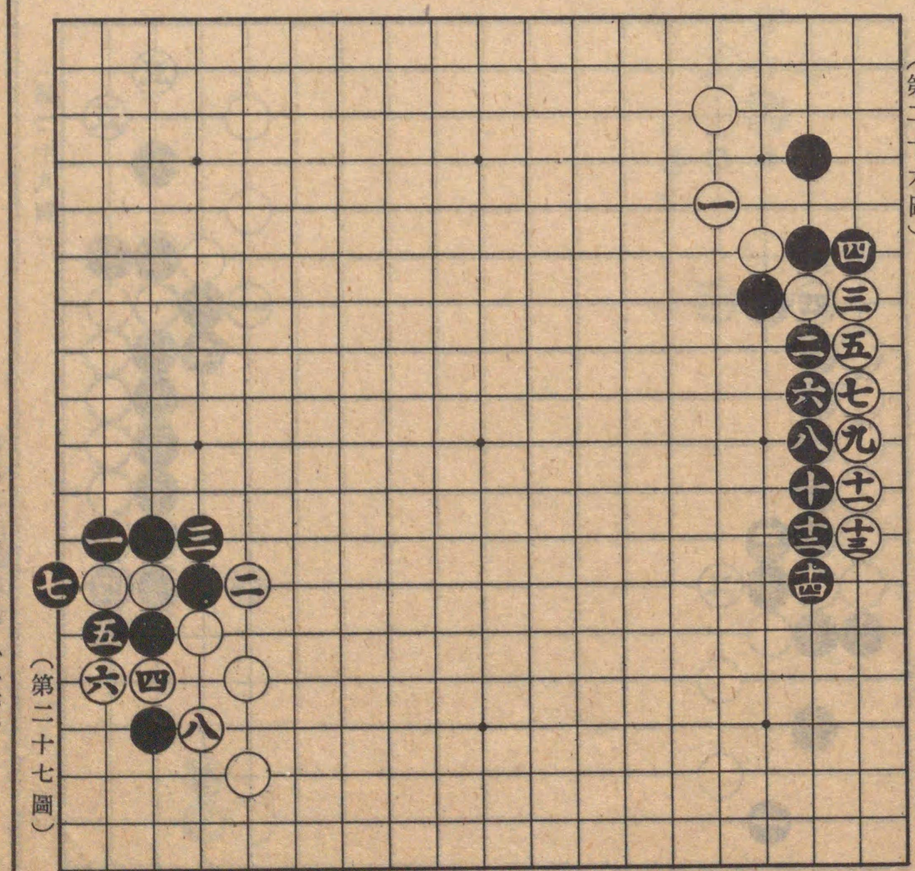
（第二十四圖）

（第二十五圖）

第二十六圖　白一は前述の征關係に拘はらず複雜を求める作戰として認められます。

黑二、四以下は絶對とされる。四にて五より約へるのは第二十七圖白八迄となり第二十五圖と同樣に白が悪くありません。

白十三まで必然です。こゝで黑が隅を捨てるか捨てないか、方針の岐れる所である。圖の十四と行びたのは捨てゝ打つ意味であり、右下隅方面の配置關係にも依る事でありますが、決して排斥さるべきでなく時にこれを選んで面白い場合もある。第二十八圖に續いて——



（第二十六圖）

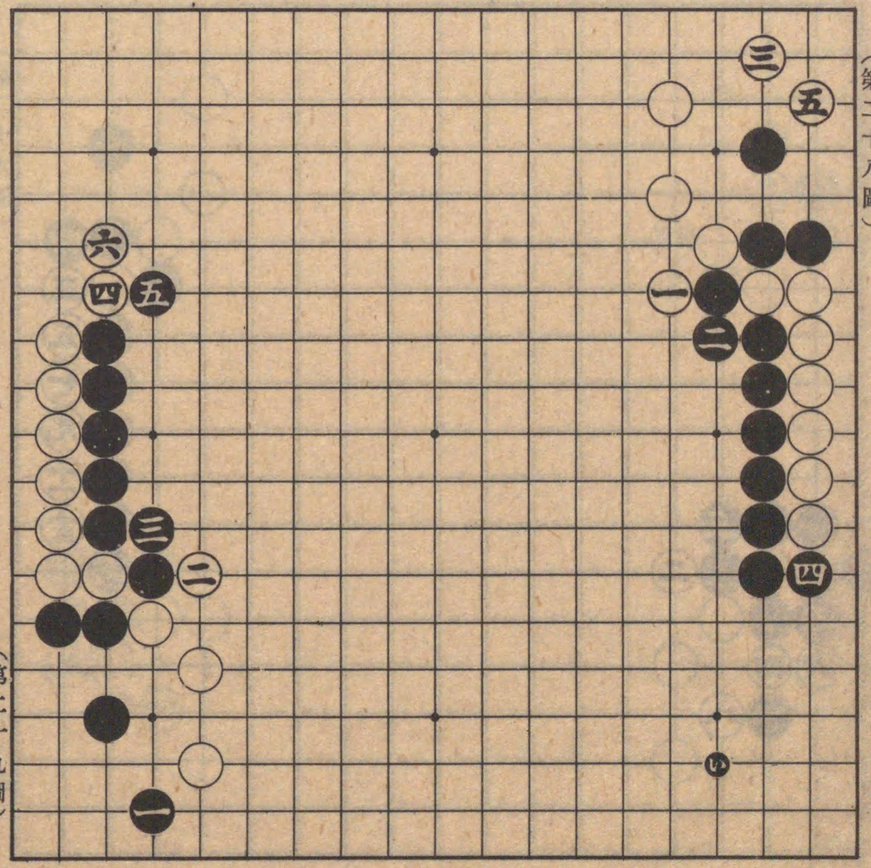
（第二十七圖）

第二十八圖　前々圖黑十四に次いで白一、三と打つて隅を屠ります。

黑四にて右上隅に手段を求め、少くとも味を殘す樣な可能性が絕無ではありませんが、初めの捨てる方針と矛盾し無要の煩瑣に汎る惧れがあるので玆では觸れない。

白五に續き右下隅に何の配置も無くば黑ぬを適切とし若し前に黑ぬでもあれば隅の締りを省略する事が出來る限り黑として本圖は成立すると考へられる。

第二十九圖　第二十六圖黑十四の手で斯く一と隅に轉ずる變化。白を第二線の低位に六路まで這はせた所に滿足を見出し隅は助けて打つ方針です。左上隅の配置關係は特に示しませんが、白は四、六の前に二の當を打つてしまふ順序である。



（第二十八圖）

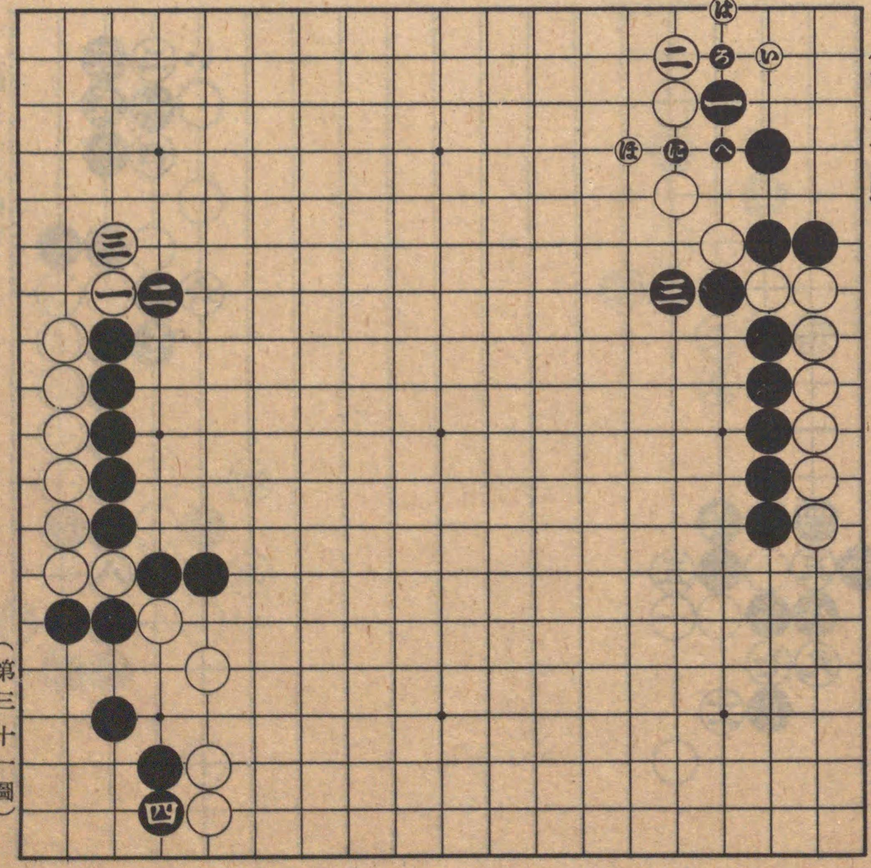
（第二十九圖）

第三十圖　前圖黑一の變化。この尖頂けは白の應手を試いたのです。

白二と平易に下れば黑は三と行びる。これは白ぬに對し黑ろ以下を以て抵抗し活路を保留する所が働かうと言ふのである。

第三十一圖　前圖黑三に續いて白は一、三と綽行びる位のものですが然る時は黑は矢張り四と約へて置くのが好點たるを失はない。

斯くなれば黑の十分滿足していゝ形であります。



（第三十圖）

（第三十一圖）

第三十二圖　黑一の尖頂けに對し白には然し二、四と應ずる處ぎも考へられます。この二、四無くして直に六、八、十と打ち黑いと綽ねられては忍びない白の不利である事言ふ迄もありません。

前二圖に比し白としては本圖を採るべきである。

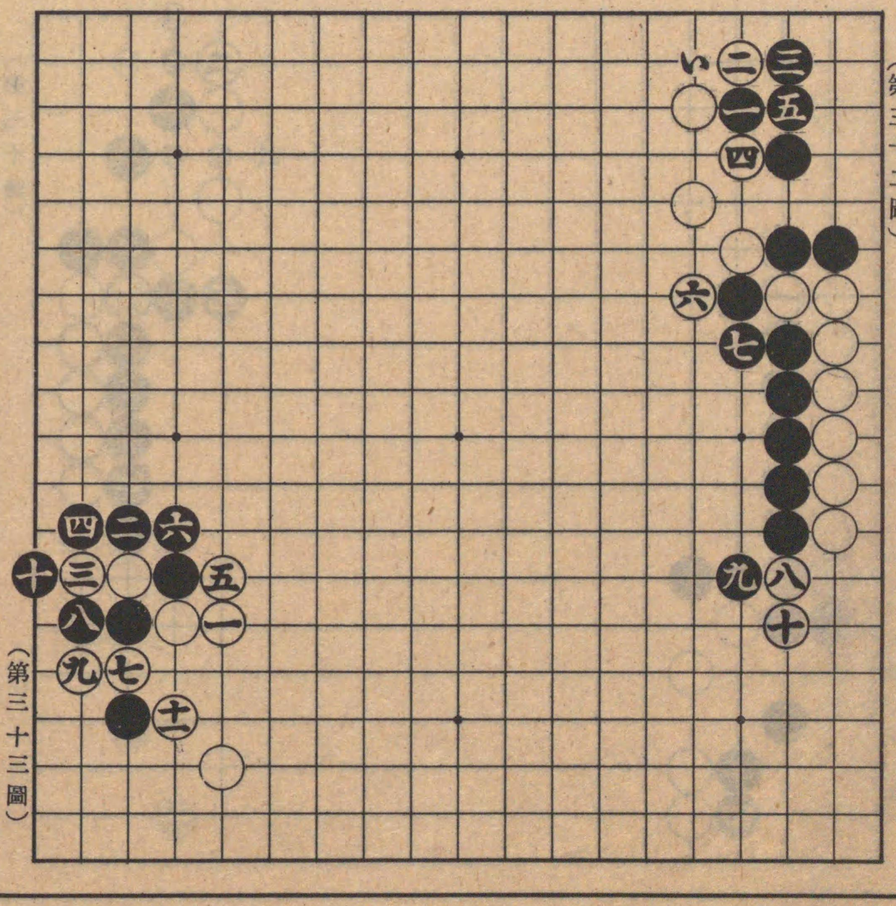
第三十三圖　白一と單に引く變化。これは七の綽込を先にして引く第二十四圖の型よりも嚴しさに於いては優るのです。但、次圖に示される征關係を全然無視する譯には行きません。

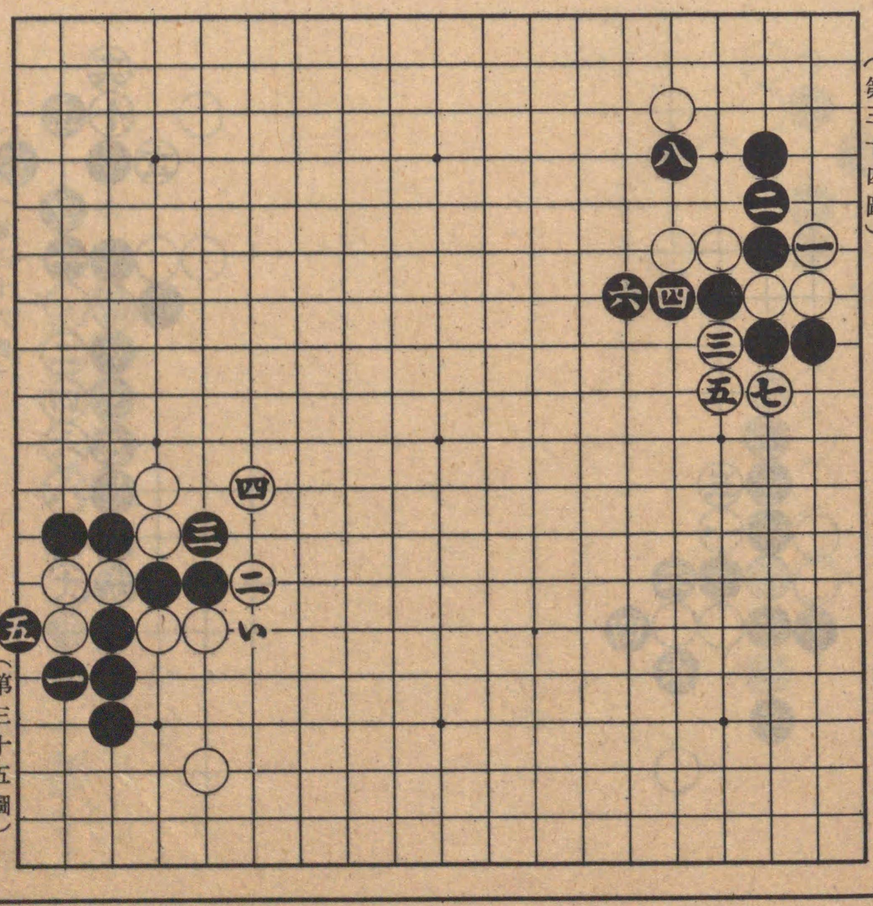
黑四は簡明を期しただけに消極的であり白五の別法に次圖がある。本圖白十一迄は既出第二十七圖に比し一層白が優る位であります。

第三十四圖　前圖白五の變化として一と當て三と切る。白五の次に白六の征が成立する時、黑六は止むを得ません。この征が然し第二十四圖で指摘した征と軌を等しくする事に注意します。

黑八以降は此處に示す限りでない。

第三十五圖　前述の征關係が黑に有利なる際は黑一、五と三子を取る事になりますが白も二、四の形に依り打てない事は無い。然る場合には黑一にて先づいと綽ねて見る具合もあるのです——



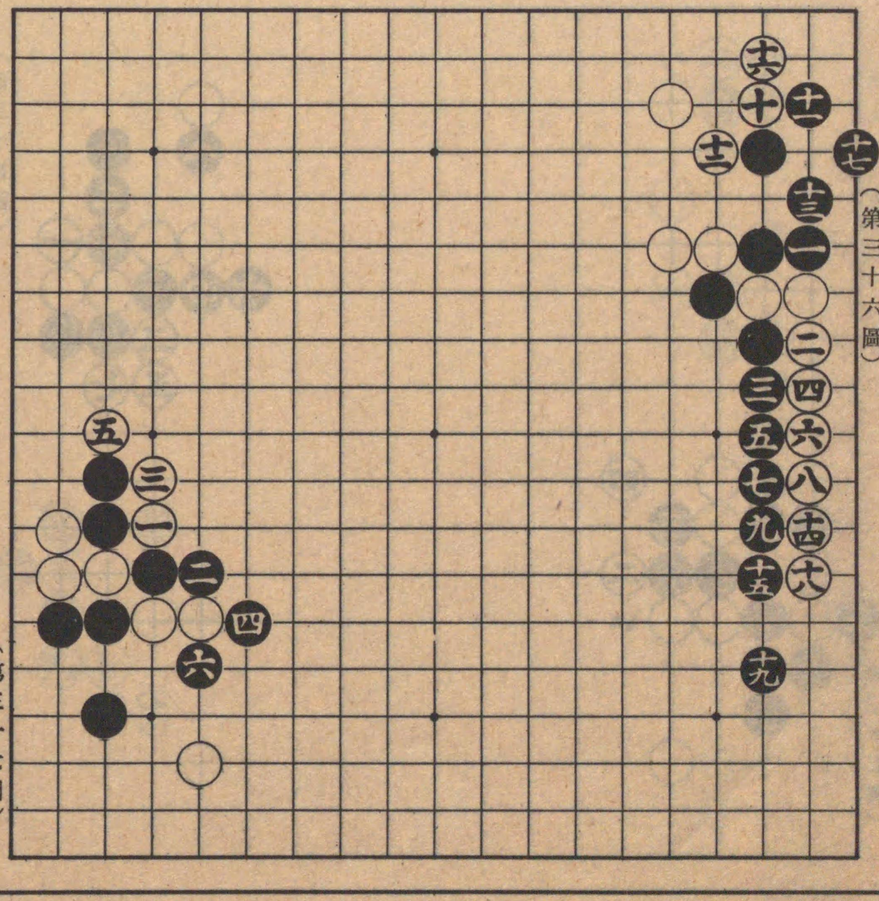


第三十六圖　第三十三圖黑四の變化として斯く一と此の方から約へました。黑は征關係を顧慮するに及ばぬ事が第三十七圖にも示されます。

黑九まで絶對です。そこで白十、十二と利かせる手順である。黑十三は白十六を容るす前提なので十六に黑が綽ねたい場合は第三十九圖に從ひます。

黑十七と眼を持つのでなければ活きられない。次頁參考圖に注意する。なほ殘說は第三十八圖に於て——

第三十七圖　征關係が白に有利としても白一、三は黑四と綽ねて凌がれる手段があり白五黑六の振換りを餘義なくされては白不利です。



（第三十六圖）

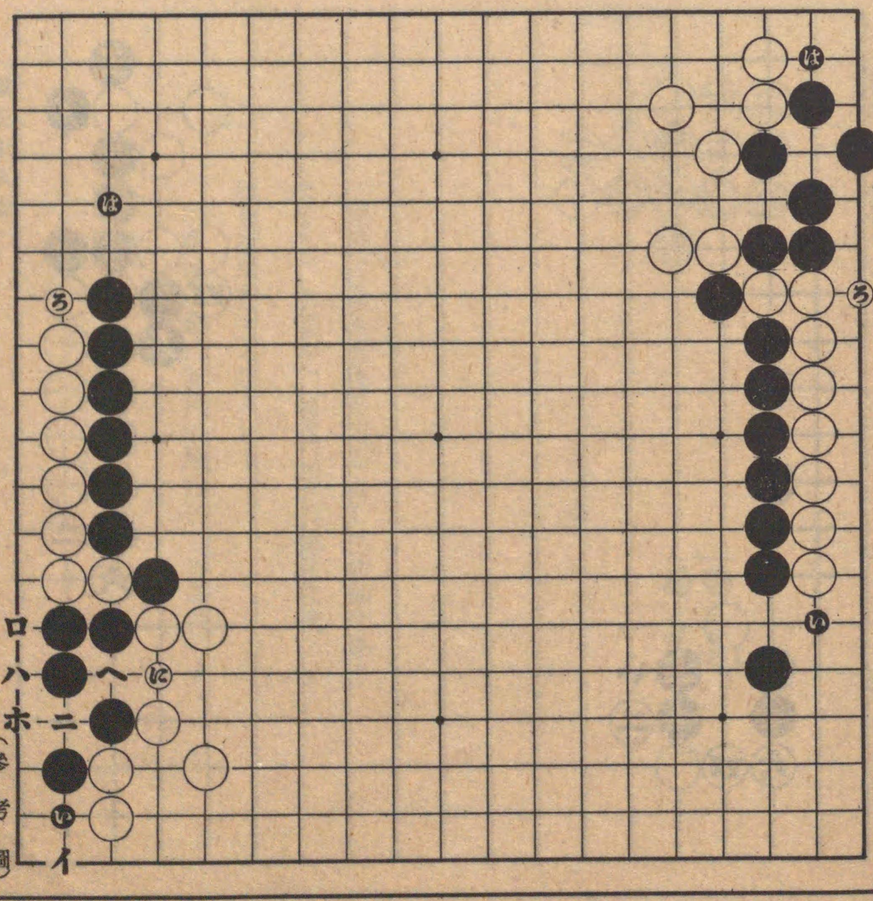
（第三十七圖）

第三十八圖　第三十六圖黑十九の後に黑ぬの約へを急ぐと白ろの下りを以て應ぜられ黑はが省略出來ません。但、その黑ぬが加はらぬ內に白もろを早く利かせる事は考へものです。保留して逆に白はの曲りで利かせる意味もあるからである。

參考圖　第三十六圖黑十七の手で誤つてぬと約へると白ろ黑はの後に白にと打たれ、この隅は無條件で活きられず劫爭を免れません。

卽ち續いて黑イと下れば、白ロ黑ハ白ニ黑ホ白ヘで劫ですし、又初め黑イをホに變へても、白ヘと當てゝ劫である。

黑ぬはホでなければなりません。



（第三十八圖）

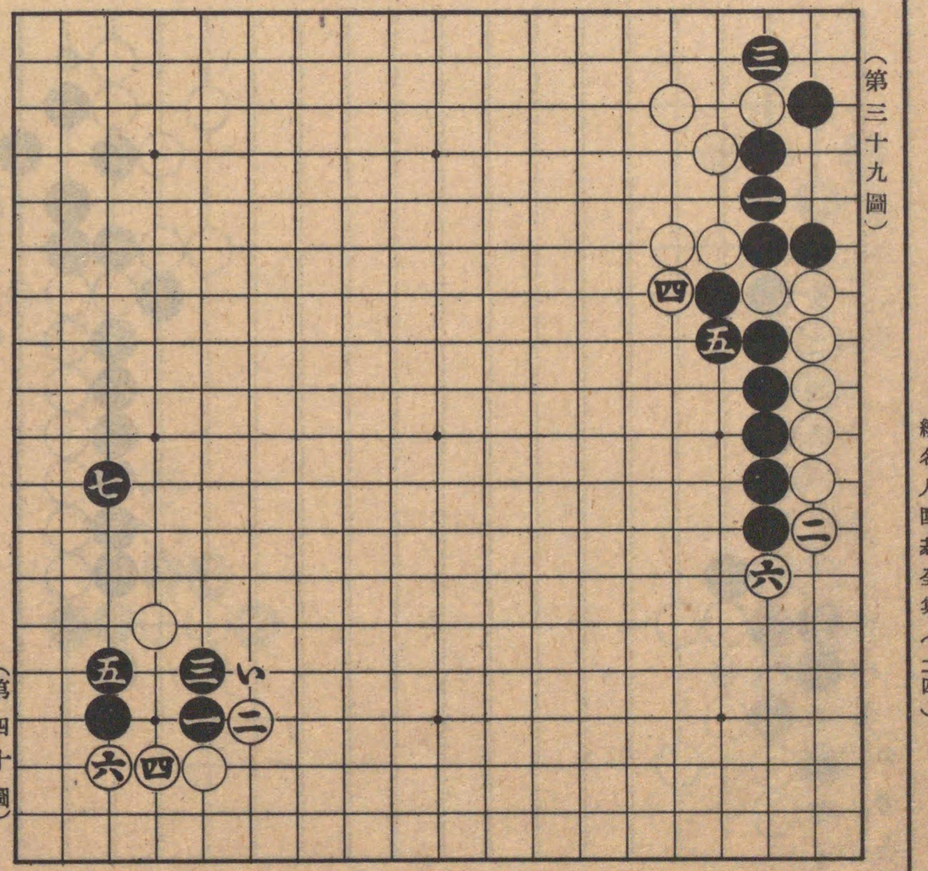
第三十九圖　黒一と粘ぐのは白二に對し第三十六圖の如く黒六と行びない方針なのです。行びずに黒三と綽ねて變化する。斯く三と綽ねる爲には本圖黒一と粘いである方が第三十六圖の十三と受けてあるより明らかに優つてゐる理だからであります。

白は矢張り四を先にして六と綽上げる手順です。

第四十圖　黒一と飛頂ける最も積極的な應法に入ります。

白二乃至黒七にて一段落。黒七と進み得るのは黒いの曲りが必要に應じて何時でも利いてゐるからである。

白二は最初大斜に掛けた方針と矛盾する嫌ひを免れません。



（第三十九圖）　（第四十圖）

第四十一圖　黒一の飛頂に對し白二、四と綽込んで粘ぐ通型の根本は黒を兩斷して攻めやうとする所に存します。

黒五にて六の方を粘ぎ白五と切らせる型もありますが先づ圖の五と下を粘ぐ方から解決して行く。

黒七にて八に行びるか圖の如く斷るかは重大問題ですが無事を主とすれば七の斷りである。

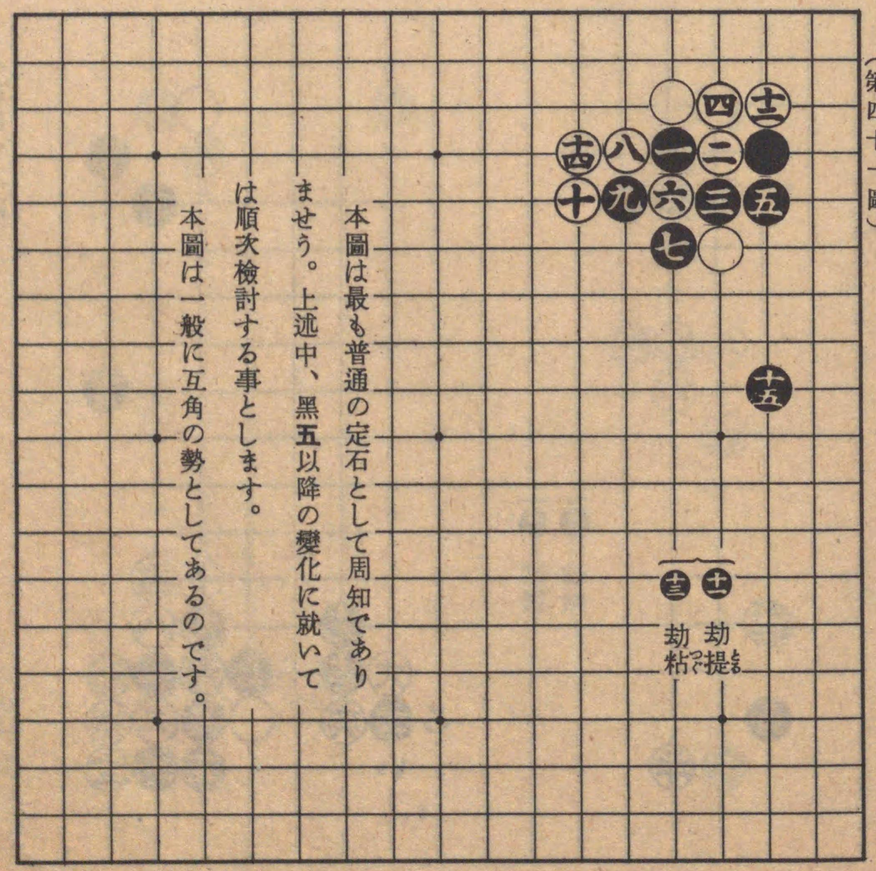
白八では九に行びる型もあります。

黒九はこの一手とされる。

白十にて十二の約へを先にする事は可能である。

黒十一乃至白十四は絶對。

黒十五は時に省略される。



（第四十一圖）

本圖は最も普通の定石として周知でありませう。上述中、黒五以降の變化に就いては順次檢討する事とします。

本圖は一般に互角の勢としてあるのです。

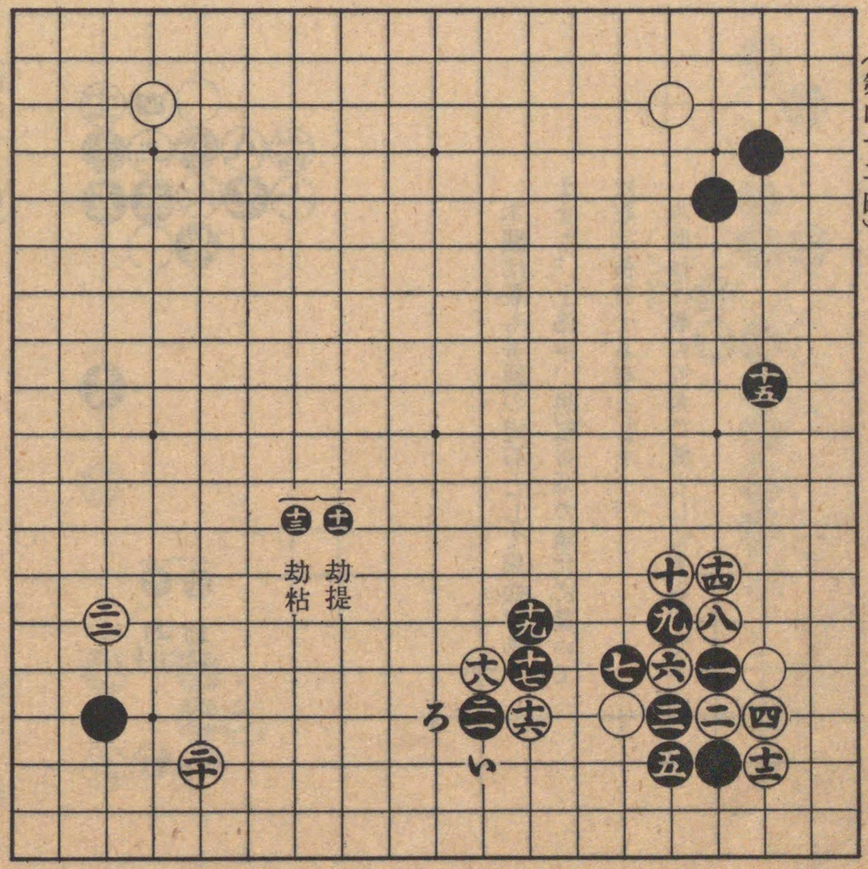
第四十二圖　前圖に於いて黒十五を省略した場合から逆に遡つて研究する。

本圖は所謂秀策流の布石に往々現れる構圖ですが黒**十五**にて**い**に拆くと白に**十五**方面に拆かれるのが餘りにも見え透いた好點である所から斯く**十五**と右邊に先鞭した趣巧である。

白**十六**にて單に**二十**に掛かれば黒は**い**と拆く一手。それよりも**十六**乃至黒**十九**の交換を先にし、白**二十、二二**と打つて將來白**い**若しくは**ろ**何れから當てるか、其の機を窺ふ意味が白**十六**より**二二**迄であります。

本圖の如く打たれた棋は實際に相當多いのである。

（第四十二圖）



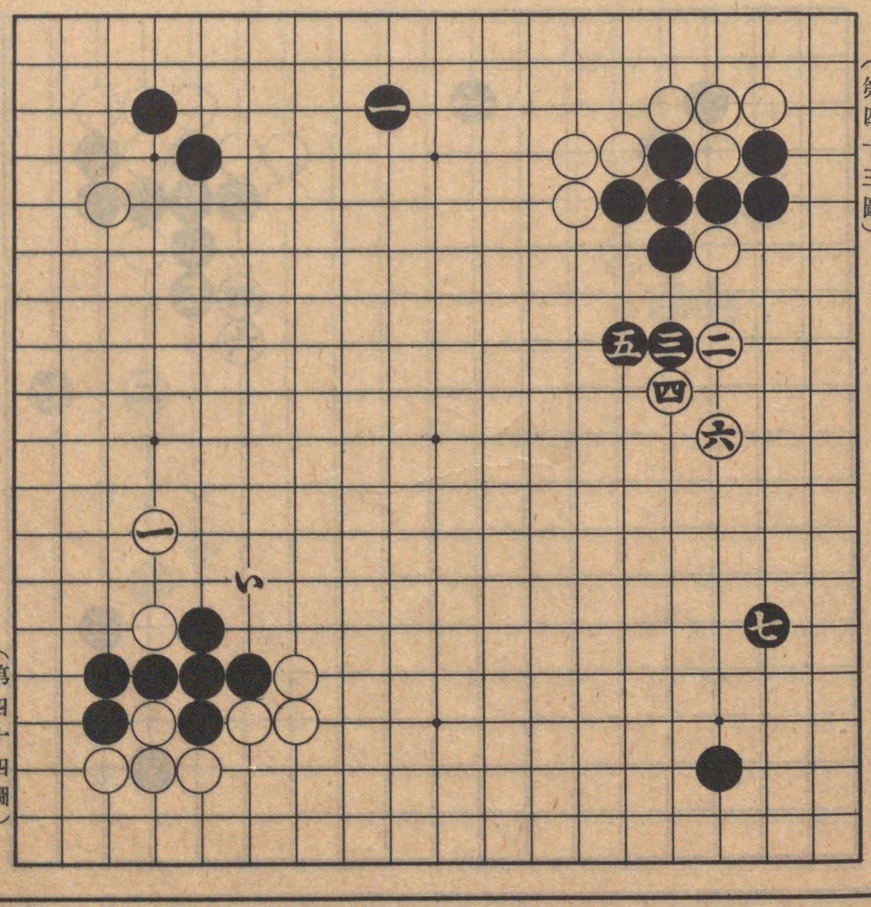
第四十三圖　黒**一**は前圖**十五**の手に相當します。

白**六**と掛粘げば黒は**七**と締る事になる。これも亦實戰に用例を見る所であります。

第四十四圖　白**一**に對し黒が再び手抜する事は許されません。白**い**と打たれ封鎖される苦痛が大きいからである。次圖との混同を警めねばならぬ。

從つて白**一**と飛ばれた時黒は前圖の如く**三、五**と頂行びるか、若しくは本圖**い**に尖出すか、何れかを選ぶのですが、兎も角も本圖**一**、又次圖白**一**を容す事それ自身權道であり本來第四十一圖に從ふべきであります。

（第四十三圖）

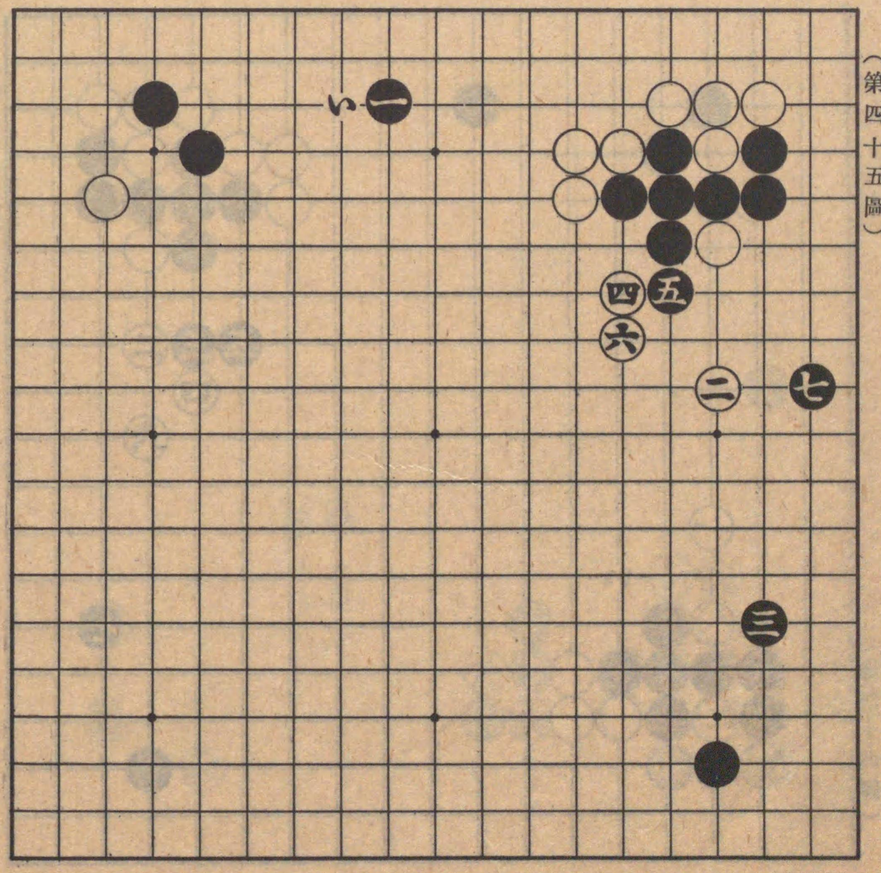


（第四十四圖）

第四十五圖　白二と一路控へる型もあり然る場合には黒は再び手を抜く事が出來ます。本圖は黒三の締りを假定しました。

白四、六と掛けて封鎖しても黒七と走つて仔細なく此の構圖に於いては殊に白四、六の厚味も黒一に依つてその威力が著しく消されてゐるのは大きい。

四、六の價値は一の方面に白の拆きが無くては現れないのです。但、其の方面、白から拆く時、必ずしも一に限らずいまで進める事も不可能でなく、さう進められても上邊に黒から直に打込んで行くのは疑問である事を附加へて置きます。



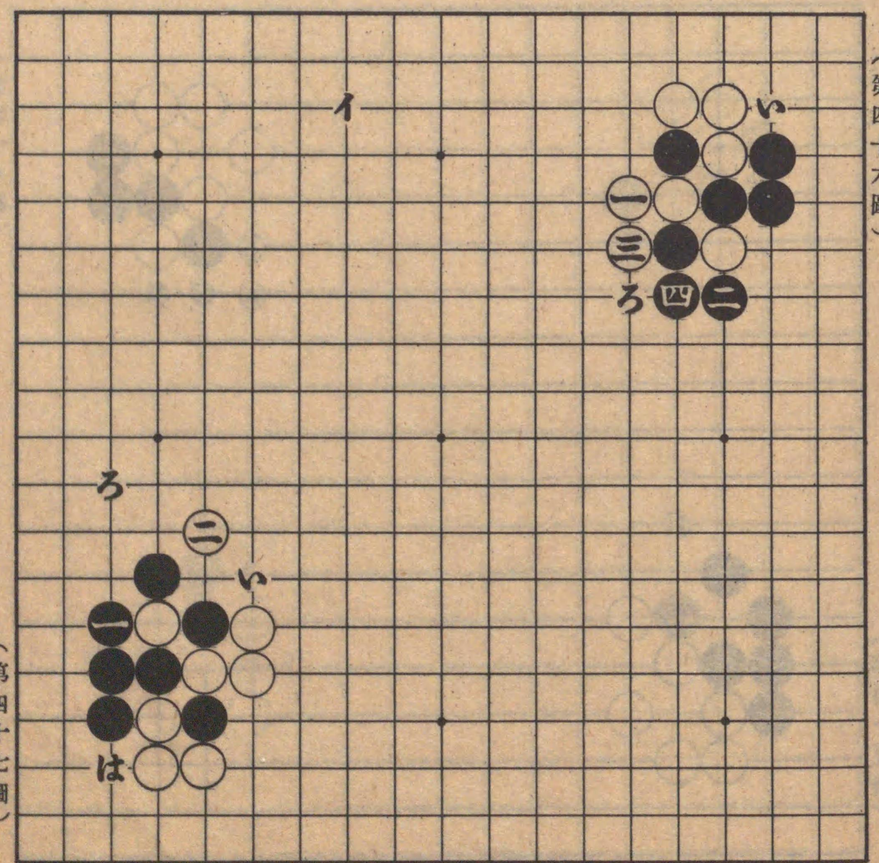
（第四十五圖）

第四十六圖　第四十一圖に於ける白八の手で斯く一と行びる型は場合に依り趣巧として往々用ゐられます。

上邊イ方面に白の勢力が豫め在れば最も恰好ですが、それ無くとも一般に廣く且つ手厚い姿勢を構へる意味で選ばれ、イ方面への發展は次の含みとして宜しい。

黒四に次いで白はい、ろの中を取捨すべきですが、一と行びた意圖からは、何れかと言へばろの押しの方でありたく、白ろならば黒い、又白いならば黒ろである。

第四十七圖　前圖黒四と粘ぐ手で斯く一と提れば白は二と掛けます。怠つて黒からいに綽ねられる形は嚴

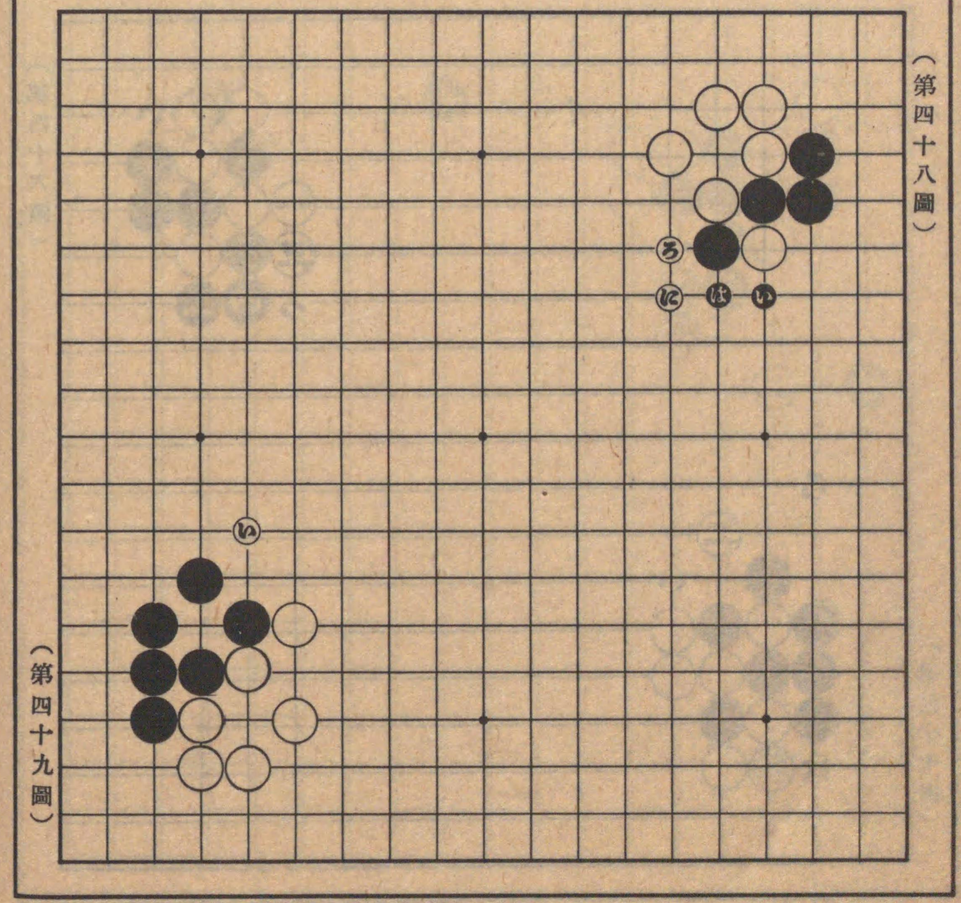


（第四十六圖）

（第四十七圖）

し過ぎる。偖白二に對し黒がろと受けるか、隅をはと約へて報いるか、乃至全然手を抜くかは四圍の狀況に依り決せらるべき問題であります。

第四十八圖　第四十一圖に於いて黒九と必ず當てるべき理を明らかにする。然う當てずに黒いと抱へ、白ろ黒はに白にと押されるか、若しくは其はと粘ぐ手で白一子を提り次圖白いと掛けられる事になるか、何れも白の厚壯なる勢威に比し黒は萎縮の形が著しい。卽ち第四十一圖の九と當てる事に依り白を重複の形に導かうとし、同時に黒自らは我が勢力の伸張を期する働きあるを思はねばなりません。



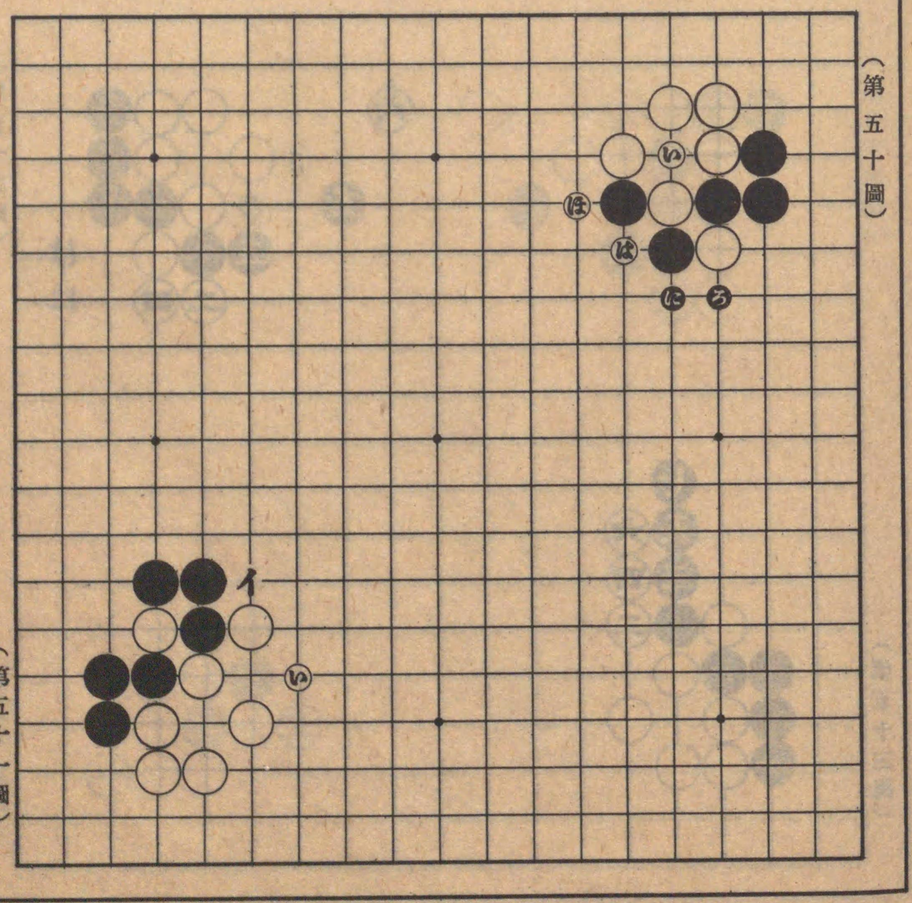
（第四十八圖）

（第四十九圖）

第五十圖　第四十一圖に於ける白十の手で、本圖いと粘ぐのは理由の全く無い事です。粘げば黒ろ白はに黒にに續いて白はほと戻つて提つて居なければならぬ。從つて白がは、ほと提つた黒一子といと粘いだ一著とを相殺し除いて考へると、本圖の手割は正に次圖の如く解剖されるのであります。

第五十一圖　玆で白がイの點を押すべきであり、又押す事が出來るのを、敢て押さずに謂はれ無くいと屈服したのが前圖に外なりません。

第四十一圖に就いては個々の著手になほ注意すべきものが多いので重ねて次圖以降に詳說します。

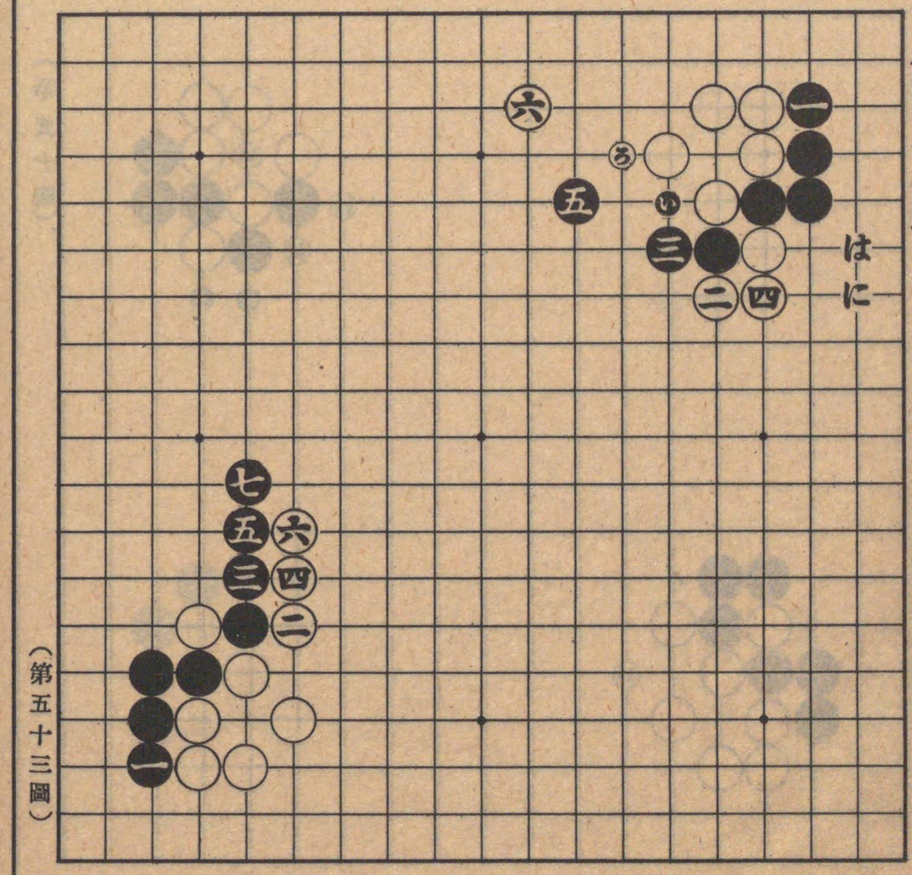


（第五十圖）

（第五十一圖）

第五十二圖　第四十一圖に於ける黑**九**の手で直ちに斯く**一**と隅を約へるのは、**六**の點に黑の三間夾がある場合には稀に行はれる型との混同である。白は**二**と當て**四**と粘ぐ事を忘れては成りません。逆に次圖白**二**と其の方から當て同圖**七**迄となる如きは黑**一**の無理を通す事となる。

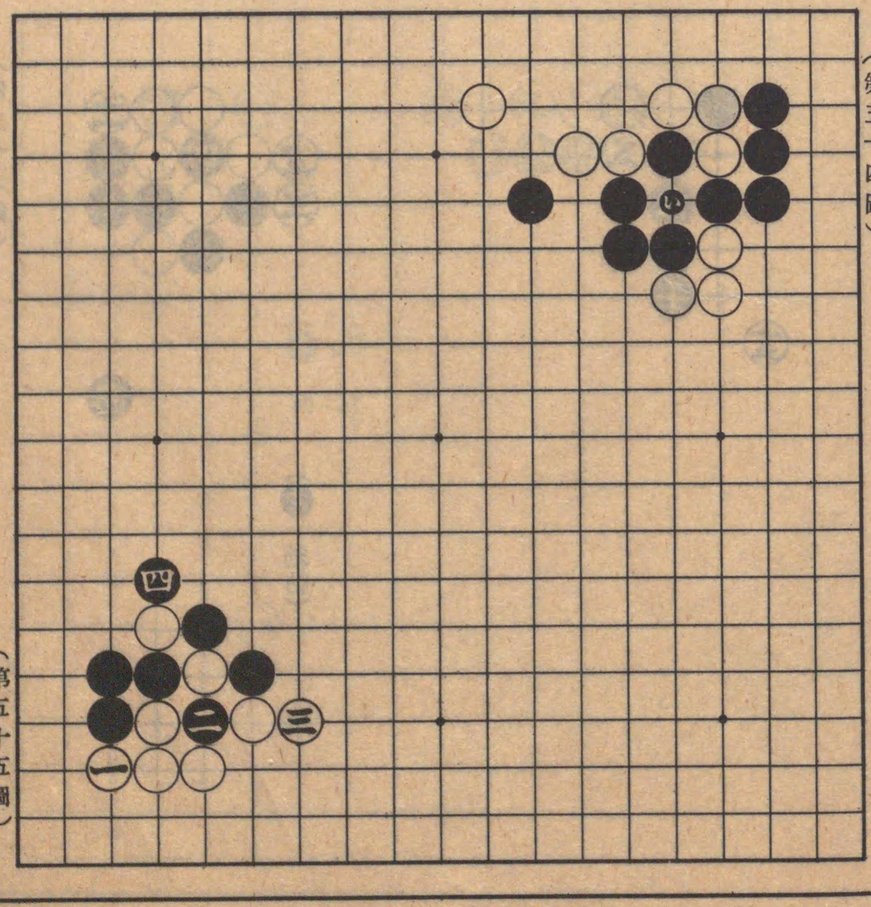
偖黑**五**に對し白は**六**と其處まで進んで良く、黑**い**と當てられても白は粘がずに**ろ**と引いて姿勢を整へ且つ抵抗してこそ**二**、**四**の趣意を達する所以であります。更に白**は**の嚴しさに備へ早晩黑**に**と低位に走らざるを得ぬとすれば、黑の不利は實に論外としなければならぬ。



（第五十二圖）
（第五十三圖）

第五十四圖　第五十二圖の白**六**黑**い**白**ろ**に次いで黑が劫を提つた形ですが、提つただけでは固より其の連絡が完全でない。と言つて或時機に黑**い**と粘ぎ得る事を想定しても、それは黑の重複以外の何ものでもなく殊に斯く粘いだ形に於いては第五十二圖の**三**の一著が忍ぶべからざる愚手と化して居るのに注意したい。

第五十五圖　第四十一圖に於ける白**十**の手で斯く**一**と隅の約へを先にします。黑**二**白**三**と單に引き、黑も**四**と抱へて治まる。第四十一圖に比し白の厚みが無い代りには黑も小さい。其の間の得失の判斷は周圍の條件に依る事であります。なほ黑が**四**

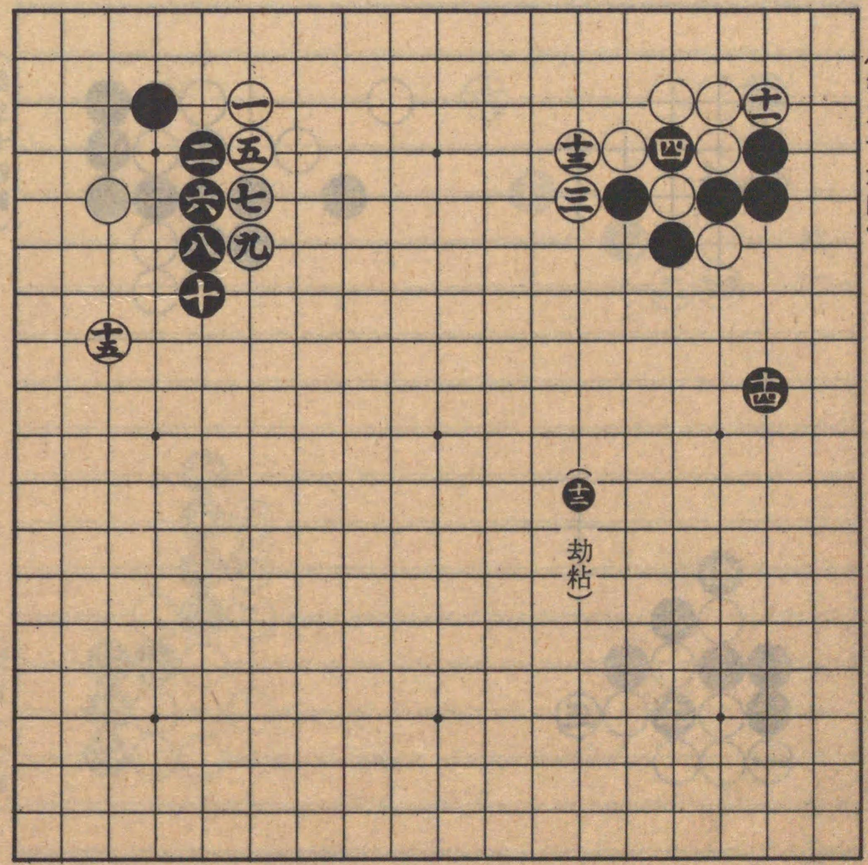


（第五十四圖）
（第五十五圖）

の手で劫を粘ぐのは有るべからざる形であり、第四十一圖と嚴に區別されねばなりません。

第五十六圖　左上隅に圖の如き配置ある際、第四十一圖に於ける白十の手で先づ一と夾み、黑二と若し尖めば乃で三と當る趣巧は成立します。

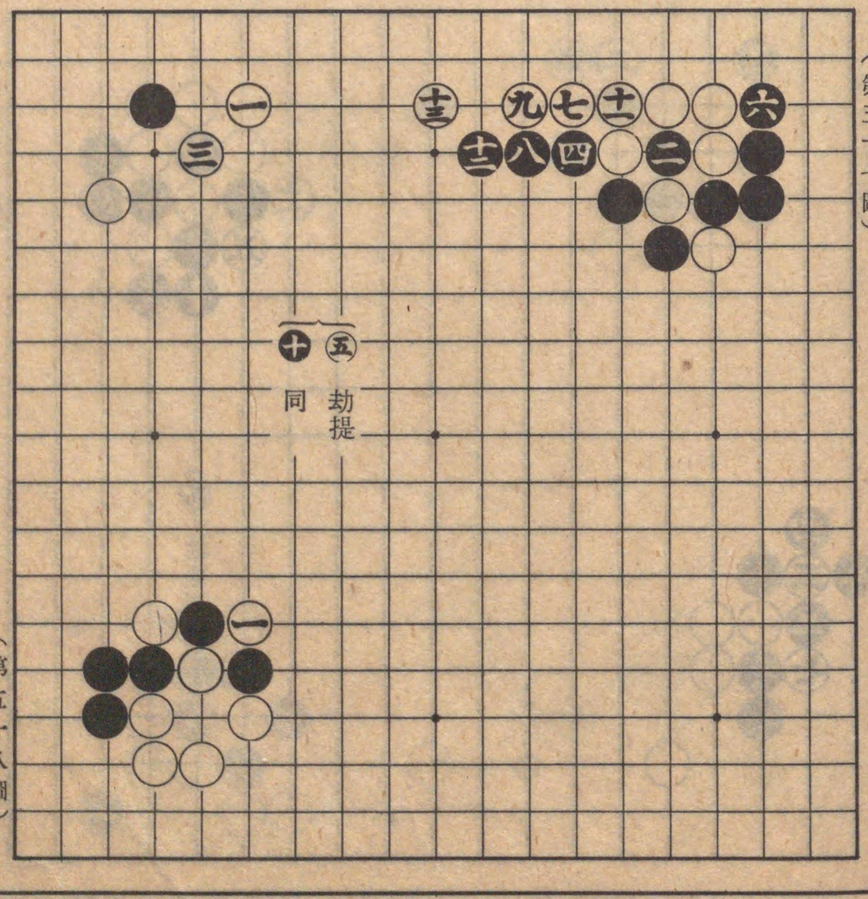
黑六の手で劫を粘ぎ、白に六と約へられる不利は論外——乃ち黑六、八、十と行びるを待つて白十一、十三と通型に戻り更に十五と拆く事になる。本圖は上邊に宏大なる形勢を張り得た點、白の註文通りですが、同じ意味に於いて一を一路右に移動し二間夾みとする等も實戰に其の例の無いではありません。



（第五十六圖）

第五十七圖　前圖の白の趣巧を挫くべく黑二と透かさず劫を提るは有力なる別法である。白三を容るしても黑は十二まで白を壓迫して中腹に厚壯を築きます。左上隅の黑一子は固より活動の餘地を持つて居るので形勢にも依る事ですが、必ずしも白有利とは觀られません。

第五十八圖　第四十一圖に於ける白十の手で斯く一と切る最も急激なる手段に就き一應指摘して置きたいと考へる。此の一が絶對に不可とされるべきではない點、又黑としては此の白一を恐れるからとて第四十八圖のⅰと單に抱へる樣な屈服こそ避けねばならぬ事に先づ注意します。

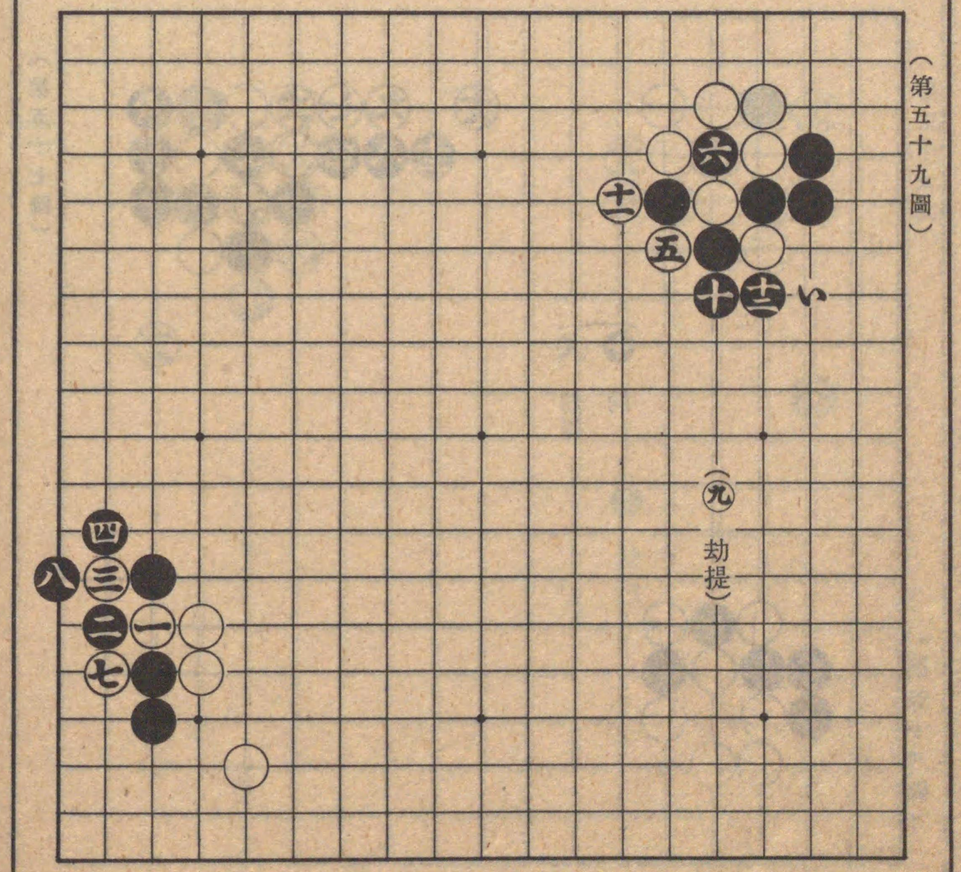


（第五十七圖）

（第五十八圖）

第五十九圖　左下隅に示される如き配置ある場合、白**一**、**三**を先にして**五**と切り劫爭を挑むのは、白が劫に勝つ事を主眼として見たので、卽ち劫立を大ならしめ、黑**八**と應ずる事を餘義無からしめた譯です。**一**の手で直ちに**五**を切り黑**六**白**一**と出た時黑が劫を粘ぎ、白**二**と突出す事にでもなれば勿論白の成功である。

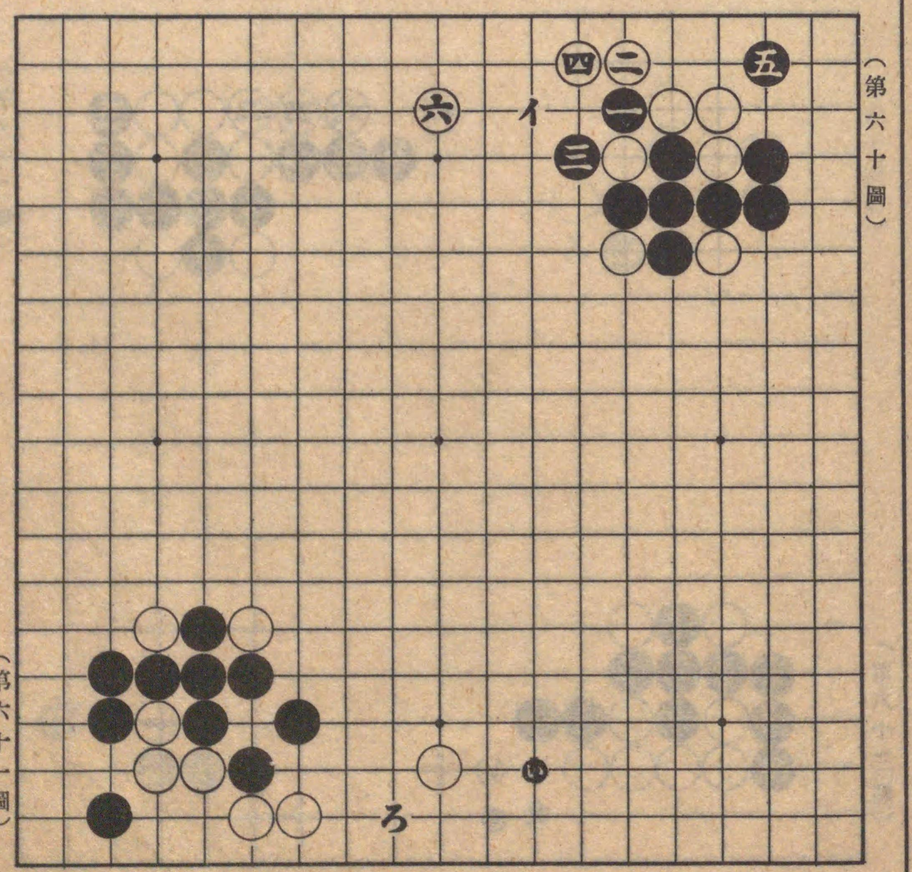
黑**八**と受けて置いて然し乍ら不惡とされ、以下黑**十二**迄必然ですが、上邊より左上隅方面へ掛けて形勢を張り得る際など白も本圖の趣巧は兎も角も成立する。要は劫立の如何に依る事であります。なほ黑**十二**の手では**い**と補ふ事も可能です。



（第五十九圖）

第六十圖　前圖の白**五**黑**六**に次いで白**七**の劫立に黑が應じないと言ふ事は前圖左下隅の例では黑の非常な不利です（卽ち黑**二**を打拔かれるのは、初めに白が**一**の手で**五**を切り黑**六**白**一**黑劫粘ぎ白**二**と突出されるのと、其の差が大き過ぎる點、白が**一**、**三**を先にし黑**八**を強ひた次第でもある）が、其の劫立を考へず、或は別の劫立を想定し、黑がそれに應じないで劫を粘いで終つた時、續いて如何に處理すべきかを示すのである。

黑**一**、**三**が一法です。白**四**は輕く**イ**と斜走する事も出來る。白**六**にて一段落なれど後に第六十一圖黑**い**が加はると次いで黑**ろ**の筋が嚴しい。



（第六十圖）

（第六十一圖）

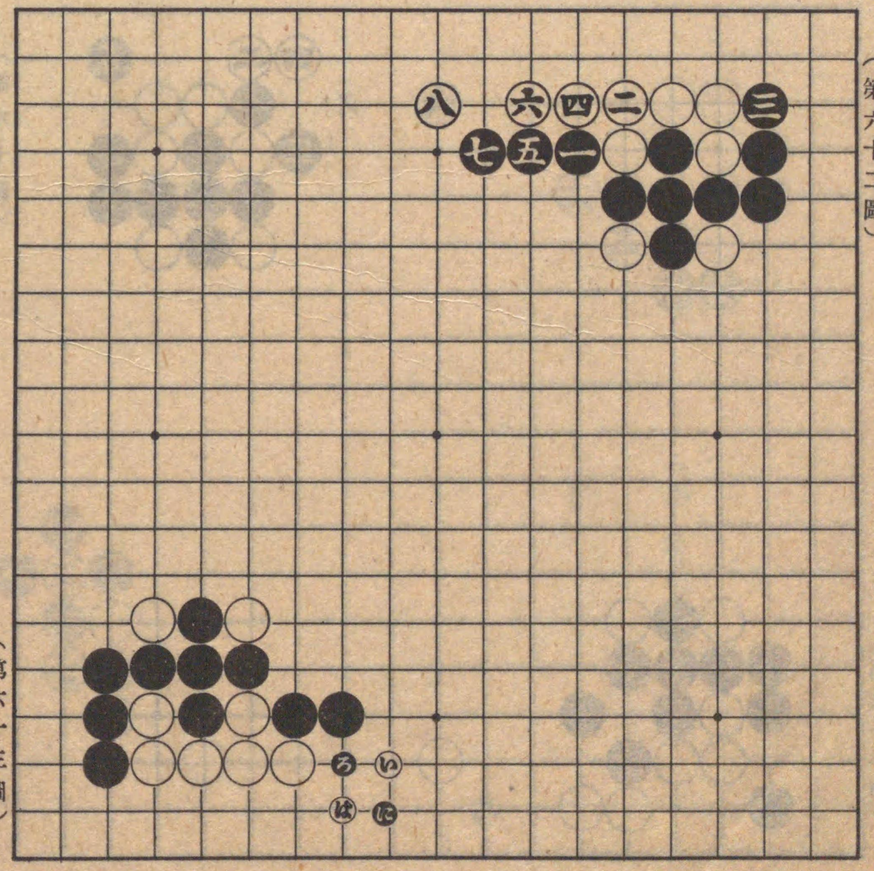
第六十二圖　黑一と當てるも亦一法であります。次に隅から三と約へるべきか逆に四の方から約込むべきかは形勢に依る事である。卽ち上邊より左上隅方面一帶に模樣を張るに便であり、それを有利と觀る時は三の手で四から約込む事となります。

黑五にて二段に六と約へるも可能ですが五、七と行びれば普通である。

白も六の手で第六十三圖(い)の飛びを急ぐと同圖黑(ろ)、(に)と出切られ窮せざるを得ません。

偖本圖も前二圖も共に黑の堅壁に附著した白二子の無效は忍びざる姿であり、劫爭の代償には白も最大のものを要求しなければならぬ理。

（第六十二圖）



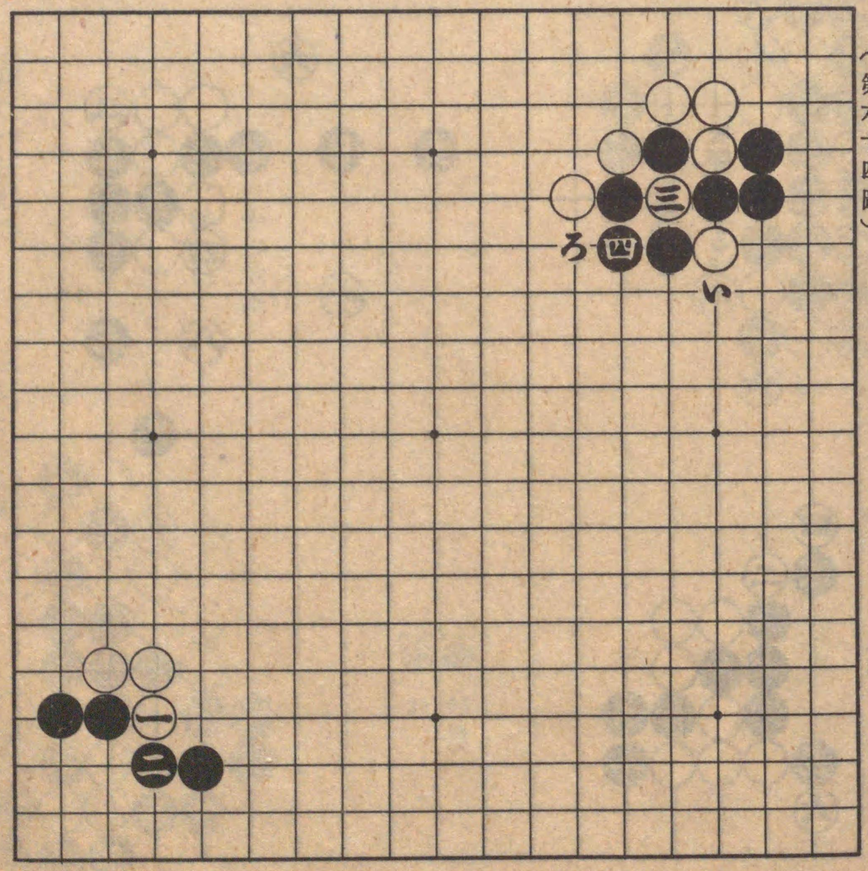
（第六十三圖）

第六十四圖　左下隅白一黑二の交換が白の極めて不利なる事は勿論ですが、然し例へば其の樣な不利を犯して迄もそれを劫立として三と提り黑四を強ひるなどの趣巧も亦全然排斥すべきではありません。但しこれは第四十一圖白十二の手の變化です。

此の劫立の例では然し黑二は先づ絕對とすべきであるが、黑が劫を三と粘いだ形に於いても、第六十圖以降との間に小さからぬ差があり、卽ち粘がれた時の白の苦痛は本圖の方が遙かに小さいのであります。

偖黑四に次いで白はいと引いて劫爭を徹底させるか又はろと押して形勢を張るか局面如何に依り取捨する。

（第六十四圖）



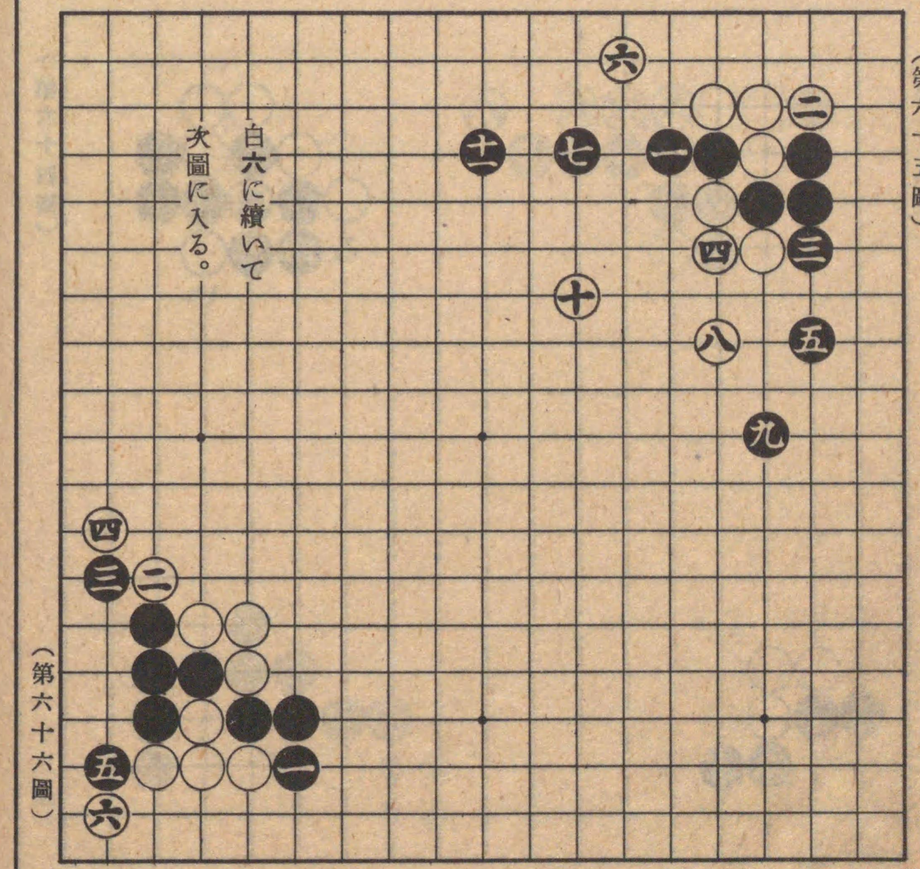
第六十五圖　黑一と行出す型に入ります。白二黑三は絕對である。

白四にて他に打方が二通りあり後に詳說する如く所謂大斜百變の主なるものはその方に屬しますが先づ四と粘ぐ比較的簡單なるものから解決して行きませう。

本圖は最も普通の定石であります。

この內、黑五、白六、白八、黑九白十等に就いて相當複雜なる變化があるので必ずしも簡單とのみ片附けられません。順次示します。

第六十六圖　前圖黑五の手で急に一と約込んだ所。正道ではありませんがその應法は心得てゐなければならぬ。白二、四と二段に約へます。



（第六十五圖）

白六に續いて次圖に入る。

（第六十六圖）

第六十七圖　黑一にて單に七、又九と綽る手段がある事は第七十五圖以降に示されます。

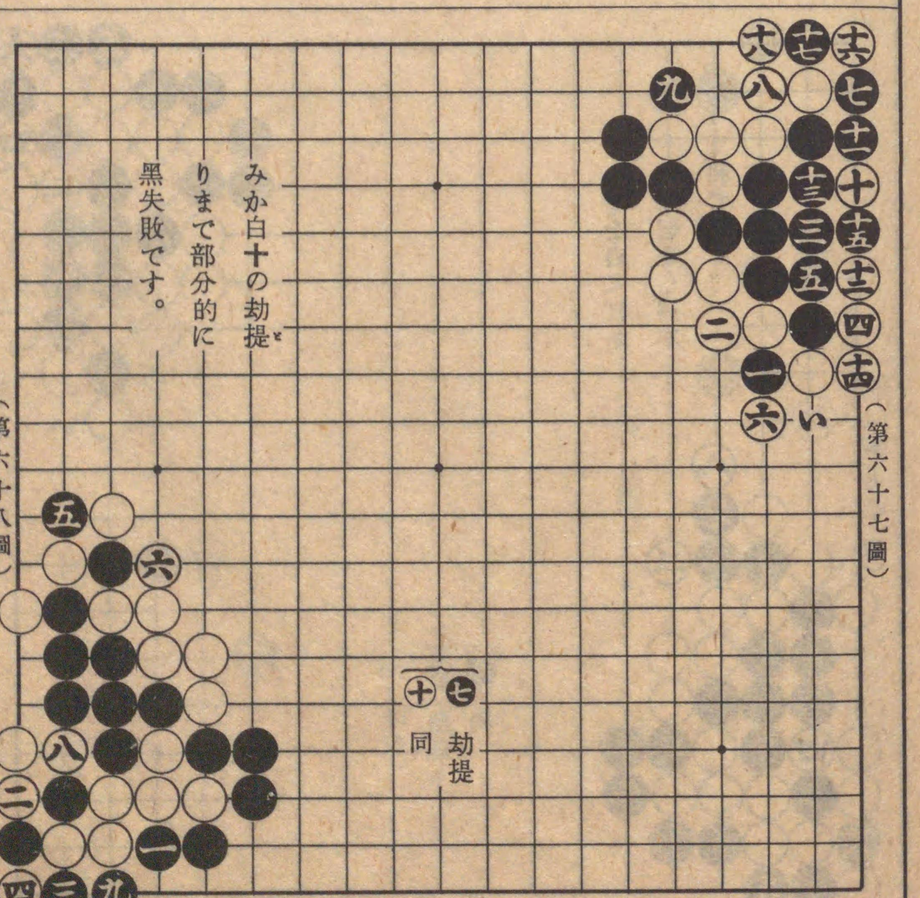
白六と抱へる征が成立せぬ場合には勿論六の手はいと引かねばなりません。それでも然し黑が良い事には成らない。黑九白十と置いての劫爭ですが、黑十一は次圖一と詰めての劫爭にも導かれます。

さて白十八の儘、當分放置して黑が機會を待つ意味はあるけれど部分的に黑の不利なる事は否定されぬ。

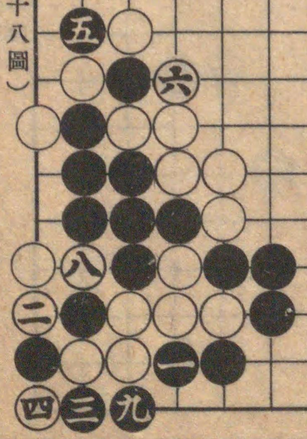
第六十八圖　黑一と詰める變化。

白二、八の先後は次圖に明らかなる如く小さからぬ差を生じます。

黑五の劫立が一手損の形であるのみか白十の劫提りまで部分的に黑失敗です。



（第六十七圖）

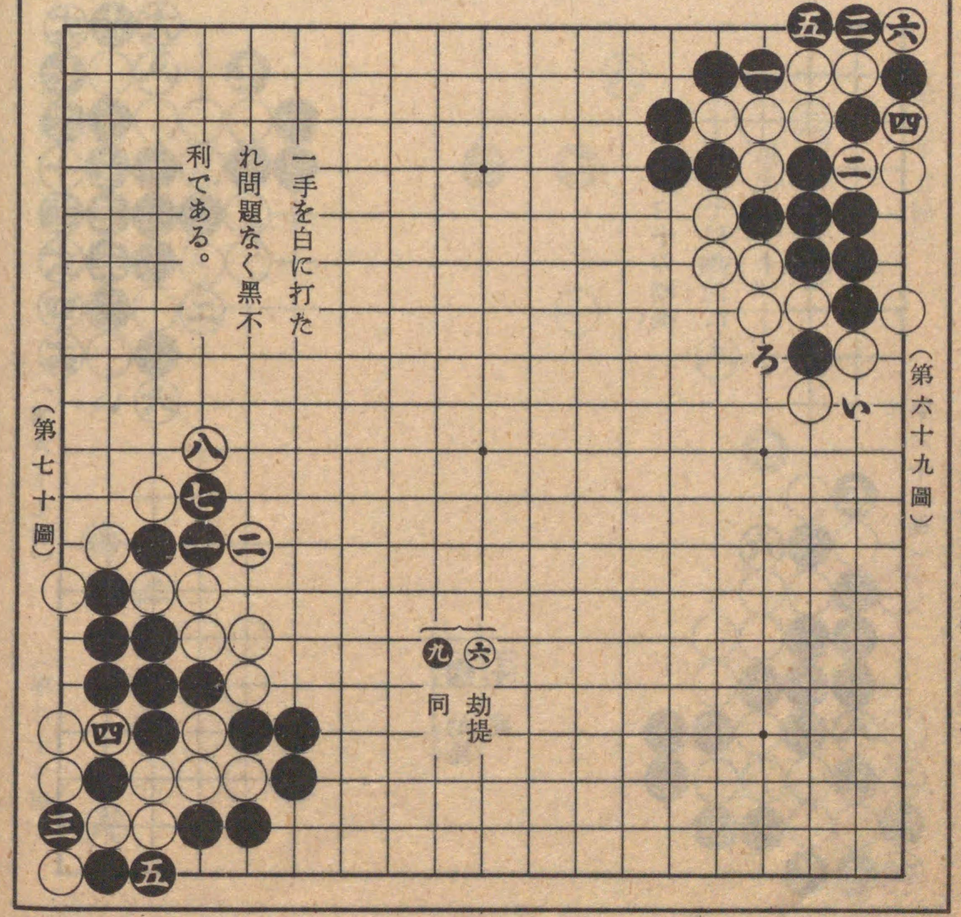


（第六十八圖）

劫提同

第六十九圖　黑一に對し白二と此の方から切れば黑三白四に續いて直に黑五を打ち得る點、卽ち前圖に於ける五の如き忍びない劫立を省略して前圖白十迄の同形に導かれますから黑としては前圖に比し劫立が一つ得であり、白が一劫の損といふ事になります。事實黑は白六の劫提りに次いでい、若しくはろを劫立とする事に依り劫爭その物には勝つ可能性さへ有るのです。

第七十圖　前々圖黑五を變へて此の一とし、次の劫立に七と更に犧牲を增せばこれも部分的には劫爭に黑が勝つけれど勝つても白に三子を打抜かれ（る事を想定し）續いてもう一手を白に打たれ問題なく黑不利である。

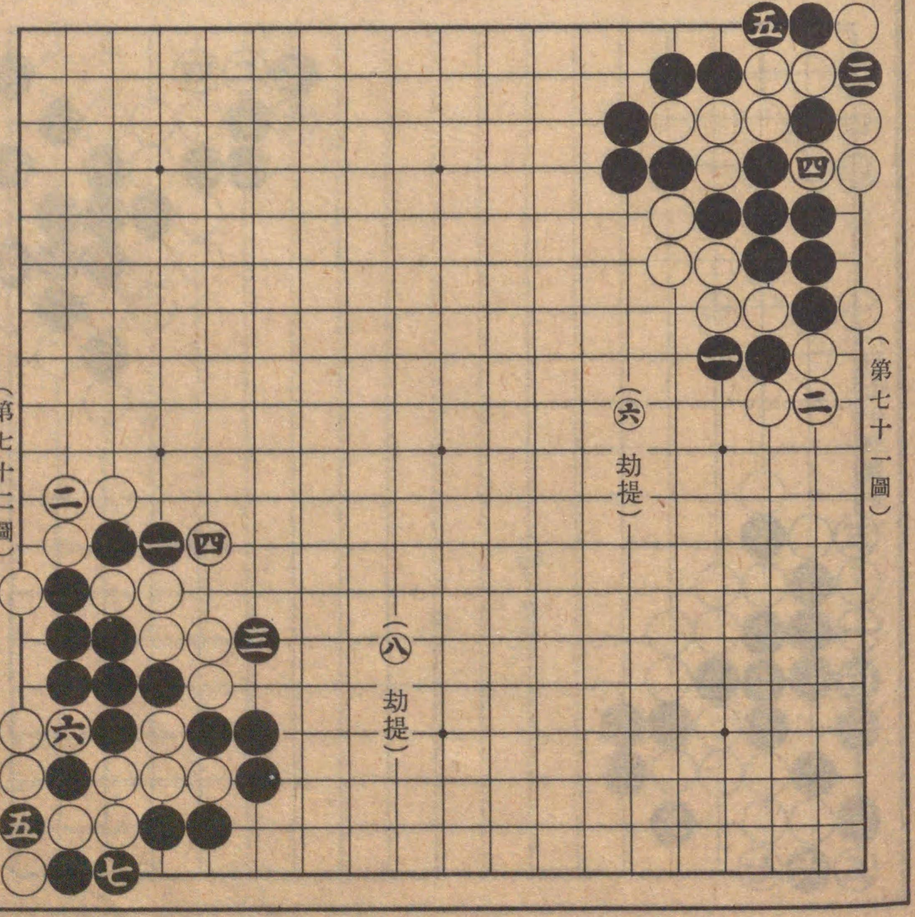


（第六十九圖）
（第七十圖）

第七十一圖　第六十八圖に於ける黑五と切る劫立を斯く一と出て見ます。白は元來征の良い場合であるから二と粘がずに征に追ふべきですが黑に劫立を多く與へまいとすれば粘ぐ事も不可能ではありません。

卽ち白六と劫を提つた時、黑には續く劫立が無いので部分的には劫爭にも白が勝つ事となる。白としては然しながら前圖の如く征を黑に逃出させて、それを打抜く大利の明瞭なるに勿論滿足します。次圖に注意。

第七十二圖　白二黑三と直に飛頂る手段に依り白四とでも若し受ければ白八に續く劫立が黑に提供されるのは白二の難點であります。



（第七十一圖）
（第七十二圖）

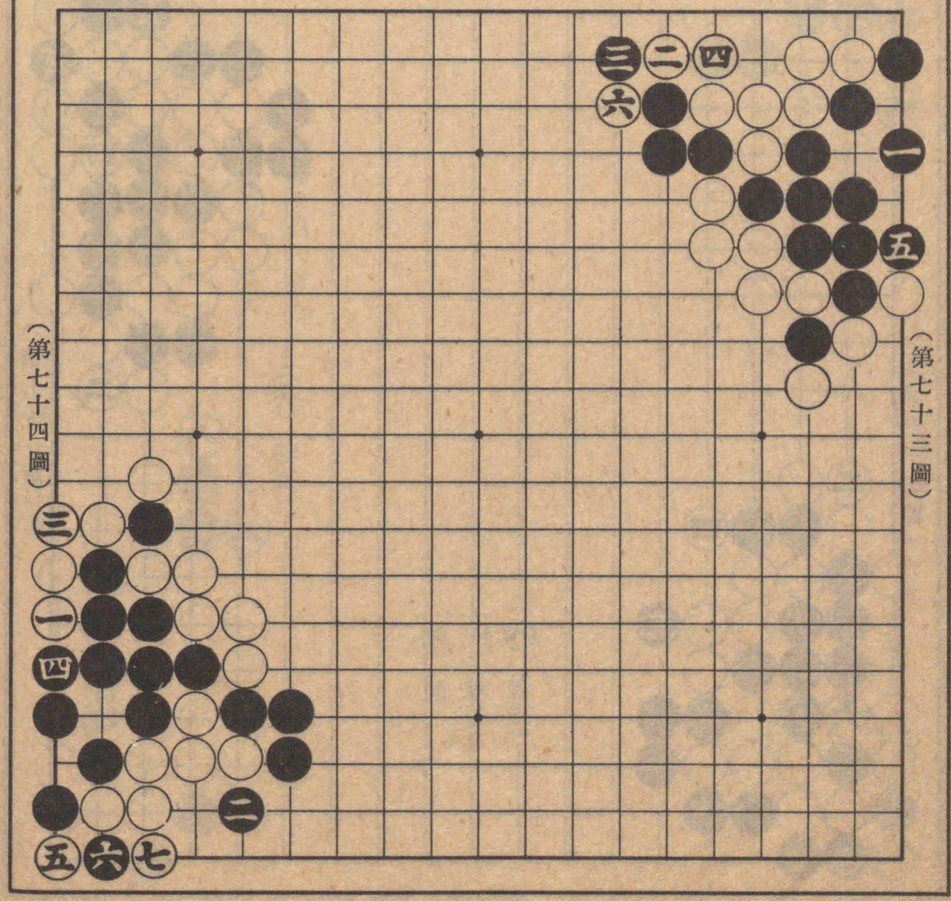
第七十三圖　第六十七圖に於ける黑九の手の變化ですが、斯く狹地に活路を求めるのでは初めに第六十六圖黑一と約へた趣意さへ疑はれ明らかに黑が悪い。

白六と切られる事になつては黑は一方を活きても、さん〴〵の結果であります。

第七十四圖　前圖白二の手で斯く一と打ち黑の眼形を奪つて取掛けに行くのは無理です。

白七まで劫爭には違ひないが、黑からは一手劫なるに反し、白は三段劫である。その不利は言ふ迄もありません。

本圖は參考までに揭げたのである。



（第七十三圖）

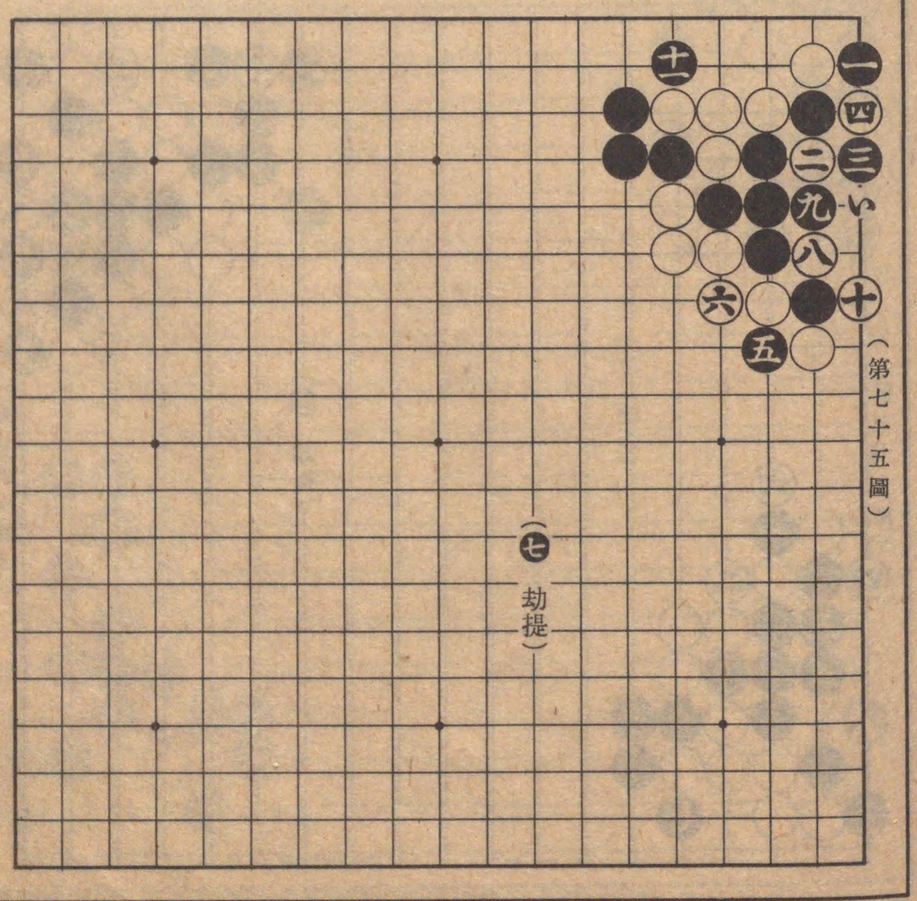
（第七十四圖）

第七十五圖　第六十七圖に於ける黑一の變化であります。

白二には機略が藏されるのですがそれだけに正著とは觀られません。

白八、十と部分的には切提る外無く、黑十一の後、白はいと挑む劫爭の含みを以て打つ意味です。其所に白の狙ひと作戰が潛んでは居るけれど、黑も或程度の成功と言ひ得ぬではない。黑は然るべき時機にもう一手補つて劫爭の禍根を解消せしめれば、兎も角も儲けた形なので打てる可能性があります。

なほ白が八の手で九に出る事の出來ないのは申す迄もありません。



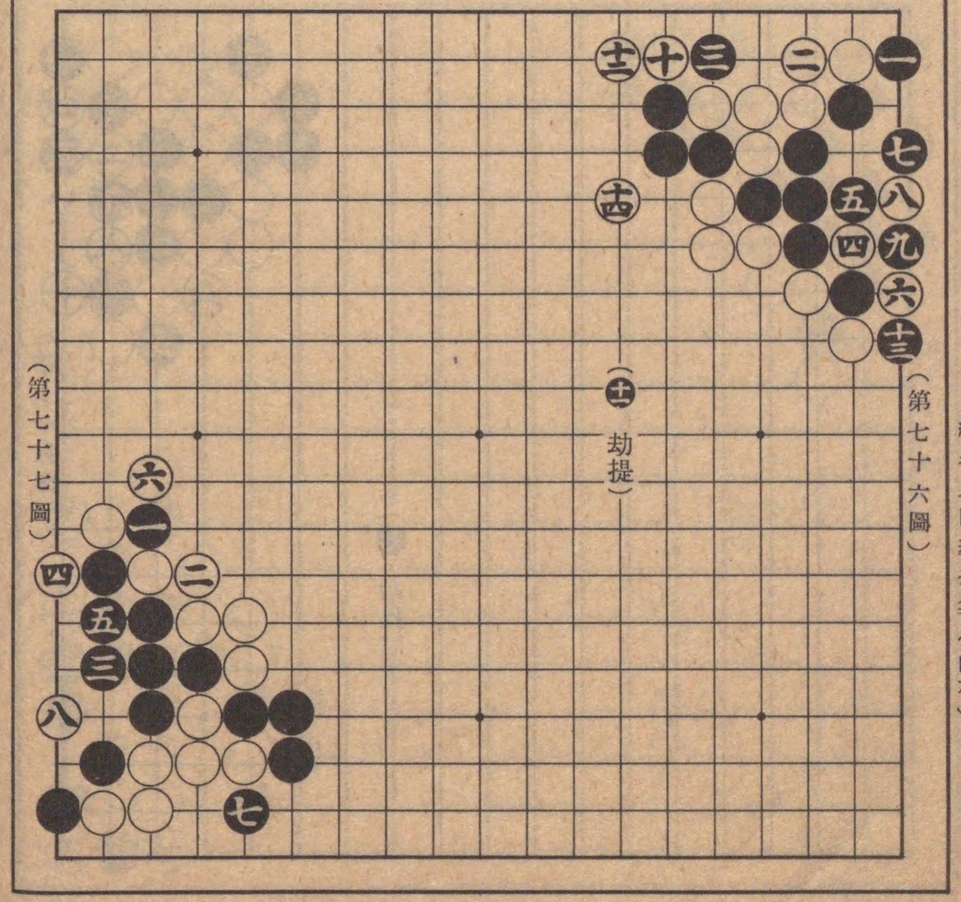
（第七十五圖）

第七十六圖　黒一白二と粘がねばならぬ。黒三と勢ひ綽ねざるを得ず此の手で次圖一、三と打てば同圖白四、六にて既出第六十七圖の型に戻つて終ひます。

白四、六は絶對である。

黒七と凹む所が大切であつて、これを誤つて八に下ると、第七十八圖に示される如く、黒の不利な一手劫に歸する。

黒十一も勢ひでした。此の手で十二と受けて居ては白に劫を提返された時、續く劫立が黒には部分的に存在しない。十四迄の結果、前圖よりも白としては有利と觀られます。



（第七十六圖）

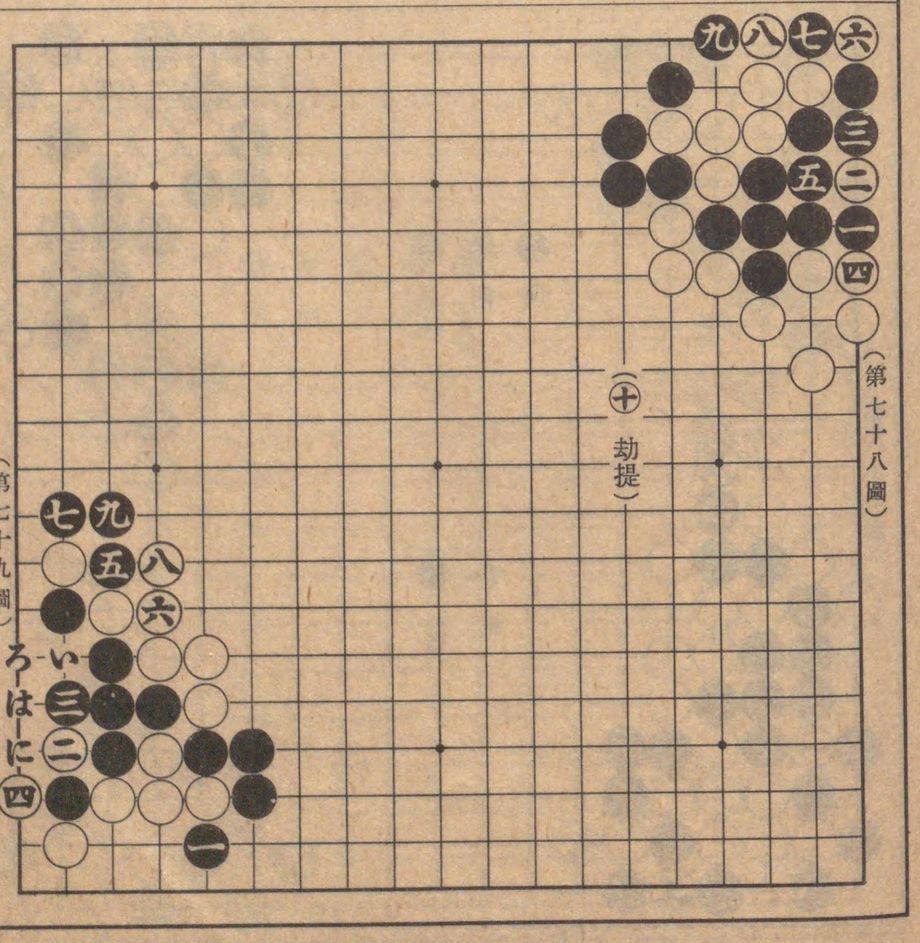
（第七十七圖）

第七十八圖　黒一乃至九に次いで白十と劫を提返され、黒に劫立無く明らかに失敗です。

第七十九圖　第六十七圖に於ける黒一の第二の變化として斯く一と綽ねます。白二、四は消極的に紛糾を避けたのですが黒九迄となれば此の結果は後の第八十五圖に比し黒稍有利であり、打てぬ事もありません。

後に白い黒ろ白はと劫爭の狙ひは黒にと提られると脅威が隅の白にも及ぶので、白も容易には敢行し得ません。但その狙ひと含みとが有ると言ふだけである。

白二は次圖以降に從ふべきであります。



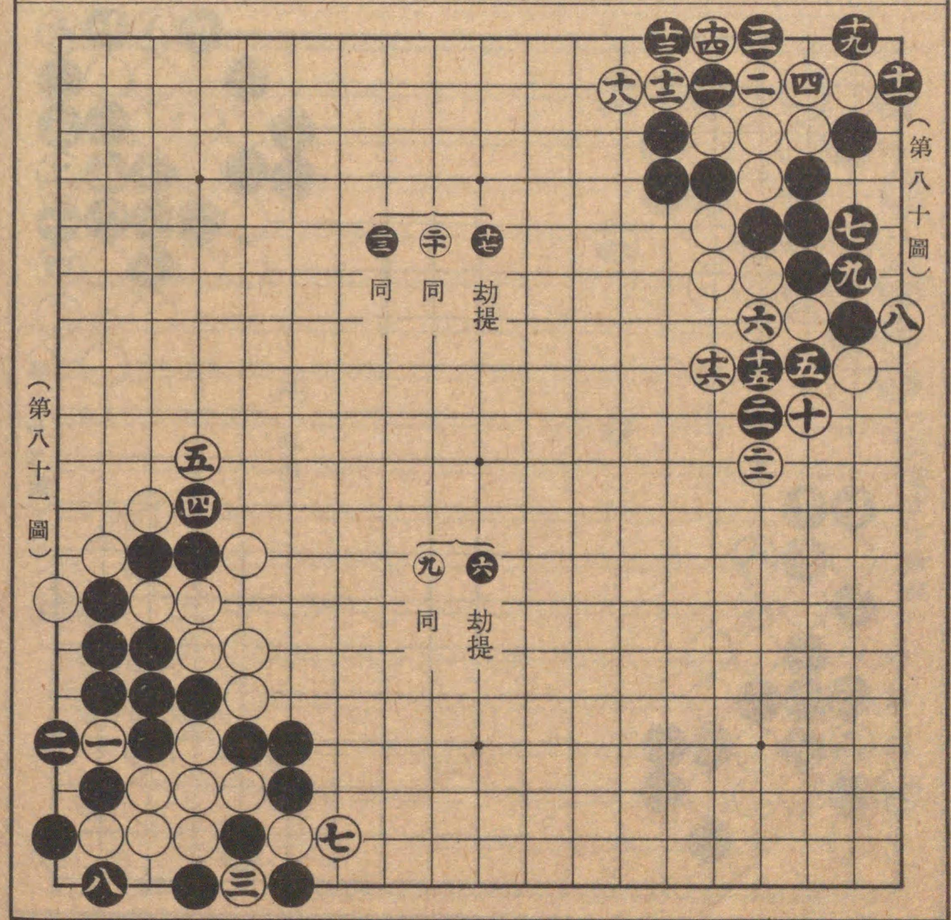
（第七十八圖）

（第七十九圖）

第八十圖　黑**五**乃至**十一**の運は、第六十七圖に於ける黑**一**乃至**七**と類似します。

白**十二**と切つて今度は此處の劫爭になる。黑**十五**、**二一**の如きを劫材としなければならぬ苦痛の大は兎も角も、二三迄となれば隅の白を屠る事は出來ます。固より黑有利とは觀られないが、白には**十八**と行出す手で次圖**一**と打込むと言ふ巧みなる劫材があり、それだと黑の不利は愈々大きからざるを得ません。

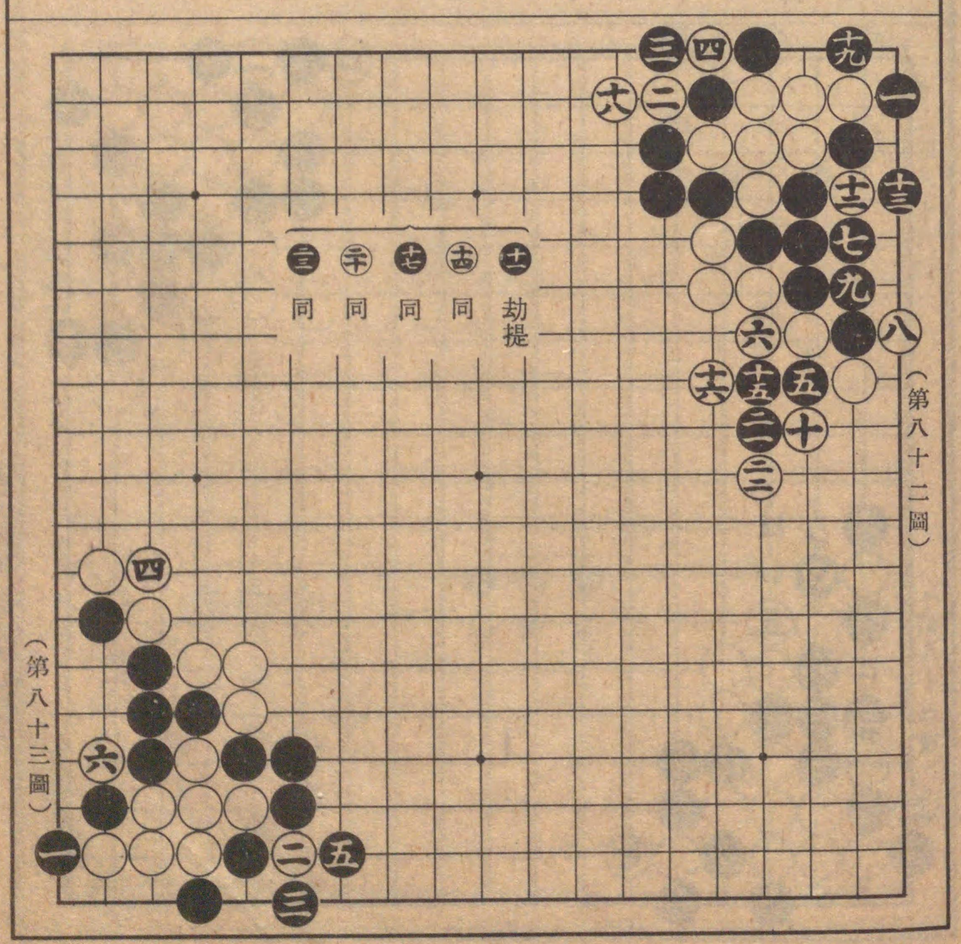
第八十一圖　白**一**黑**二**の交換は所謂『地入り濱入り』であつて隅を黑に與へる以上白に損無く、前圖との一劫の差は餘りに大です。



第八十二圖　第八十圖に於ける黑**五**の手で斯く**一**の綽ねを先にする變化です。本圖と前圖との差が矢張り一劫の違ひに存し、從つて部分的には本圖黑**一**が働く事を思はねばなりません。

第八十三圖　前圖の如く劫を提らずに、白**四**と粘いで見る。黑**五**は今度劫爭を起しては黑に劫材が皆無であるから斯く打抜いて劫爭は避ける外なく、そこで白**六**と切ります。

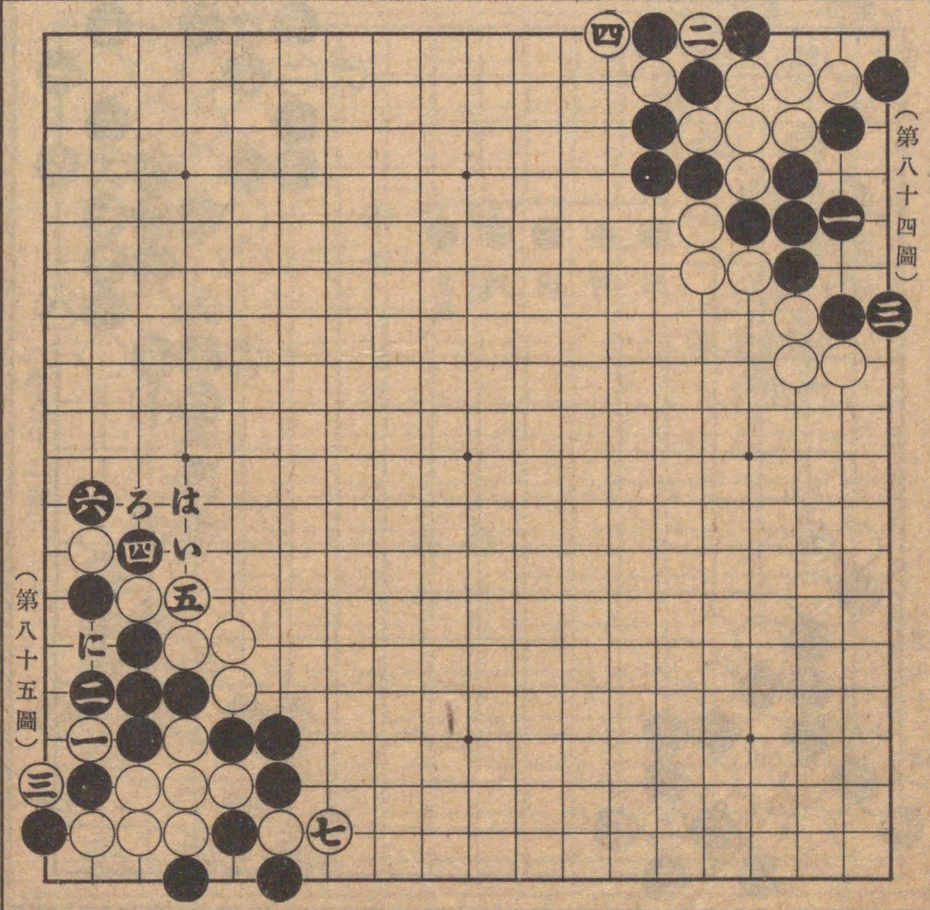
切つた儘では不完全であるが此後機を得て更に白が一手補ひ、取切る事となれば相當の形です。要するに白**四**は劫爭を封ずる意味であるが、消極的たる誹りは免れない。



第八十四圖　前圖黑**五**と提る手で斯く**一**、**三**と打つて此の方を活きる事は、遡れば第六十六圖に於いて黒**一**と約込んだ意志と矛盾するのは勿論、前圖黒**一**、**三**の期した所でもある筈がない。

白**二**、**四**と打抜かれては黒の不利は問題外であります。本圖は參考迄に掲げました。

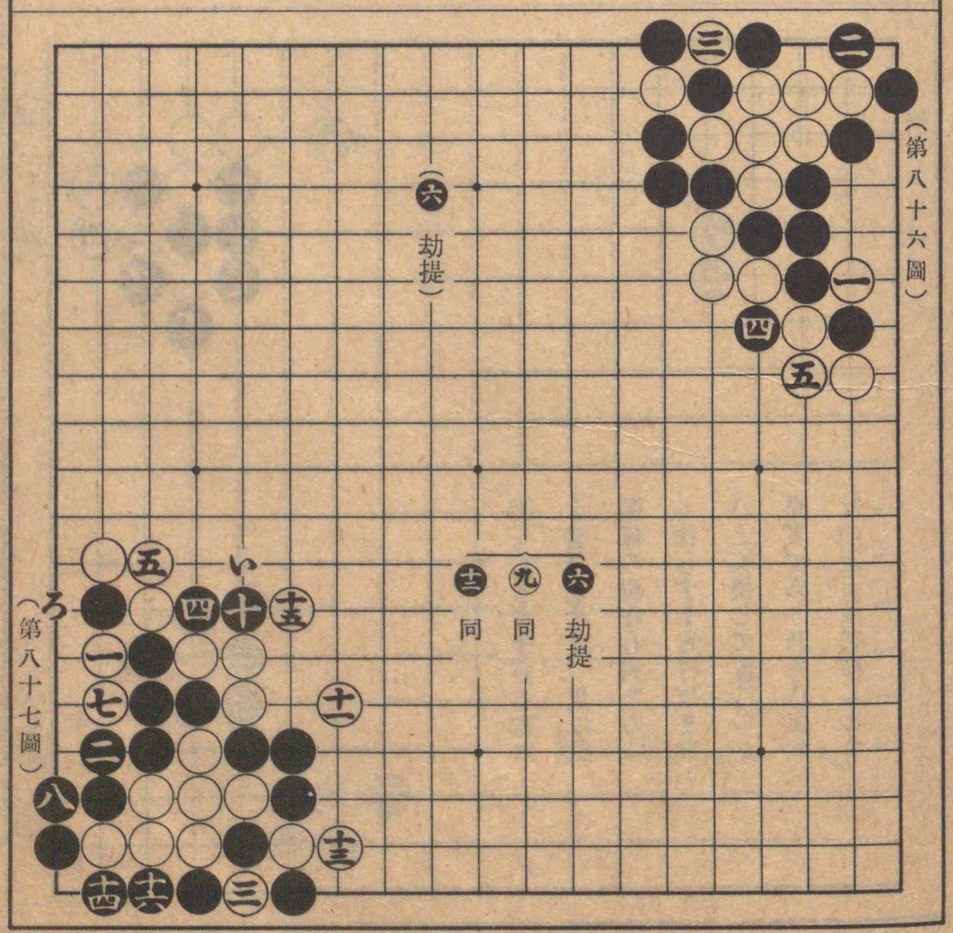
第八十五圖　第八十二圖白**四**の手で斯く**一**と切る。次いで黒**二**乃至白**七**が考へられます。**七**に續いて黒**い**と押すか、又白から**い**と當て黒**ろ**白**は**と押す事になるかは言へないが後者には白**に**と打込んでの劫爭が含まれる事だけを指摘するに留める。



第八十六圖　前圖の白**一**にて此方を**一**と切るのは黒**二**白**三**に次いで黒**六**と提返され、白に續く劫材無き限り、部分的には明らかに白の失敗に歸する。

第八十七圖　同じ白**一**に對し黒**二**と粘げば以下黒**十六**迄、部分的には隅の白を屠る事が出來ます。然し其の地は現在十五目に過ぎず、白は**十三**、**十五**の手で種々打方があらうけれど簡單に黒**十四**、**十六**を容るし次いで白**い**と補ふものとしても、滿足し得る結果です。

なほ黒**二**の手で、**七**と受けるなどは白**ろ**と提られ、黒に劫材無く窮せざるを得ません。

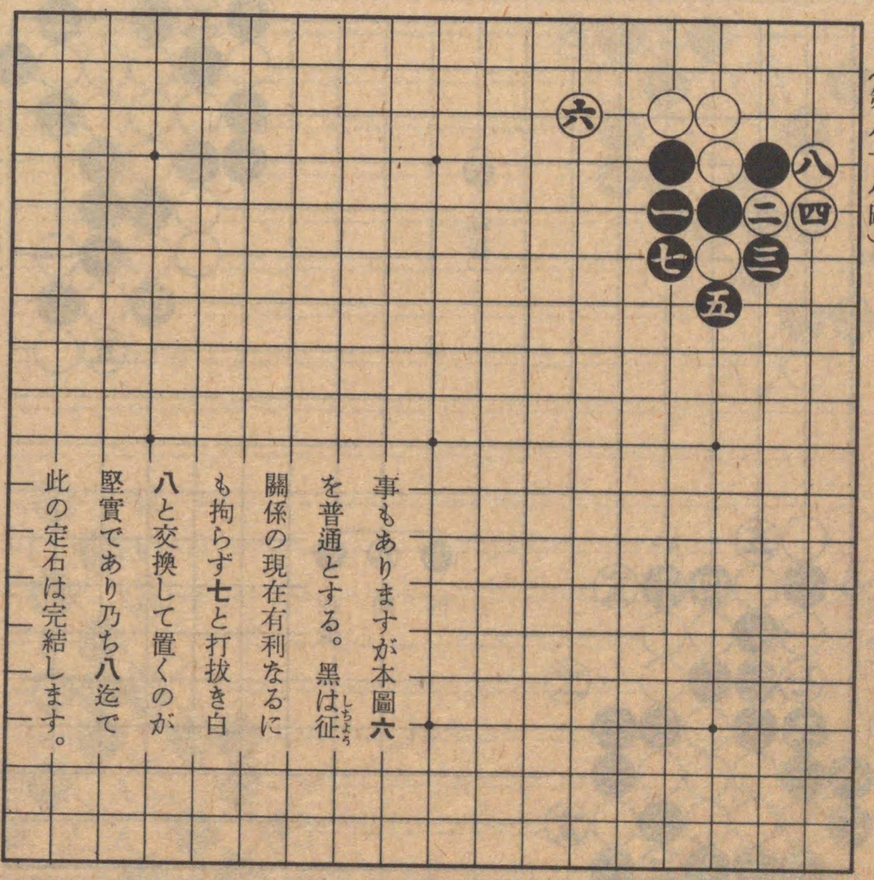


第八十八圖　黒一は術語に『上を粘ぐ』と呼ばれる型であります。隅の實質に於いては失ふ所あるも外勢を張つて滿足しやうとし、或は先手を得やうと言ふ意味を以て選ばれるのですが、何れの場合にも其の裡に簡明を求める意向が働いて居らぬとは言へません。多分に其の點もあるのである。事實に於いて變化が比較的簡單ですから先づ此の型より征服して行くを便宜と考へる。

白二、四は固より絶對です。

黒五と抱へる征の成立する事が初めに一と上を粘ぐ爲の必要條件である——第九十五圖參照。

白六を一路高く次圖の如く構へる事もありますが本圖六を普通とする。黒は征關係の現在有利なるにも拘らず七と打拔き白八と交換して置くのが堅實であり乃ち八迄で此の定石は完結します。

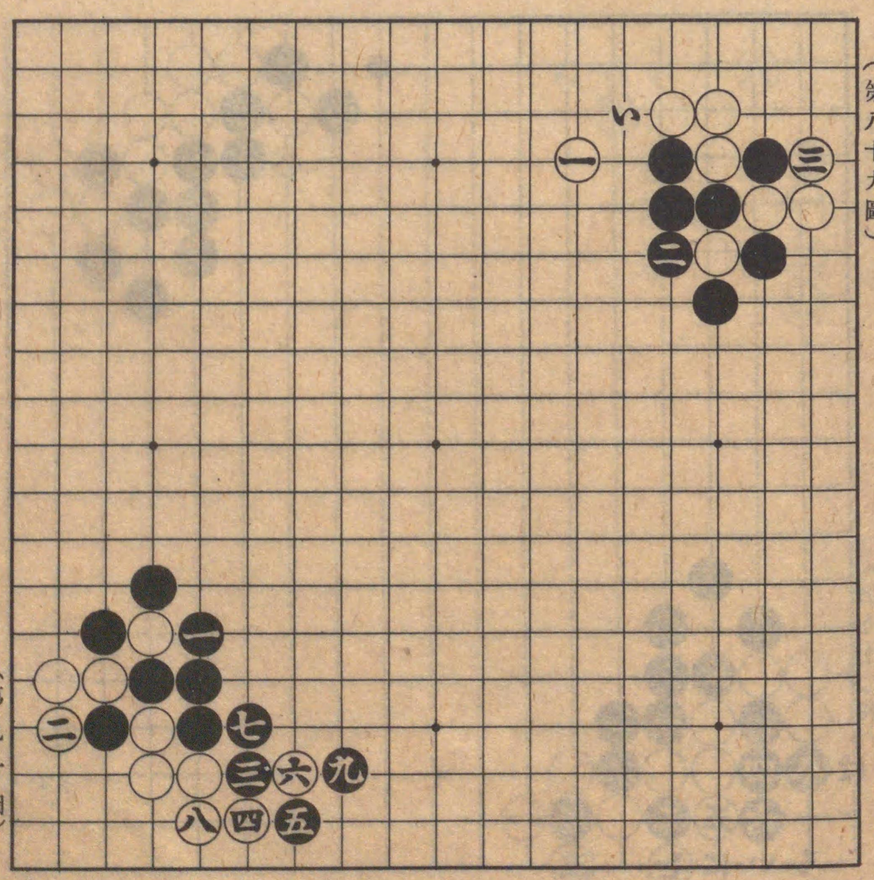


（第八十八圖）

第八十九圖　前圖白六を以て一路高く一と構へるには、上邊左方の配置關係が主として考慮に入れられねばなりません。卽ち其の方面との權衡を保つ意味ですが、黒いと綽出される餘地の殘る所、一般に正著とは觀られない。

第九十圖　前圖白一、從つて第八十八圖に於いては白六を稀に省略する事があります。手を拔いて白の良い筈は無いが、黒は先づ一と打拔き白二を餘義無からしめて三、五と二段に約へるのが嚴しい形です。

白八と尋常に粘げば黒九と抱へて外勢が厚壯を占める。但し次圖以降に注意を要します。



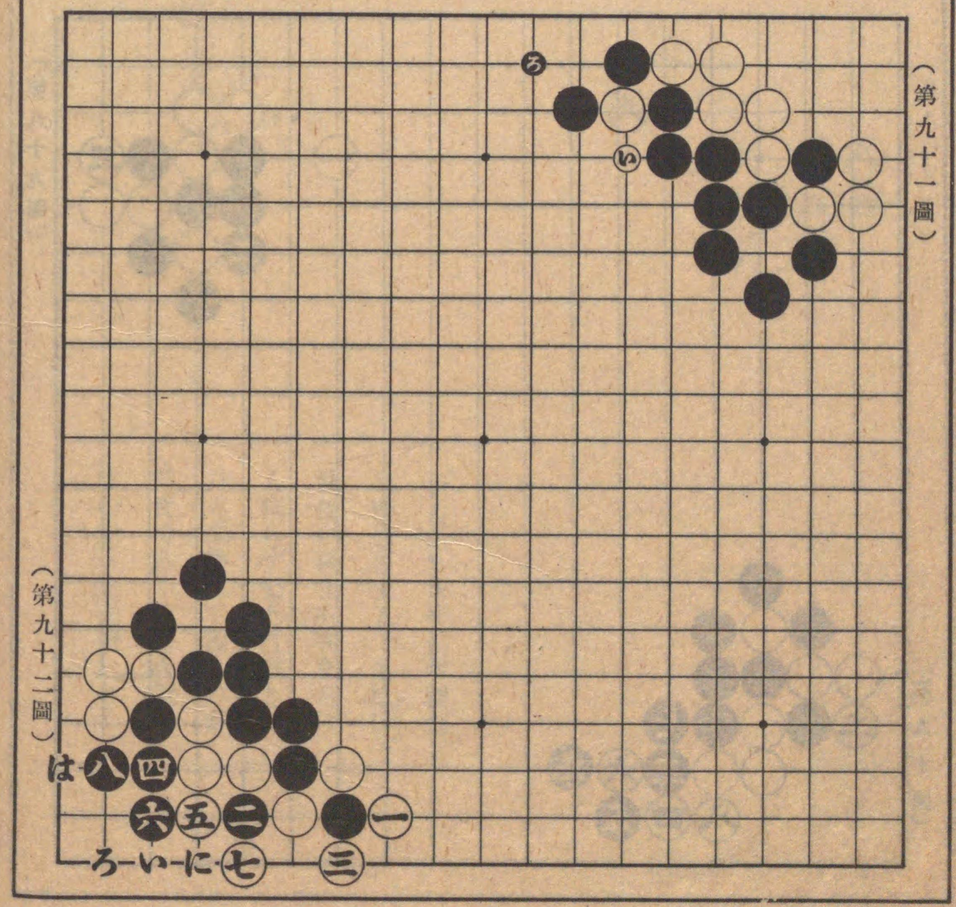
（第八十九圖）

（第九十圖）

第九十一圖　前圖黑**九**と抱へる征が成立すれば勿論問題はありませんが、然らずして其の**九**に續いて斯く白**い**と行出す餘裕があるとしても、黑は**ろ**と應じて優に戰ひ得る姿であり、行出しは白の負擔を增すものでなければならぬ。

第九十二圖　前々圖に於ける白**八**の手で斯く**一**と抱へる變化。

黑**二**乃至**八**に次いで白**い**黑**ろ**白**は**黑**に**の劫爭は、其の狙ひがあると言ふだけのものであつて、白から容易には挑む事が出來ません。卽ち黑**八**迄で、本圖は明らかに白の失敗に終りました。



（第九十一圖）

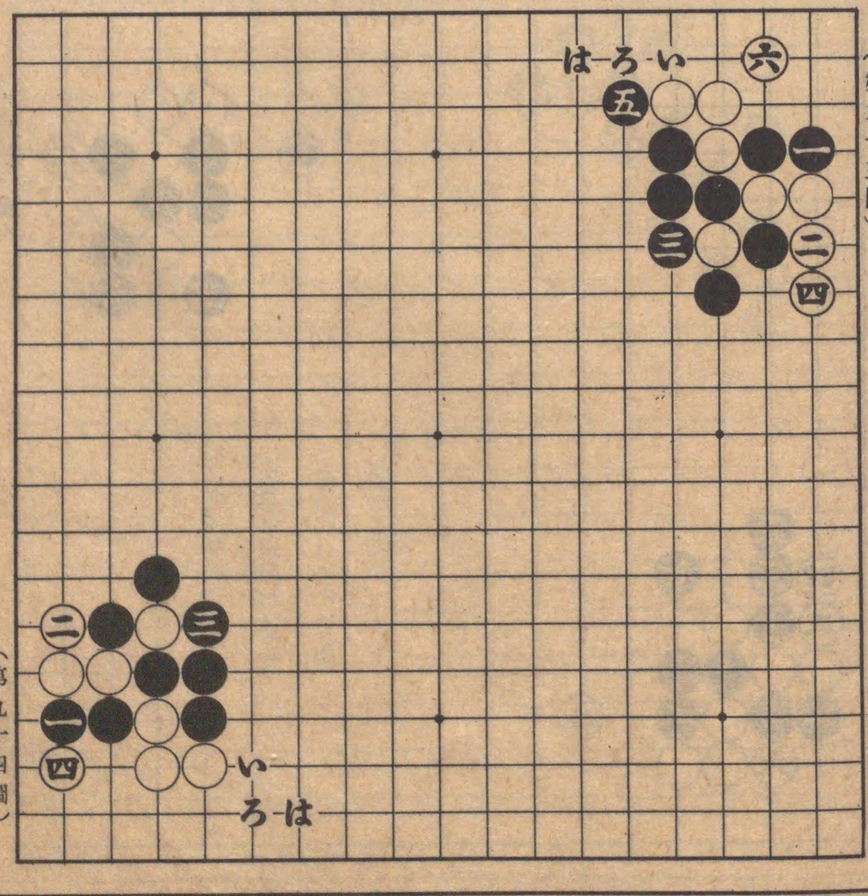
（第九十二圖）

第九十三圖　第九十圖黑**一**の手で斯く**一**と隅から約込むのは、白**二**を促し其の調子で**三**と打抜く運びを求め導く意味に於いて面白い。征關係が現在有利には違ひないが然るにも拘らず征は早機に打抜くを確實とするので、其の打抜きを自然の手順で誘つた所が黑**一**、**三**の働きです。

白**四**黑**五**に次いで白は**六**と補ふ位のものですが其の時黑は手を抜いても、又**い**と綽ねて置いても宜しい。

六の手を若し**ろ**と綽ねれば黑は勿論二段には**は**と約へる。

第九十四圖　白**四**と玆で戻るのでは黑**い**白**ろ**黑**は**と約へられ白の窮狀が蔽はれません。



（第九十三圖）

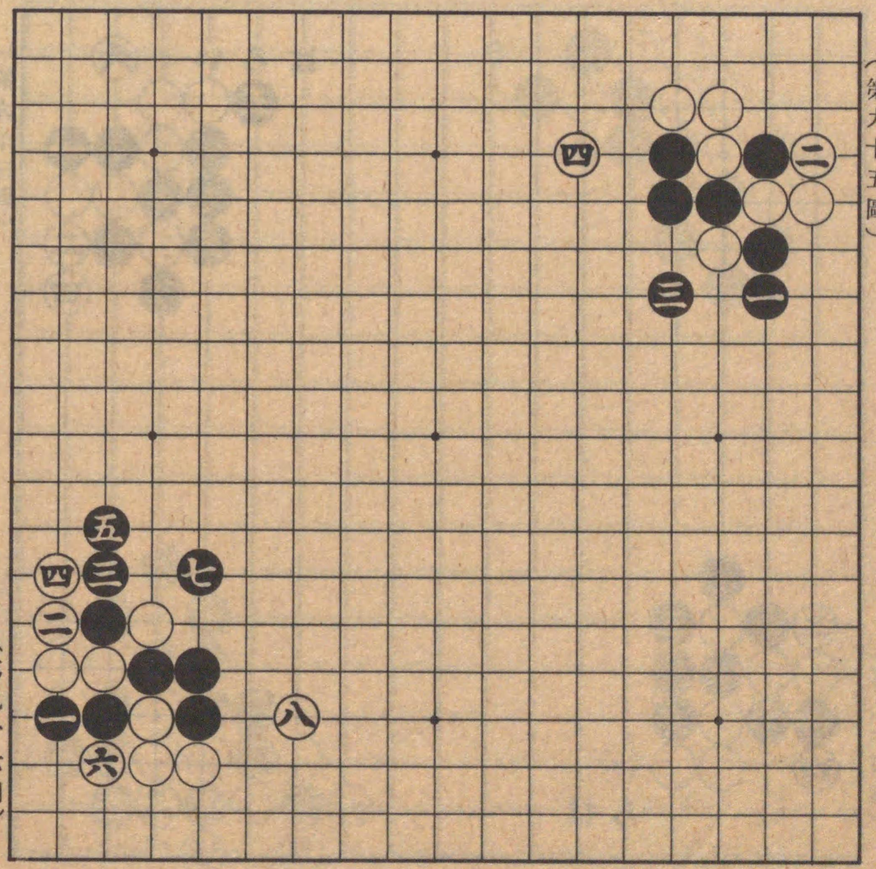
（第九十四圖）

第九十五圖　初めに指摘した征關係の黒に不利な際は斯く**一**と引く外ありません。

白**四**と高く構へるに適切であります。然しながら征關係悪しくしては本來第八十八圖に於いて**一**と上を粘ぐ手から、破綻であり矛盾である。本圖黒**一**、**三**は第八十八圖の打抜いた形の明快に比し、劣る事申す迄もない。

第九十六圖　黒**一**を先にし白**二**、**四**を導いて**三**、**五**と運ぶも前圖と大差なく依然たる黒の不利です。**五**の裾が空いて居る點も、黒の不滿でなければなりません。

（第九十五圖）



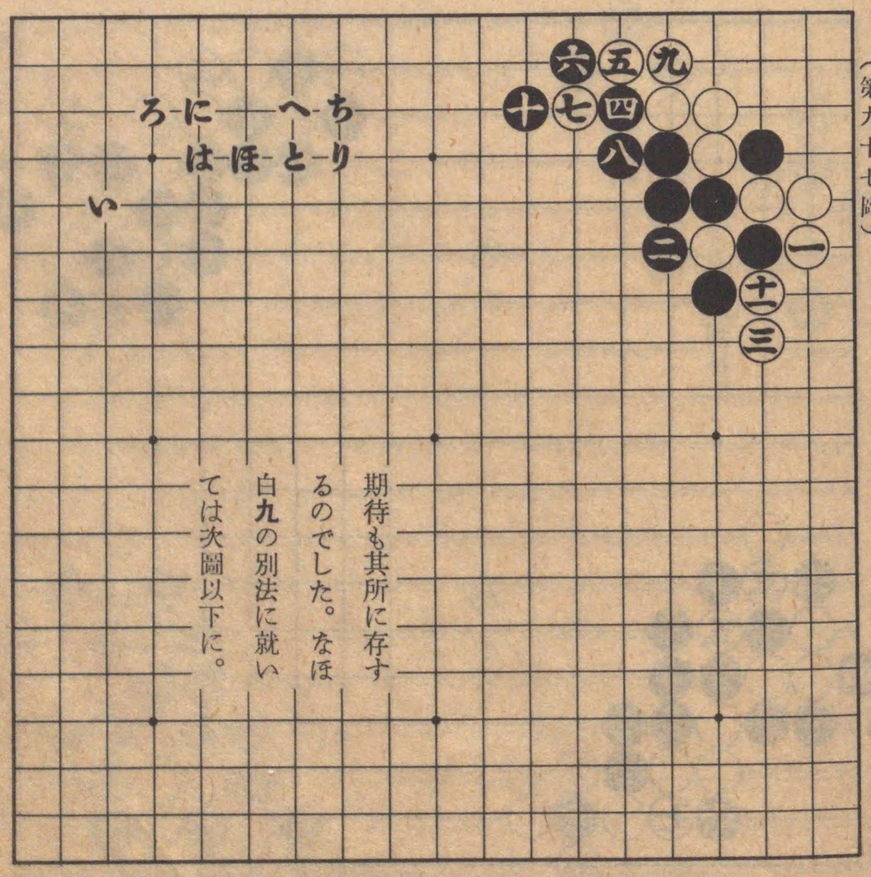
（第九十六圖）

第九十七圖　第八十八圖に於ける白**六**の手で斯く**一**と曲り**三**と斜走するは場合に依る事であります。一般には上邊左方に黒の低い配置が豫め在る際など實戰にも往々行はれる所である。部分的には黒が有力なる外勢を張る事となるので紊りに用ゐるべきではない。

黒**四**、**六**と二段に約へる手筋が玆にも適用され、白**九**と粘げば黒**十**と抱へた時、白**十一**と補つて一段落。

蓋し左上隅方面に白**い**黒**ろ**白**は**黒**に**白**ほ**黒**へ**、の如き交換あれば、黒**十**迄の厚みも、更に白**と**黒**ち**白**り**と押して一方より壓迫を加へ、其の效果を著しく減殺すべく、白**一**以降の期待も其所に存するのでした。なほ白**九**の別法に就いては次圖以下に。

（第九十七圖）



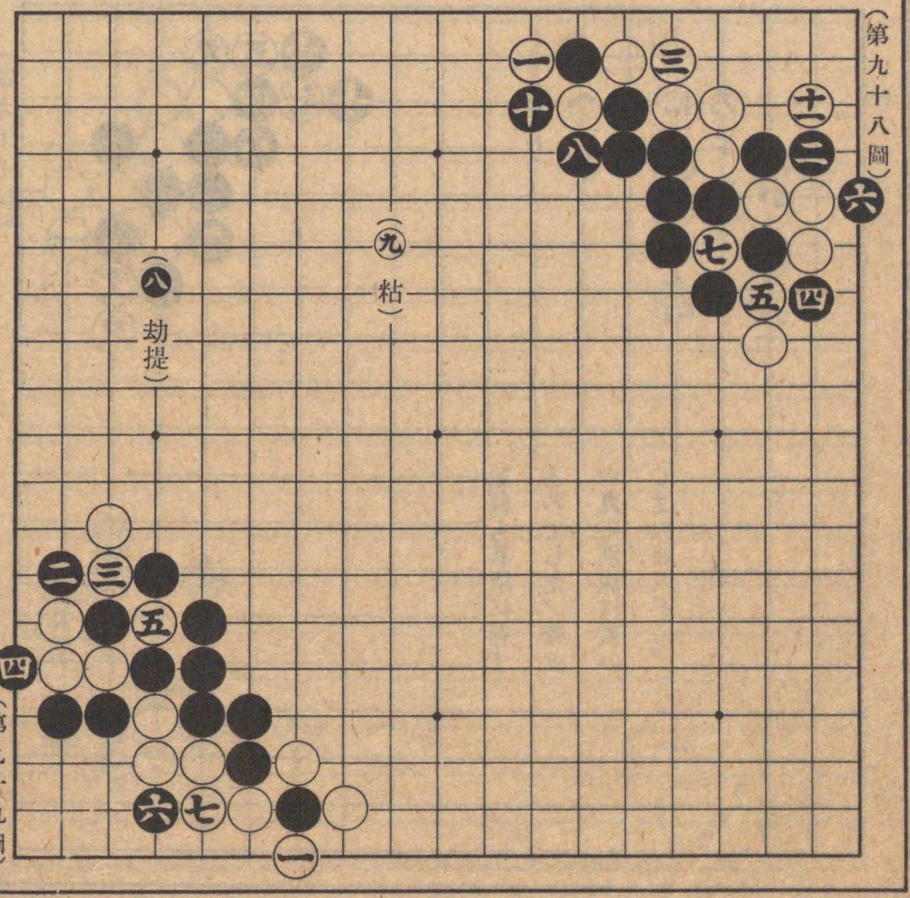
第九十八圖　前圖白九の手で斯く一と抱へる變化です。

黑二と約へ四と綽出して勢ひ劫爭である。白も固より覺悟の上でなければなりません。黑八に對し部分的には白九と劫を粘がざるを得ず黑乃ち十と打拔く事となり此の結果は先づ互角に近しと觀られる。

第九十九圖　前圖白三の手で斯く一と打拔き、黑の劫立を解消せしめ得れば旨いが、それには黑六と頂ける巧みなる手段があります。黑八と劫を提られて白は窮するのである。

黑も六の手で七を切り白六と抱へられる劫立は忍びず、圖と大差ある事を思ふべきであります。

（第九十八圖）



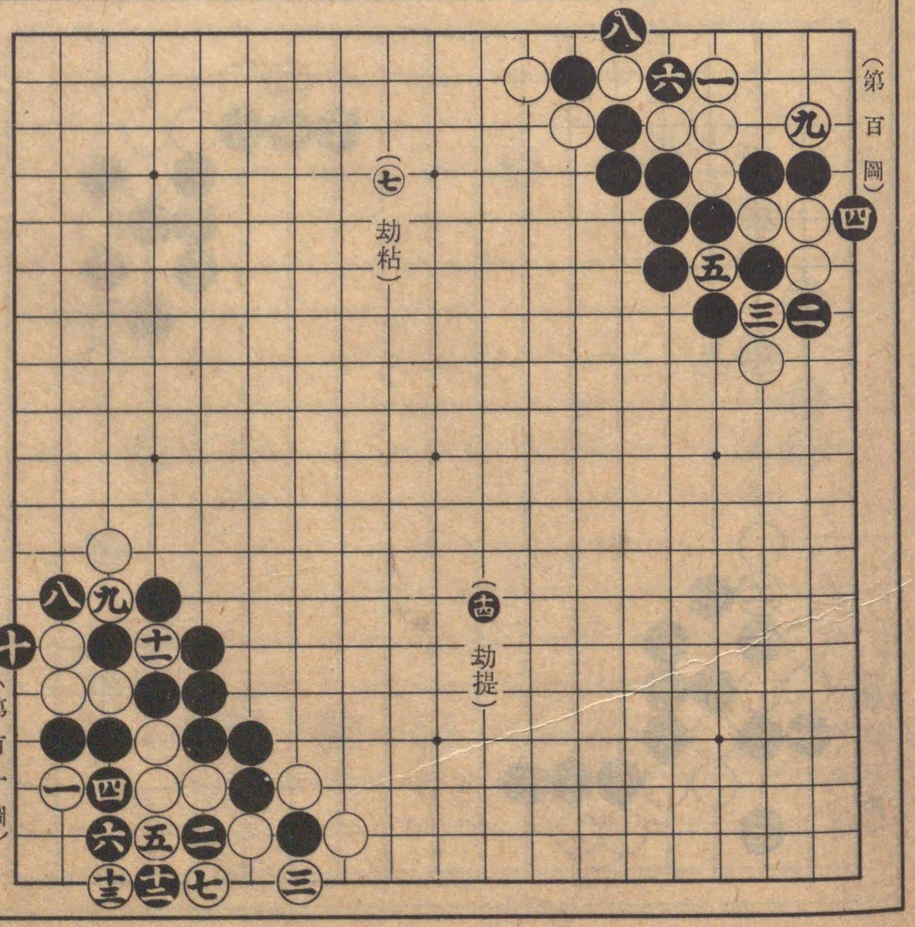
（第九十九圖）

第百圖　白一と再び斯く掛粘ぐも依然黑二、四の劫爭。

黑に六の劫立がある限り白七と粘がざるを得ず、黑八白九の振換りは勿論黑の大利である。

第百一圖　今度は白一と頂けて其の方から働き掛けて見ます。

黑二乃至十にて猶且つ劫爭を挑むべく、結局黑十四の劫提り迄、白に收拾の途が盡きました。斯くては最初に指摘した所の右下隅方面の黑の低い姿勢と言ふ想定も空しからざるを得ず、明らかに白の失敗としなければなりません。



（第百圖）

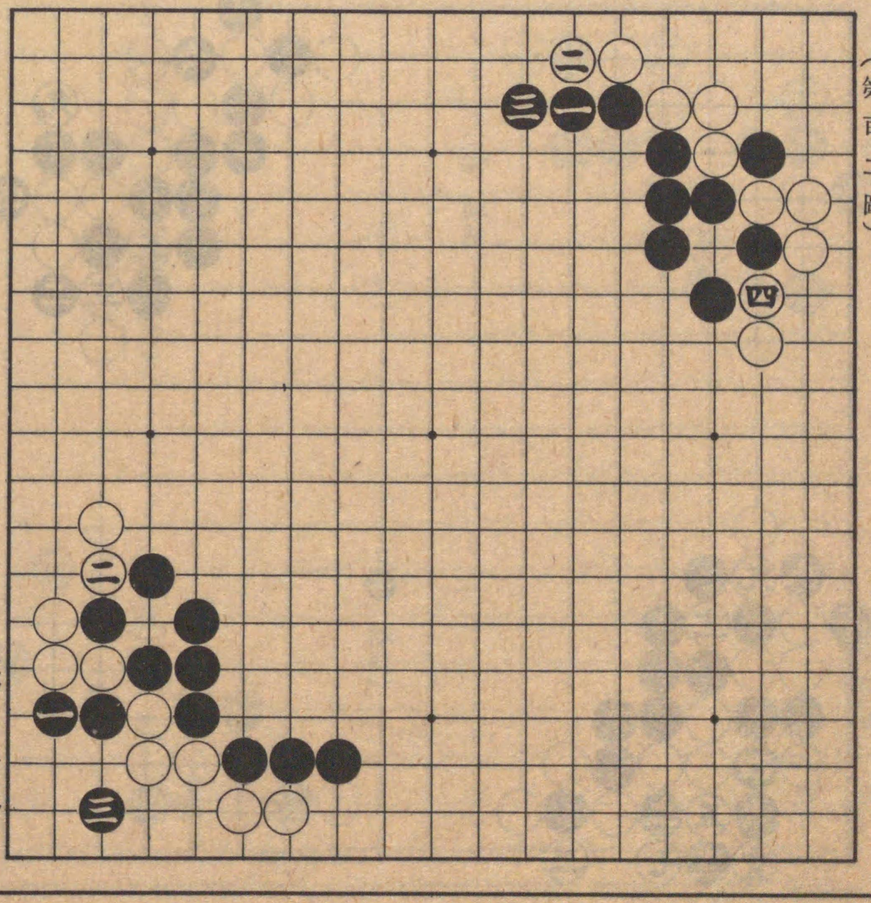
（第百一圖）

第百二圖　第九十七圖黑**六**と二段に約へる手で斯く**一**、**三**と行びるのは確實と言へます。確實には違ひ無いが緩い事も亦否定されない。

白**四**は省略し得ない肝要の一著である。さて左上隅方面に黒の低い配置ある時、本圖**一**、**三**の愚は愈〻蔽はれぬ所なのであります。

第百三圖　前圖白**四**を怠る可からざる理を明らかにする——

黒**一**、**三**の手筋が燦然と輝くのを見るであらう。但し白**二**の手で**一**の一路下に夾頂ければ黒は勿論**二**の一路左に綽出し既に示した嚴しい劫爭を敢行する迄であります。



（第百二圖）

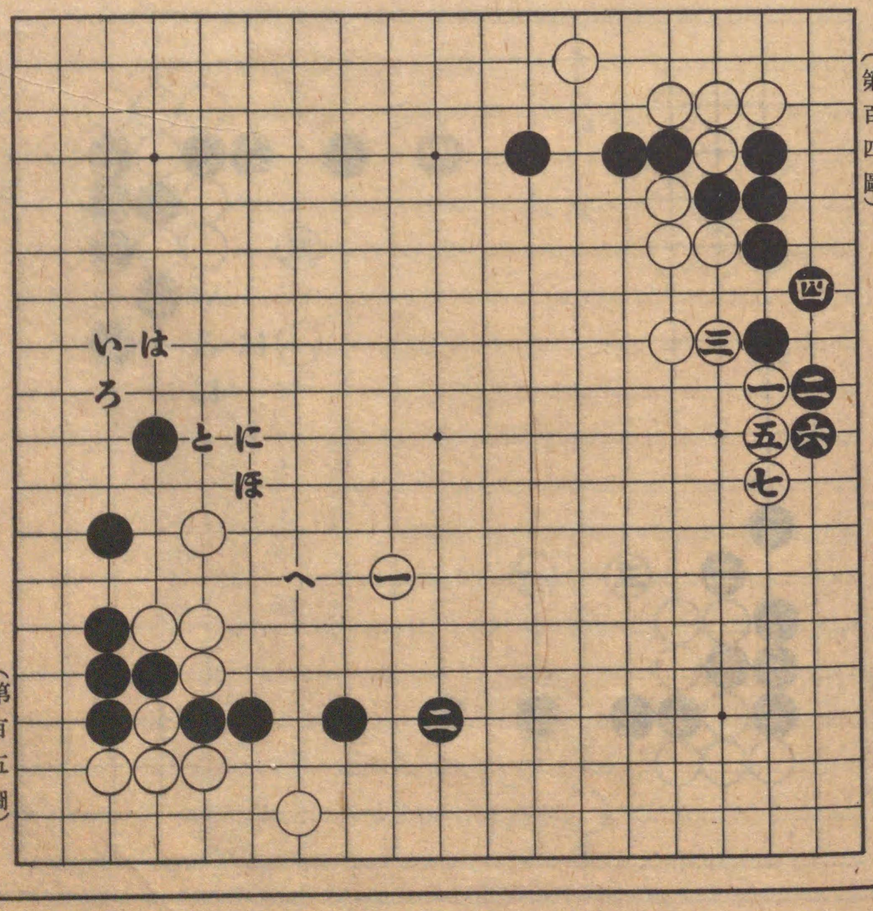
（第百三圖）

第百四圖　第六十五圖に於ける黒**九**の手を省略する例が絶無ではありません。卽ち圖の白**一**乃至**七**と高壓される事を意としない特殊の場合に手を拔いて他の好點に轉ずる。

白**一**以下は然る際の通型である。

第百五圖　第六十五圖の白**十**を以て斯く**一**と進むも常に見る所です。

黒は矢張り**二**と應じて宜しい。次いで機を得て白**い**と迫るに便なる左上隅方面の配置を想定し、白**い**黒**ろ**白**は**黒**に**、若しくは黒**ほ**、に對しては白**へ**と補はざるを得ません。白**い**でなく逆に白**と**と飛頂ける様な碁勢に導かれる時は**一**は明らかに第六十五圖**十**より優る理。



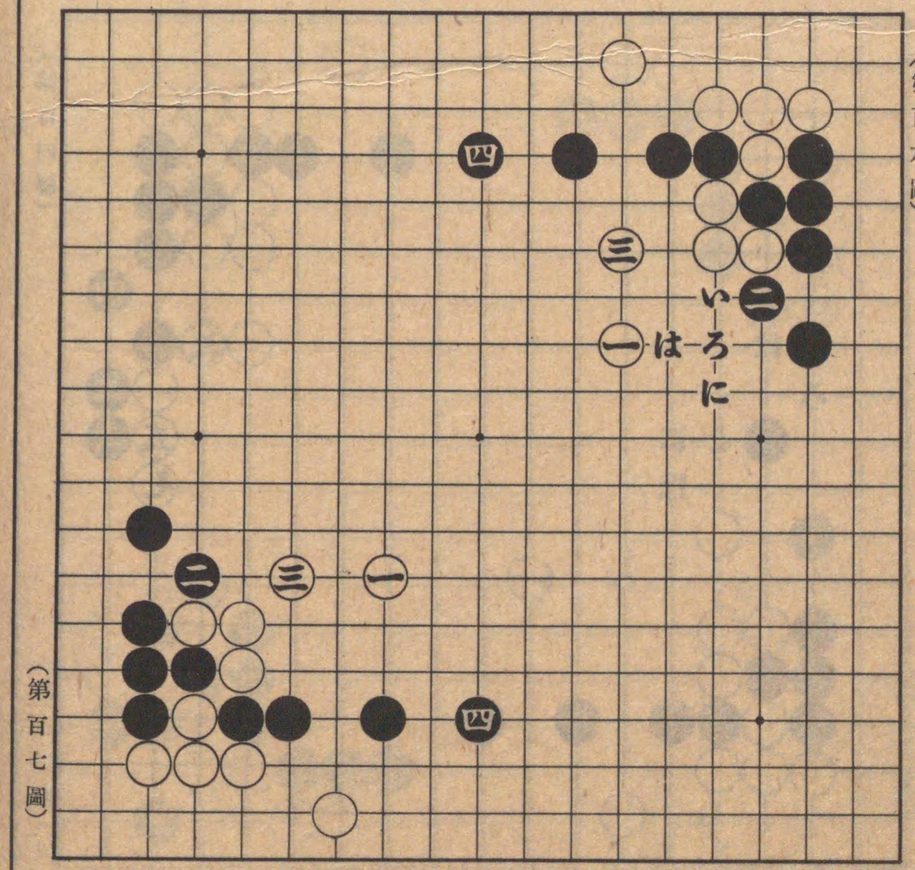
（第百四圖）

（第百五圖）

第百六圖　第六十五圖に於ける白**八**の手で斯く**一**と間を空けて打つ型が稀に行はれます。これは然し術語に謂ふ所の『利き』の惡い手であつて黒は**二**と腹れて置く位で宜しい。

白**三**にて**い**に押し黒**ろ**白**は**黒**に**等を交換して見ても、黒を堅めるに過ぎず、結局は**三**の點に補はざるを得ません。

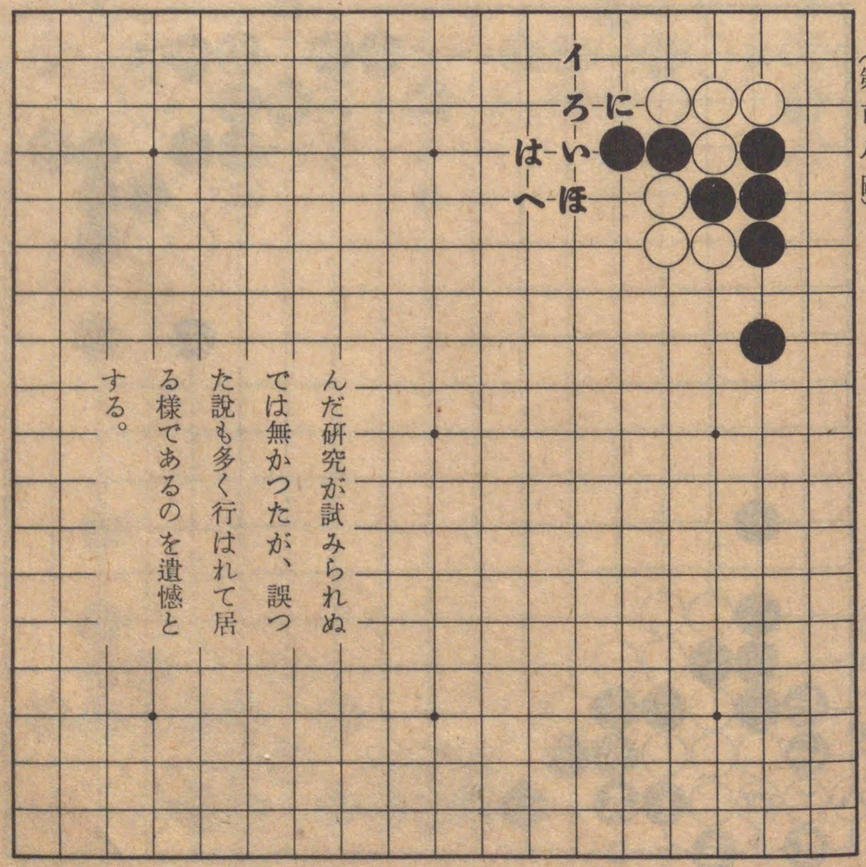
第百七圖　前圖白**一**を變へ斯く**一**と單に大斜走する。矢張り黒の形を熟さしめる事を嫌ひ、ぼんやり打たうと言ふのですが、黒は此の時にも**二**と補つて確實であり、白**三**黒**四**となつて一段落であります。



（第百六圖）　（第百七圖）

第百八圖　第六十五圖に於ける白**六**の手では猶奇變を弄して種々の打方があります。其の中には定石と目されぬものもあるけれど、それに對する應酬の途は心得て居なければなりませんし、又立派に定石としての存在を主張し得る型もある。仍つて以下少しく詳細に變化を檢討して行く積りであります。

卽ち白は此處で**イ**と斜走するのが常態であると言つて置いたが、他に**い、ろ、は、に、ほ、へ**等々に打つ手段がある譯である。就中前三者は何れかと言へば『嵌め手』なるものに近く、最後の白**ほ、へ**に就いては比較的新しい型として從來相當突込んだ研究が試みられぬでは無かつたが、誤つた說も多く行はれて居る樣であるのを遺憾とする。

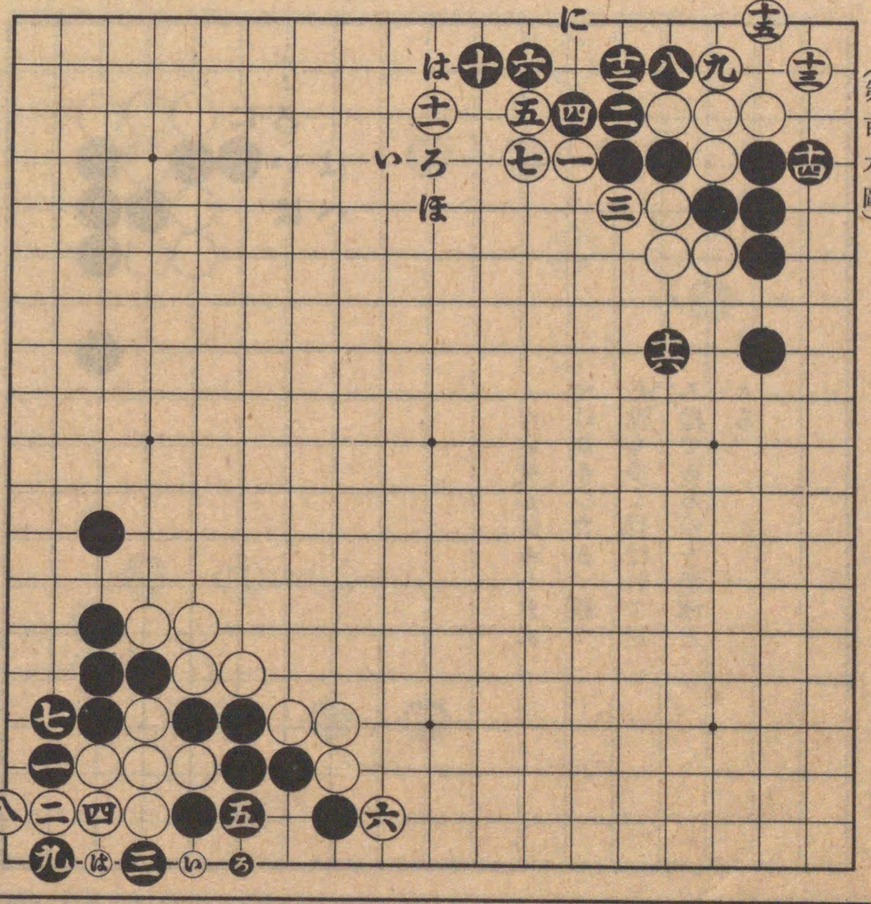


（第百八圖）

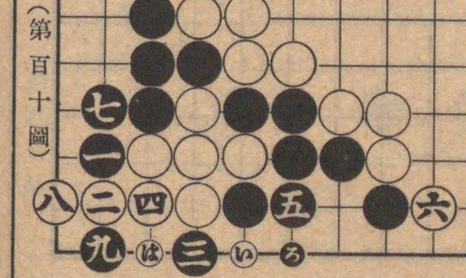
第百九圖　白一に對し黑は二と曲る一手であります。白三は此の手で四と約迄む變化もある。

白五と二段に約へたい筋ですが、黑は六乃至十二の手順に依り治まつて良く白十三、十五と隅を活きた時黑十六と飛ぶ位で宜しい。猶後に白はいの尖み若しくはろの竝びを以て利かせるを働きとすべく、然らずして白はに、に次いで白ほと補ふなどは頗る拙である。

第百十圖　前圖黑十の手で斯く一と綽ね白二乃至黑九を期するは最も嚴しい手段であります。續いて白(い)黑(ろ)白(は)の劫爭は白の寄劫であり黑の何等顧慮するを要しない所です。



（第百九圖）

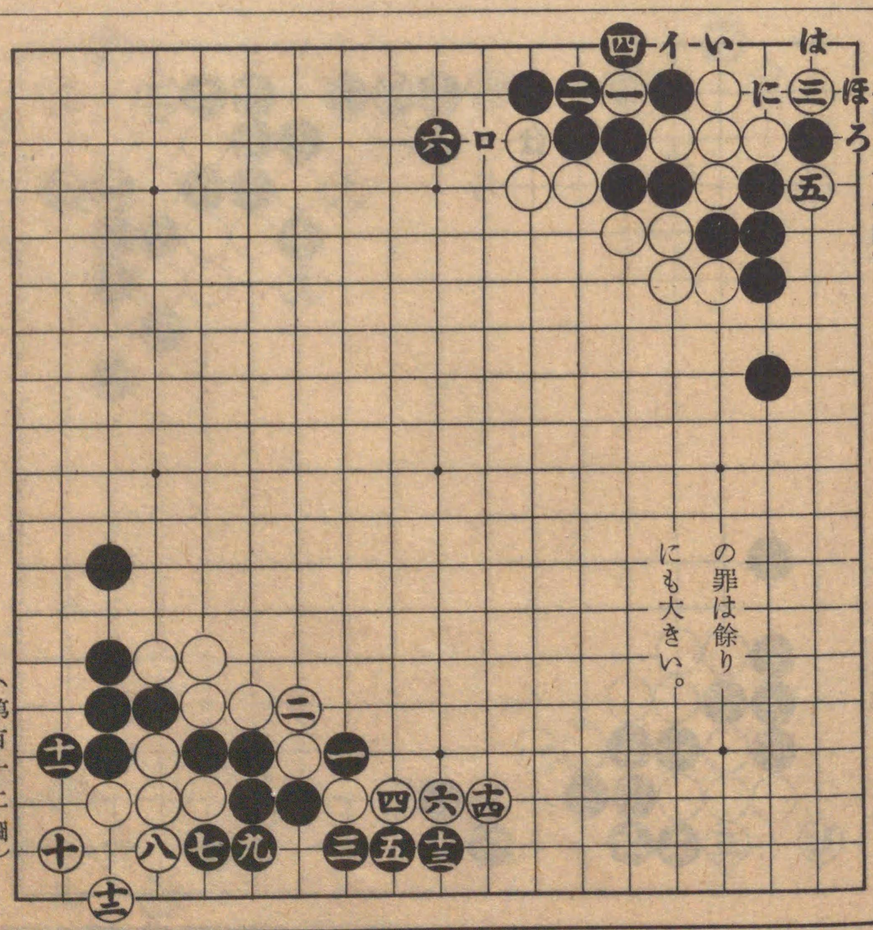


（第百十圖）

第百十一圖　前圖白二の手で先づ一と切つてから三と約へる。黑四白五と隅を活きた時、黑六と進出する事になります。勿論白が三と約へずにイ、に提れば黑はロと綽上げるべく、白が結局三の約へに戻らざるを得ぬ事は明らかであらう。

なほ本圖には後に黑からいに綽ね白ろ黑は、若しくは黑い白にに黑ほ白ろ黑は、何れかの劫爭も含まれて居る事に注意します。

第百十二圖　第百九圖に於ける黑六の手で斯く一の切りを先にする不當を念の爲に示す。白十四迄の結果黑が低き第二線を這つた不利は固より、二の點の白の缺陷を癒した黑一の罪は餘りにも大きい。



（第百十一圖）

（第百十二圖）

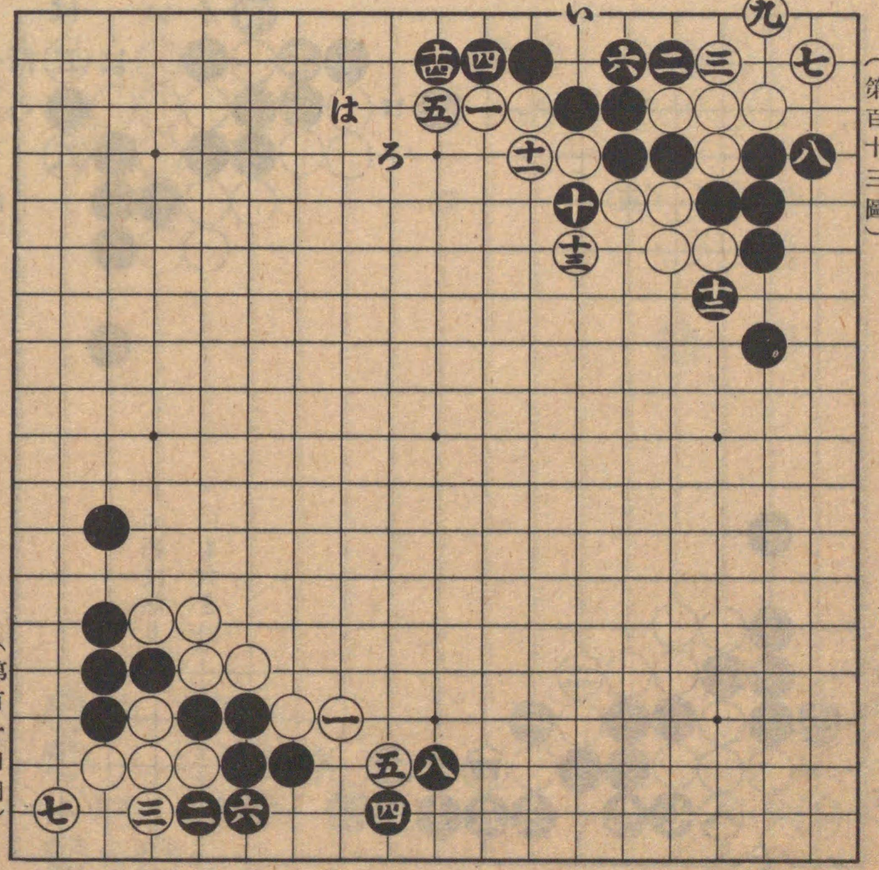
第百十三圖　第百九圖に於ける白**七**の手で斯く**一**と行びます。黒**二**、**四**が此の時にも肝要であり**四**を先にして白から**二**、の下りを打たれては甚だ拙い。白も**九**の手で**十四**に約へ黒**い**と交換してから**九**と活きると黒に圖の**十四**を省略されるので詰りません。卽ち黒が**十四**の泳ぎを怠れば白は**ろ**、又**は**の有力な利きを持つ。

黒**十**、**十二**の手順に依り姿勢を整へ多分の味を將來に殘しました。

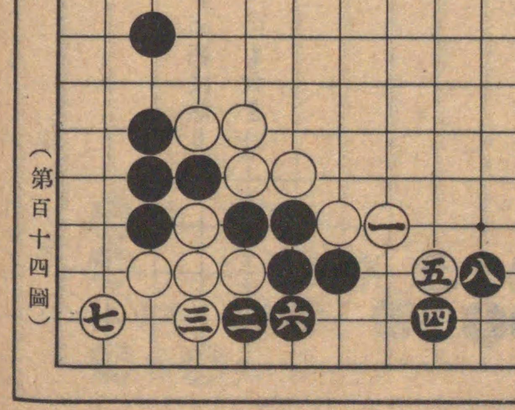
第百十四圖　第百九圖に於ける白**五**の手の別法として斯く**一**と行る。

黒**二**、**四**が依然手順であり形です。

白**五**に對しては黒**六**、**八**と應じ問題なく黒有利である。



（第百十三圖）



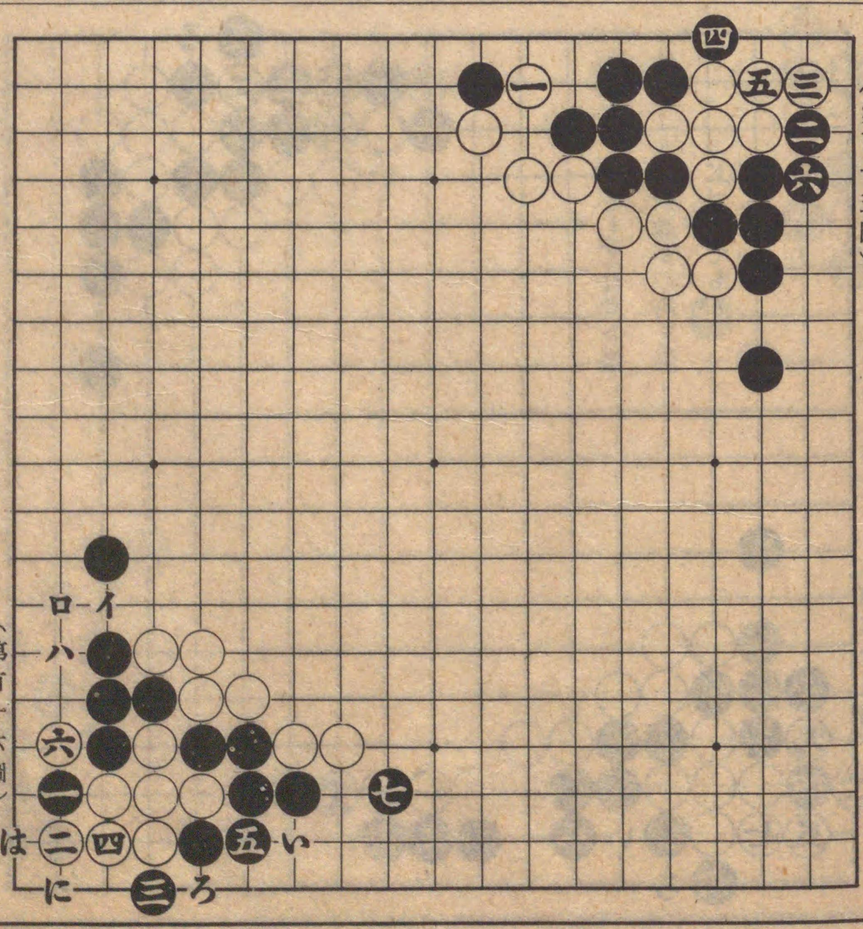
（第百十四圖）

第百十五圖　前圖白**七**の手で斯く**一**と綽出して來る無理を示すのみ。

黒**六**迄となり攻合ひに勝つ事を確かめて欲しい。

第百十六圖　本圖黒**一**、**三**は勿論續く**五**、**七**を想定したのです。白が**二**の手で若し**五**を切れば、黒**い**白**ろ**黒**七**、に次いで隅に白は後手で補つて居なければなりません。

本圖**六**のまゝでは黒**は**、或ひは黒**に**、と打たれての劫味が殘されて居る。それを防ぐべく白**イ**黒**ロ**白**ハ**を早く利かせてしまふのも白として忍びない譯です。第百十四圖に比して然し黒が必ずしも優るものとは觀られぬ事を言つて置く。



（第百十五圖）

（第百十六圖）

第百十七圖　第百十四圖に於ける黒六の手で直ちに斯く一と綽上げるのは白二、四と奇襲され、黒五白六の後、隅は無條件では取れず、劫ですから甚しき黒の不利である。黒三にて六に當て白い黒三白ろ、と提らるゝも劫味が殘り黒の薄弱と不安とは否定されません。

第百十八圖　第百十四圖白五の手で斯く一と壓すれば穩當であります。白五で若しいを切れば黒八白ろ黒五と下り攻合ひ黒勝。

黒十二を怠り白から十二の約へを利かせられるは辛いが圖の如く十二と這ふ苦痛も小さくない。第百九圖白一が時に依り一策たる所以であり黒としては前々圖か次圖かの内を選ぶべきである。

（第百十七圖）

（第百十八圖）

第百十九圖　前圖黒四の手で更に斯く一と押し次いで三と置きます。

黒も十一の手で十三に打缺き隅を屠らうとするのは白に外勢の厚壯を獲られるから面白くありません。次圖參照——

白十六に續いて黒いが成立しそれを征に抱へられる憂ひ無くば黒良く然らずしては黒も充分と言へない。換言すれば其のいでも成立しなくては黒も此の十六迄の結果は疑問なのです。但白ろの約へが今度は利かぬ點は認められる。

第百二十圖　黒一、三は隅を屠つても白の外勢が絶大です。其の得失は比較になりません。

（第百十九圖）

（第百二十圖）

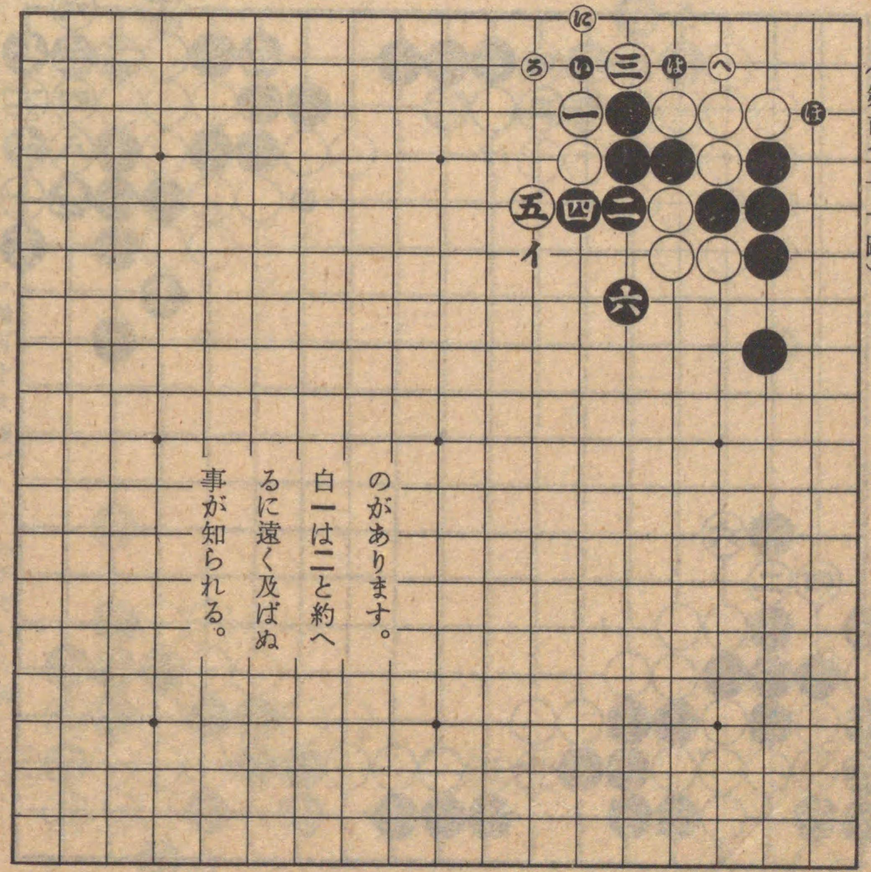
第百二十一圖　第百九圖に於ける白三の手の變化として斯く一と約込んで見ます。

黑二は絕對。此の手で三に下り白二と約へられては忽ち黑の全滅である。第百二十四圖に示される。

黑は四と曲つてから六と飛ぶ形ですが、諸處に斷點を控へて居る白の不安は蔽ひ難いものがある。

先づ白が直に三子の逸出を圖り惡い（次圖參照）外に、放置すれば黑い白ろ黑は白に黑ほ白へと屈服を餘義無くされる不利があります。

又然らずして黑イと單に綽ねられるとしても、虚路の詰つた白の形は進退に不自由を感じ頗る不氣味なものがあります。白一は二と約へるに遠く及ばぬ事が知られる。

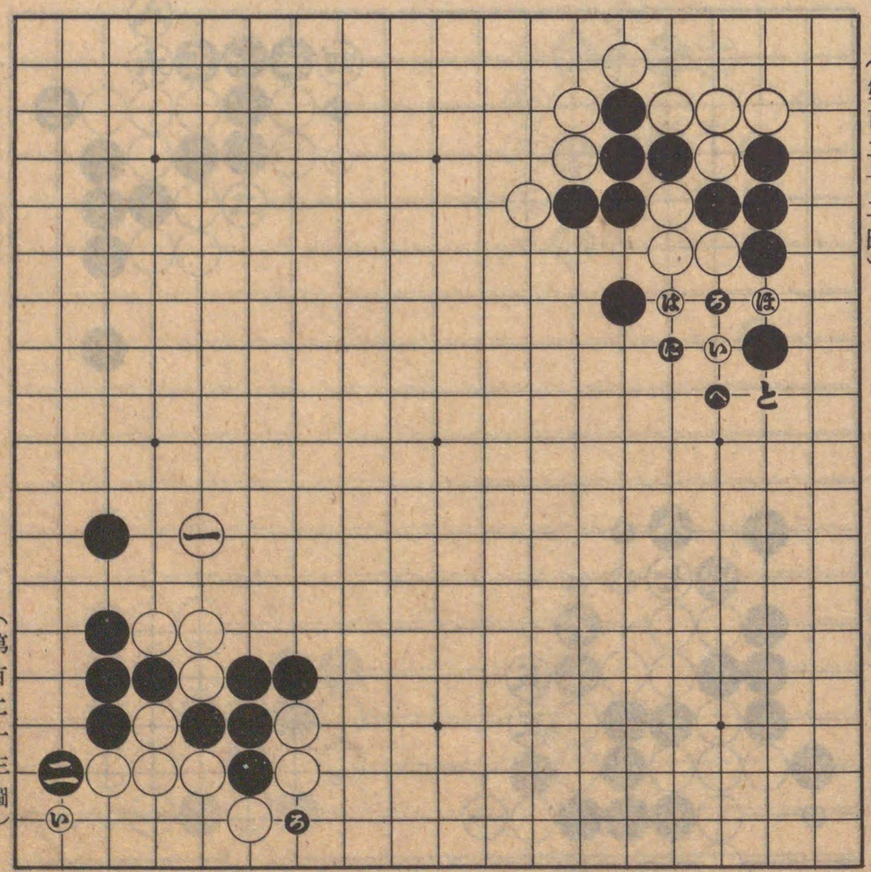


（第百二十一圖）

第百二十二圖　前圖黑六に次いで白が三子を助けるにはいと飛頂ける外ありませんが、それも黑ろ白はに黑へへの激烈なる劫爭に訴へねばならぬ危險がある。

黑の方は若し其の劫爭を避けやうと思へば白いに黑とと穩かに引いて居て仔細無く、白はなほ多く苦しまざるを得ぬでせう。

第百二十三圖　第百二十一圖に於ける白五の手で本圖の如く直ちに一と飛んで逸出を企てるには、黑二白いに黑ろに對する用意が豫め無くてはなりません。ろと切られた二子を征に抱へられるやうな事があつては問題にならぬ。



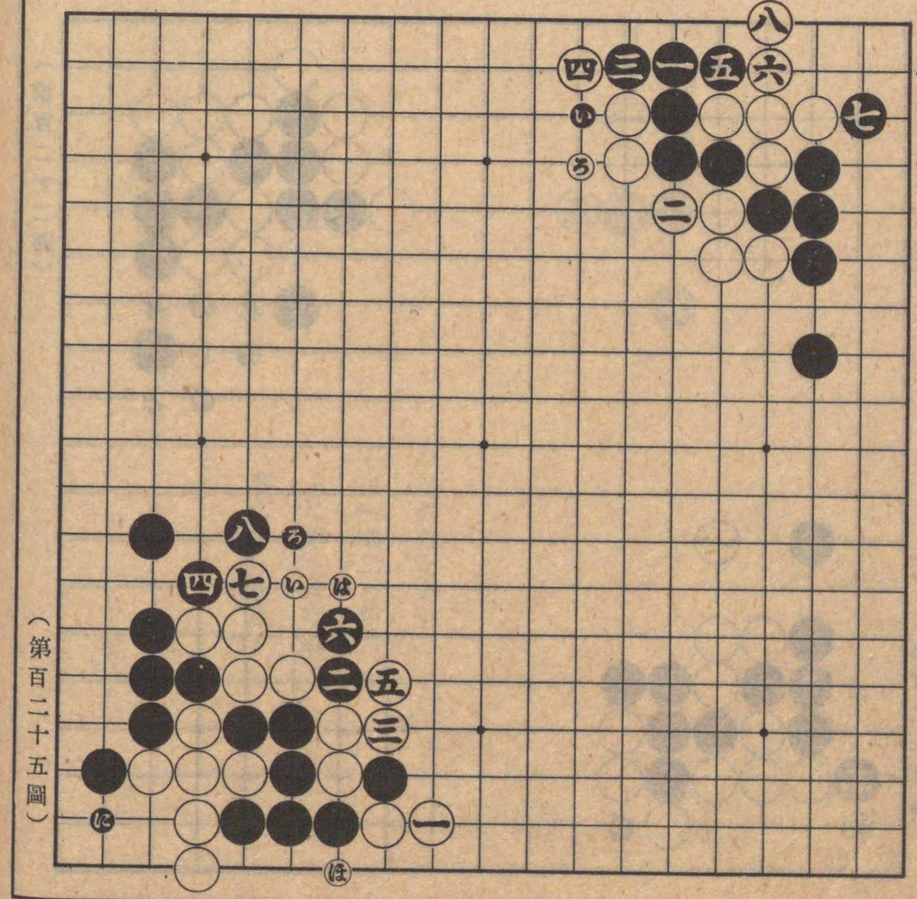
（第百二十二圖）

（第百二十三圖）

第百二十四圖　黑一と下るのは無謀に過ぎません。

黑三白四と必ず約へ、黑七の時白八と下るのが筋である。續いて黑㋑と切つて來れば白は㋺と當てる事を忘れては成らぬ。これで攻合ひに勝つのです。

第百二十五圖　前圖黑㋑の切りに對し斯く一と引くのは黑六子を屠るに變り無くとも、それを利して黑に外勢を手厚く張られる所、白の不滿が小さくない。卽ち黑二乃至八に次いで黑㋺及び㋩を利かせる事となれば、數子を捨てゝ黑は少しも惜しくない理であります。



（第百二十四圖）

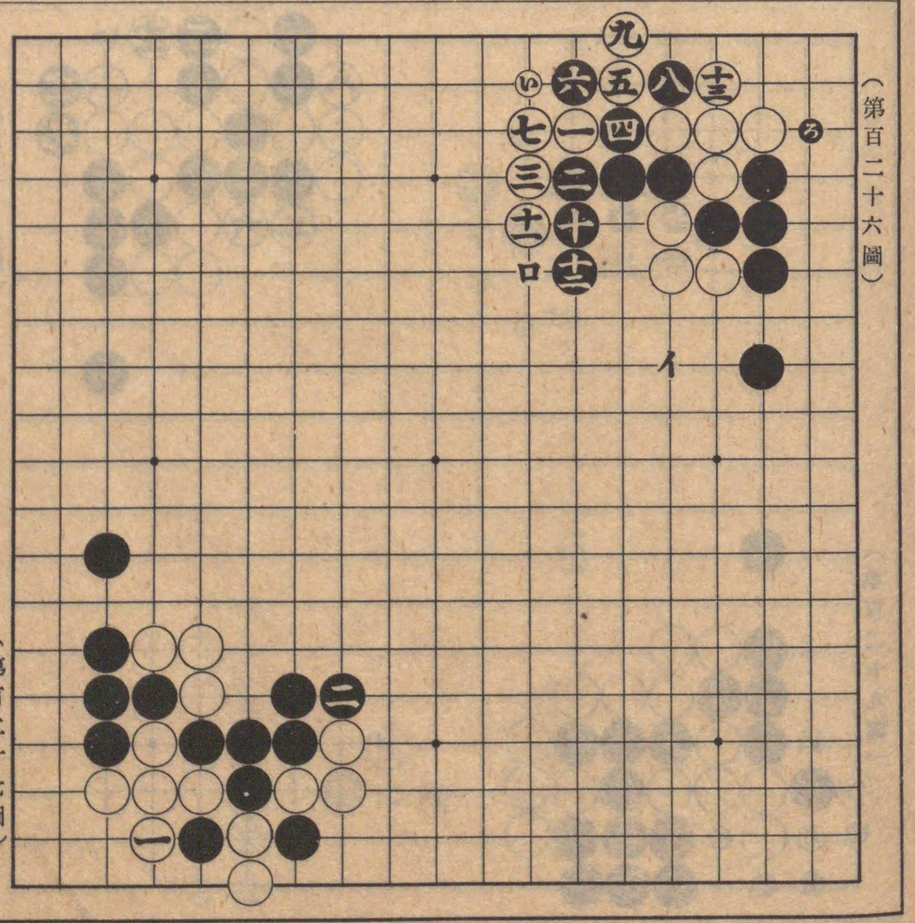
（第百二十五圖）

第百二十六圖　白一と飛ぶ變化。實戰にも往々見受けられる所です。

黑二は斯く押すの一手と言ひたいが、なほ別法は第百三十六圖に示されます。

黑四にて十一に綽れば第百三十圖である。四と出る型は六、八と切りを入れて置いて十、十二と引上げる所が生命です。白十一肝要——此の手で單に十三に抱へ黑十一と曲られる不利は次圖に疑ひありません。又十一の手で㋥の方に抱へれば黑㋭を利かせられる屈服がある。

本圖十三に次いで黑イと飛ぶべきかロと曲るべきかは形勢に依り取捨の岐れる所であります。



（第百二十六圖）

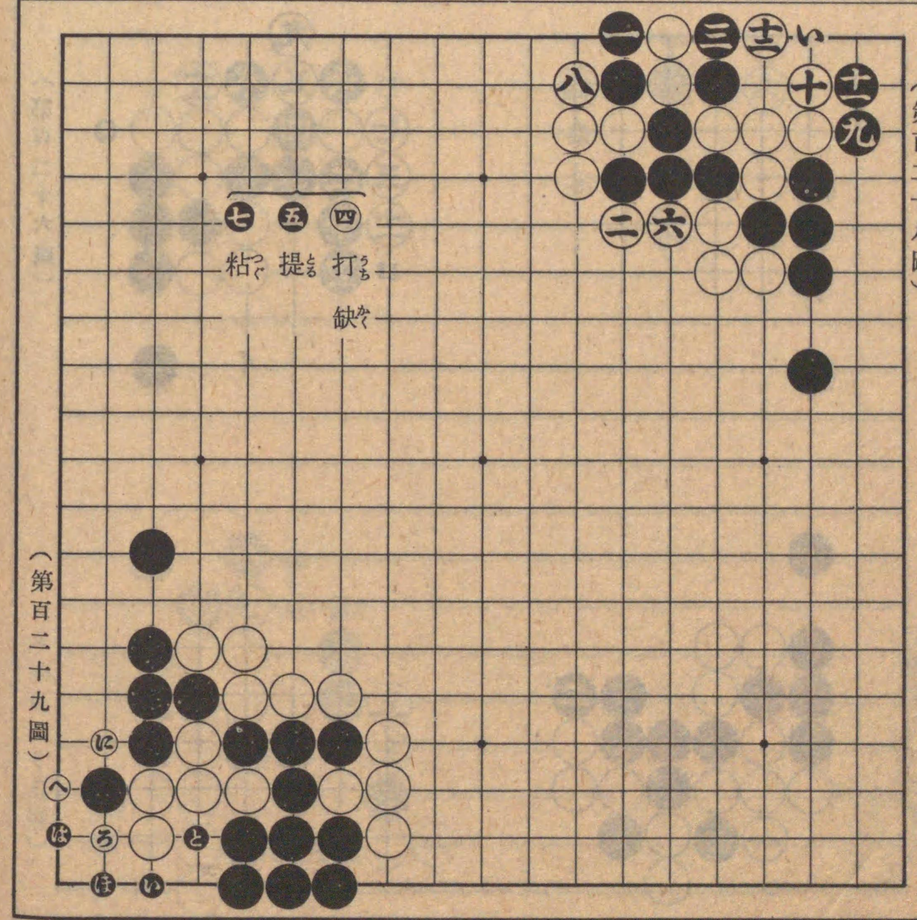
（第百二十七圖）

第百二十八圖　第百二十六圖に於ける黒十の手で誤つて斯く一、三と白二子を提ると白二乃至十二で黒の全滅に歸する。なほ此の點に關し後の第百四十一圖にも注意します。

黒九と綽ねる手で若しいに飛べば白は十一に尖んで宜しい。

第百二十九圖　前圖黒十一の手で斯くいと頂ければ辛うじて劫には導かれる。卽ち白ろ以下符號の手順にて黒と迄の劫です。勿論それで黒が良いと言ふ事は考へられません。

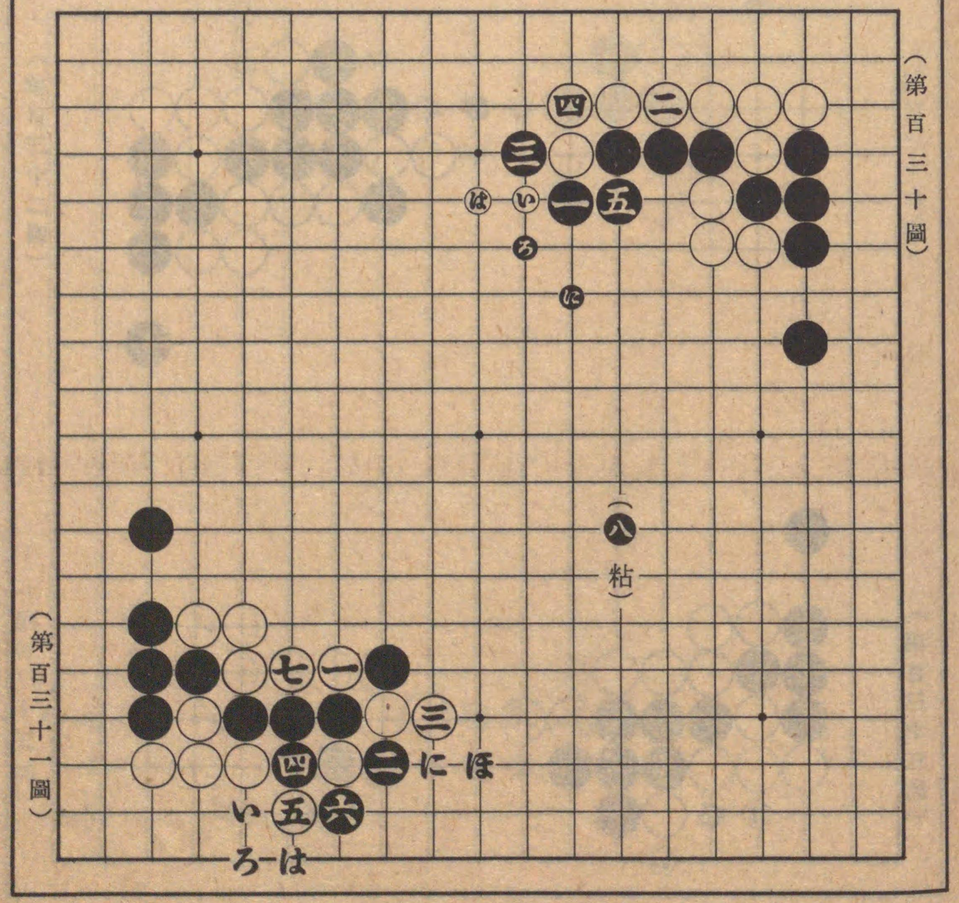
白がろと曲らずにほの點に約へれば黒とと當てての劫爭ともなる。何れにせよ負擔は黒の方が遙かに重い劫であります。



第百三十圖　第百二十六圖黒四の手で斯く一と綽ねる變化。白二は此の手で五を切る事も出來る。次圖參照——本圖の如く粘げば頗る簡單な歸結です。

黒三、五に次いで白いと切れば黒はろ、にを以て報い白三子を包圍する勢ひを示して中央に厚味を加へる事となる。次圖との選擇は主として左上隅方面の配置如何に依るものと觀るべきであります。

第百三十一圖　白一と切るのは續いて五、七と絞り黒を壓迫する意味である。黒八に次いで白はい、ろ、はの中を取捨すべく、それに應じて黒もに、ほの何れかを決定すべきで



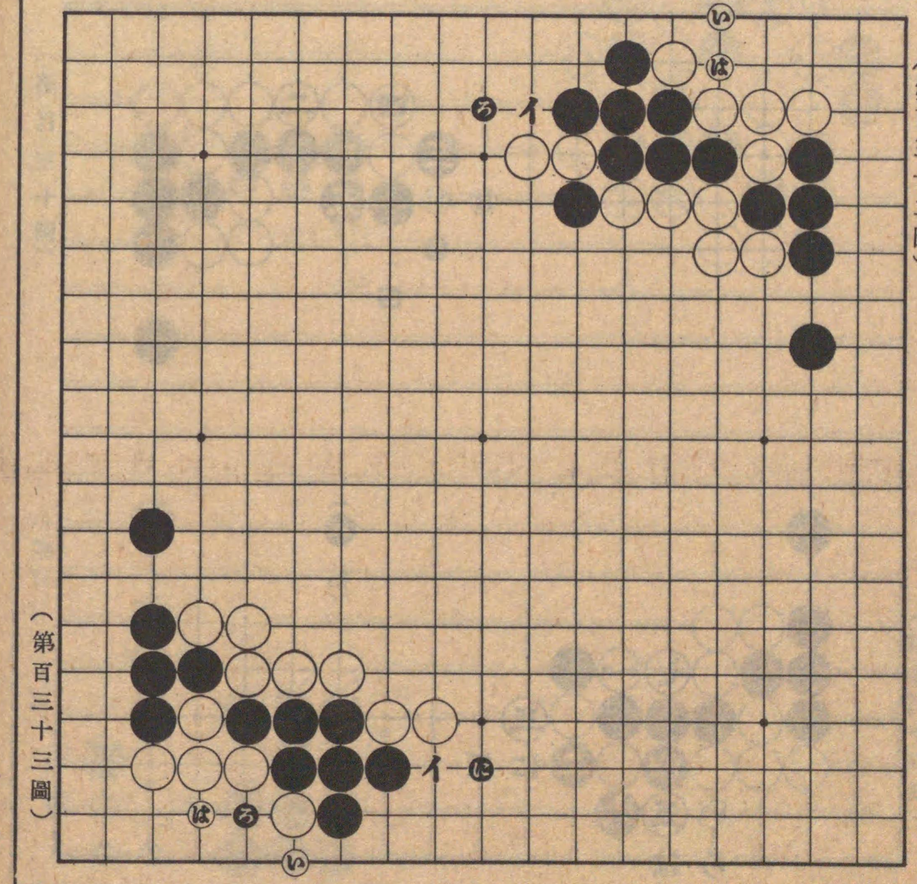
すが、右下隅方面の條件も其の間には考慮されねばならぬこと勿論である。試みに次に詳說すれば——

第百三十二圖　白(い)の掛粘(かけつぎ)に對し黒イと押すに仔細無きも、ろと飛ぶには白イと出られる具合に注意しなければなりません。

白(は)と堅く粘がれた時は黒イと押すもろと飛ぶも自由であり其の決定は左上隅方面の配置關係に依る。なほ第百三十五圖に注意。

第百三十三圖　白(い)の下(さが)りに應じては黒ろ白(は)を交換してからにと飛びます。但し飛ばずにイと押す積りならば勿論ろは保留すべきである。

更に次圖に注意します。



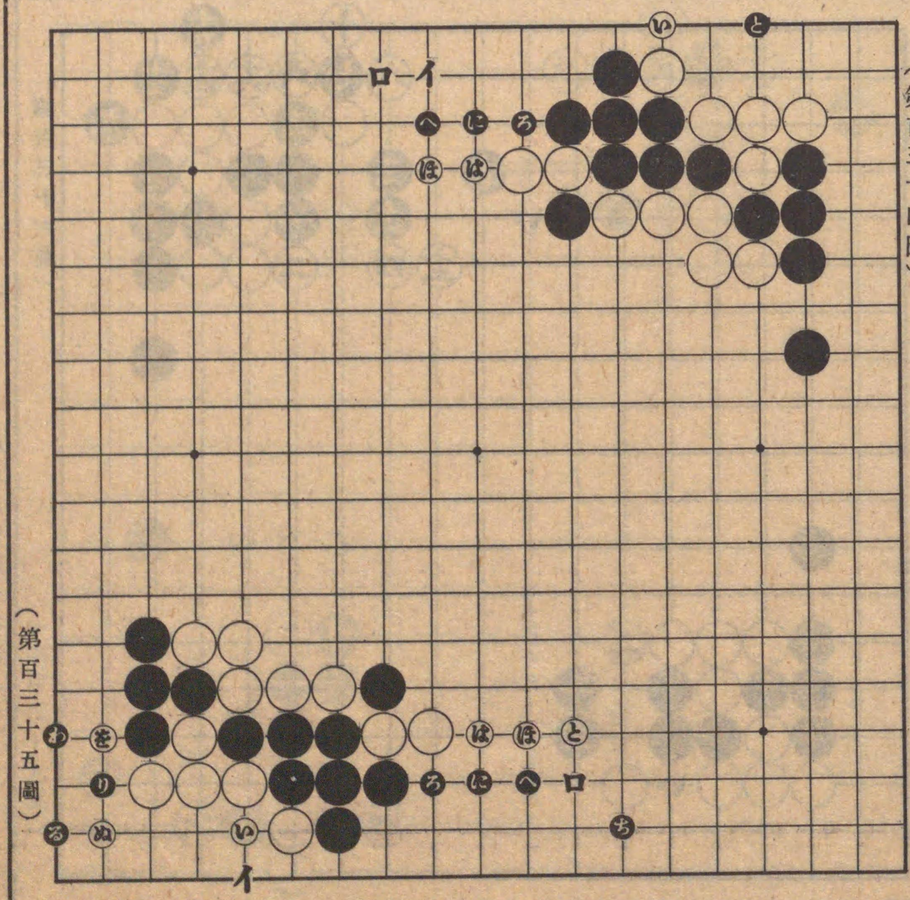
（第百三十二圖）

（第百三十三圖）

第百三十四圖　白(い)黒(ろ)と押す際にも次のにと押す手でイに走るべきか、又への手に至つてもロと走るべきか、乃至は圖の如くに、へと押すべきであるか、總べて部分的には決定せられません。一に左上隅方面の布石關係に依る事である。

本圖に於いては後に機を見て黒(と)と置く筋が殘されて居る事を忘れては成らぬ。

第百三十五圖　白(い)又イに應じ黒(ろ)以下と報いる手順中、黒はちの手で猶もロを押すべきか、白も(と)の手でロに約(きり)へるべきか、これ亦右下隅次第である。然して後に黒(り)白(ぬ)黒(る)白(を)黒(わ)の狙ひが藏されます。



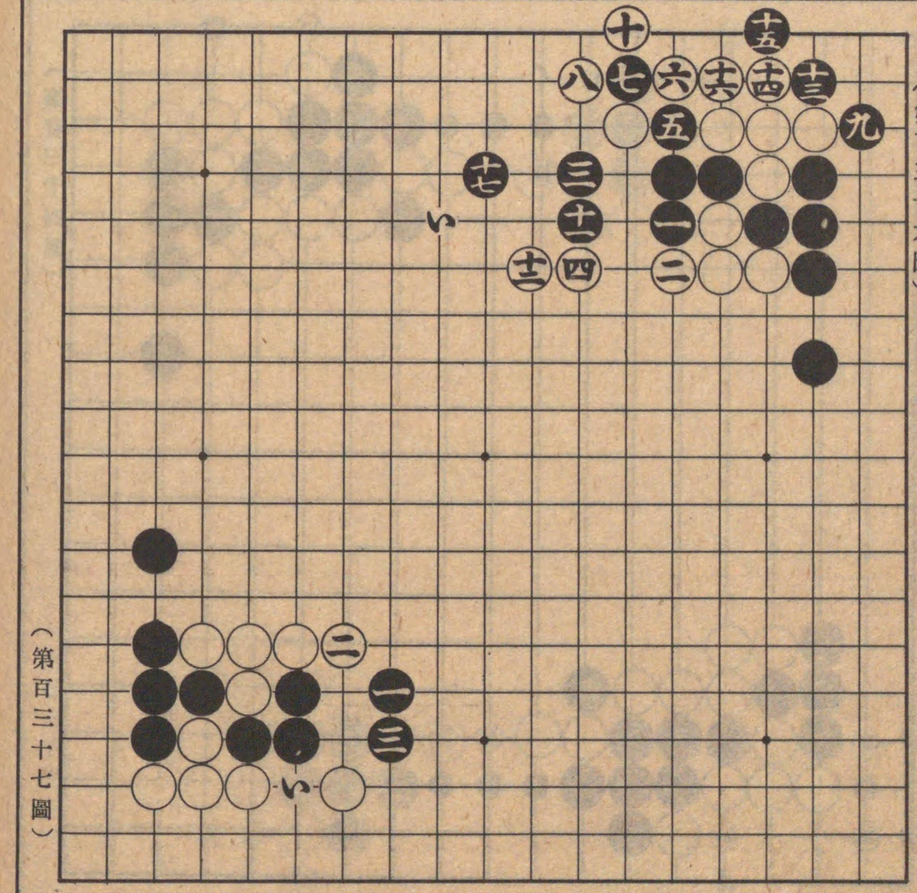
（第百三十四圖）

（第百三十五圖）

第百三十六圖　第百二十六圖に於ける黒**二**の手の別法として斯く**一**と曲り**三**と飛んだのは面白い趣巧である。白**四**に次いで黒**五**、**七**の出切りを行はうと言ふ意味に外なりません。

黒は**九**以下を利かせて當初**一**、**三**の目的を達し**一七**と飛びましたが、左上隅方面に白の勢力ある場合には次いで白**い**の來攻を顧慮する必要がある——

第百三十七圖　前圖**三**を本圖**一**に變へれば前述の白の來攻を惧れるに當りません。乃ち白**二**黒**三**と飽く迄も堅實に備へ、黒**い**よりの出切りの筋を後の狙ひとする事が出來る。黒の一策たるを失はぬと考へる。



（第百三十六圖）

（第百三十七圖）

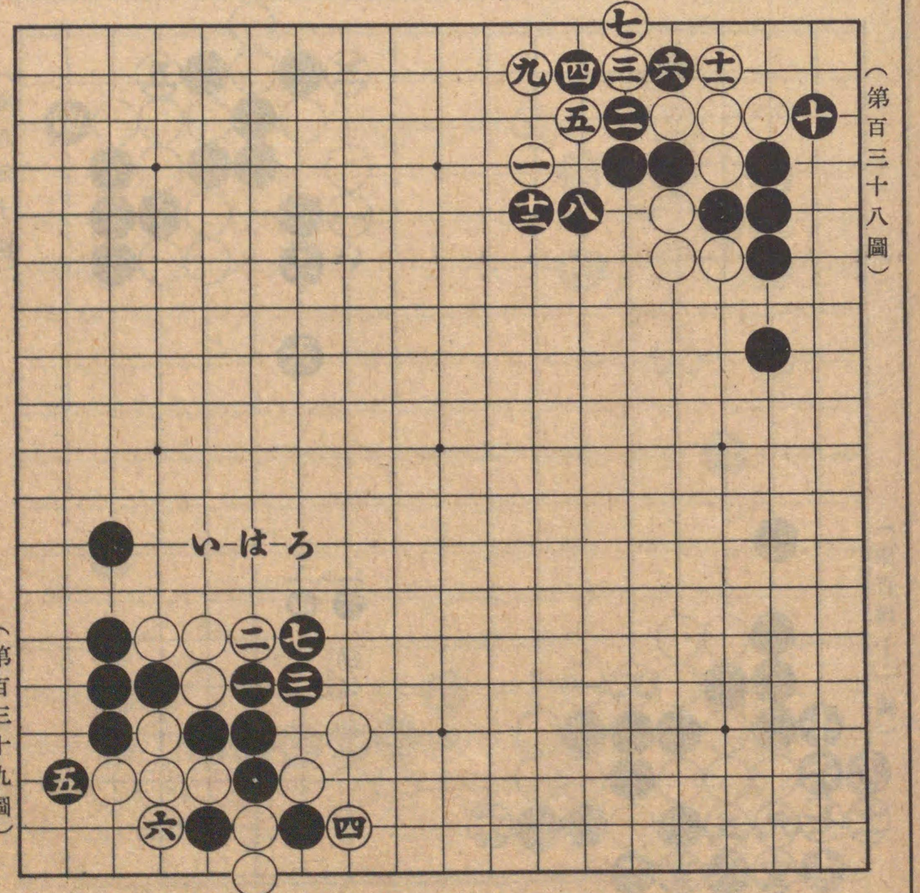
第百三十八圖　白**一**から變化。

黒**二**、**四**を迎へて白**三**、**五**と切る所は既出第百二十六圖と軌を等しくするものであります。從つて黒は矢張り**六**、**八**と引上げる事が肝要です。

黒**十**の綽（はね）を利かせ**十二**と押すに至り一般に黒優勢である。

第百三十九圖　前圖黒**八**の手で斯く**一**と押し**三**と曲ります。白**四**は止（や）むを得ない。

黒**七**と曲つて白四子の負擔が輕からず、次いで白**い**ならば黒**ろ**と飛ぶべく、又白**は**と其の方に飛んだ時にも黒**ろ**と飛（つ）頂け白を追ひつゝ中央へ進出して宜しい。



（第百三十八圖）

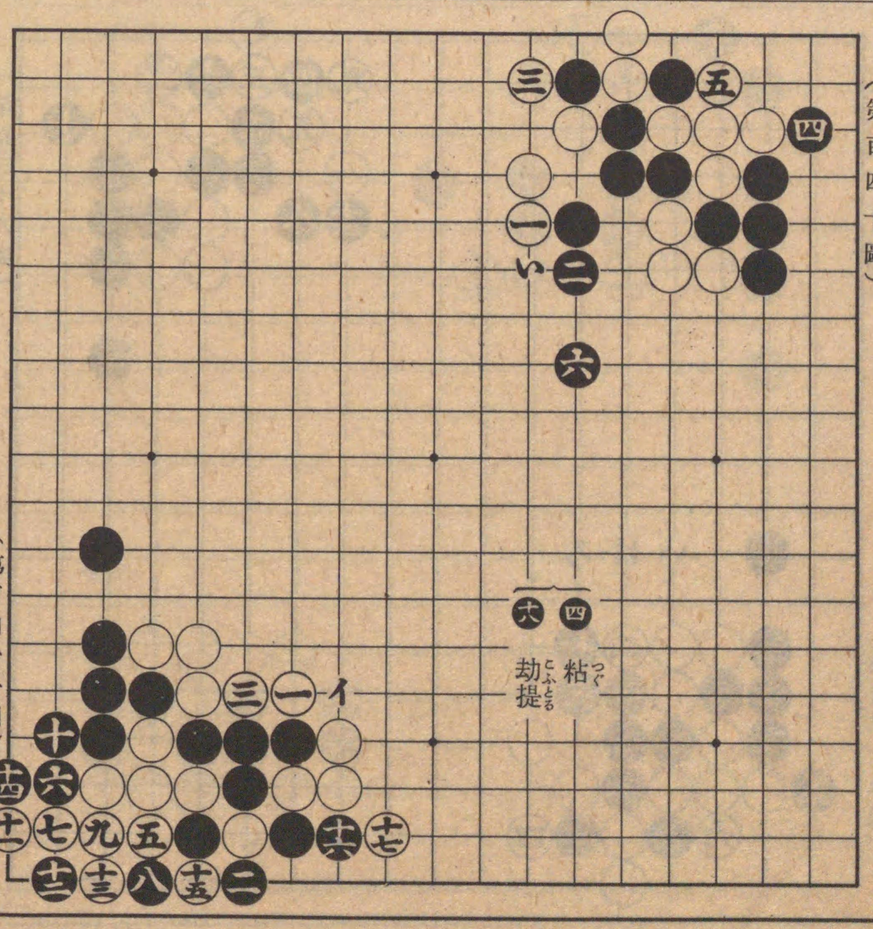
（第百三十九圖）

第百四十圖　第百三十八圖の白**九**と抱へる前に斯く**一**と押し黒**二**との交換を先にして置きます。白**三**を若し**五**の方へ抱へ黒**四**を避けやうとすれば黒は**い**に曲つて白の虚路詰りを窺ふ事になる。

圖の白**三**、**五**に對し黒も**六**の手で**い**に曲るのは白に響きません。

第百四十一圖　第百二十六圖に於ける白**九**の手で單に斯く**一**、**三**と封鎖し絞るのは成功しない。白**七**にて**八**に下れば黒**七**、である。

黒**十八**まで白の一手寄劫であり現在は白が取られて居る形なので黒**イ**の切りも殘るし白全滅の姿に近いと言ふ事が出來ます。

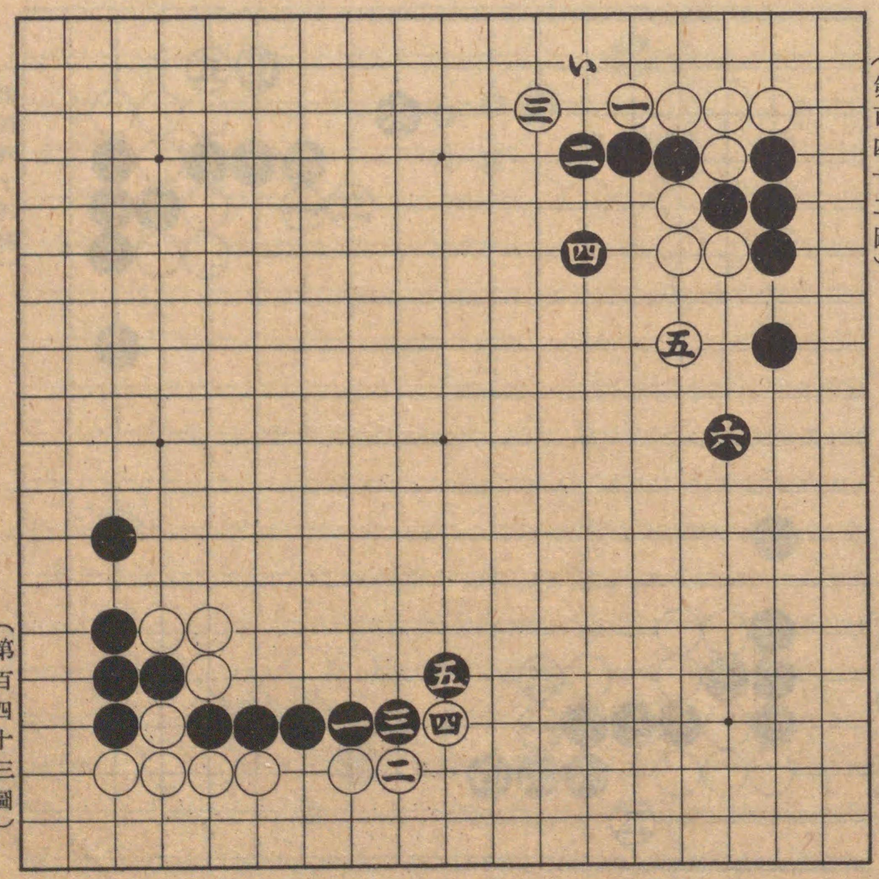


（第百四十圖）

（第百四十一圖）

第百四十二圖　今度は白**一**と押し**三**と飛びました。黒**二**、**四**は最も堅實な姿勢ですが、既出第六十五圖に比し白が上方で實利を多く收めただけに黒を一方では手厚い形にして居る所が否定されない。第六十五圖ならば白**一**にて**い**、と走る一手で治まつて居るものを圖の如く**一**と這ふのに良い理なく黒**二**、**四**を好調に且つ效果的ならしめたのは當然です。

第百四十三圖　前圖**四**の手で黒は斯く**一**、**三**と押して打つのも亦簡明である。矢張り白に實利を容るす代りに自らは中央に厚壯の模樣を張つて滿足する意味に外なりません。



（第百四十二圖）

（第百四十三圖）

第百四十四圖　白一と掛ける型に入ります。これは從來白の無理として排斥されて居たものですが、掛けて後の双方の應酬に關し定說が無く漠然と黑が悪くないと言はれる程度であつた。乃ち此の一が場合に依る趣巧として相當有力なる事を先づ主張して置きます。

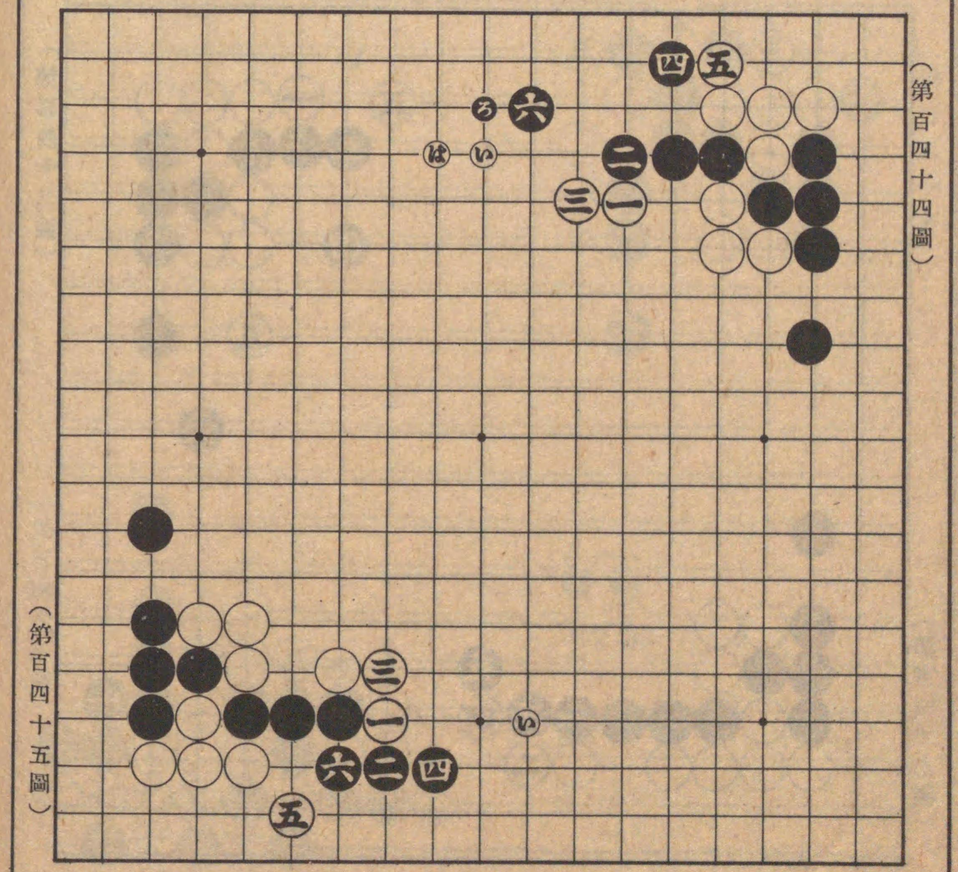
偖白一黑二と俗に押せば白は三と平易に引き黑四、六に次いで白(い)黑(ろ)白(は)と壓迫を加へる。中原に於いて最も厚壯なる勢力を築いて良い。

第百四十五圖　前圖白三の手で斯く一と約へるのは一段と嚴しい。

黑四と行出せば白は五を利かせ黑の形を崩してから(い)方面より迫るべく、固より四圍の條件にも依る事ですが此の結果から白に不利は考へられません。

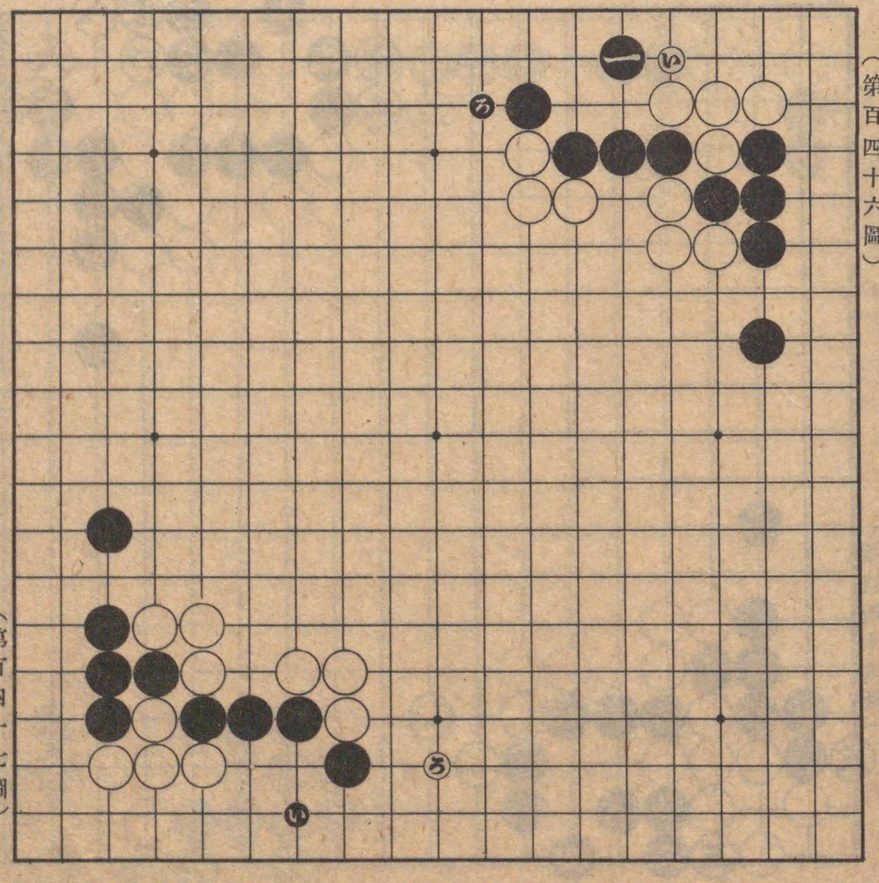
第百四十六圖　前圖に於いて白から覗かれた點に黑が先手して斯く一と飛びます。其の意は白を(い)と受けさせて黑(ろ)を期するのですが、果して然うなれば黑も悪くないけれど、白には第百四十八圖二と約へて打つ烈しい手段がある。

第百四十七圖　前圖黑一を以て斯く(い)と掛粘ぐ——一見形の樣ですが白(ろ)と封鎖され、黑は纔に眼形を保つに過ぎず、白に絶大なる外勢を築かれて終ひます。



（第百四十四圖）

（第百四十五圖）



（第百四十六圖）

（第百四十七圖）

第百四十八圖　黑一に對しては白二と約へるべき勢ひでもあり又最も手強い打方なのです。

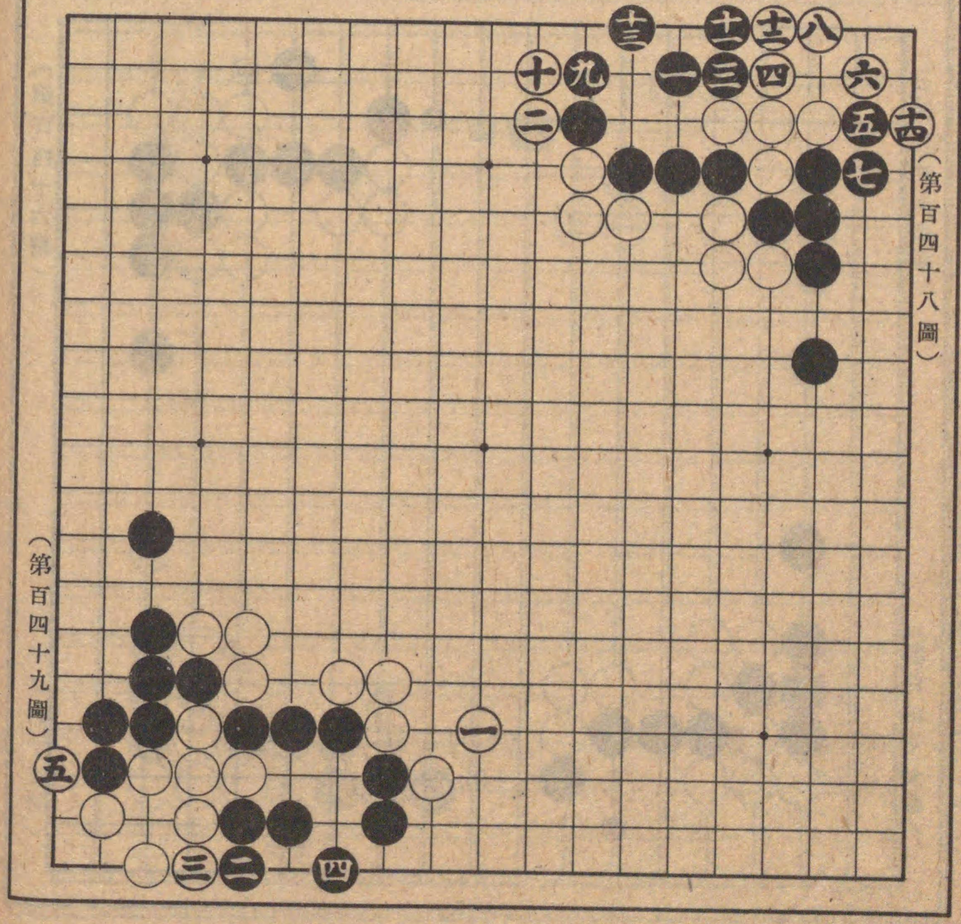
黑三乃至白八に次いで黑九以下白十四と互に治まる結果は此の狹地に蹈蹐した黑の不利が否定されません。

黑九の手で隅の白を取り掛けに行くなどは白九と透かさず綽ねられるので忽ち黑の無理が暴露されます。

第百四十九圖　前圖黑九に次いで白一と斯く掛粘ぐのは弛みである。

從つて黑から直ちに隅を取掛けに來られる惧れがあります——第百五十一圖參照。

本圖は黑が無事を求めたのですが畢意白一と前圖十との差である。



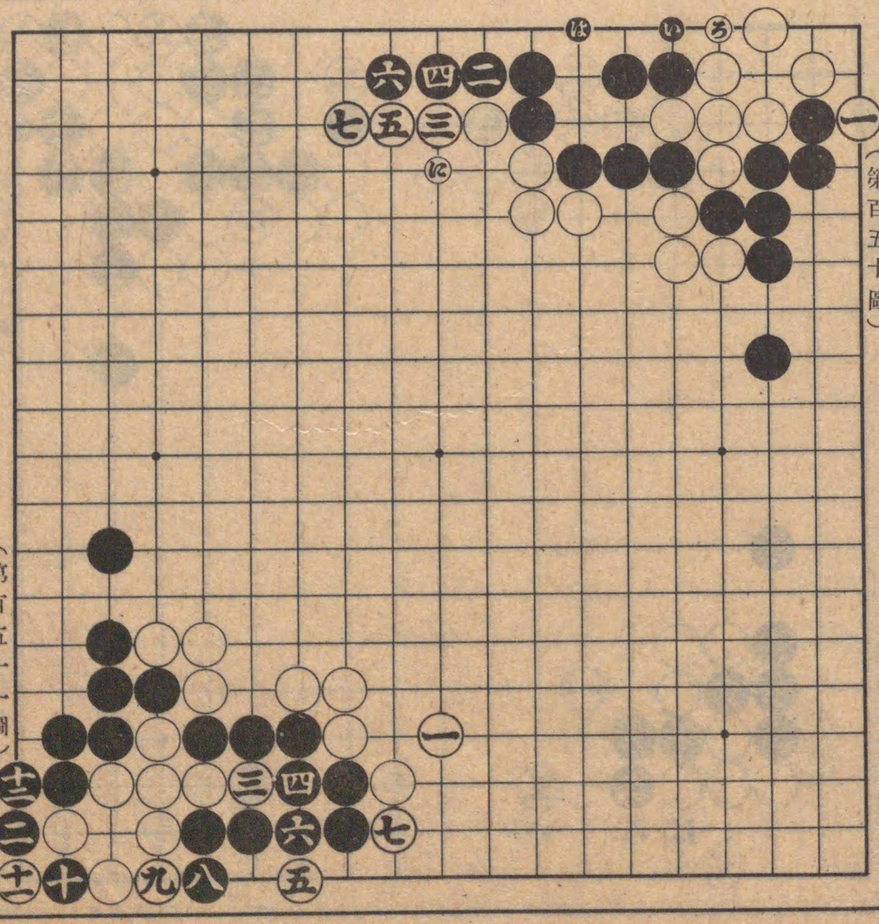
（第百四十八圖）

（第百四十九圖）

第百五十圖　前圖白一の手で隅から斯く一と綽ね、活きる事を先にし一に次いで黑い白ろ黑は白にの手順を示し前圖に歸する型を示した書がありますが首肯出來ない。黑が依然たる弛みである。

圖の如く黑二、四、六と這つた儘手を拔かれるものとしても白が良いとは言へません。

第百五十一圖　此の白一に對しては黑から直ちに隅を取掛けに行く事が出來ると言つて置いた。黑二以下が卽ちそれであります。黑十二まで兎も角も白が取られて居る。現在屠られては白の不利疑ひ無い。



（第百五十圖）

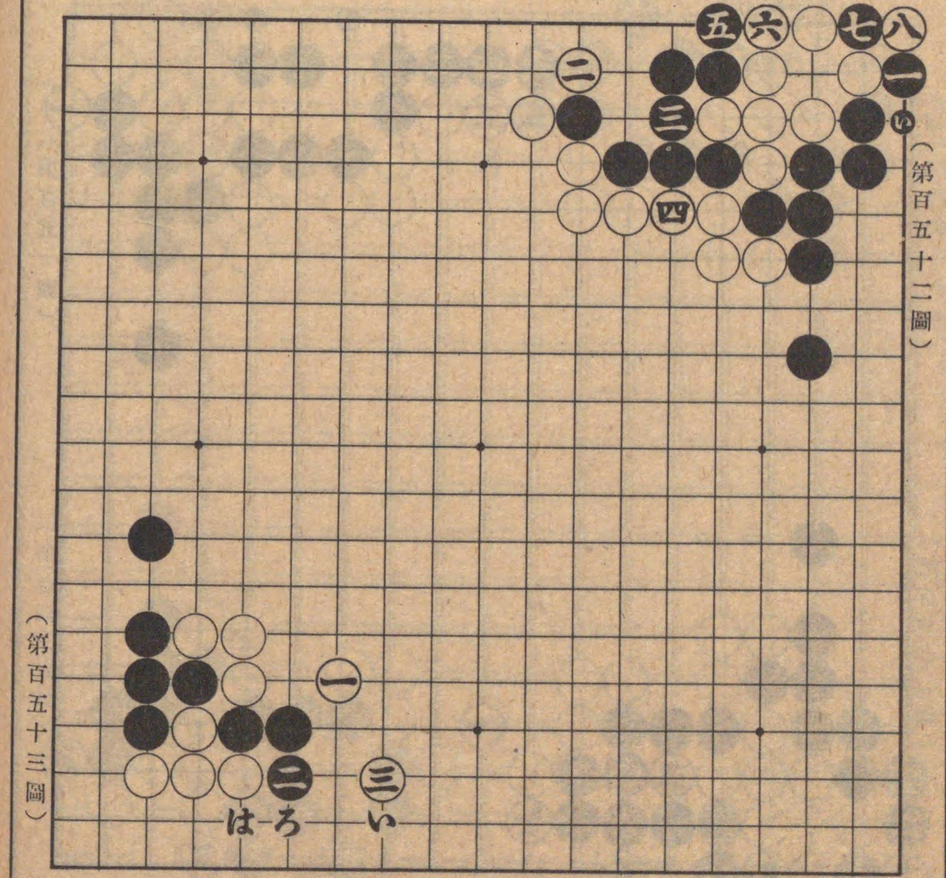
（第百五十一圖）

第百五十二圖　第百四十八圖に於ける黒**九**の手で斯く**一**と綽ねて直ちに取掛けに行く非を示すのです。

白**二**は必然であり、黒**七**白**八**に次いで黒**い**ならば白は其の儘にして手を抜いて、外部を完全に締付けた滿足が大きい。

第百五十三圖　白**一**に對しては本來斯く**二**と約込むのが正著なのであります。白**三**は固より**一**と掛けた趣巧の遂行に外なりません。

是に對する黒の應手としては**い**に頂ける、**ろ**に下る、及び**は**と綽ねるの三樣ですが、一般には綽ねる手が最も穩當であり最惡の場合にしてなほ互角の別れとなるものである。



（第百五十二圖）

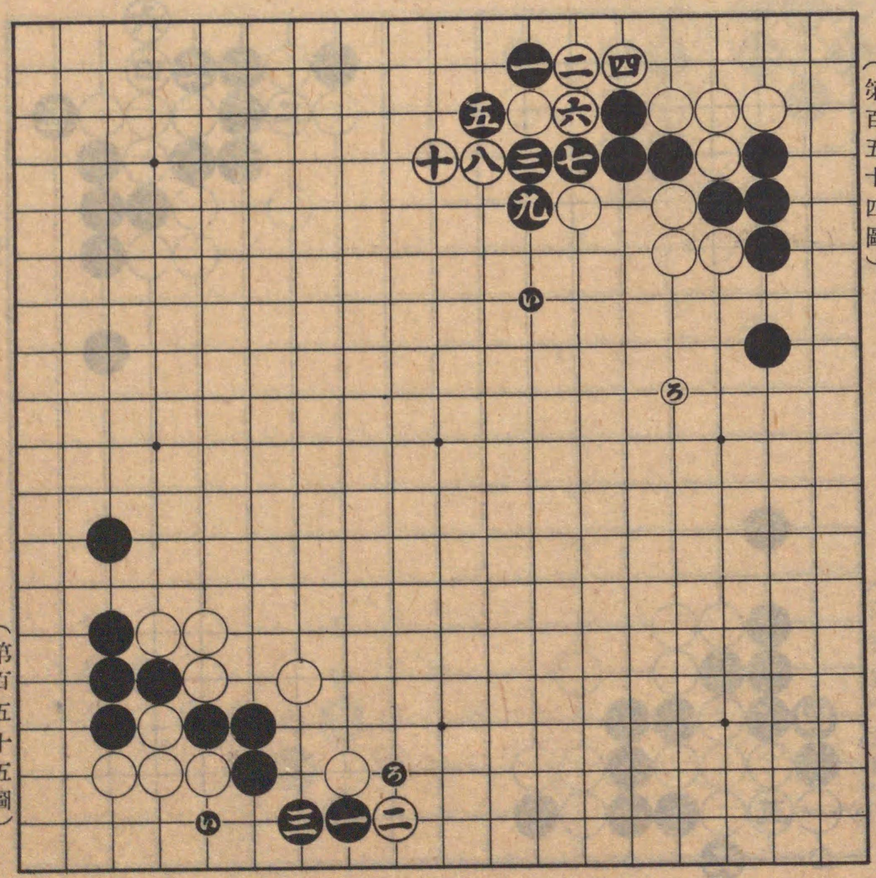
（第百五十三圖）

第百五十四圖　黒**一**と先づ頂けて見ます。白は此の時必ずや**二**と綽出すべく、**二**の手で**一**の一路左より約へる不當は次にも明らかです。

偖黒**三**と頂越せば白**四**と渡り、以下白**十**迄は必然の運びである。續いて黒**い**白**ろ**を想定し、實利を確保して居る白の優勢は疑ひありません。

斯くの如きは黒が封鎖された初めの三子を逸出し得たりとして滿足すべきものでは無い。

第百五十五圖　黒**一**白**二**と約へれば黒**三**と引かれた時、黒**い**及び**ろ**の兩方を白が同時に防ぐ事は出來ないので、得失は自明であります。



（第百五十四圖）

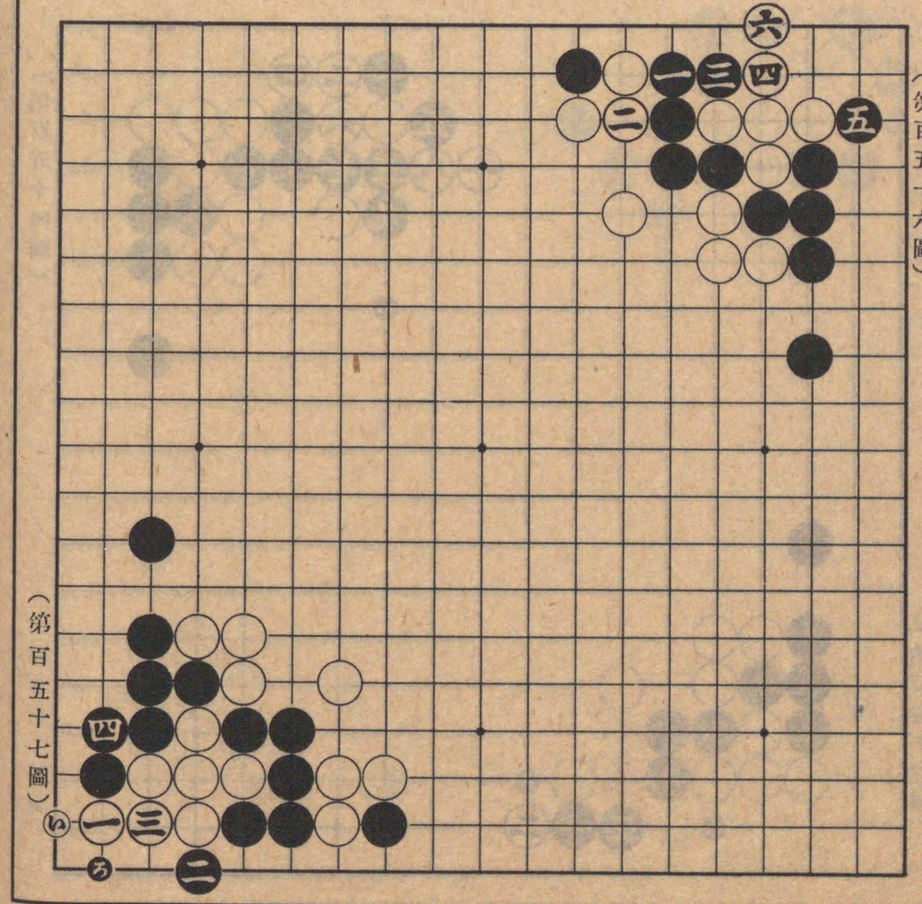
（第百五十五圖）

第百五十六圖　前々圖に於ける黒三の手で斯く一と突出せば白は二と粘ぐに限る。

黒三、五に對し白には四、六と下る凌ぎがあります。續いて黒が若し五の一路上に下れば白は一の一路上に綽ねて攻合ひに勝つ。

白も六と下る手で五の一路上に約へたりすると次圖黒二以下で忽ち破綻を免れません。本圖白六に次いで第百五十八圖の如き劫爭の手段は黒にも存するものゝ白として恐れるに當らない——

第百五十七圖　白一乃至黒四に續いて白(い)黒(ろ)と頂けられ、それ迄に終る。白一の輕卒であります。

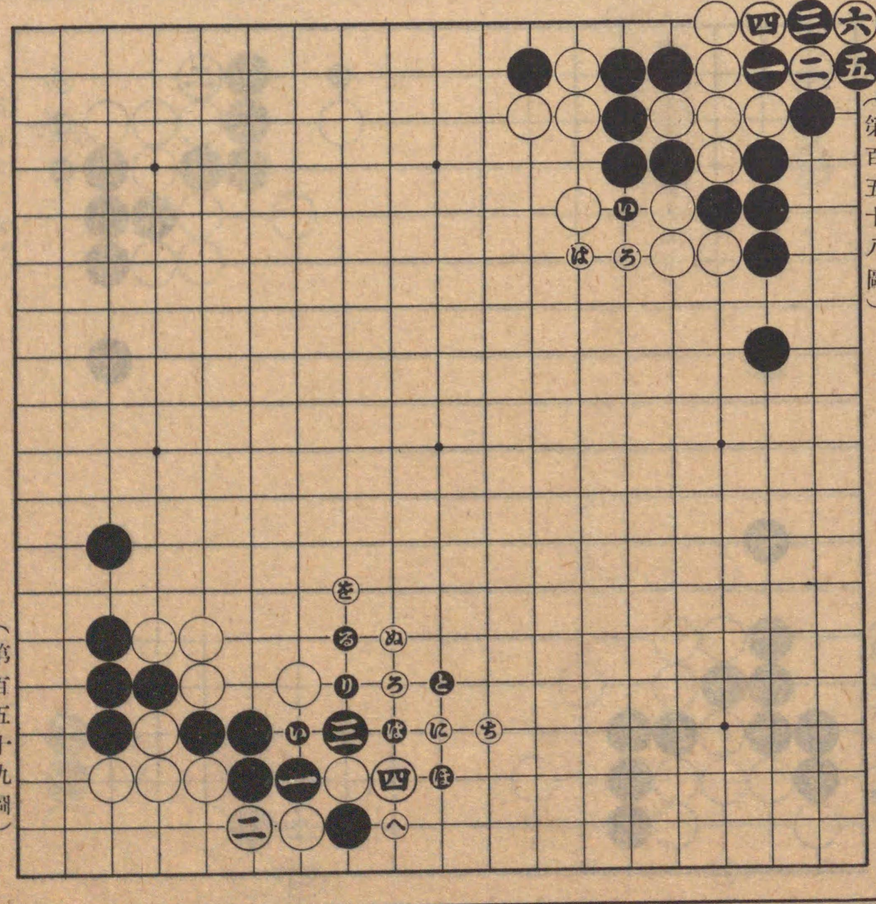


（第百五十六圖）

（第百五十七圖）

第百五十八圖　前々圖に於ける白六に次いで黒一、三と打つ筋は部分的に巧妙ですが白六と提られた時の劫立に先づ黒が困る。此處のみで言へば黒(い)白(ろ)黒三と劫を提返し乃で白(は)と假り粘ぐものとします。續いて黒一と更に劫を提つた時、白は隅の數子を捨てゝ他の好點に轉じ連續的に二手打つ事が出來る理ですから黒は隅を屠つて大いに悪しく白は捨てゝ他に大利を收める。優劣は問題になりません。

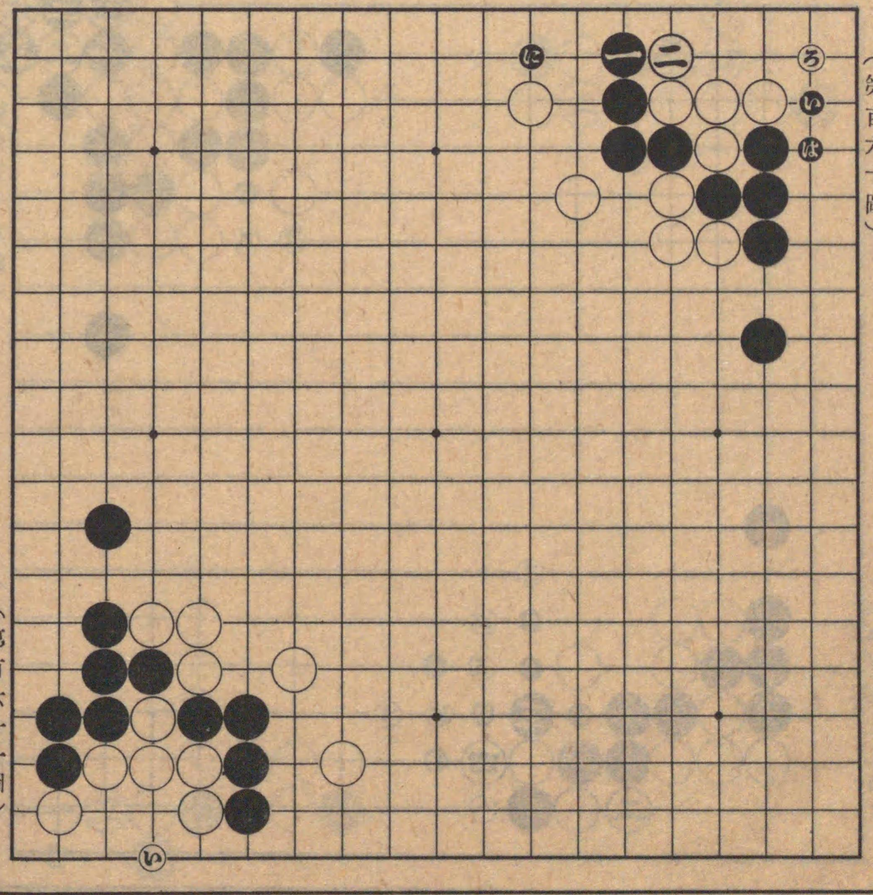
第百五十九圖　第百五十六圖黒一の手で斯く一と切り白二、四に次いで黒(い)以下符號の順序に逸出を企てるなどは白の厚みが絶大です。



（第百五十八圖）

（第百五十九圖）

第百六十圖　黑一と下る變化。白は勿論二と約へる一手ですが、此の型に關しては從來行はれて居た通說に重大なる誤謬がある。それは續いて黑がい、はの綽粘を先にするか、若しくはにの頂けを先に試みるかと言ふ所から岐れるのであつて、結論を此處で下すと綽粘を早く打つてしまふのは黑がよろしくない事に歸著します。卽ち黑は先づにと頂けて白の挨拶を問ふべき手順である。これが根本であります。黑い白ろ黑はと綽粘ぎを急ぐのは、續いて次圖に於ける白いの筋がある事を示す爲に、恰も其のいの價値を表す所にのみ捉はれた輕卒なるかの如くさへ見える。



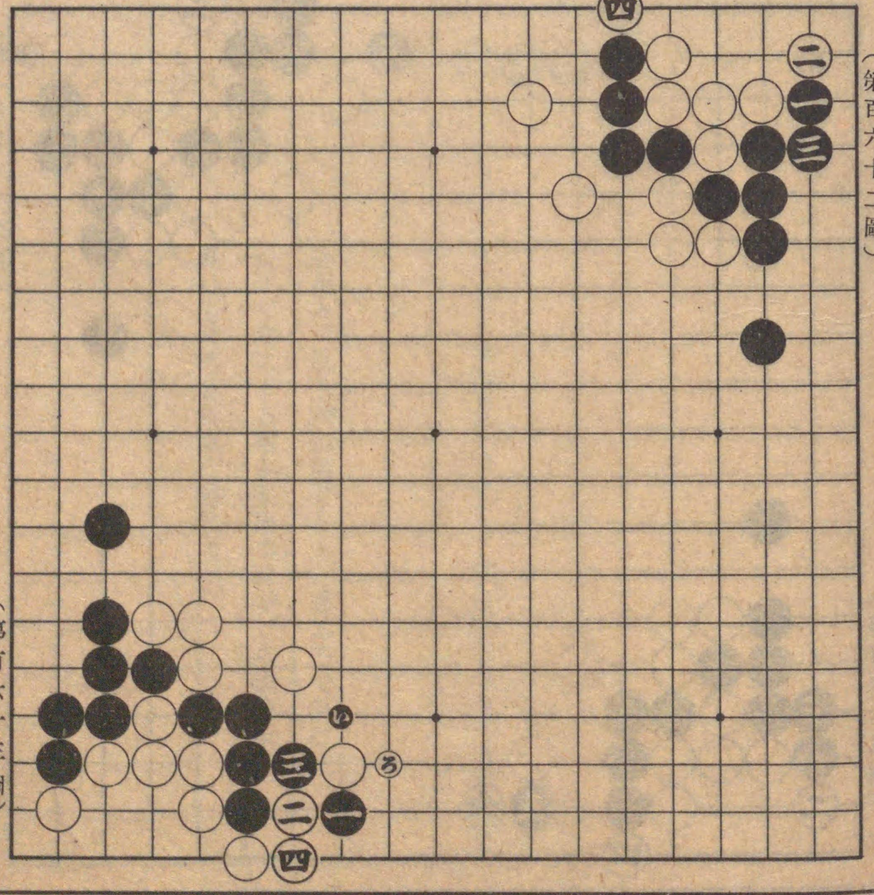
（第百六十圖）

（第百六十一圖）

第百六十二圖　黑一、三の綽粘に對しては白四と綽ねる手筋がある事に從來想到されなかつたのは寧ろ怪しむべきであります。斯く綽ねられると黑は應手に苦しまざるを得ぬのであるが、以下兎も角も黑の窮狀を具體的に先づ示す事とする。

第百六十三圖　黑一と飛頂ければ白は二と綽込んで最も簡明です。黑三白四に續く黑い白ろ以降は既出第百五十九圖に歸するのみ。從つて白の外勢が厚且つ壯を致す事は比較を超越します。

但し白は二の手で一の一路右から約へるも宜しく、又ろと引く事さへ可能です。順次揭げる。



（第百六十二圖）

（第百六十三圖）

第百六十四圖　黑**一**と約へ**三**と粘げば白は敢て取掛けに行かずとも**二**、**四**と隅を活きて置いて宜しい。

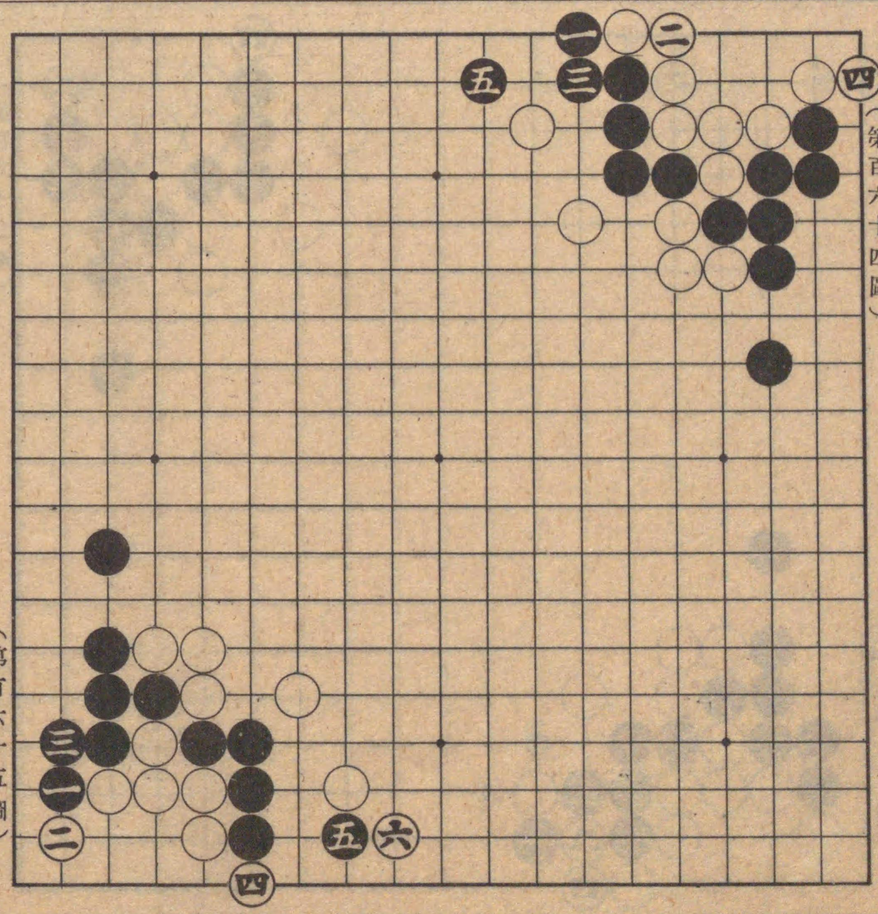
黑の方は**五**と飛ぶ位のものですが其の姿勢の低きは固より、まだ治まつても居ないので得失は自明です。

第百六十五圖　黑**五**に對し白は**六**と約へる事が出來る、又**六**の一路上に引くも可能であると述べましたがこれらは本來黑が**一**、**三**の綽粘ぎに先立つて**五**と頂け、白**六**と約へればそこで綽粘いで白**二**、**四**と應じたものと解すべく、白が**六**の手で引いた場合も亦然りであります。仍つて黑が**五**の頂けを先にした型として次圖以降に改めて詳說する。綽粘いでから黑**五**に對し白**六**は謂はば餘計の事です。第百六十三圖に從つて問題無いのでした。

第百六十六圖　黑**一**と頂けるならば前述の次第ですから隅を綽粘がぬ內にすべきである。

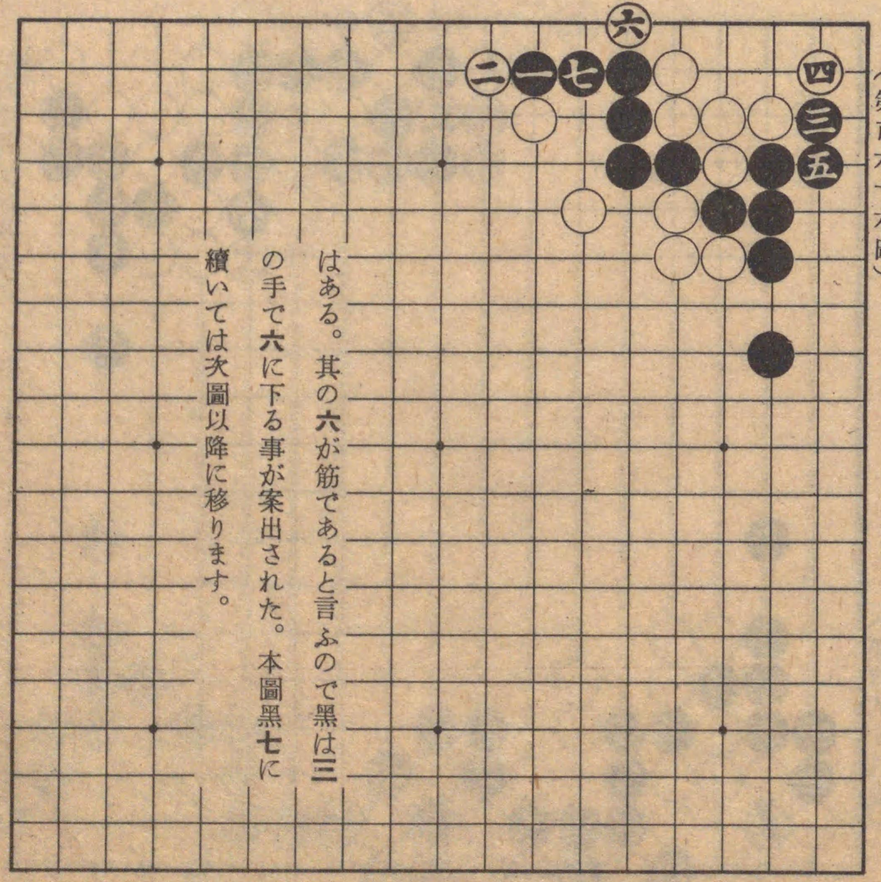
白**二**と直ちに約へるのは實は白が無理なのですが、然し其の時黑**一**、**三**と綽粘ぐものとして、第百六十三圖の簡明に比し白が劣る點だけでも黑が**一**を先にすべきである事は理解されるでありませう。但し黑には**三**の手で後に示す如く**六**と下る妙著があるのです。

偖白**六**は本圖卽ち黑**一**白**二**の交換が先にある場合にも有力なる手筋である。



（第百六十四圖）

（第百六十五圖）



（第百六十六圖）

續の手はある。其の**六**が筋であると言ふので黑は**三**の手で**六**に下る事が案出された。本圖黑**七**に續いては次圖以降に移ります。

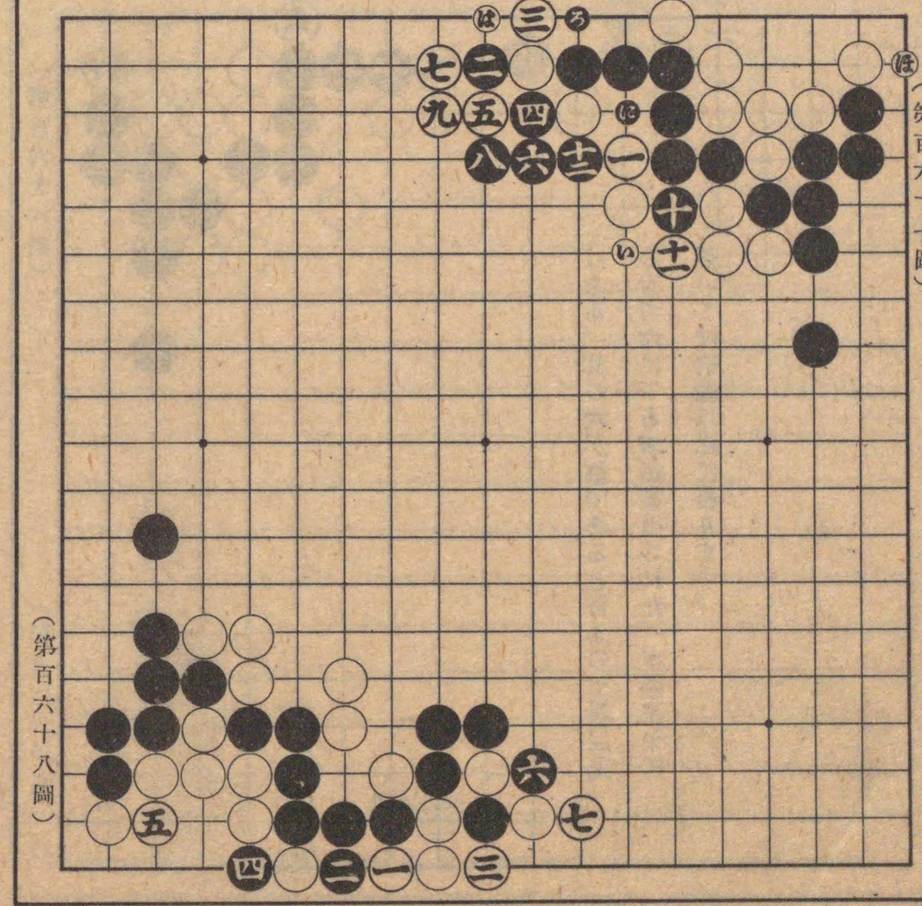
第百六十七圖　白一と詰めて打ちます。此の手で五に掛粘ぐ變化は第百七十二圖に示される。

黒は二と夾頂ける外ありません。

白三は四に粘ぐ事も不可能でなく第百七十圖參照。斯く三と下れば白七まで絕對である。

白九の別法は次の二圖です。黒十二に續いて白(い)乃至(ほ)となり眼形なき黒の一團は其の負擔でなければなりません。又若し白が(い)の手で(に)を粘ぎ黒(い)と切つての征關係が黒に不利ならば、問題は無い。

第百六十八圖　四圍の狀勢如何に依つては此の白一乃至七を期する事が出來ます。是は然し劫が附いて居



（第百六十七圖）

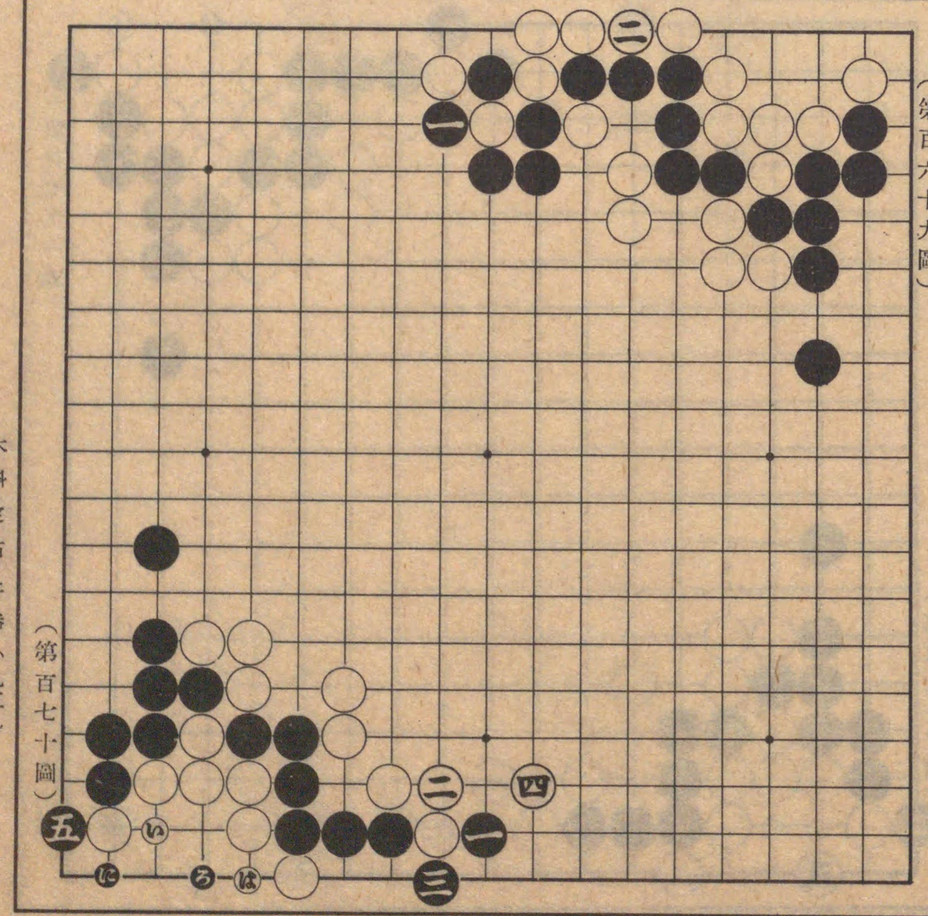
（第百六十八圖）

る事ではあり、味が宜しくないので白も感服した姿ではない。

第百六十九圖　前圖黒二の手で斯く一と打抜き白二を容るします。六子は捨てゝも是亦黒が悪くない結果と言へやう。

第百七十圖　第百六十七圖に於ける白三の手で斯く二と粘いで見る。

黒三白四は勢ひであり、そこで黒五と綽ねます。隅は劫ですから一概には言へないが、劫に白が敗れて隅を屠られる事になつては白も芳しくない譯である。其の劫は白(い)と堅く粘ぎ黒(ろ)白(は)黒(に)のそれか、又初めに白が(い)の一路下に掛粘いでの劫もある——劫を嫌つて白が(い)の手で(に)



（第百六十九圖）

（第百七十圖）

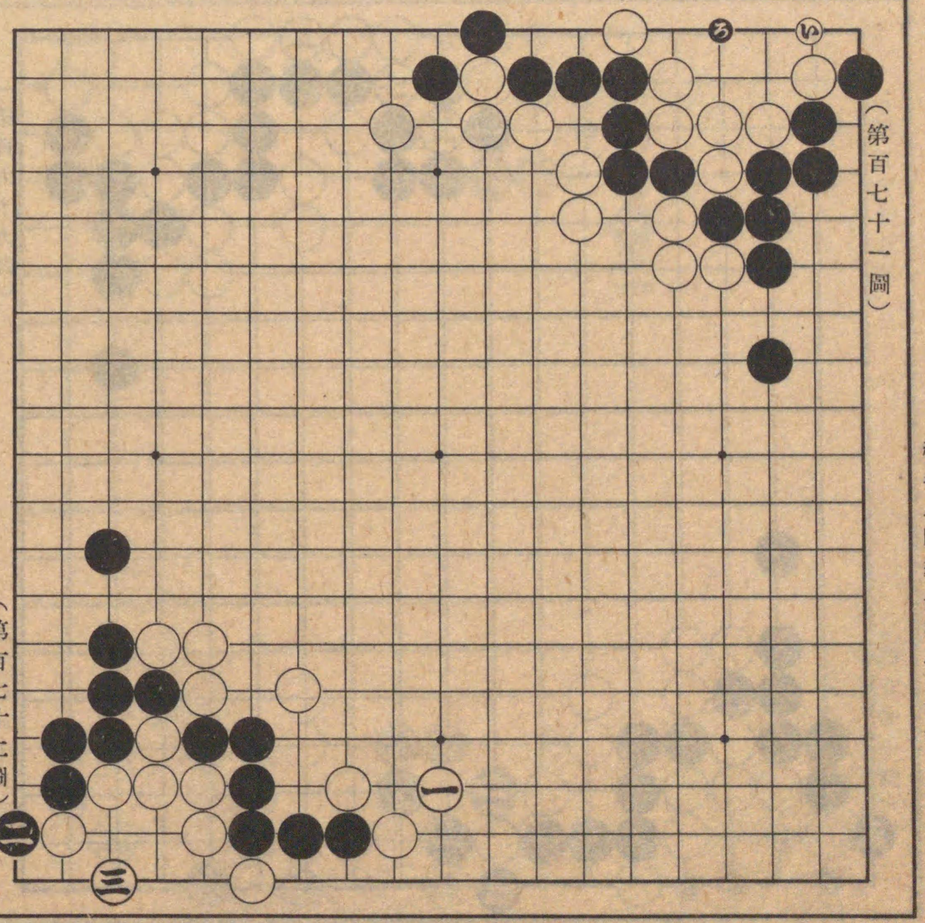
に下つたりすると次圖白㋑黑㋺と筋に置かれ、攻合ひは白が足りない事になつて終ひます。

第百七十二圖　第百六十六圖に於ける黑**七**に次いで白**一**と斯く掛粘ぐ變化である。

黑**二**白**三**で劫以外に無い。此の白**三**に就いては前二圖にも注意する。

劫爭である限り決定的な事は言へませんが、白が屠られる事になると良いとは觀られない。

但し白には外部を締付けて厚みを築く具合があります。黑として此の形に對し少くとも成算あるべしとは部分的に考へられぬのである。



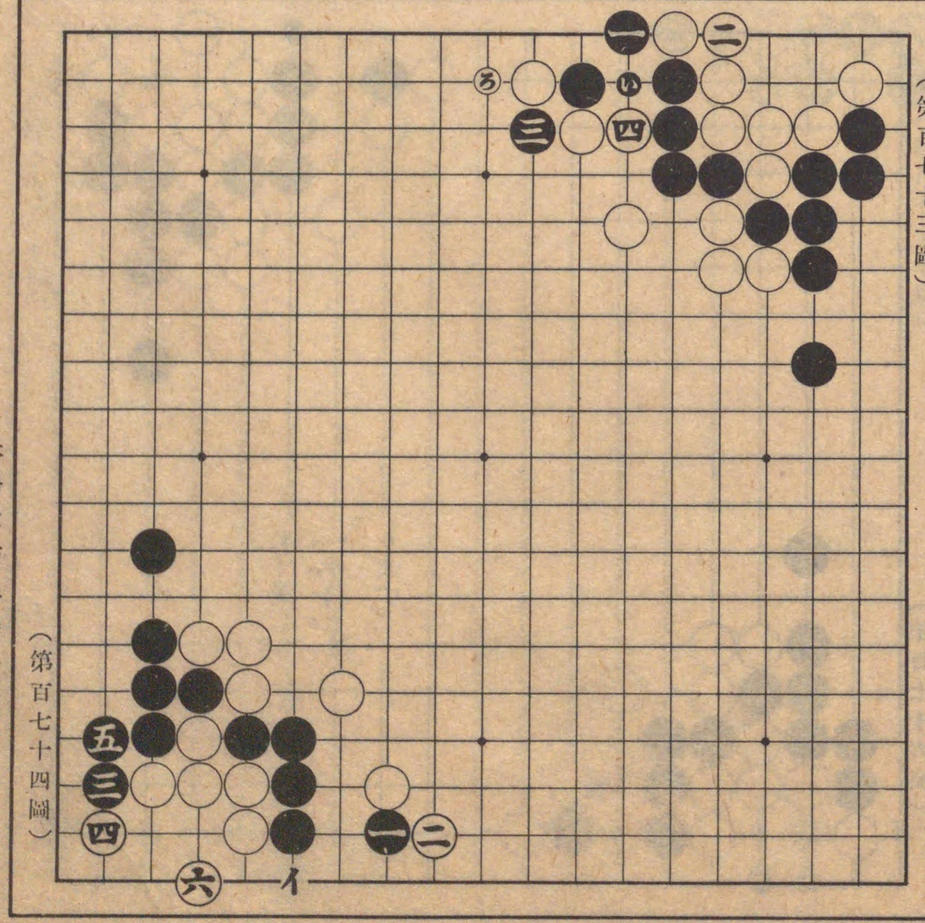
（第百七十二圖）

第百七十三圖　第百六十六圖に於ける白**六**に次いで斯く黑**一**と約へ**三**と切れば白は**二**、**四**を以て報います。

續いて黑㋑白㋺と引く迄であり虛路が詰まつて居る爲に外に出る事が出來ないのは固より、隅との攻合ひにも黑は明らかに敗ける。

第百七十四圖　黑は先づ**一**と頂けて白の應手を問ひ然る上で**三**、**五**の綽粘ぎを行ふべき順序である事を第百六十六圖でも力說して置きました。

所で白**六**は**イ**に綽ねる筋が依然有力なる所以を前圖まで說いて來たのであるが、從來、圖の如く**六**と尖む形が推奬されて居たのにも其の理が無いではありません。

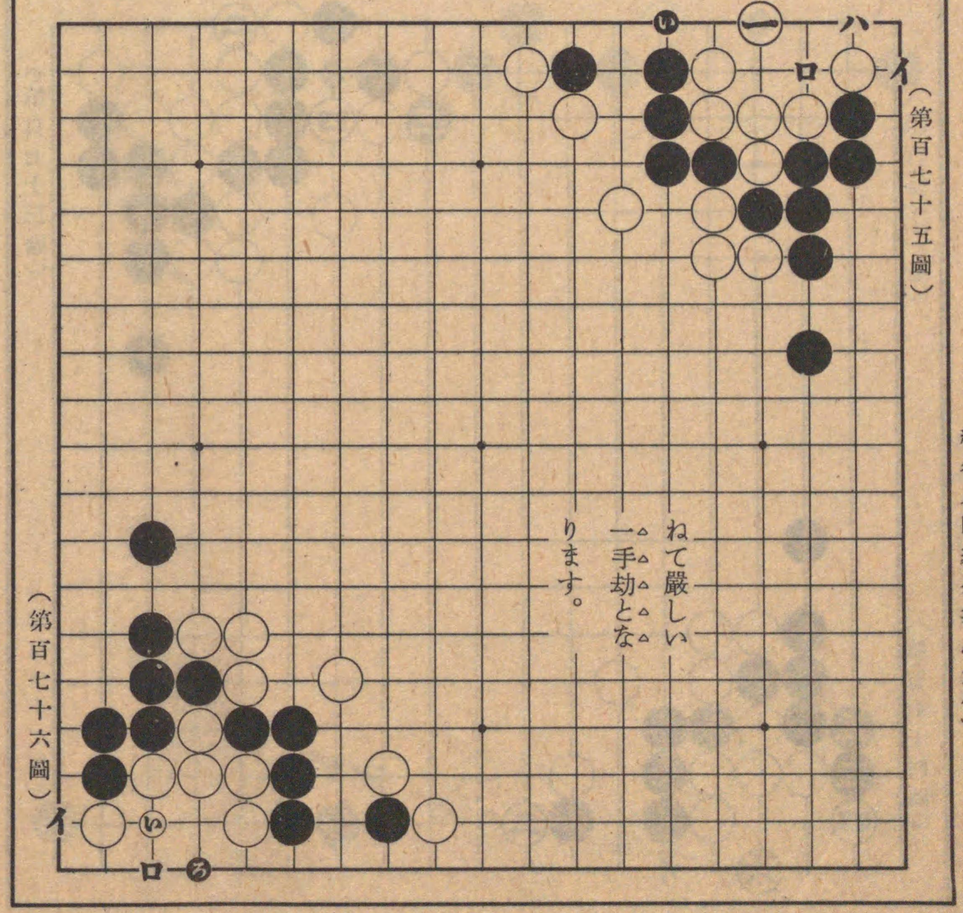


（第百七十三圖）

（第百七十四圖）

第百七十五圖　白一と尖む筋には次に黒がイと綽ねて來れば白ロと堅く粘ぎ黒ハを期して手數の延びる所で戰つて勝たうし、又黒はイと綽ねずロを切る意味もありますが、それならば白イと下つて活きて終はうと兩樣の働きが含まれる。後者には更に黒いの利きを以て外部に働き掛ける鋭い狙ひが藏されるのです。再三指摘した如く其のいが双方からの急所である所より、其處に先鞭する工風が案出された次第である。

第百七十六圖　前圖白一の手で堅くいを粘げば黒ろと置かれて攻合ひは白が足りず、又白イと下るも黒ろが成立するし白ロの掛粘は黒イと綽



（第百七十五圖）

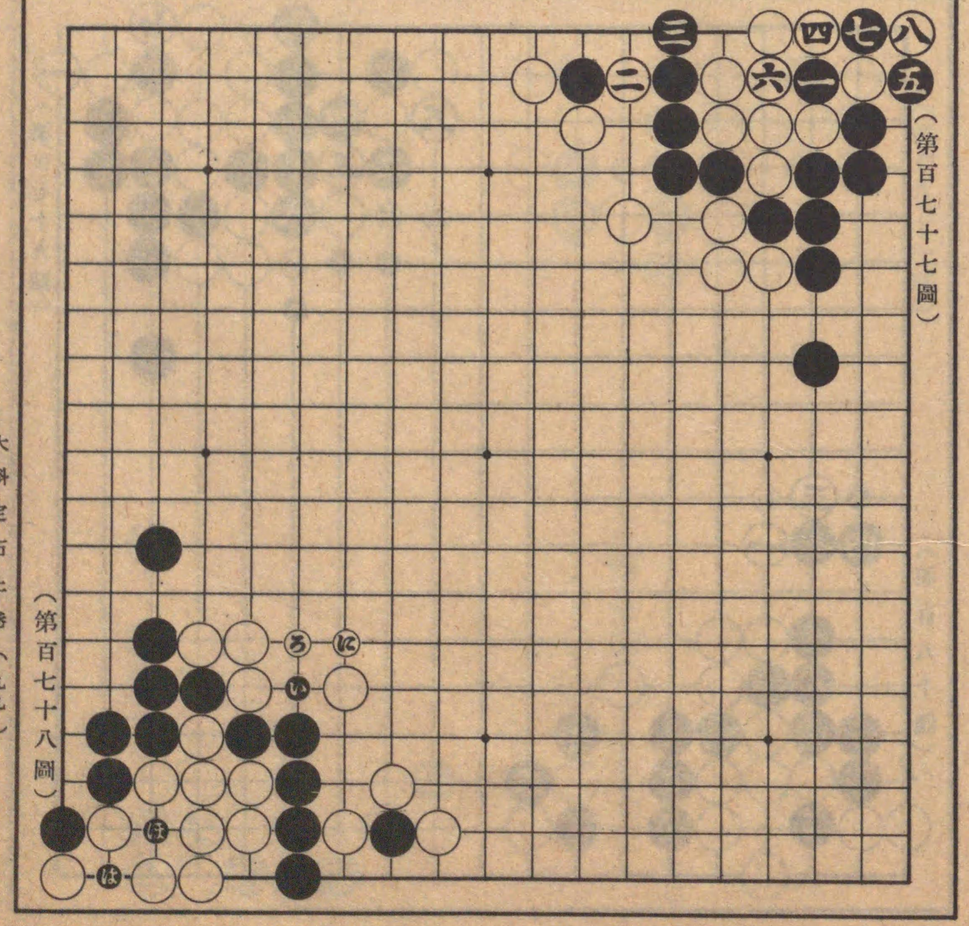
ねて嚴しい一手劫となります。

（第百七十六圖）

第百七十七圖　第百七十五圖白一に續いて斯く黒一と切るのは次に三の下りと、隅に於ける種々の味とを含んだ一種の筋ではあります。

白二と綽込めば黒三乃至白八の劫爭となる。然しながら白が無事を求めるならば二の手で五に下り第百七十九圖の如く隅を活きて打つ事も可能であります。

第百七十八圖　前圖に續いて部分的に解決を期すれば黒い白ろ黒はと劫を提る——白は勿論劫爭を繼續し得る筈ですが假りに劫爭は放棄してにと堅く粘ぎ外壁を完全ならしめて黒ほを容るした上で他の好點に轉ずるものとしても不滿無き姿である。



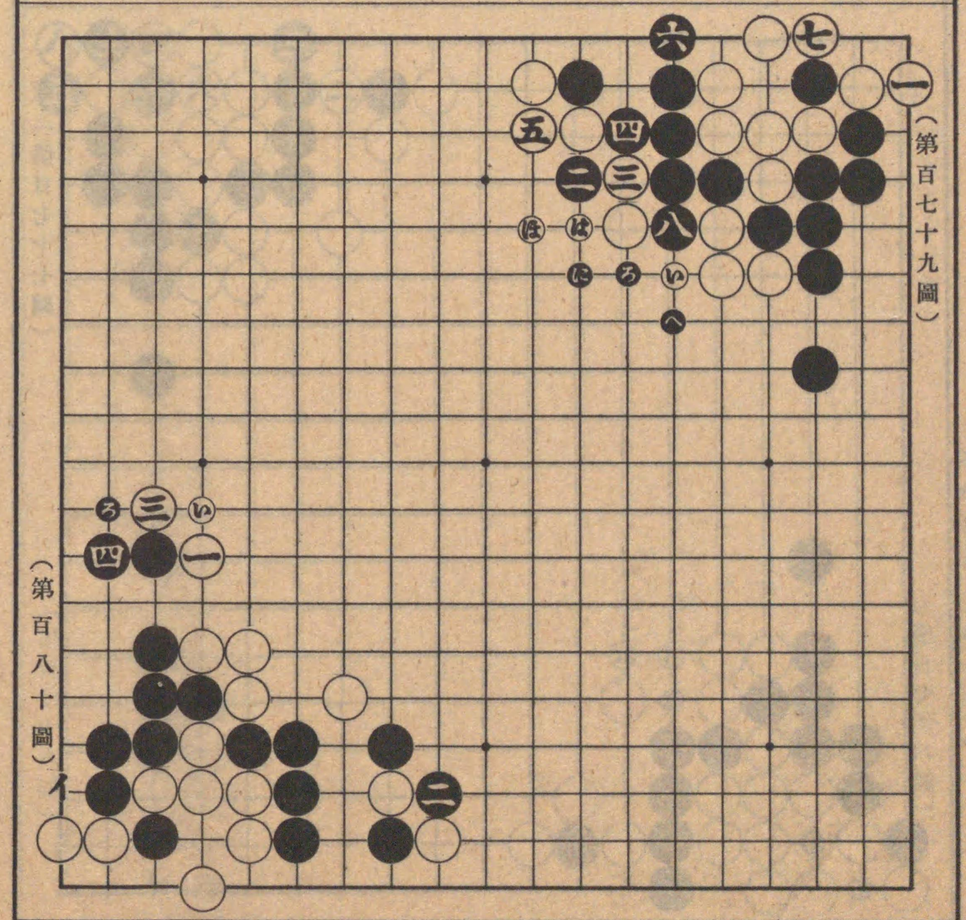
（第百七十七圖）

（第百七十八圖）

第百七十九圖　前々圖白二の手で斯く一と下る變化。黑は透かさず二と頂越すのが簡明です。

白三と遮れば黑四白五に次いで六の下りを利かせ先手で手數を一著延ばして置いてから八と出ます。續いて白い黑ろ以下符號の示す順序で解決する。本圖は白不利である。

第百八十圖　前圖白三の手で斯く一と飛頂けるのは前圖に於ける黑八の出に對する用意ですが、黑は顧みずに二と切り白三黑四と應じて差支へありません。續いて白い黑ろと曲つて良く、時に其のろを省略し得るのは隅に對し黑イの約へが何時でも利いて居るからに外ならない。

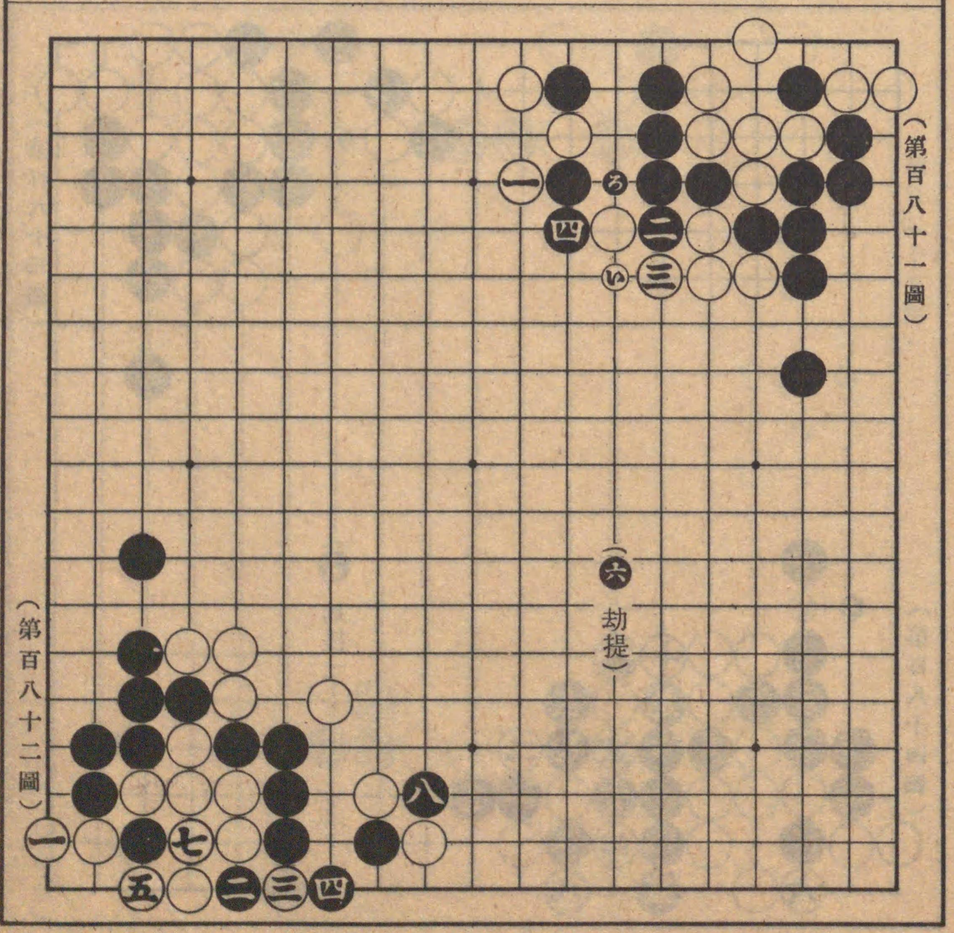


第百八十一圖　前々圖に於ける黑二の頂越しに對し白一と斯く受けるのは全然不合理です。黑二、四と出られ留め様がありません。

續いて白い黑ろで明らかに白の破綻に終る。

第百八十二圖　白一の下りに對し今度は黑二白三黑四と直接劫を挑みます。白は五、七と屈服せざるを得ぬので黑八と透かさず切る。

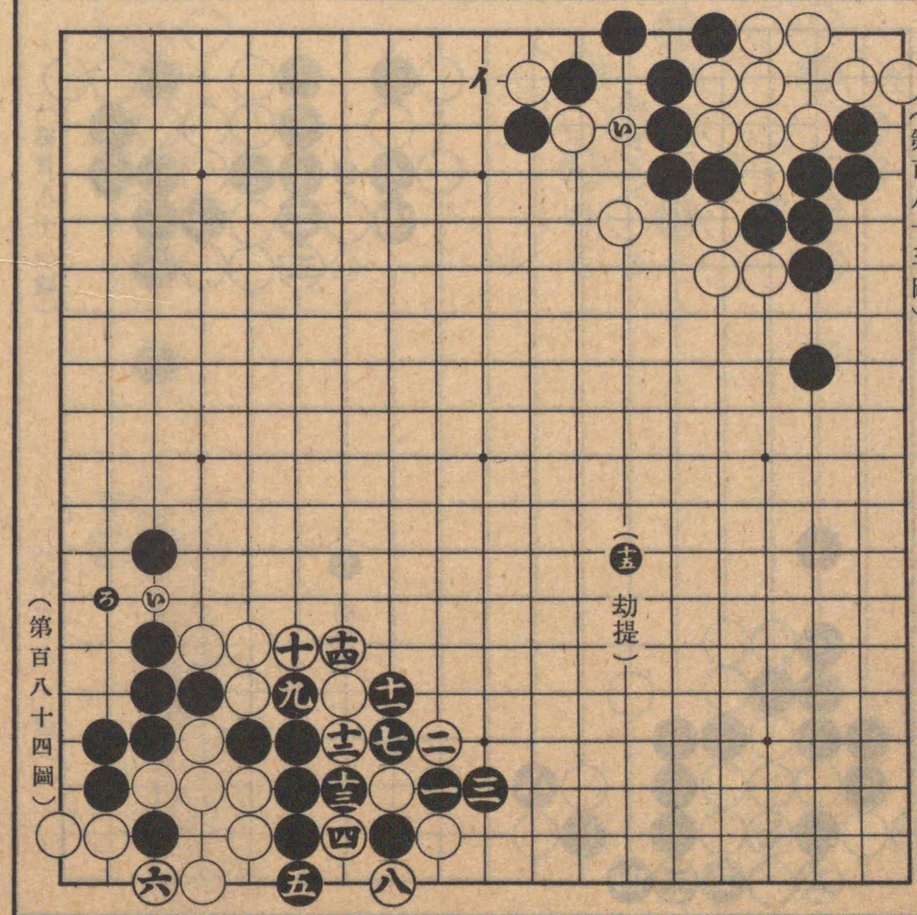
これも頗る簡明ではありますが白に五、七と提られて居る爲に隅の味と言ふものが解消して終つたのは止むを得ない。黑としては二の手で直ちに八を切る手段が成立すれば理想的なのです。



第百八十三圖　前圖黑八の後に白㋑の狙ひ、又白イと引いて動き出し大きく黒を攻める含みが藏されます。從つて四圍の狀勢に依る事が多く常に必ずしも黒が有利とはされませんが、容るされさへすれば前圖は何よりも簡明なる所を黒は採りたい——

第百八十四圖　既述の次第であるから黒一と單に切る手段が次には考へられねばならぬ順序です。

白二、四は絶對である。黒五白六と交換し隅を決めて終ふのは惜しいけれど仕方がありません。黒九、十一の手順が肝要。部分的には黒十五に次いで白㋑黒ろ白劫提りとなり、黒宜しからず、大問題であります。



（第百八十三圖）

（十五　劫提）

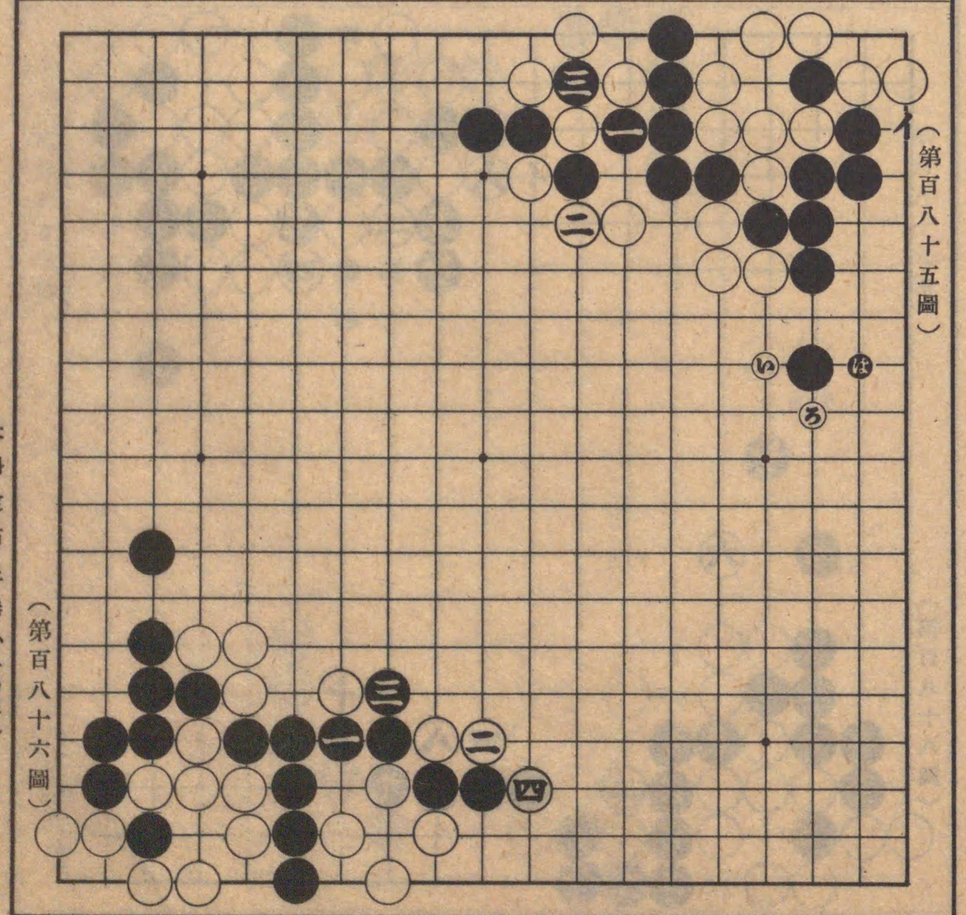
（第百八十四圖）

第百八十五圖　前圖に於ける黒九の手で直ちに斯く一と當てれば白は二と外から約へる。白の姿の輕い所は其の劫爭の負擔も重からざる理であります。黒三白㋑黒劫粘ぎ白ろ黒㋩を想定しても黒イが最早利かぬ點の辛さが否定されず第百八十圖との差は全體に小さくありません。

第百八十六圖　黒が劫爭を嫌ひ前前圖九の手で斯く一と粘げば逸出は容易なのです。

白も二の手で三を約へる事は出來ない。其の無理は次圖に示される。

黒三白四の變化は勢ひですが、斯くては四圍の狀勢にも依るものゝ一般に黒の好ましからぬ振換りである。

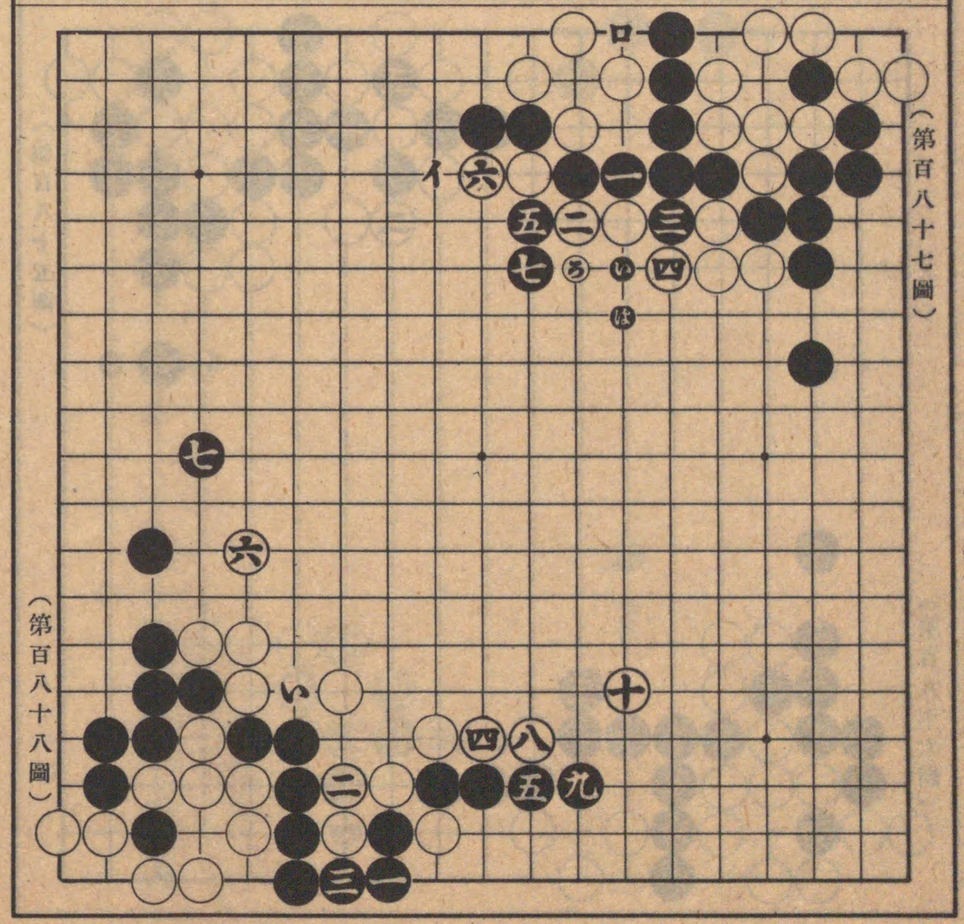


（第百八十五圖）

（第百八十六圖）

第百八十七圖　黒一白二と約へる爲には、黒三乃至七に次いで黒イの征關係が白に良く、或ひは黒七の手でいを切り白ろ黒はに續く黒七の征關係も白に有利でなければなりません。卽ち其の兩方の征關係が白に良い場合には白ロと詰めて攻合ひに勝つ譯ですが、然る場合は普通には考へられない。

第百八十八圖　第百八十四圖に於ける黒七の變化として斯く一と下つて見ます。これは黒の方から劫爭を避けたものと解すべく白二乃至十を想定し黒の姿勢の低い所に難點が存する。但し白にもいの邊りに缺陷のある事は否定されません。

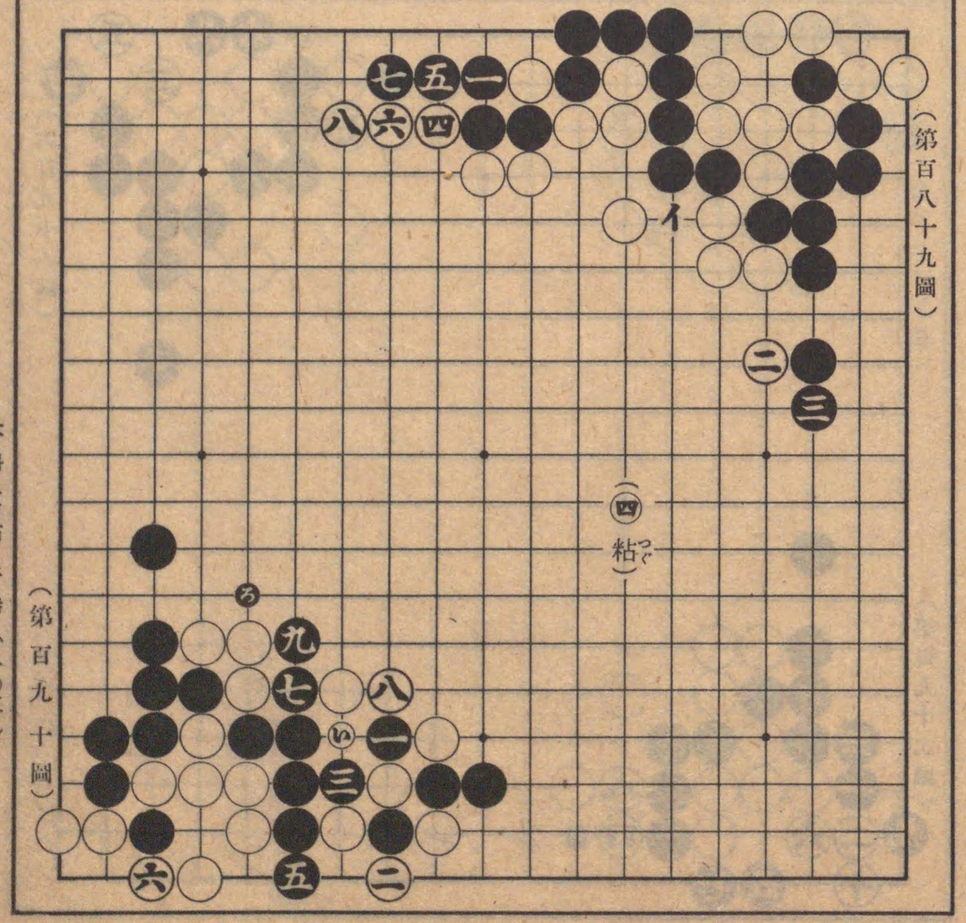


（第百八十七圖）

（第百八十八圖）

第百八十九圖　前圖に於ける黒五の手で斯く一と抱へるのは次に黒イと其處を出切る嚴しさを狙つたのですが、白は先づ二と頂け黒三と交換して其の出切りを一旦緩和し牽制したる後、圖の如く四以下の壓迫を加へる。黒の姿勢の低い所を強調すれば本圖は前圖に比し一層黒の忍びない形でもあります。

第百九十圖　第百八十四圖に於ける黒五の手で斯く一、三を先にし五と下ります。今度は白も四と粘がざるを得ぬから乃で黒五白六と交換し七、九と突出す。續いて白ゐ黒ろとなる變化も考へられるのです。得失なき岐れと觀られる。



（第百八十九圖）

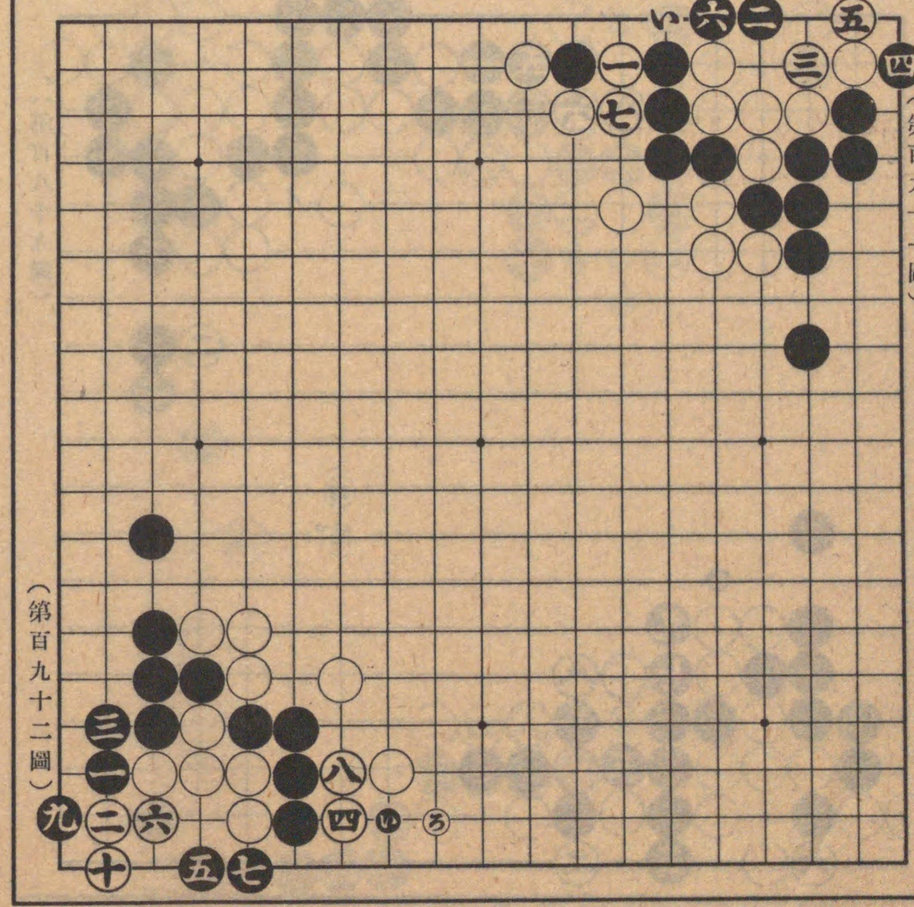
（第百九十圖）

第百九十一圖　白一はいに綽ねるを最善とし又二に尖む筋もある事をこれ迄示して來ました。次の型に移る前に圖の如く一と綽込む結果を玆で檢討して見ませう。

黑二は白の打つべかりし筋を奪つたのである。以下白七迄の持となり外部の締付けが皆利いては居るものの後手では白が芳しくありません。

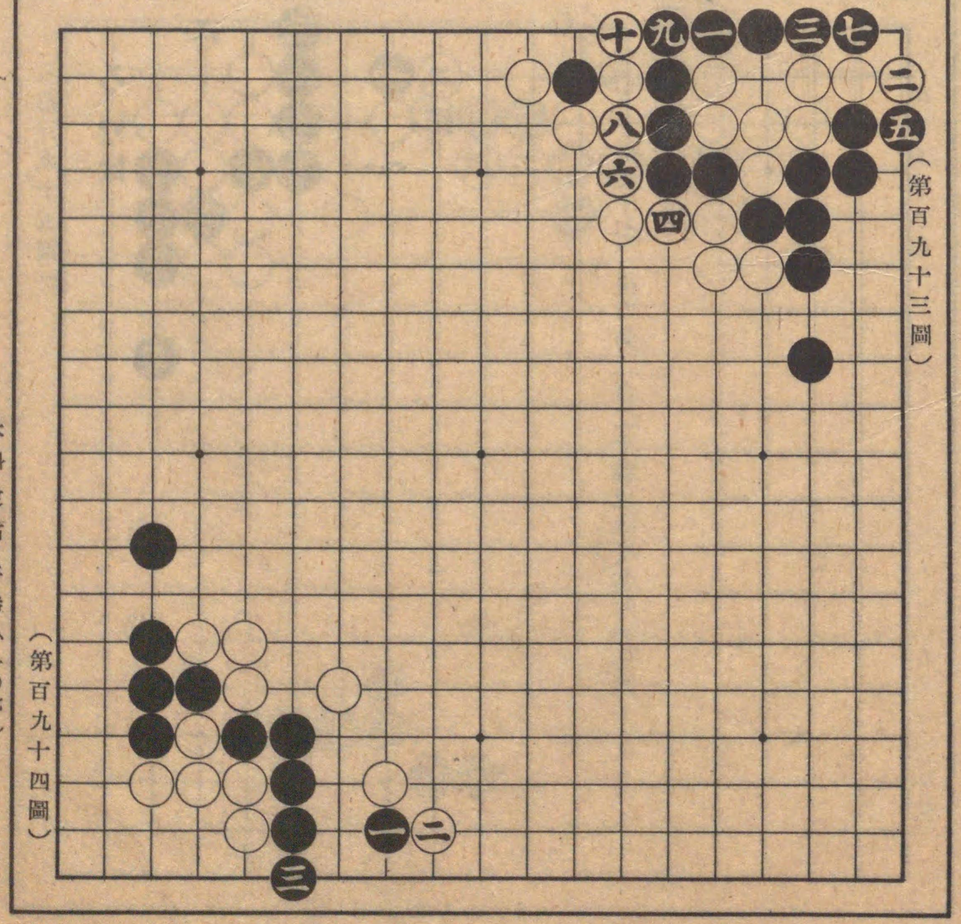
黑四にて六を先にすれば第百九十三圖である。

第百九十二圖　は前圖と比較する爲に揭げるのです。黑が一、三の綽粘を先にした時白四と尖頂けて十迄の持となつては黑いと白ろの交換が無いだけに前圖よりは更に白が劣る。



第百九十三圖　前々圖に於る黑四の手で本圖一と直ちに盤つても持に違ひ無く、外部の關係も總べて變りありませんが、同じ持ならば黑として前圖を採りたい。それは黑白何れから手を著けるにせよ此の持を破る事を劫立とする樣な萬一の場合を考へると黑の負擔は本圖の方が明らかに大なるを以てであります。

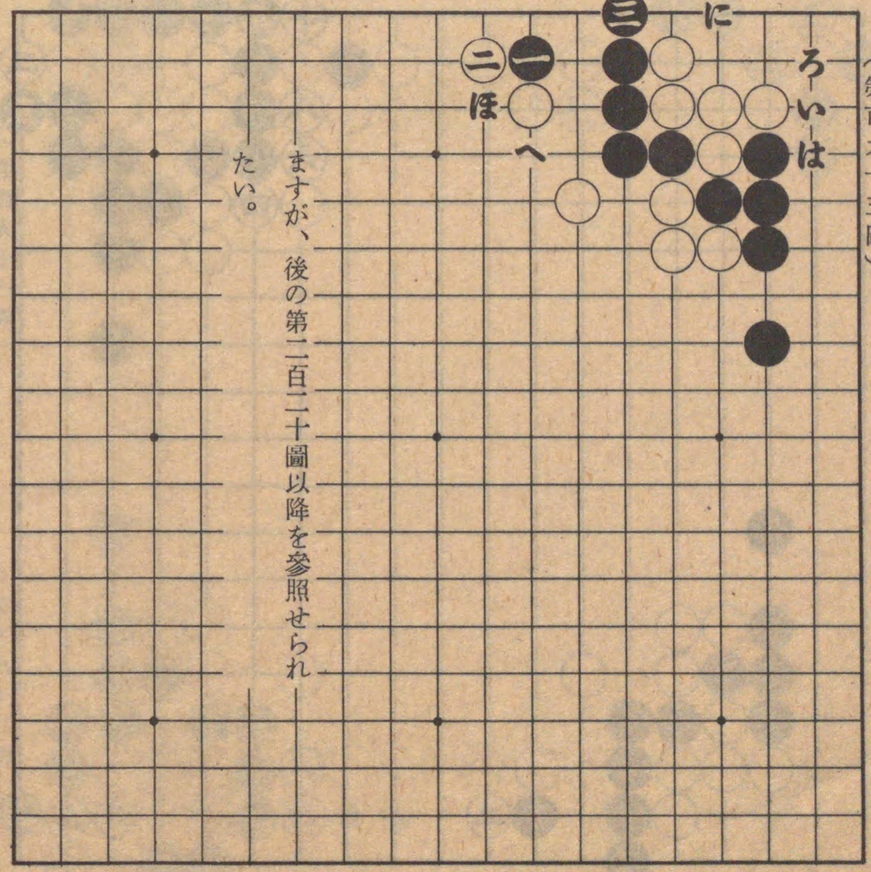
第百九十四圖　黑一白二と約へた時、直に黑三と下る筋のある事を第百六十六圖でも指摘して置きました。此の三の點が第百六十二圖に於ける白四の綽ねと同點であり、更に第百六十六圖白六と綽ねた點でもある事に注意すべきである。



第百九十五圖　黑が**一**と頂けるに先だつて**い**に綽ね白**ろ**黑**は**と粘げば白は單に**三**と綽ねて問題無く、又黑**一**白**二**に次いで黑**い**白**ろ**黑**は**と綽粘ぐも、白は矢張り**三**と綽ねて宜しい外に、今度は白**に**と尖む從來の筋も決して排斥されなかつた——黑が**い****は**の綽粘ぎを先にして**一**と頂けるは全く手順を誤つたものである。

本圖黑**一**を先にした時、白**二**と約へるのは白に稍無理の嫌ひあり乃ち黑**三**と下る筋が成立する——以上がこれ迄說いて來た所の大綱であります。なほ白が**二**と約へずに**ほ**に引く型、また黑**三**と下る手で**ほ**を切り、若しくは**へ**と頂越す手段などもありますが、後の第二百二十圖以降を參照せられたい。

（第百九十五圖）



第百九十六圖　前圖黑**三**の下りに續いて白**一**と若し隅から約へれば、黑は**二**と切る一手です。以下白**十一**迄は必然の經過と觀られる。

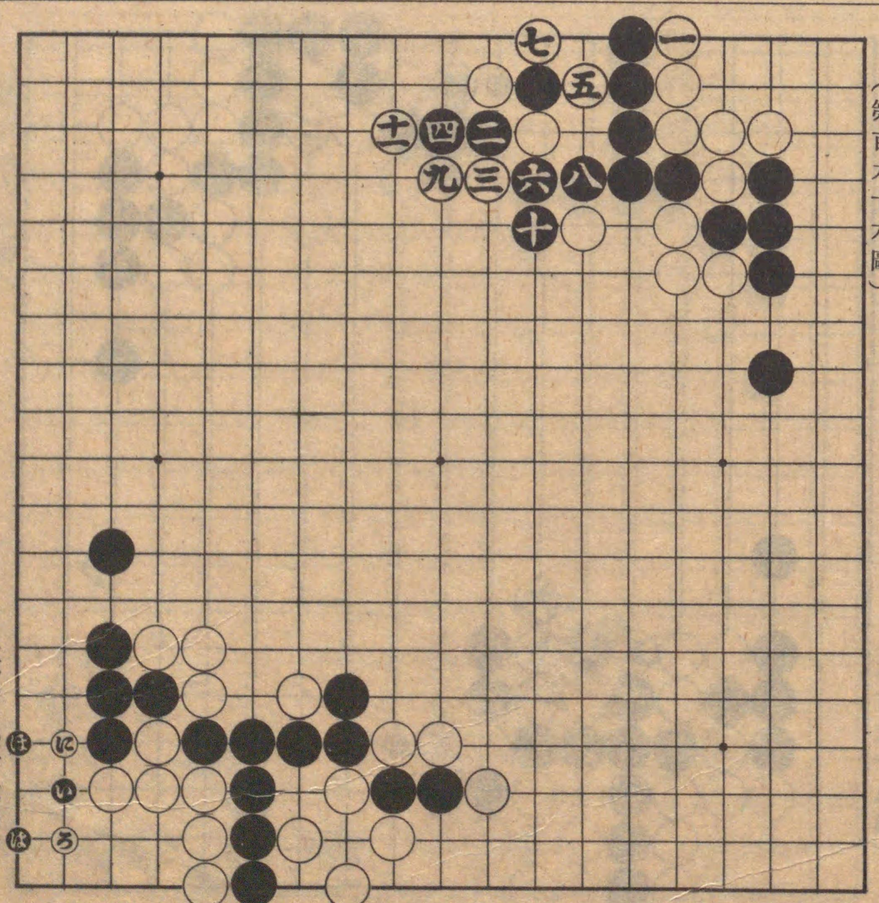
此の結果は既出第百八十六圖と似て居ますが、後に黑からは機を得て次圖**い**、**は**と二段に綽ね劫爭を挑む烈しい狙ひが藏されて居るだけに黑の惡い筈はありません。

黑**六**にて**七**に下る不當は第百九十八圖に——

白も**九**の手で**十**を約へたい形であるが、それには第百九十九圖に示される征關係に注意しなければならぬ。

其の點は前圖**一**、**三**に際し双方戒心を要するのであります。

（第百九十六圖）



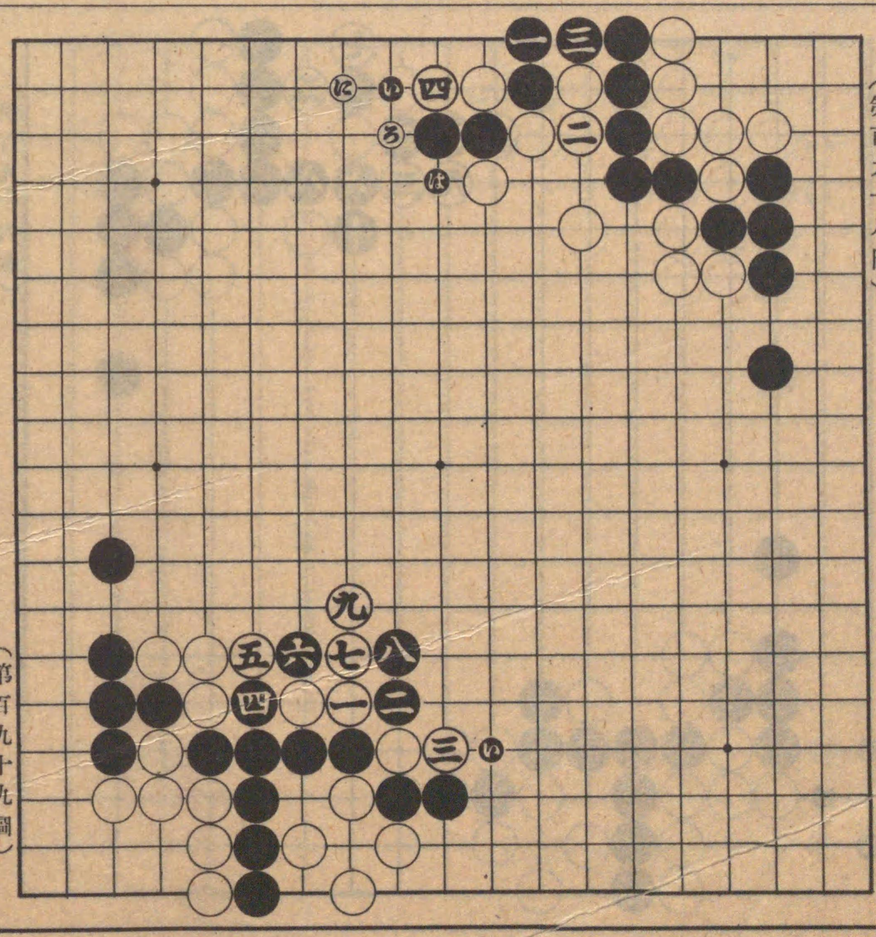
（第百九十七圖）

第百九十八圖　前々圖黒六と切る手で斯く一と下る。これは同圖二と切つた烈しい意味と根本的に相容れぬので、白二、四に黒の窮するのも固より當然に過ぎません。

白四に續いて黒い白ろ黒は白にでそれ迄である。

第百九十九圖　第百九十六圖に於ける白九の手で斯く一と約へます。

黒二乃至白九に次いで黒いと追ふ征が成立するか否かが先決問題であります。此の點は第百九十五圖に於ける黒一、三を打つに當り、否、遡つて初め第百五十三圖白一、三の趣巧を採る時に豫め双方に於いて用意が無ければならぬ理である。



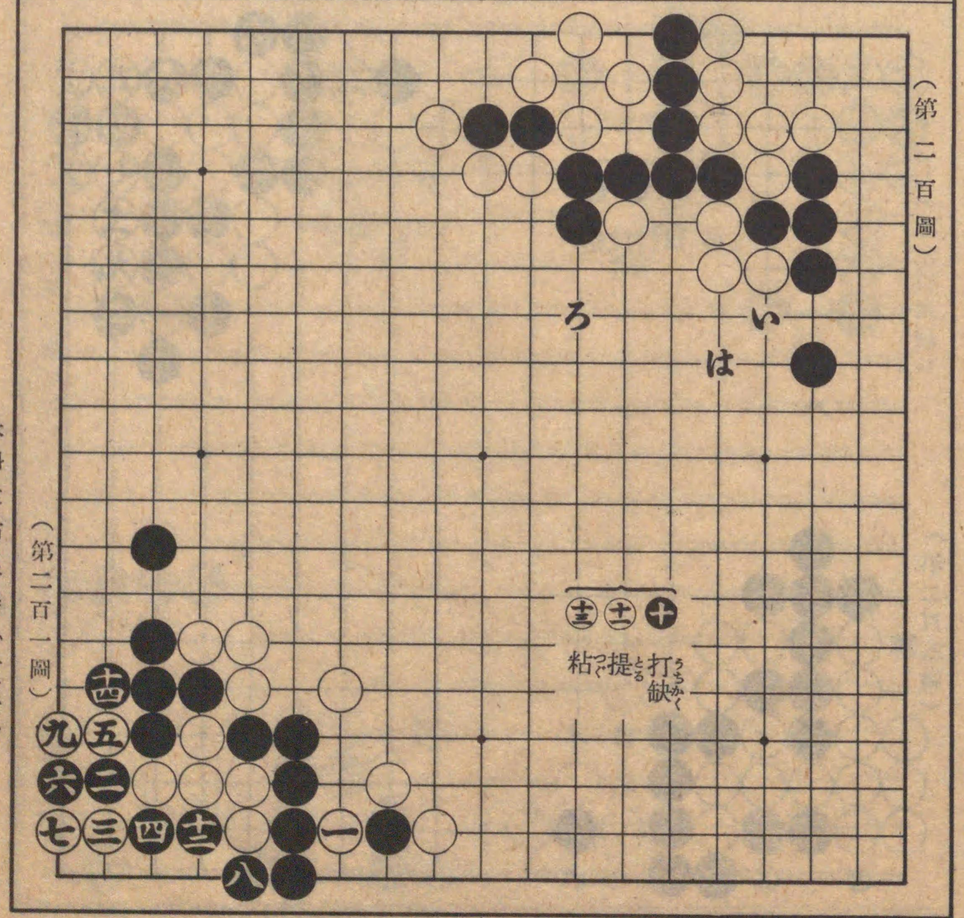
（第百九十八圖）

（第百九十九圖）

第二百圖　第百九十六圖白十一に次いで、隅の劫爭は暫く別として黒が打つにはい、ろ、はの三點が考へられる。其の選擇は全局の形勢にも依る事であつて一概に言へませんが就中黒いは最も堅實であり白四子の活動力を減殺すると同時に隅の劫を狙ふ意味に於いても適切たるを失はぬ點であります。

第二百一圖　第百九十五圖黒三に續いて白一と斯く綽込むは大いに非である。卽ち黒には二と綽ねて四と切る烈しい筋があるのです。

黒十四迄となり攻合ひに白が足りず隅は鏖殺されてしまふ上に外勢の厚壯を誇る事も白は出來ません。



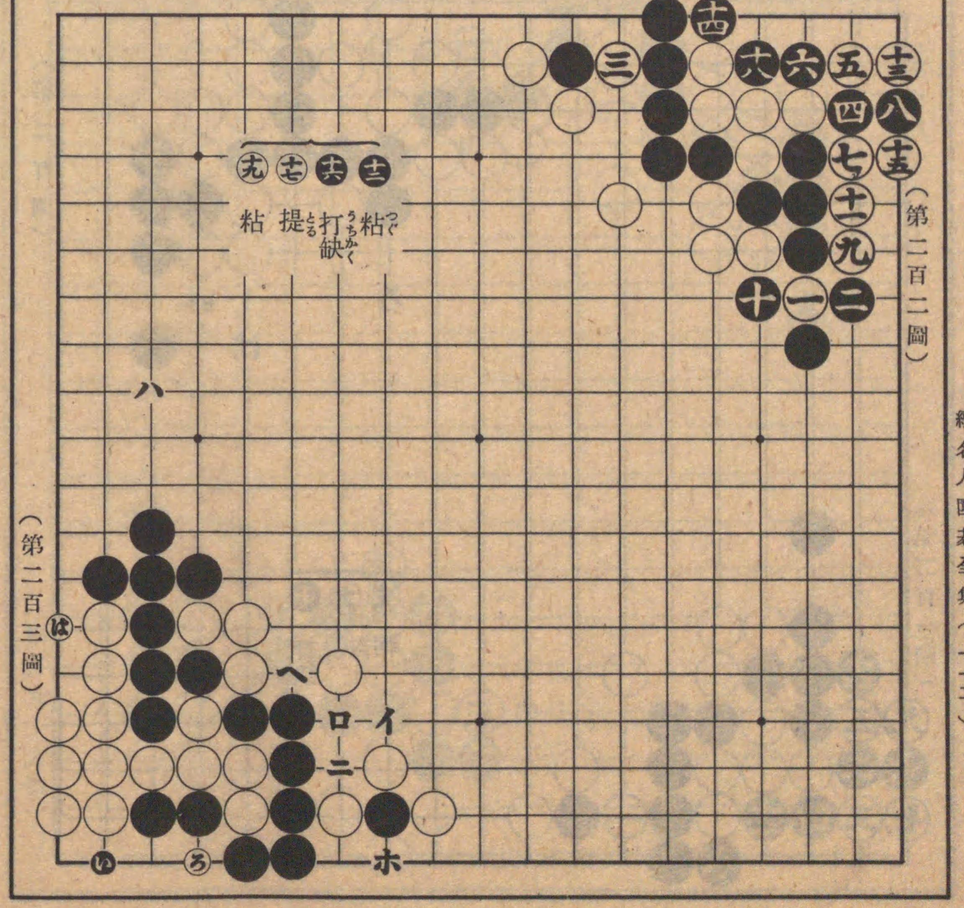
（第二百圖）

（第二百一圖）

第二百二圖　白が一の綽込みを先にし黒二と交換してから再び三と綽込む變化です。黒四、六の手筋に變りは無いが白九、十一と絞る形に前圖との差があります。

白十九に續いて次圖に移る——

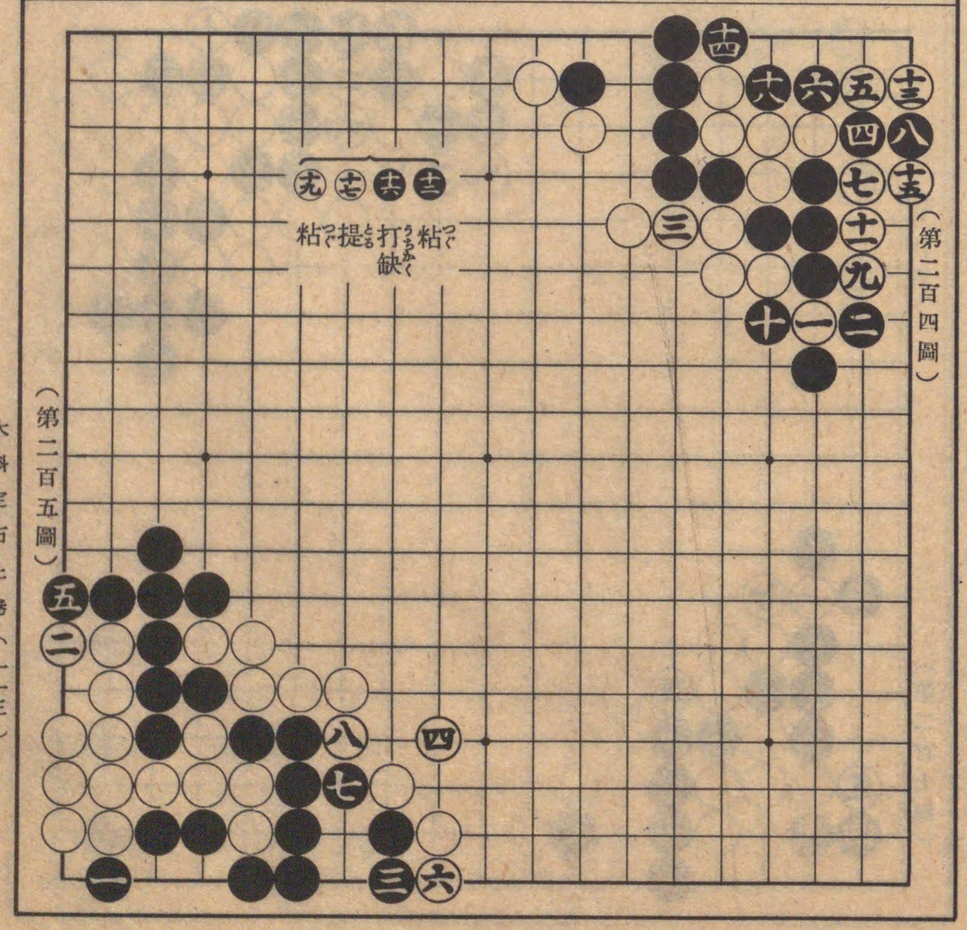
第二百三圖　茲で黒にはいと綽ねて隅の白を取掛けに行くのと單にイに頂越して逸出を求めるのと兩途の選擇がある。黒イ白ろ黒ロの時白ハと迫られるのは形勢にも依る事ですが黒として好ましくないとすれば直ちにいに綽ねる方を採る外ありません。但し其の黒いに對しても白はに黒イ白ロ黒ニ白ホ黒ヘ白ろと活路のみを求める事は勿論問題にならぬ。



第二百四圖　前々圖に於ける白三の手を變へたのみ。餘は十九迄、全く同一です。前々圖三と本圖三との差は前圖に於ける黒イの頂越しの失はれる所に現れ、更に具體的には次圖と成ります。

第二百五圖　前圖に續いて黒は斯く一と綽ねる外無い。

白二乃至八にて持となる結果は後手でも白は外勢の整備を以て滿足すべく、黒の方は先手と言ふ點が慰めとなる位のもので餘り面白いとは言へませんが、さりとて白も第百五十三圖一、三を敢行しただけの効果を收めたとは觀られない。要するに前圖白一、三は巧妙なる凌ぎである。

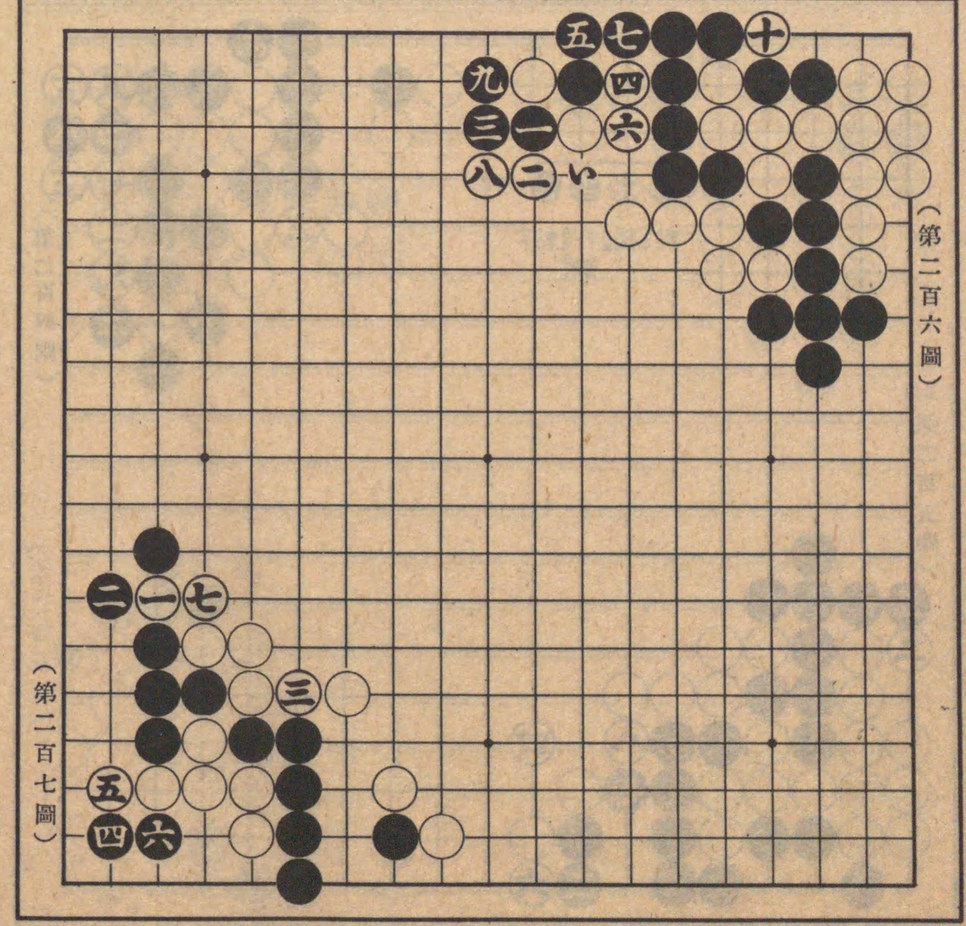


第二百六圖　前圖に於ける黒一の手で本圖の如く一と切ります。白二乃至黒七は必然の運びです。黒が五の手でいを切る餘裕無きを確かめ、既出第百九十六圖との差を思ふべきである。斯くて白八黒九に次いで白十と打缺き隅を活きる事となれば、黒としては前圖の持の結果より幾分優る程度のものです。

第二百七圖　白一、三を第二百四第二百五の兩圖に於いて推奨して置きましたが續いて黒四と筋に置く變化を考へて見ませう。

白七と茲で粘ぐのを働いた手順とします。第二百十圖參照。

黒八以降を改めて次圖に示す。



（第二百六圖）

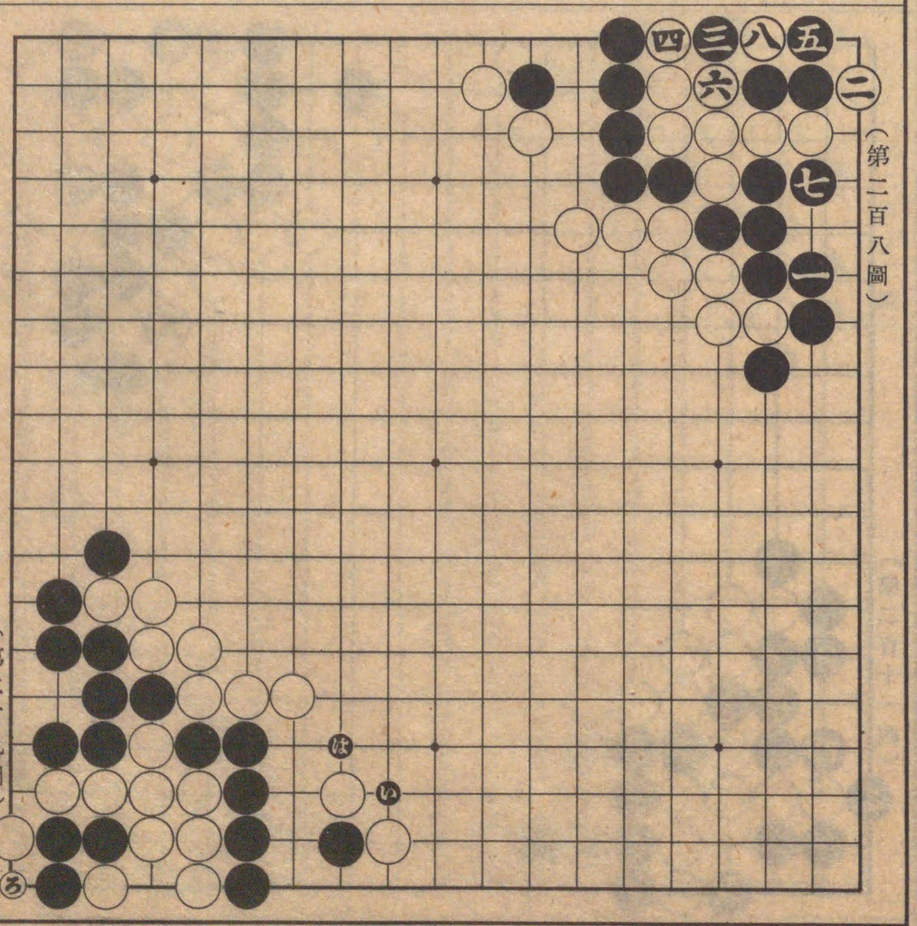
（第二百七圖）

第二百八圖　前圖に續いて黒一と屈服し粘がざるを得ません。第二百十三圖參照。

白二は此の手で四に約へる事も出來ます。第二百十一圖が夫れです。

白六に至つても隅の數子に拘泥せず外部を締付けて打つ事が出來る。第二百十二圖に示されます。圖の如く、六と當てれば、黒七白八の劫ですが部分的には續いて次圖の結果が想定される。

第二百九圖　黒い白ろ黒はの振換りに黒の不利は考へられません。白としては劫爭を選ぶべきか將又第二百十一、十二圖を採るべきか何れも考へられるので迷ふ所である。



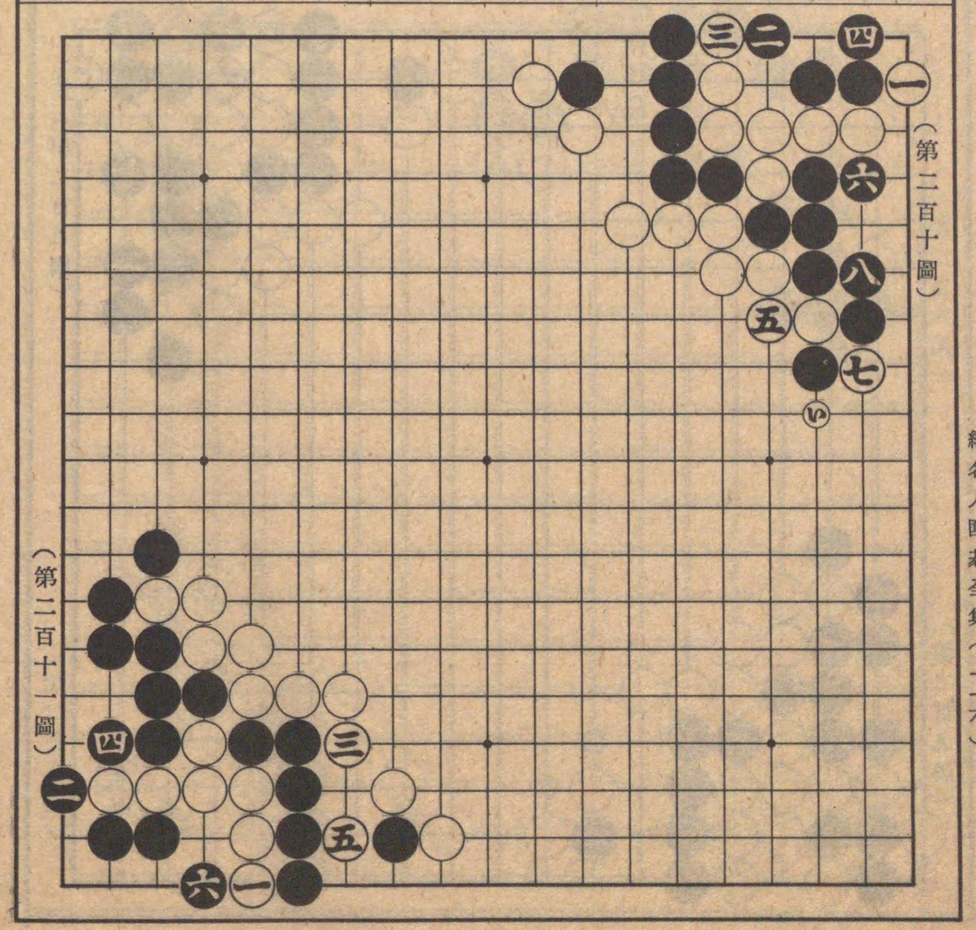
（第二百九圖）

第二百十圖　第二百七圖に於ける白七の手順たる事を明らかにする。

卽ち其の七を怠り、前々圖に倣つて本圖白一乃至黑四を先にしてから五と粘いだりすれば黑六、八と隅を味好く取られて終ひます。次いで白⑩と征に抱へても後手ではあるし、白良しと言ふには難色無きを得ない。

第二百十一圖　第二百八圖に於ける白二の手で本圖の如く一と約へるのは隅を捨て、外部を締付ける意味に外なりません。

卽ち白三、五と外勢の厚壯を築いて先手に廻りますから狀勢に依つては黑も隅を屠つて晏如たる事は容されない譯である。

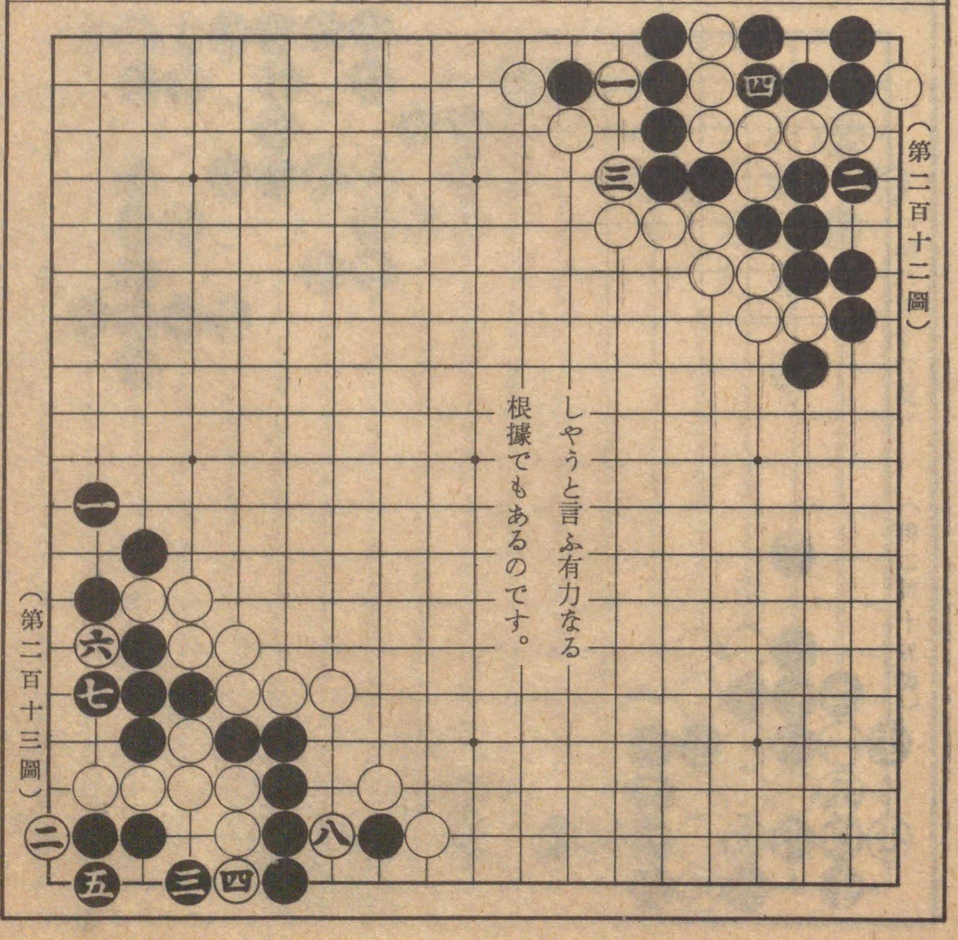


（第二百十一圖）

（第二百十圖）

第二百十二圖　第二百八圖に於ける白六の手で本圖の如く一と綽込み黑二白三と矢張り先手で外部を締付けて隅は黑に與へる策です。前圖と全く等しい。然しながら是等は白が斯くても打てると言ふ程度を出ないのであつて必ずしも白優れりとする譯には行きません。而して第二百八圖の劫爭とす可きか否かは部分的に決定されぬのであります。

第二百十三圖　第二百八圖に於ける黑一の屈服を避けて本圖の如く一と掛粘ぎ働かせ樣とすると白二乃至八にて攻合ひが黑は足りず、劫でも何でもなくなる。蓋し第二百八圖一の萎縮は又前二圖の結果に白が滿足しやうと言ふ有力なる根據でもあるのです。



（第二百十二圖）

（第二百十三圖）

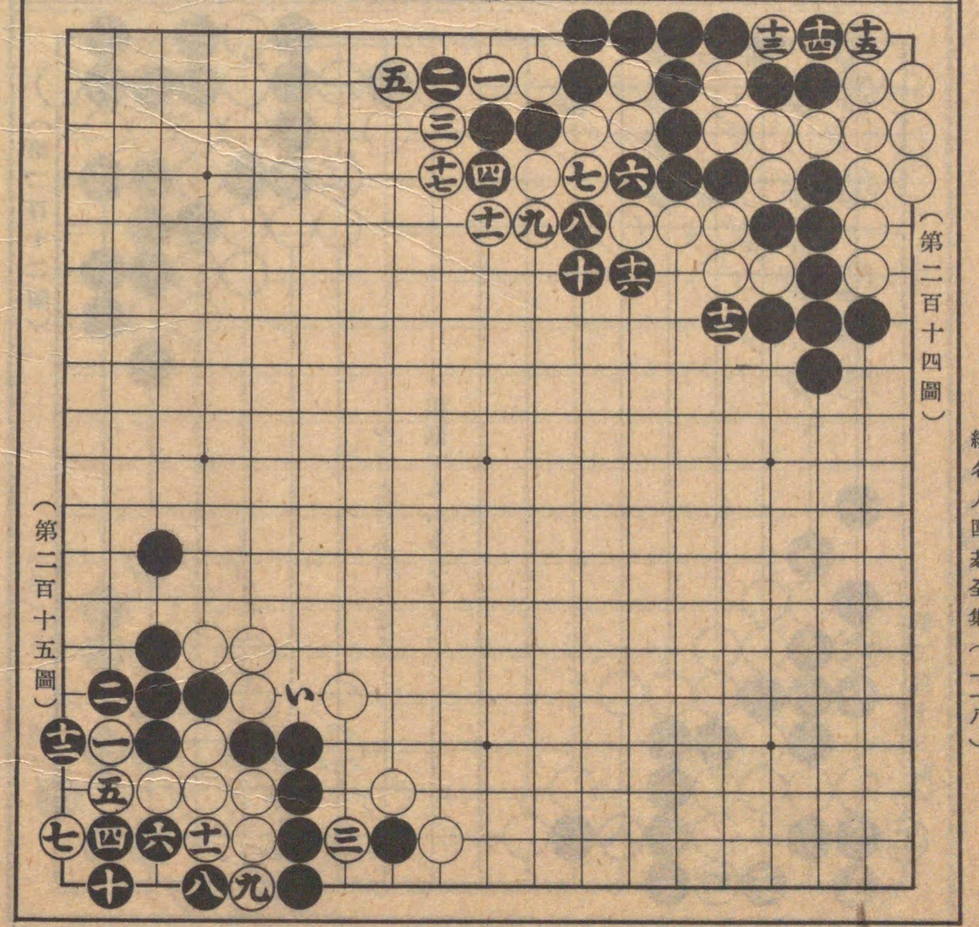
第二百十四圖　第二百六圖に於ける白**八**の手で本圖**一**と強引に泳ぐ策があります。

黒**二**と勢ひ約へざるを得ず、白**三**以降は互ひに已むなき經過である。

斯くて白**十七**迄の結果の得失は双方の獲たる厚みが全局に及ぼす所の如何を以て判斷する外無く、畢竟此の如き變化も成立する事を示す迄のものであります。

第二百十五圖　第二百一圖以降に於ける如く隅で黒に絞られる事を嫌つて白**一**黒**二**の交換を先にし**三**と綽込みます。但し黒**二**、**四**に就いては次圖以降に注意する。

黒**四**と筋に置いて**十二**迄の劫爭は



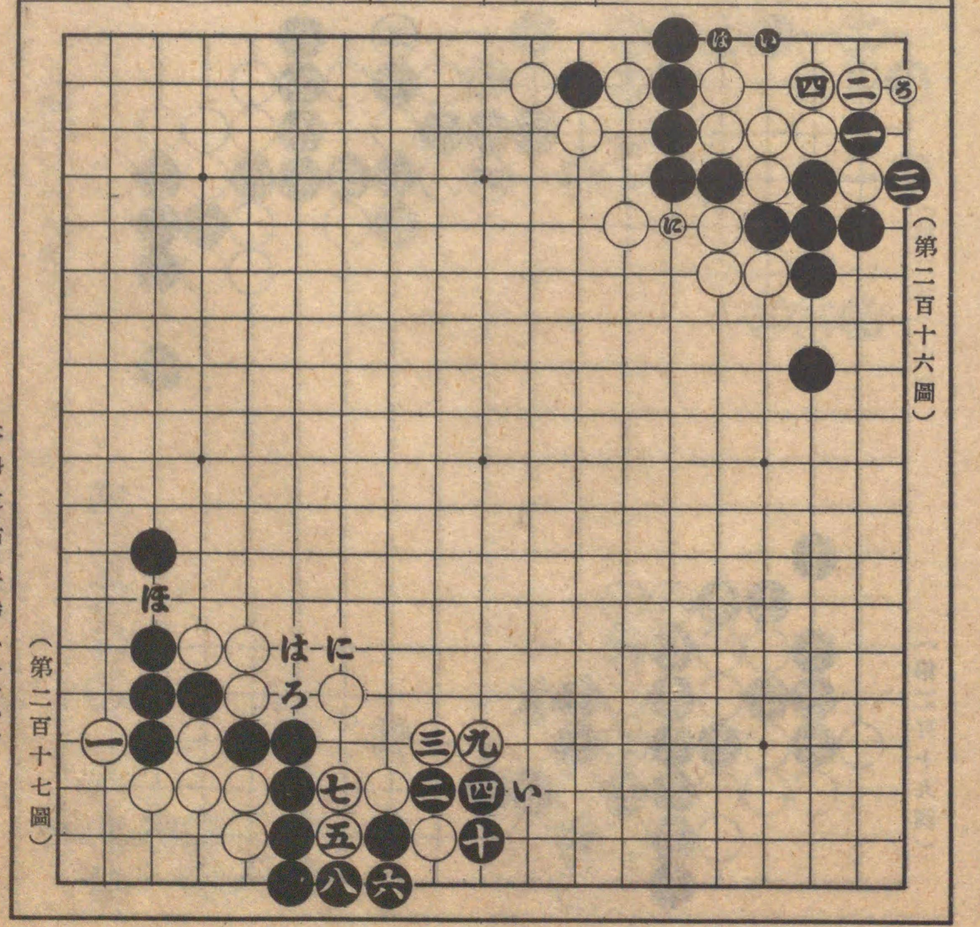
（第二百十四圖）

（第二百十五圖）

黒**い**等の劫立がある限り部分的には白の失敗たる事明らかである。

第二百十六圖　前圖に於ける黒**四**の手で本圖**一**、**三**と切り提れば白**四**と粘がれ、續いて黒**い**白**ろ**黒**は**白**に**と成ります。是は白が隅を捨てゝ先手を取らうと後手でも持に甘んじやうと自由であり、何れにせよ白に外部を締付けられるので、黒が前圖白**一**の術中に陷る點に變りは無い。

第二百十七圖　白**一**の綽ねを顧みず黒**二**と切る變化――黒**十**を**い**に行びると黒**ろ**白**は**黒**に**等の嚴しさを減ずる事を思ふべきです。なほ隅の白は黒に**ほ**の點の不完全がある爲に無條件で活きて居ます。



（第二百十六圖）

（第二百十七圖）

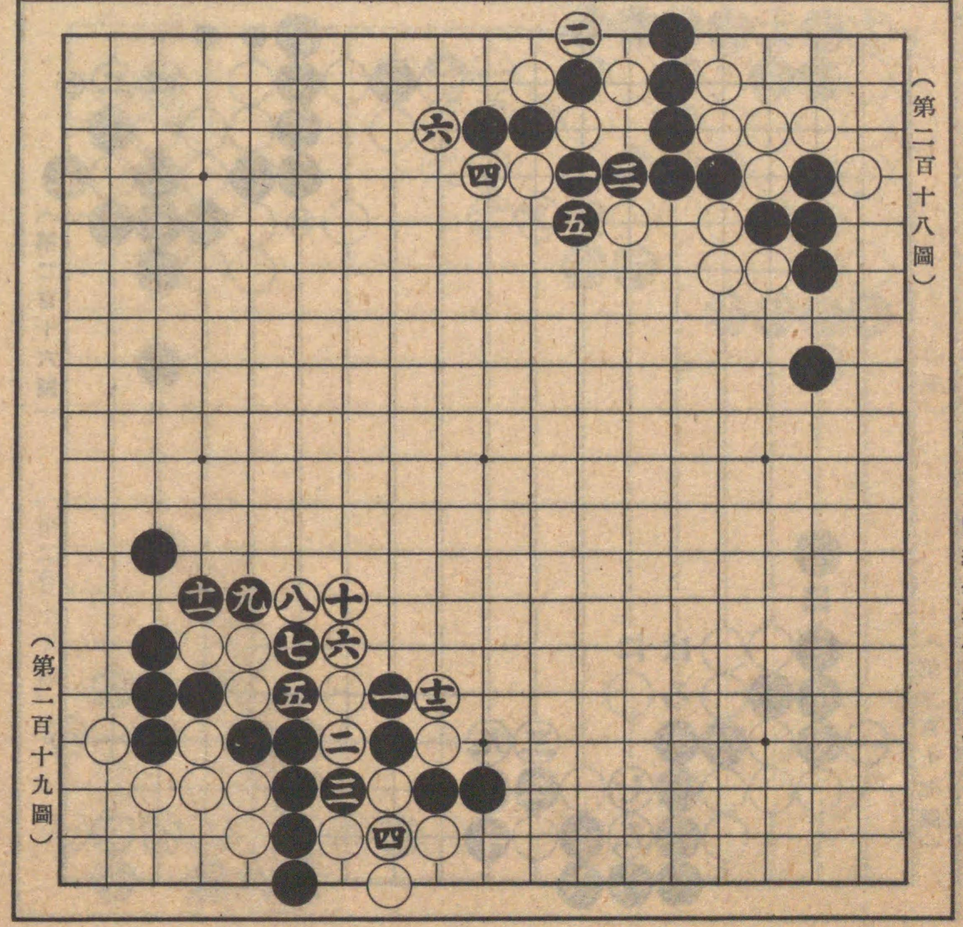
第二百十八圖　前圖に於ける黒**六**の手で本圖**一**と切れば以下白**六**迄と成る位のものですが、此の結果は第二百圖に比し、隅の白が治まつて居るだけに黒不利とせざるを得ません。

第二百十九圖　前圖に於ける黒**三**の手で本圖の如く**一**と出る手段は大いに有力です。

白**二**と遮つて抵抗すれば黒**三**白**四**に次いで黒**五**乃至白**十二**と言ふ振換りを見る可きは必定である。

今度は隅の白に對し黒から手段の餘地あり、無條件でない。白の外勢も然る事乍ら、白三子を打抜いた黒の安定と隅の白の不安とを考量して黒有利と謂ふ事が出來ます。

（第二百十八圖）



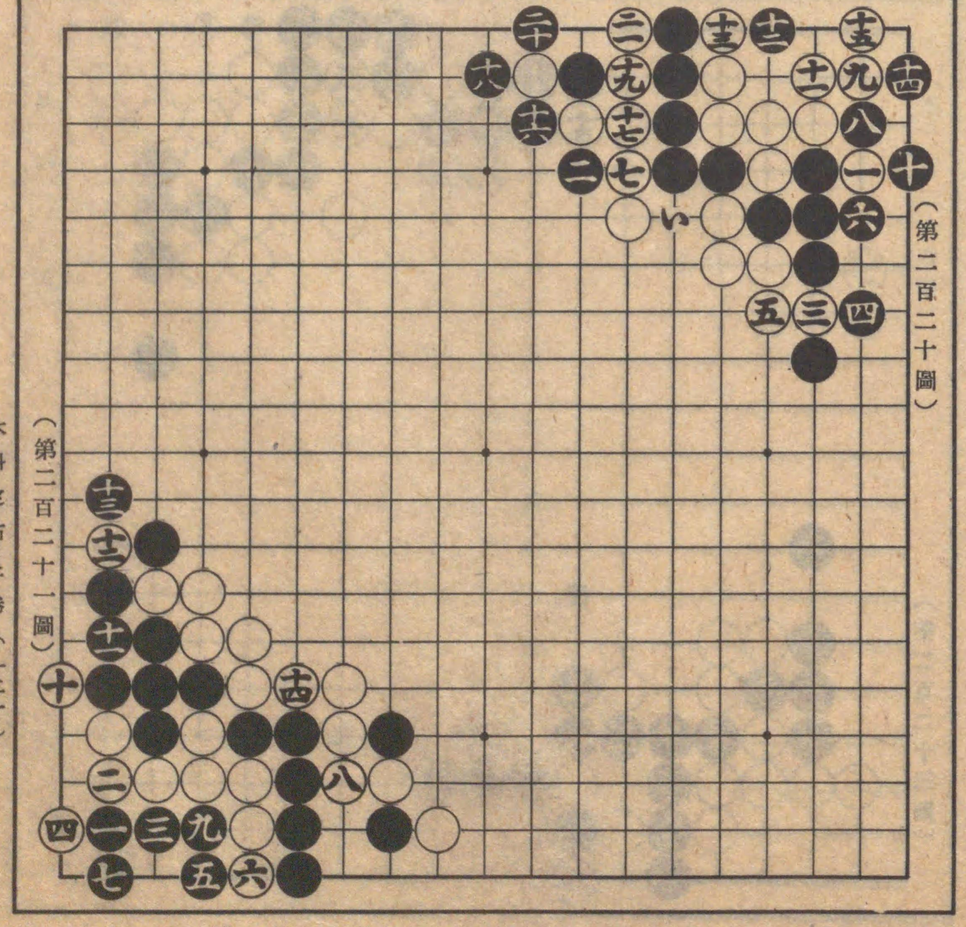
（第二百十九圖）

第二百二十圖　白**一**の綽に對し黒**二**と頂越すは如何――白も直ちに**七**と遮る事は出來ないので先づ**三**、**五**を利かせてから遮る。從つて黒は**八**の手で**十七**を切り又**い**から出る譯に行きません。

偖黒**八**、**十**と切提り**十四**の綽をも利かせた上で**十六**と切り白**二一**迄となる結果は兩方から黒が打つた樣でも白の實利が兎に角大きい。

第二百二十一圖　前圖に於ける黒**八**の手で斯く**一**と置くのは白**二**乃至**十四**となり、白**十**、**十二**等が働いて攻合ひは明瞭に黒の敗けであります。

前圖白**一**と綽ねる研究は以上で一段落とします。



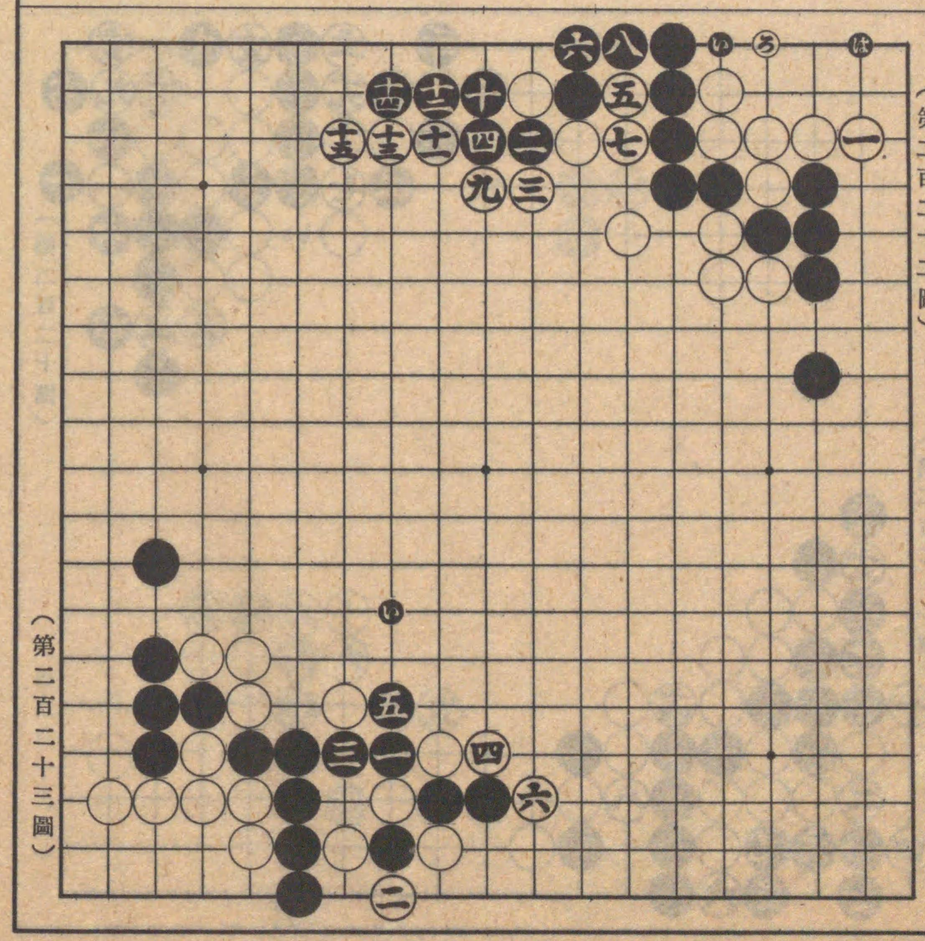
（第二百二十圖）

（第二百二十一圖）

第二百二十二圖　第百九十五圖に於ける黒三の下りに對し白一と單に隅を下つて見ます。黒は二と切る一手である。

白三乃至黒十は通型ですが、續いて白十一以下を想定し黒は一旦屈服に甘んじても、白の外部に缺陷がある外に、隅も黒い白ろ黒はと置いて劫です。要するに白一は不徹底であり好ましくありません。

第二百二十三圖　前圖に於ける黒六の手で斯く一と切れば白六迄、是も例の通型です。乃ち次いで黒い等を想定し隅の不完全は依然たる白の負擔でなければならぬ。本圖は然し前圖よりも黒として打悪い、卽ち難



（第二百二十二圖）

（第二百二十三圖）

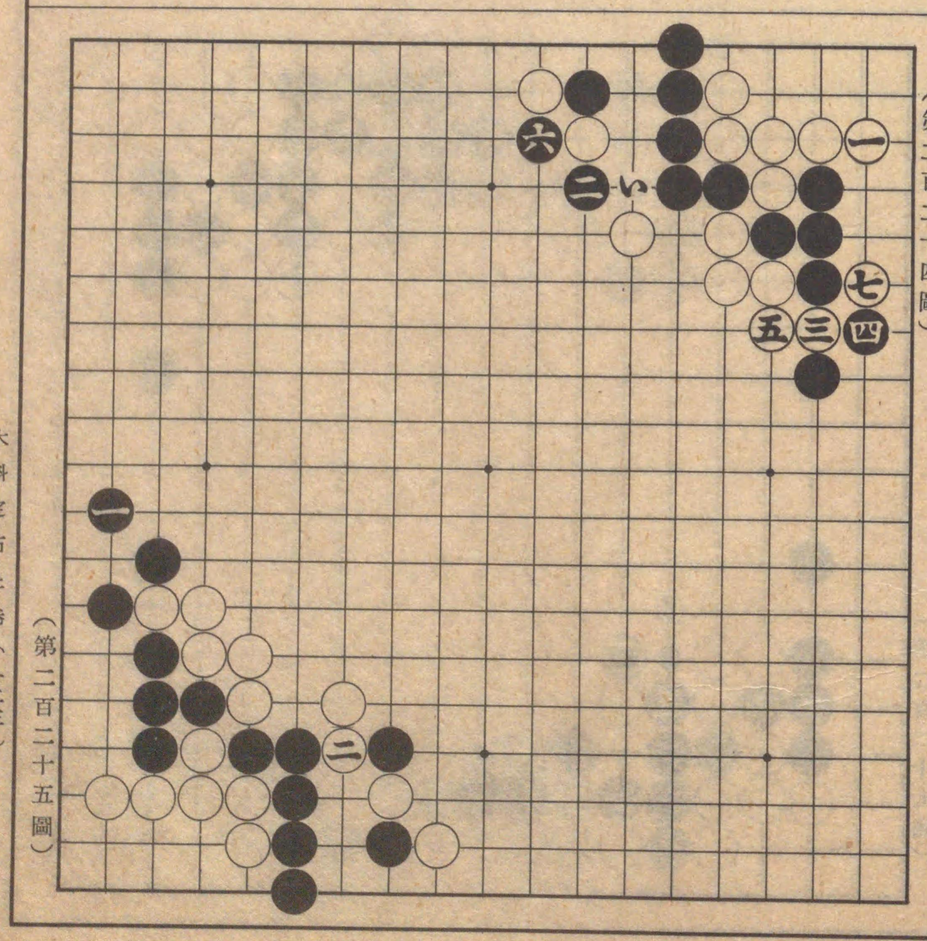
局面が想像されるのは黒五迄の型の不備に外ならない。

第二百二十四圖　白一の下りに對し黒二と頂越す不當を示す。

白が直にいと遮る事の出來ない理は既に再三指摘しました。そこで三及び五を先にして其處に勢力を加へ次にはいに遮らうとするのは當然に過ぎません。

仍つて黒も六と勢ひ切らざるを得ず、其の時白七と切るに及んで黒が窮するのである。

第二百二十五圖　前圖に於ける黒六の手で斯く一と掛粘ぎなどすれば忽ち白二と遮られ、前圖白一の意中を行く事となります。



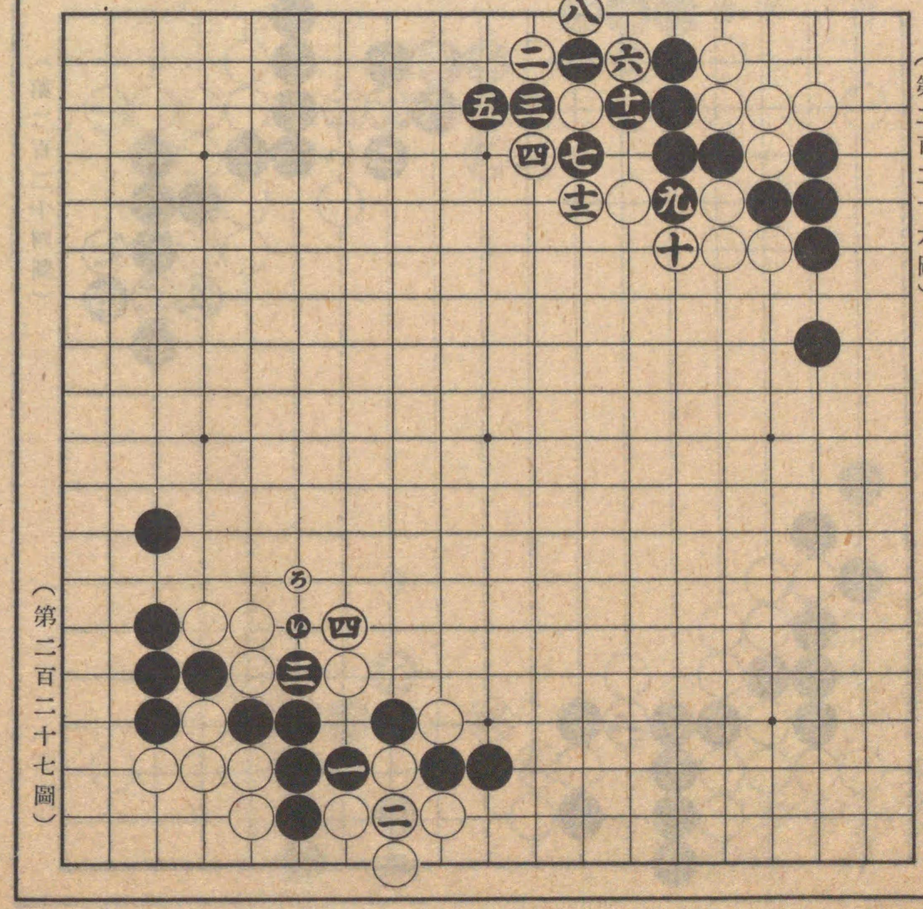
（第二百二十四圖）

（第二百二十五圖）

第二百二十六圖　遡つて黒一白二に次いで黒三と直ちに切れば如何と考へて見ます。

白四、六の手順が此の形に於いても正しい。黒九、十一と當て兎も角も劫爭です。此の九、十一を前後する譯に行かぬ事が次圖に示されます。白も十二の手で劫を粘いだりすると黒十二と出られる迄である。詰局双方劫爭に成算ありや否やの問題となる。本圖の如きは定石と觀らるべきでありません。

第二百二十七圖　前圖に於ける黒九の手で斯く一の當てを先にすると白二と粘がれ、黒三白四と弛められるので續く黒い白ろが成立します。



（第二百二十六圖）

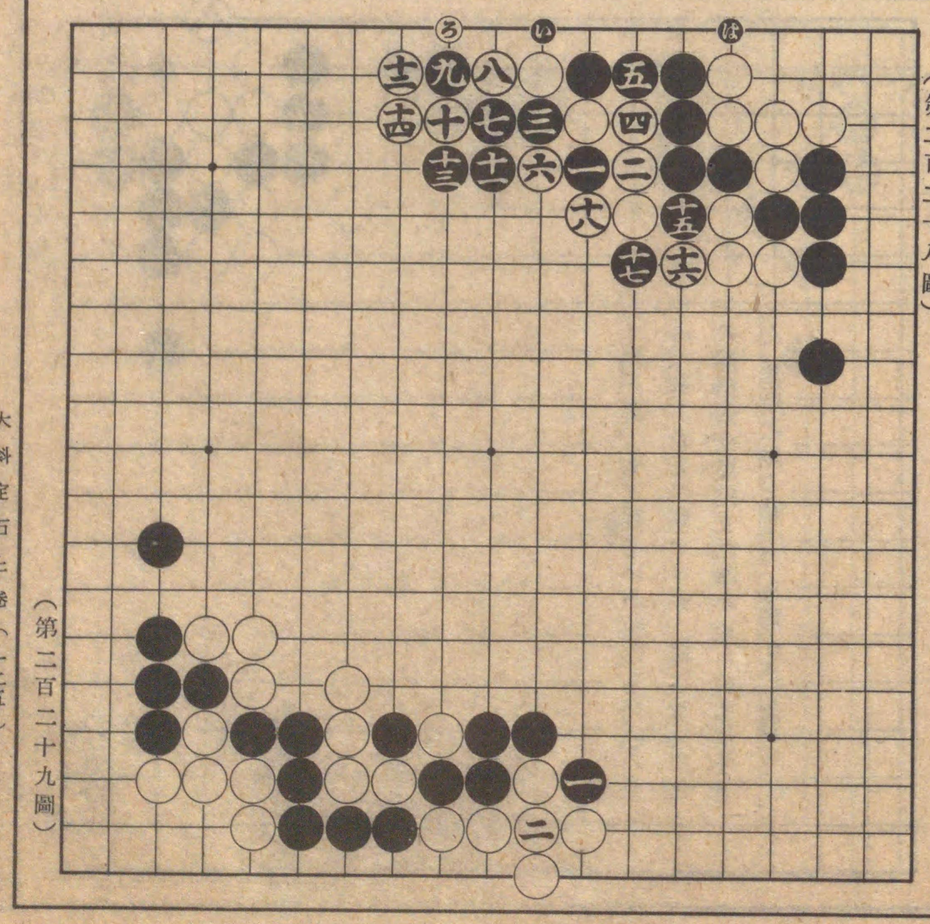
（第二百二十七圖）

第二百二十八圖　黒一と今度は直ちに頂越しを試みる。白二以下双方必然の運びです。

黒十三と曲つた時、白が十四と若し圖の如く粘ぎ、續く黒十五乃至白十八に次いで黒いと白ろ黒はと、其の綽ねでも利けば問題になりますが、夫れが利く筈は無い。

要するに白十八迄となつて黒五以下の七子には救援の途が無いのです。

第二百二十九圖　前圖白十四と粘ぐ手で直ちにろに提り、本圖黒一白二と粘いで辛抱して居られても、黒には續く打方がありません。前圖黒一は常に無理である。



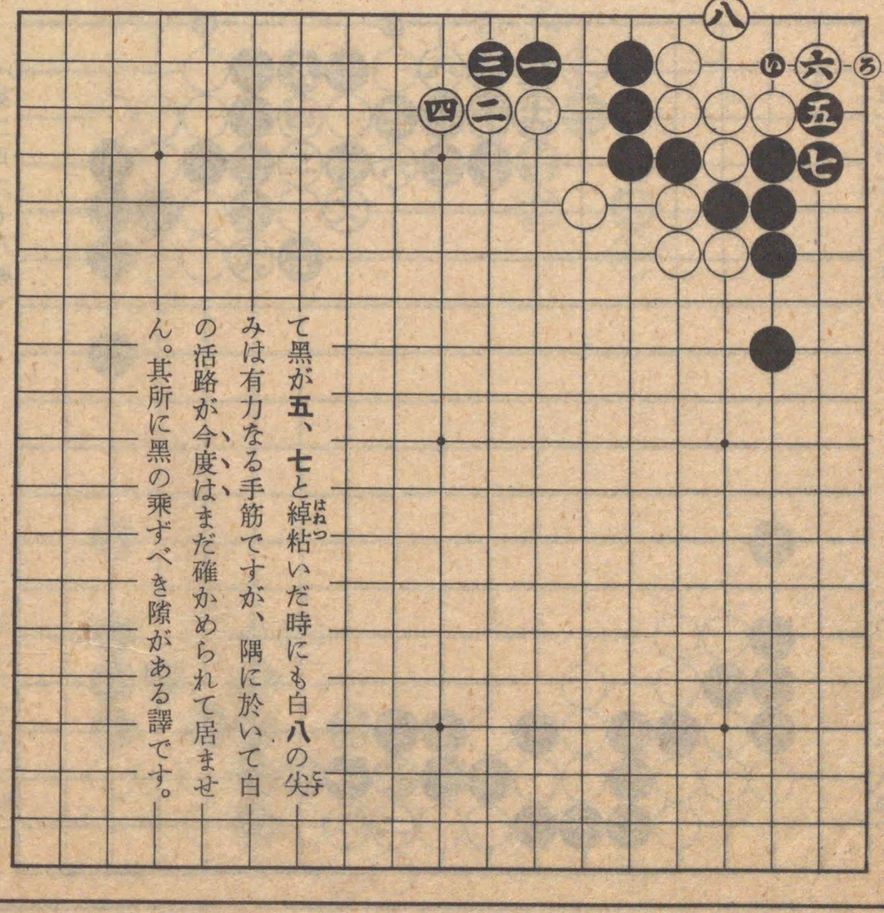
（第二百二十八圖）

（第二百二十九圖）

第二百三十圖　黒一に對し白二と引けば最も無事であります。

黒は更に三と押し、白四を餘義無からしめて乃で五、七の綽粘を行ふ順序です。此の手順を誤り綽粘を先にしてから一と頂けたり、若しくは綽粘を打つた上に白六、八に續いて黒い白ろ迄も交換してから一と頂けたりすれば、白は隅の活路が確かめられた今、何を苦しんで二の手で三に約へ紛糾を求める必要が有らうや必ず本圖二、四と引き黒を這はせて滿足すべき理である。

其の故に黒の方は逆に先づ一と頂けて白の樣子を見る意味が大切となつて來るのです。偖一、三を先にして黒が五、七と綽粘いだ時にも白八の尖みは有力なる手筋ですが、隅に於いて白の活路が今度はまだ確かめられて居ません。其所に黒の乘ずべき隙がある譯です。



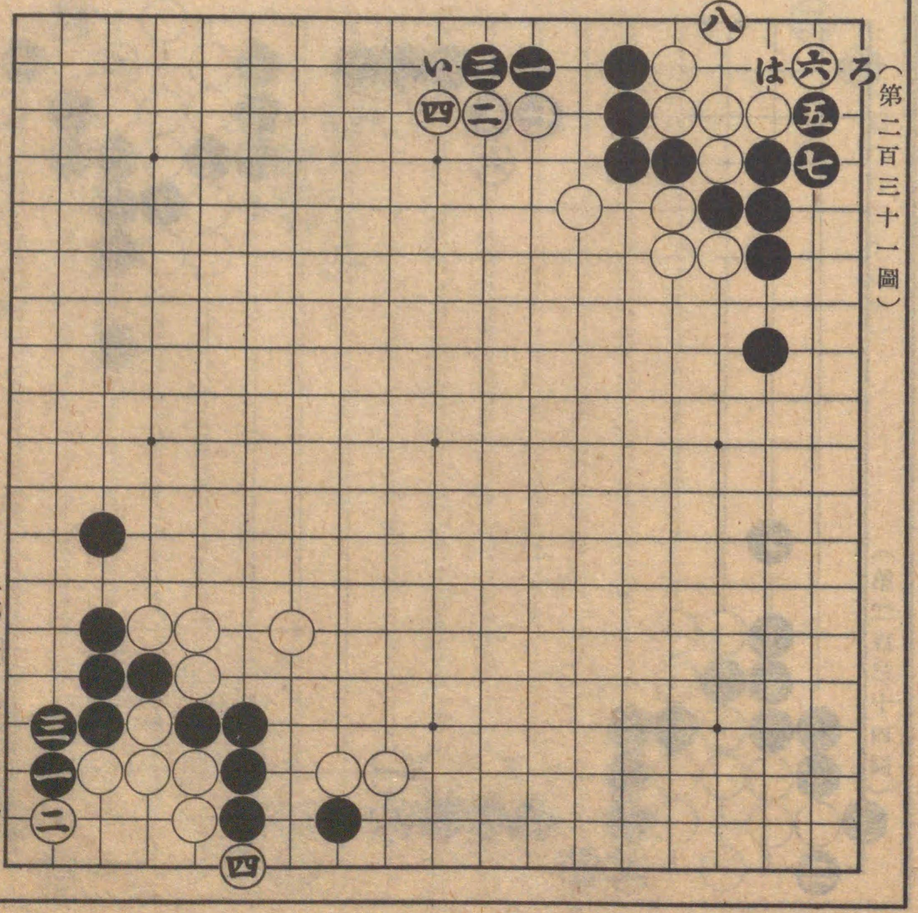
（第二百三十一圖）

第二百三十一圖　前圖を補足します。黒三にて五、七の綽粘を急ぐは猶次圖に於ける白四の綽ねが成立する惧れあるを免れません。必ず三と續いて押す可きである。

白四にていを約へる無理は第二百四十二圖に示されます。

白八にていと約へたり又ろと下るなどは何れも黒に八の點に置かれ、攻合ひは白が足りない。

白八の儘では活きて居ないものを黒が玆ではに切りを入れ白ろと交換して態々白を活かせる愚を思へば、五、七の綽粘ぎを先にし黒は白ろ迄も交換してから黒一と頂ける不合理も自明でありませう。



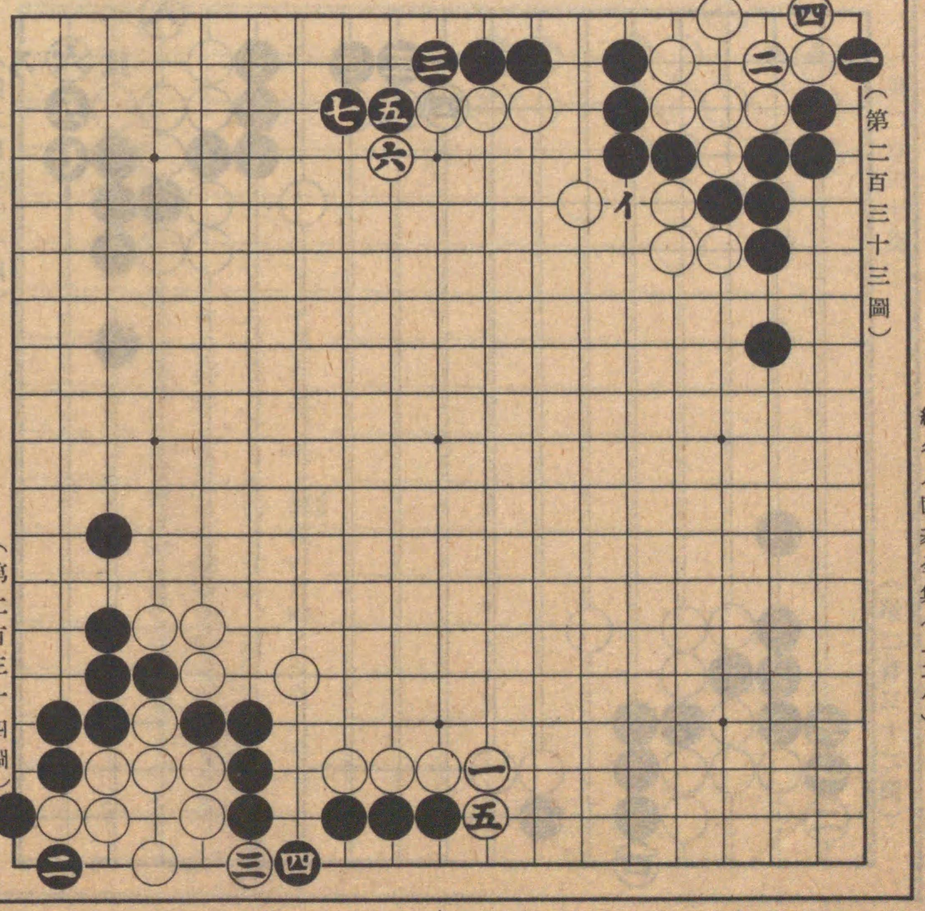
（第二百三十二圖）

第二百三十三圖　前々圖に於ける白八に續いて本圖の如く黑一と綽ね三と泳ぎます。但し綽ねずに三と直ちに泳いでも宜しい。

白四と隅は活きても黑に五を綽上げられる事になつては得失は自ら分明であります。何よりも白はイの缺陷を先づ守らねばならぬ。

第二百三十四圖　前圖の四と下つて活きる手で本圖の如く更に一と行びて打つ。此の時黑が隅を二と綽ねて取り掛けに行けば白は先づ三と綽ね劫爭の意味を殘して五と約へます。

綽ねずに三の手で單に五を約へると黑三と下られ隅は無條件死に歸する。本圖は黑が面白くありません。



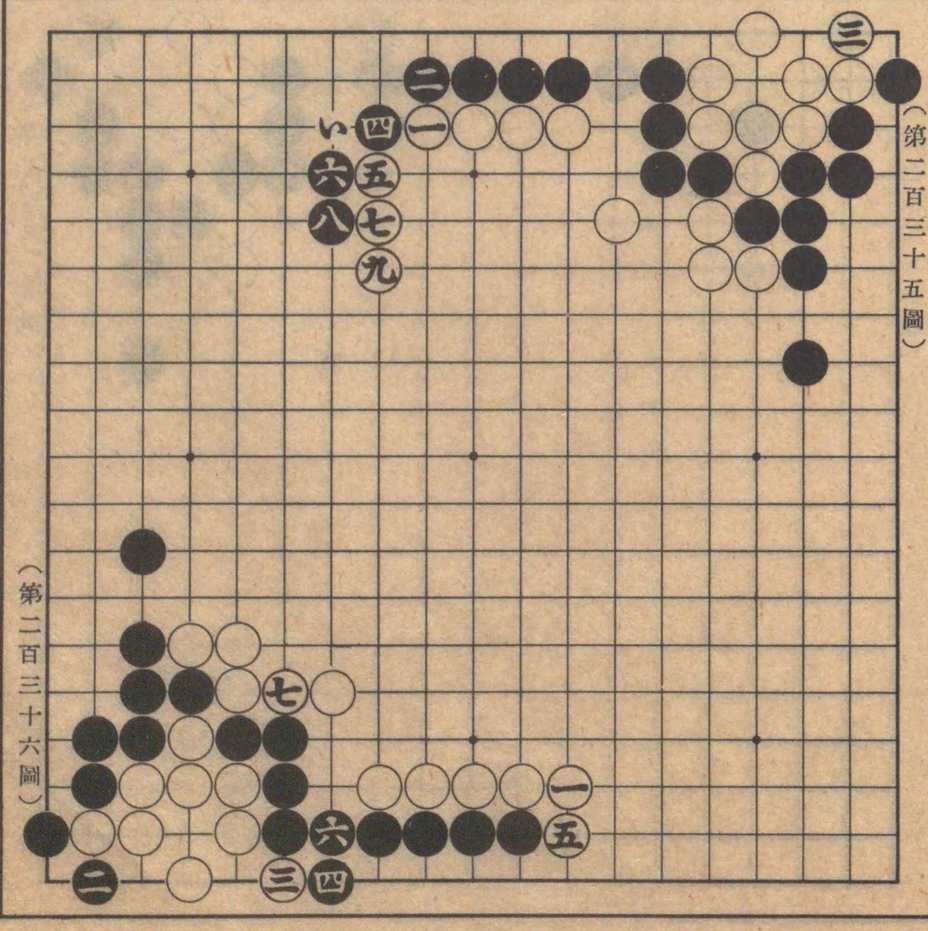
（第二百三十三圖）

（第二百三十四圖）

第二百三十五圖　隅が無條件でなくては滿足しないとすれば、黑は猶も二と泳ぐ外無い。乃で白三と活きた時に四と綽上げます。尤も左上隅方面の配置如何に依る所多い事ではあるが、其の方面には一般に黑の勢力が想定されるので圖の如く四と二段に綽ね得るものと觀られる。

然らざれば黑は六を以ていと行びて置く迄です。

第二百三十六圖　前圖に於ける三の手で白が更に本圖の如く一と行びます。黑二と綽ねて取掛けに行けば白は三、五と約へ、寄劫ではあるけれど兎も角も無條件でなく、中腹の厚みも大きいので白は滿足します。



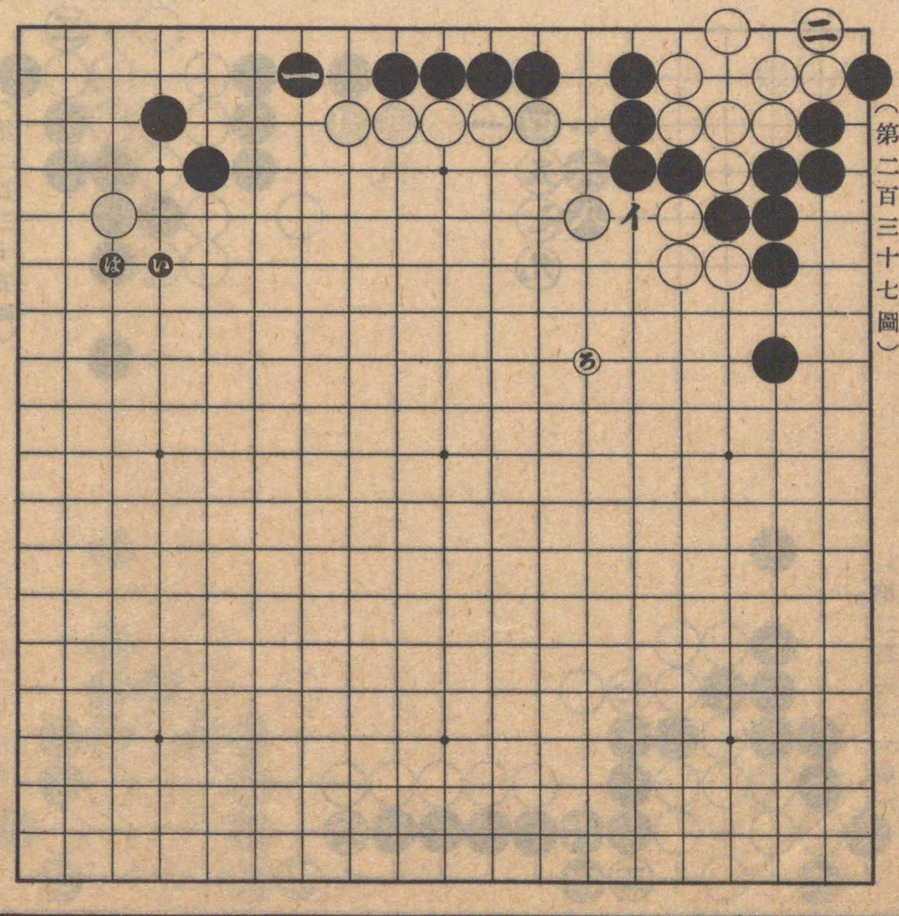
（第二百三十五圖）

（第二百三十六圖）

第二百三十七圖　黒が飽く迄も隅の白を屠る事を好まぬとすれば左上隅に於ける圖の配置を想定し黒一と整る位のものである。

然る上は白も二と補ひ隅を活きて置く外ありません。さて黒㋑と掛けた時、イの缺陷に備へて白㋺と守れば黒㋑の約込みとなるものとして先づ互角の勢ひと謂ふべきです。互角では第百五十三圖に於ける白一、三の手段が少くとも成功したものとは觀られない理である。

左上隅に於ける本圖の想定は抑々第四十六圖の黒一と行出すに當つて左上隅方面に黒の勢力ある事を前提とする故決して不當ではありません。

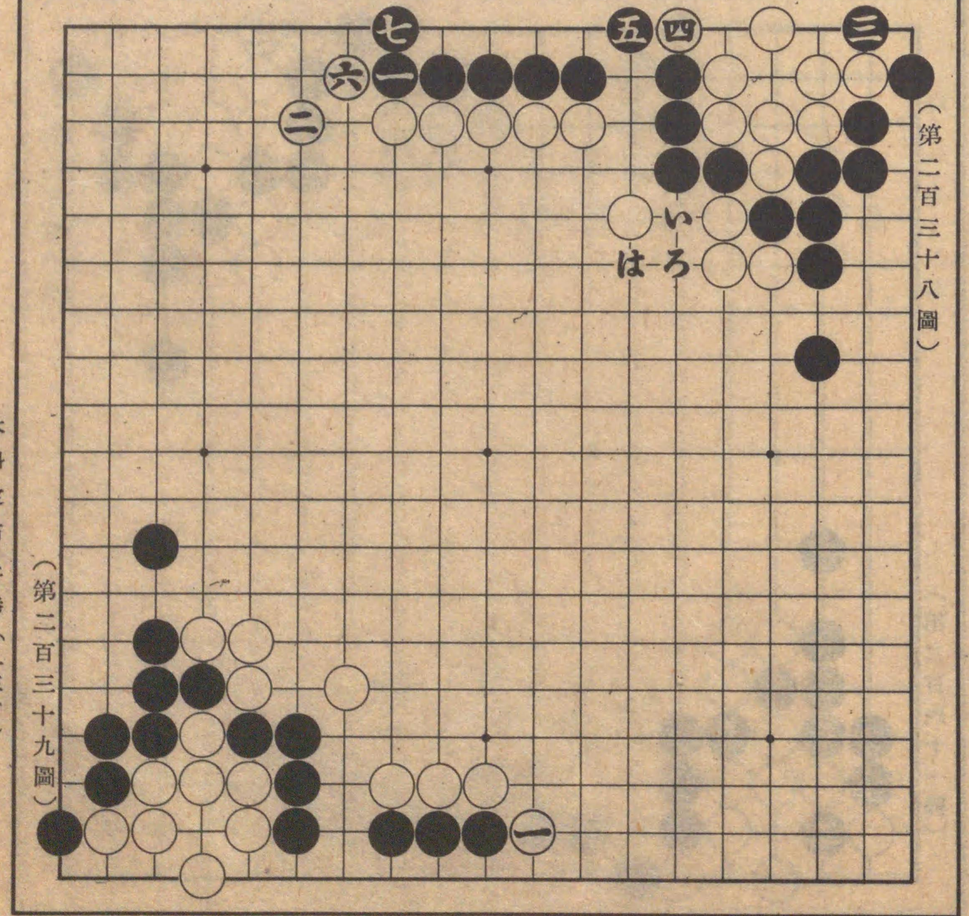


（第二百三十七圖）

第二百三十八圖　前圖に於ける黒一と飛ぶ手で本圖の如く一と猶も泳いだ時、白が中腹の勢力を主として二と飛ぶか、又此の手で三と補つて隅を活きるかは部分的には定められぬ事であります。

白四黒五の交換は勿論黒**い**白**ろ**黒**は**の出切りの嚴しさを緩和したのであり黒七迄、隅の白を屠る事となれば兎も角も黒に不滿の無い姿であると言ひ得ます。

第二百三十九圖　右下隅方面に何れの配置も無く、或は白の勢力のみが在る樣な場合には第二百三十五圖に於ける白一の手で本圖の如く急に約へる事が可能である。遡つて第百



（第二百三十八圖）

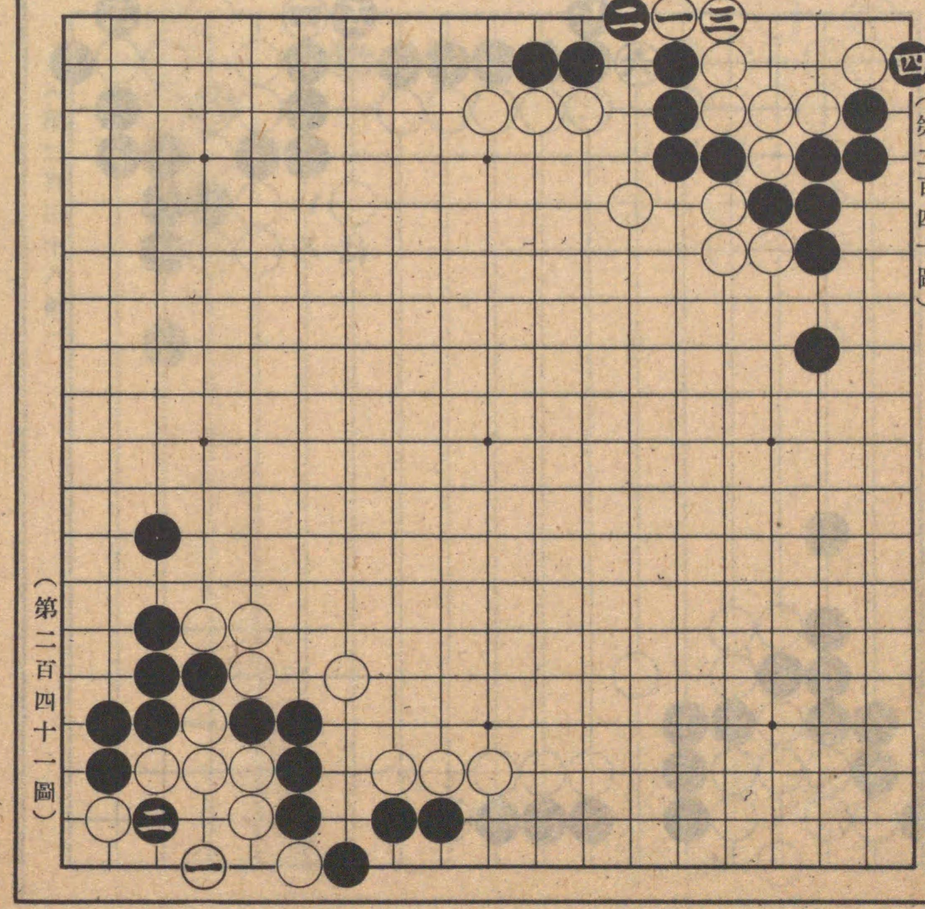
（第二百三十九圖）

六十圖に於ける黒一の下りが問題とならざるを得ません。此處に至つて後の第二百五十圖に於ける黒一、三と綽粘ぐ型に入つて行かねばならぬのは蓋し當然の順序であります。

なほ殘説を補つて置く——

第二百四十圖　第二百三十一圖に於ける白八の手で本圖の如く一、三と綽粘げば黒四と綽ねられ、白は忽ち窮して終ふのです。

第二百四十一圖　前圖に於ける白三の手で斯く一と掛粘ぐのも、一見第二百三十四圖等と類似するやうですが、實は黒二と切られる烈しい筋があるので白には策を施す餘裕がありません。



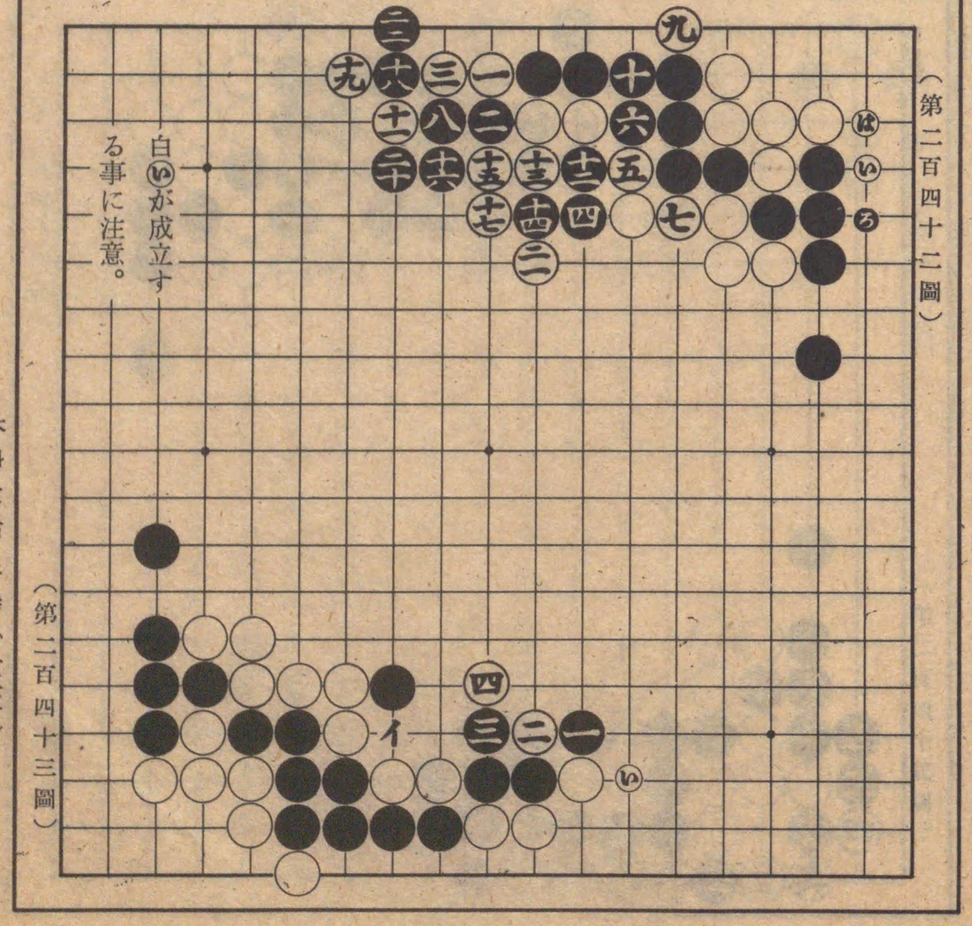
（第二百四十一圖）

第二百四十二圖　第二百三十一圖に於ける白四の手で本圖の如く一と急に約へる無理を明らかにする。黒は二と切つて四と頂ける筋である。

白五乃至十九は双方必然の運びと觀るべく、黒二十は單に二二と下る事も出來ます。

白二一は勿論十三以下の五子の征を防いだのですが、此の征關係の黒に不利なる事迄萬一にも想定するのだと大變である。黒二二に續いて白ろ黒ろ白はと綽粘ぐ位のもので黒が悪くありません。

第二百四十三圖　前圖黒十二の手で本圖一と輕卒に綽ねると白二、四の手筋に依りイの缺陷を凌いでから



（第二百四十二圖）

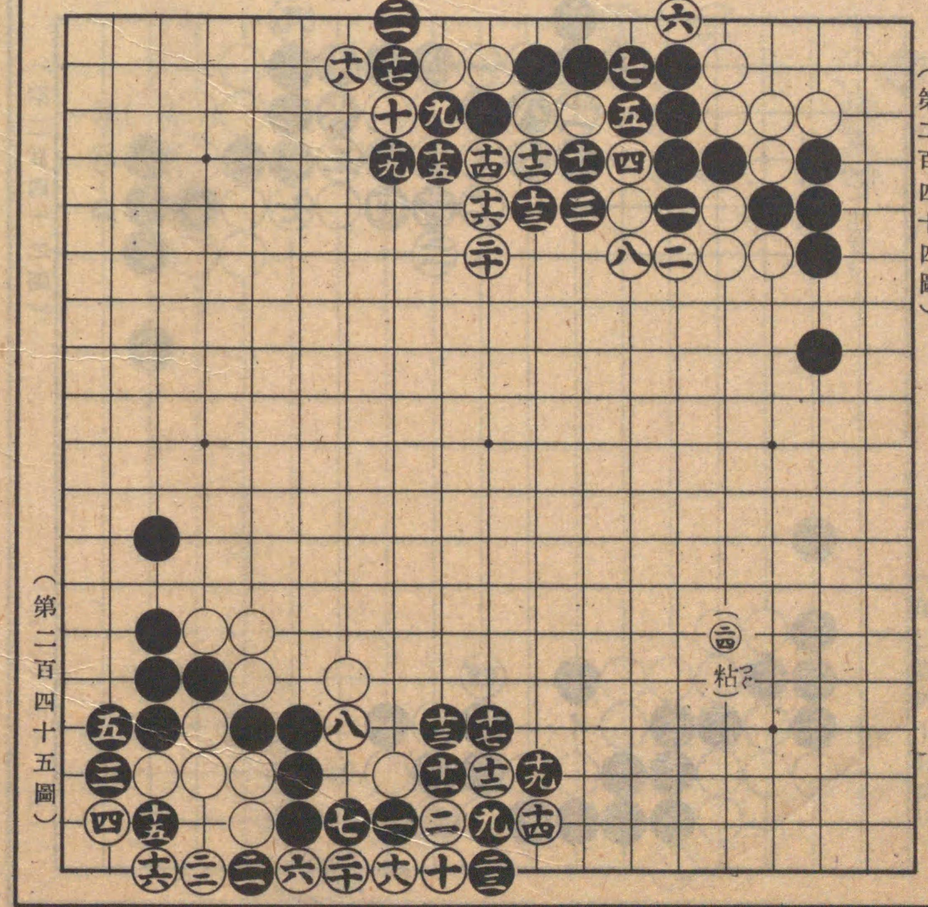
白いが成立する事に注意。

（第二百四十三圖）

第二百四十四圖　前々圖に於ける黒**四**の手で本圖の如く先づ**一**と出て後に**三**と頂けても黒は良いのです。

卽ち白**四**乃至黒**二一**となる結果は前々圖と似たものであるが、白**二十**は同圖の**二一**よりも幾分働いて居る事だけが認められます。

第二百四十五圖　本圖は第二百三十二圖の補說と觀るべく、卽ち同圖に於ける白**四**が本圖の**六**に相當します。又遡れば第百六十七圖に於ける黒**八**の變化に外なりません。黒**十五**と玆で切りを入れるのは働いた筋ではある。白**十八**の餘義無き理を、第百六十七圖と比較して次圖に於いて確かむべく、黒**一三**迄となれば六子



（第二百四十四圖）

（第二百四十五圖）

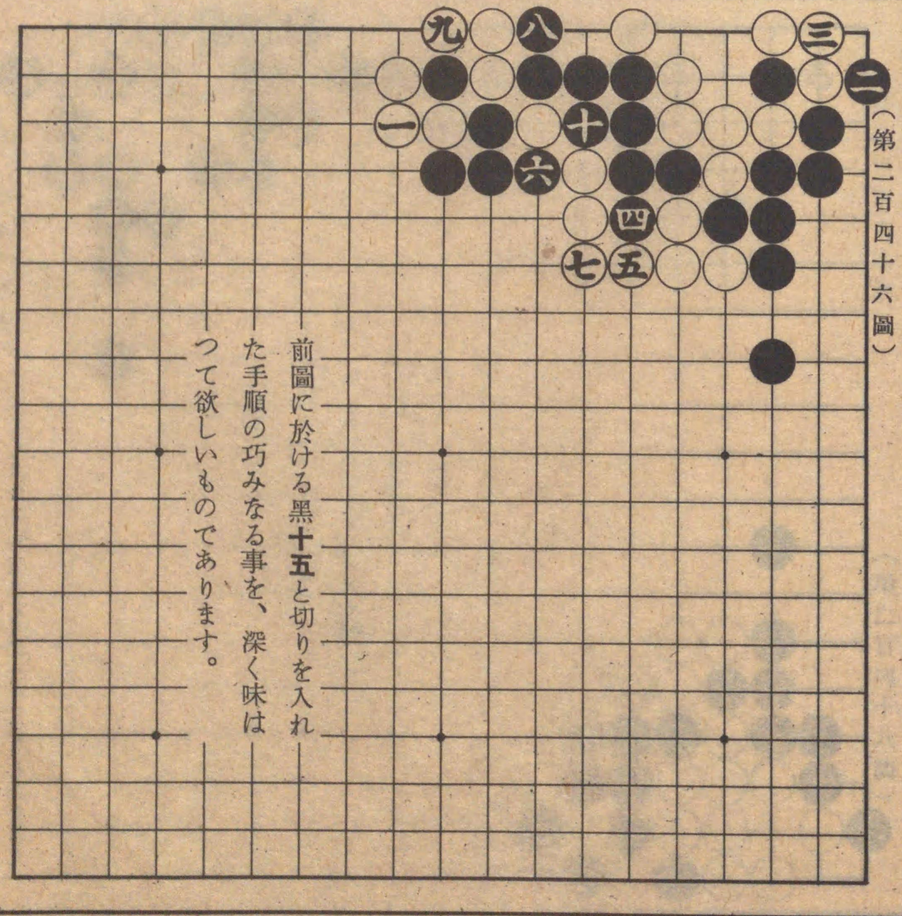
を捨てゝ黒に悔い無き姿であります。

黒**三**、**五**の可なるに非ず白**二**の約へに難點の存するものと解するが眞であらう。

第二百四十六圖　卽ち前圖に於ける白**十八**の手で斯く**一**と粘げば黒は先づ**二**の綽ねを利かせ白**三**を餘義無からしめてから**四**、**六**と出て當てる。

白**七**にて**十**を粘ぎ黒**七**と切られての征關係が白に有利なる點までも考慮に入れ、若しくは主張するが如きは却つて研究の容易を妨げるに過ぎず無要の煩ひであります。黒**十**迄の結果、隅の白に活路の無い所、第百六十七圖との差は大き過ぎる。

白は前圖に從はざるを得ません。



（第二百四十六圖）

前圖に於ける黒**十五**と切りを入れた手順の巧みなる事を、深く味はつて欲しいものであります。

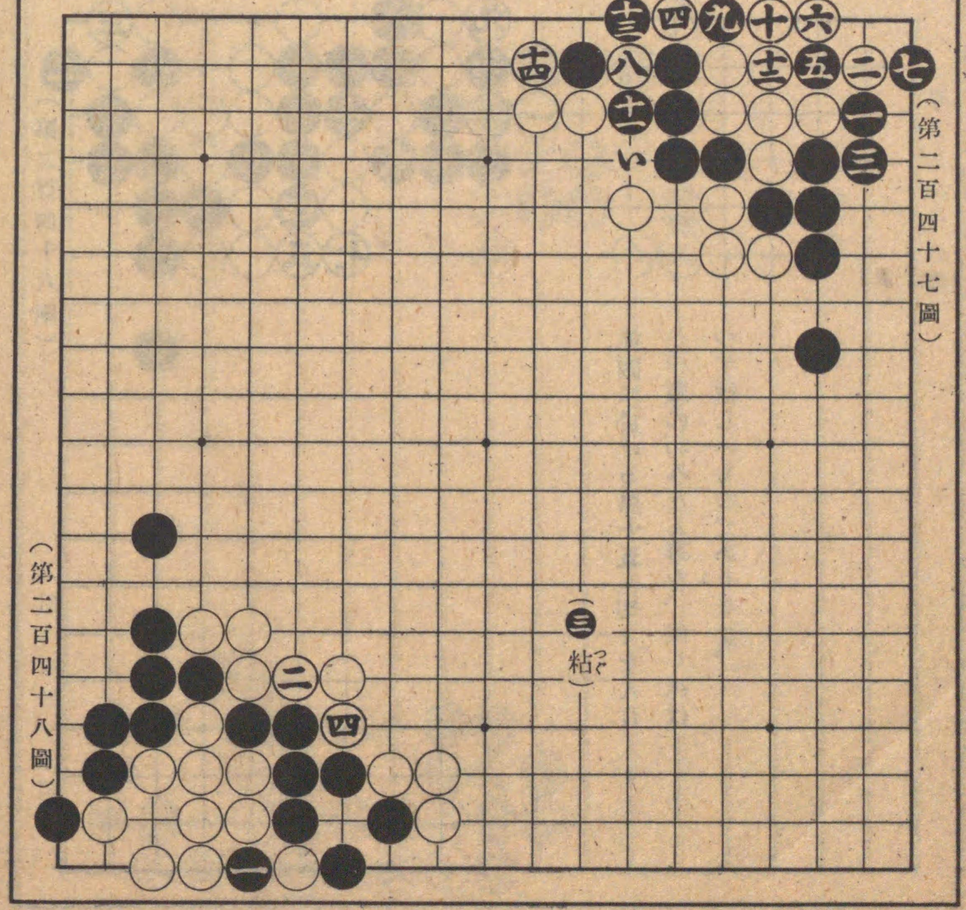
第二百四十七圖　第二百三十二圖に於ける白**四**に續く變化であり從つて前々圖に於ける黒**七**の別法に外なりません。

斯く**五**と切つて**七**と當てる事を急ぐと隅に構はず白**八**と綽込まれる。黒**九**、**十一**は肝要なる手順です。**十一**を先にすると白い黒**十三**白**九**と粘がれて終ふ。

白**十二**と提らざるを得ぬので黒**十三**百**十四**に續いて次圖の劫である。

第二百四十八圖　部分的には黒**一**乃至白**四**となる位のものであります。

隅の白を屠るのに黒は劫爭に依る外無く、何よりも白の外勢が強大なので黒の不利疑ひありません。



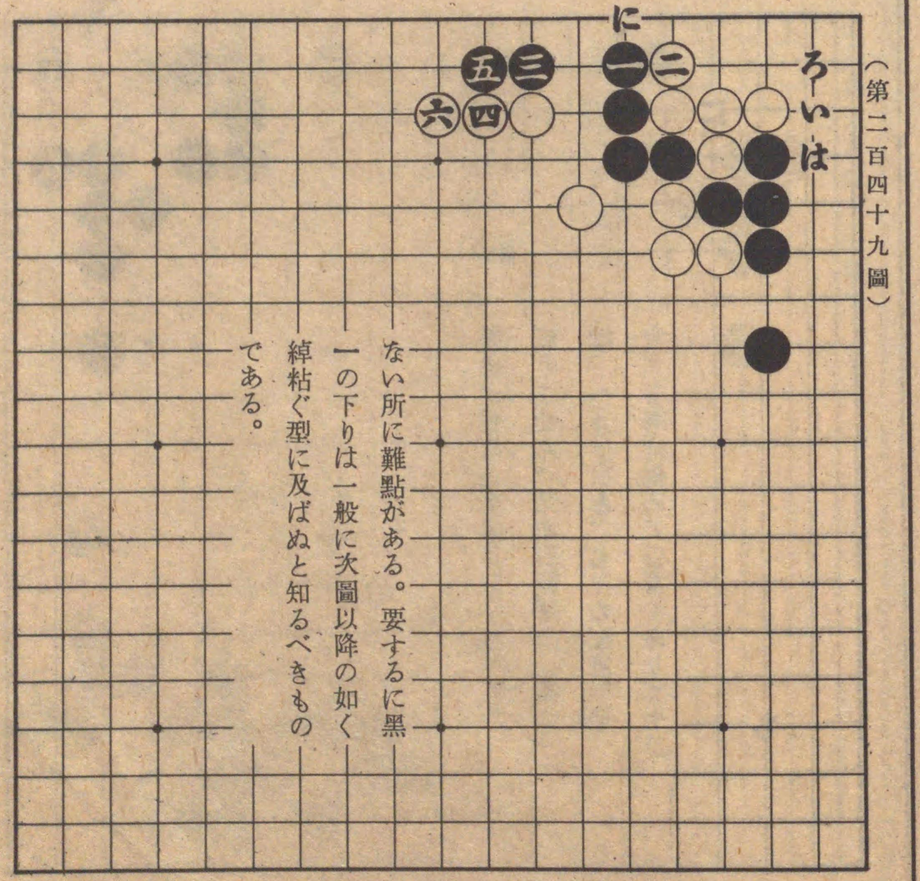
第二百四十九圖　黒**一**と下る型を終つて此の手で**二**に綽ねる次圖以降の型に入るに際し要點だけを復習して置きたい。

黒は先づ**三**と頂け白**四**黒**五**と泳いでから黒い白ろ黒**は**と綽粘ぐを正しき手順とし、綽粘を先にしては白**に**と綽ねられてそれ迄である。

黒**三**に對し白**四**の手で直ちに**五**と約へるは白が稍無理である。

白**四**、**六**と引いた後の黒い白ろ黒**は**に對し隅の白を捨てゝ打つか否か又黒もそれを屠る可きか否か、周圍の狀勢に依る事が多い。

黒は**三**の手で**に**に下る有力なる筋もあるが、必ずしも簡明とは言はれない所に難點がある。要するに黒**一**の下りは一般に次圖以降の如く綽粘ぐ型に及ばぬと知るべきものである。



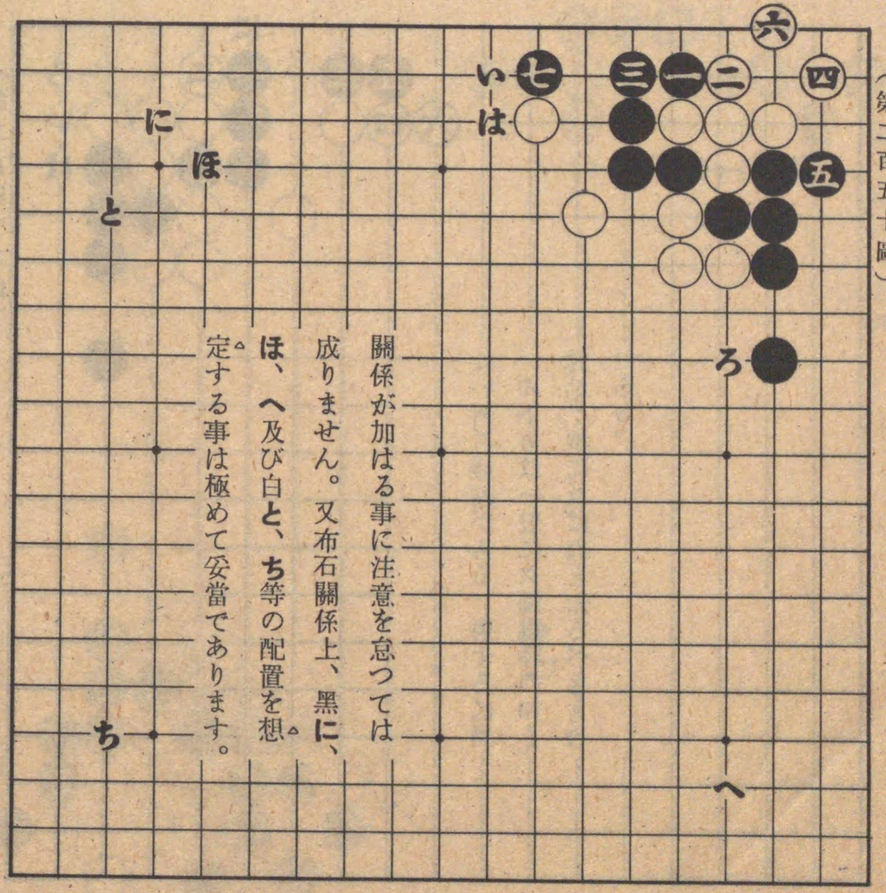
第二百五十圖　黒一、三と綽粘ぐ型に入ります。其の變化は最も複雜を極めるのです。今便宜の爲に今後の研究の大綱を先に示します。

黒七に次いで白いと直に約へるのは白が無理である。

白ろの頂を先にしてからいと約へる手段がある。それには黒が本圖一以下を捨てる簡便法があるが、然し必ずしも捨てずとも宜しい。

ろを先にしていと約へるも結局白が良くないとすれば殘るは白はと引く外ない。而して此の最後の型は一般に黒に不利なる場合が考へられぬ。

以上の順序で說いて行く方針であります。各種の變化中、黒の追ふ征關係が加はる事に注意を忘つては成りません。又布石關係上、黒に、ほ、へ及び白と、ち等の配置を想定する事は極めて妥當であります。

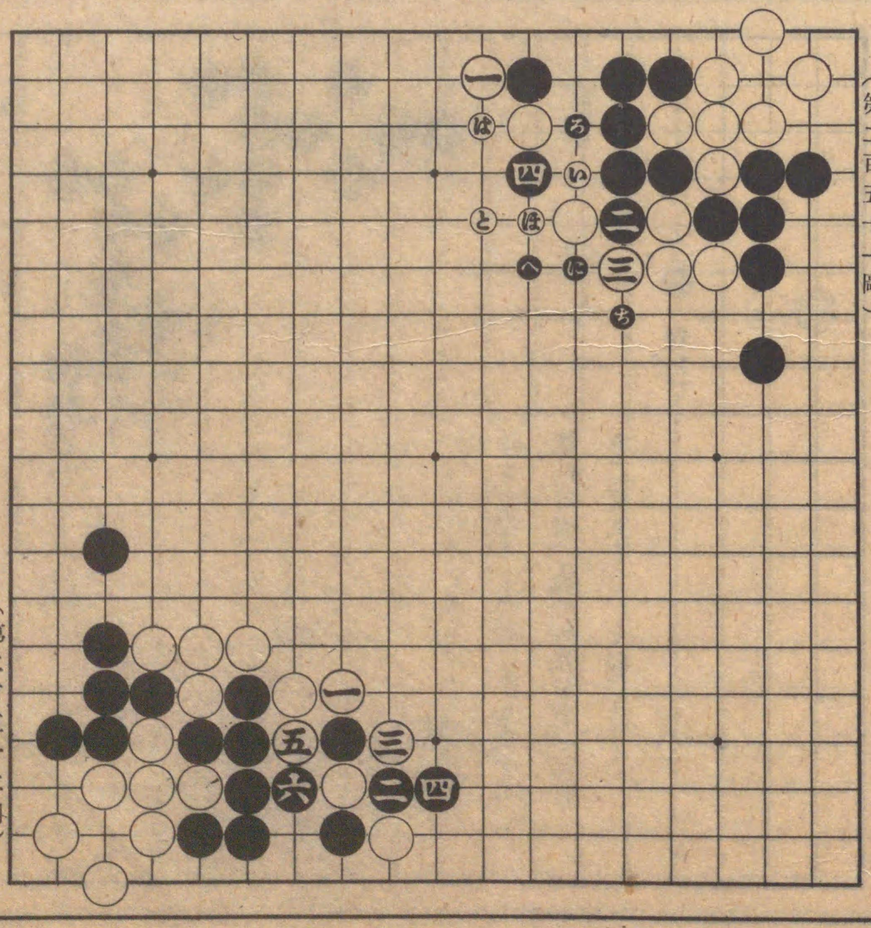


（第二百五十一圖）

第二百五十一圖　前圖黒七に對し白一と直接約へた時は黒二白三黒四と頂越して宜しい。次いで白若しいと遮るならば黒ろ以下符號の順序を逐つてこれは問題になりません。

黒四に續いて次圖白一と押す變化が有り、相當多岐です。なほ後の第二百六十圖以降參照。

第二百五十二圖　黒は二と切り四と行出すに限る。切らずに三と迂濶に出たりすると第二百五十九圖に示される如く白の術中に陷るのです。其の點、後の第三百十二圖との混同を嚴に戒めます。白五黒六と當てゝ劫爭ですが、これは少しも面倒なものでない。續い次圖に示します。



（第二百五十一圖）

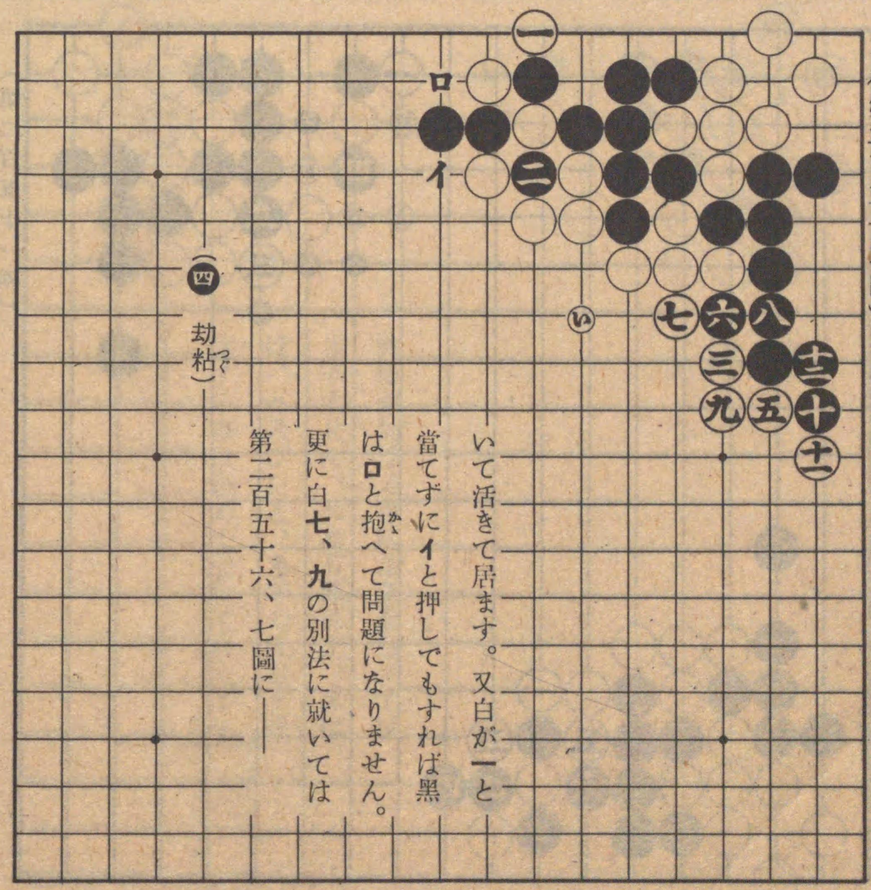
（第二百五十二圖）

第二百五十三圖　白としては此處で一と當て、何とか劫爭を利して解決を求めなければならぬ形であります。二の點に劫を粘ぐなどは最初の方針を悉く無效ならしめるものであり、粘ぐ姿自身忍びぬ愚觀を呈する。

さて白一黑二と提られ早速劫立の問題ですが、先づ白三と頂ければ黑は構はず四の手で劫を粘いで終ひます。續いて白五乃至黑十二の運びは必然でありますが、其の時白はいと補つて一路上の斷點に備へる位のものであらう。所で第二百五十圖に於いて想定した布陣に在つては黑は右下隅を締つて充分の姿勢であります。

なほ本圖六以下の黑は勿論手を抜いて活きて居ます。又白が一と當てずにイと押しでもすれば黑はロと抱へて問題になりません。

更に白七、九の別法に就いては第二百五十六、七圖に——

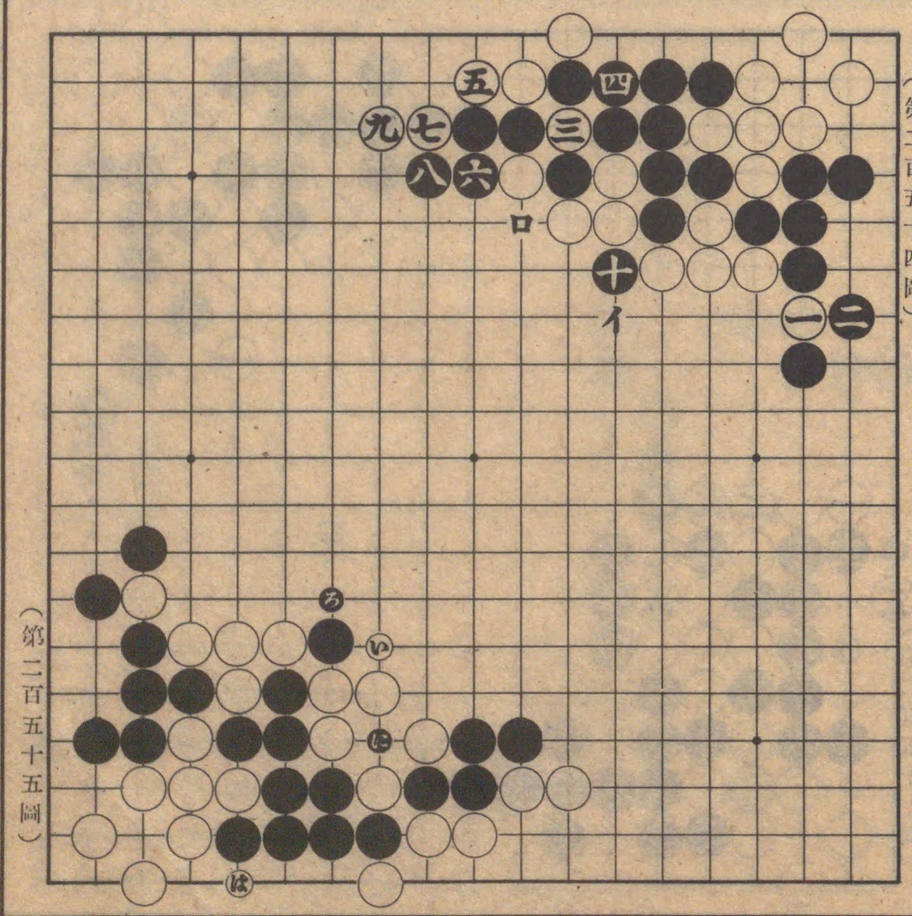


（第二百五十三圖）

第二百五十四圖　前圖白三の手で本圖の如く一と綽込めば此の劫立は嚴しいから黑も二と受けるべく、反面、此の交換それ自身が黑に非常に有利なものでもある事を思ふ。

白三黑四と屈服を餘義無くさせられましたが白五黑六と曲つて白には劫立が有りません。次いで白七と若し綽ねて來たら黑は先づ劫を提つて然るべきであるが、提らずに八と曲り十と切るも頗る簡明——續いて白イ黑ロ、の外に次圖がありまず。

第二百五十五圖　前圖黑十に對し白いに黑ろ白はと取掛けに來ても黑はにと劫を提つて白に劫立が無いからそれ迄である。實戰に於いても此の



（第二百五十四圖）
（第二百五十五圖）

劫爭を黒として恐れる理由は絕無とす可きであります。

第二百五十六圖　第二百五十三圖に於ける白**七**の手で本圖の如く**一**と引けば黒は**二**、**四**の儘手を抜いて他に轉ずべく、紛れる所が少しもありません。

第二百五十七圖　同じく第二百五十三圖白**九**の手を變へて本圖の如く**一**と下つて見ます。

黒**二**、**四**と切つて左方の八子を捨てる方針が簡明である。黒**六**と掛け**八**、**十**と絞つた形は痛快至極です。黒**十二**に對し白は**十三**と置く筋に限りますが、其の時黒い白ろと交換して黒はと行び、續いて次圖である。

（第二百五十六圖）

（第二百五十七圖）

第二百五十八圖　白は此處で何は措いても先づいと拆かねばなりません。其の時黒ろ乃至白とを交換すると五目點の形に外側の一手で、此の黒を屠るには白は合計九手を要する理です。但し黒はろ以下を勿論今直に打つには及ばぬ。九手と言ふ事を示した迄である。

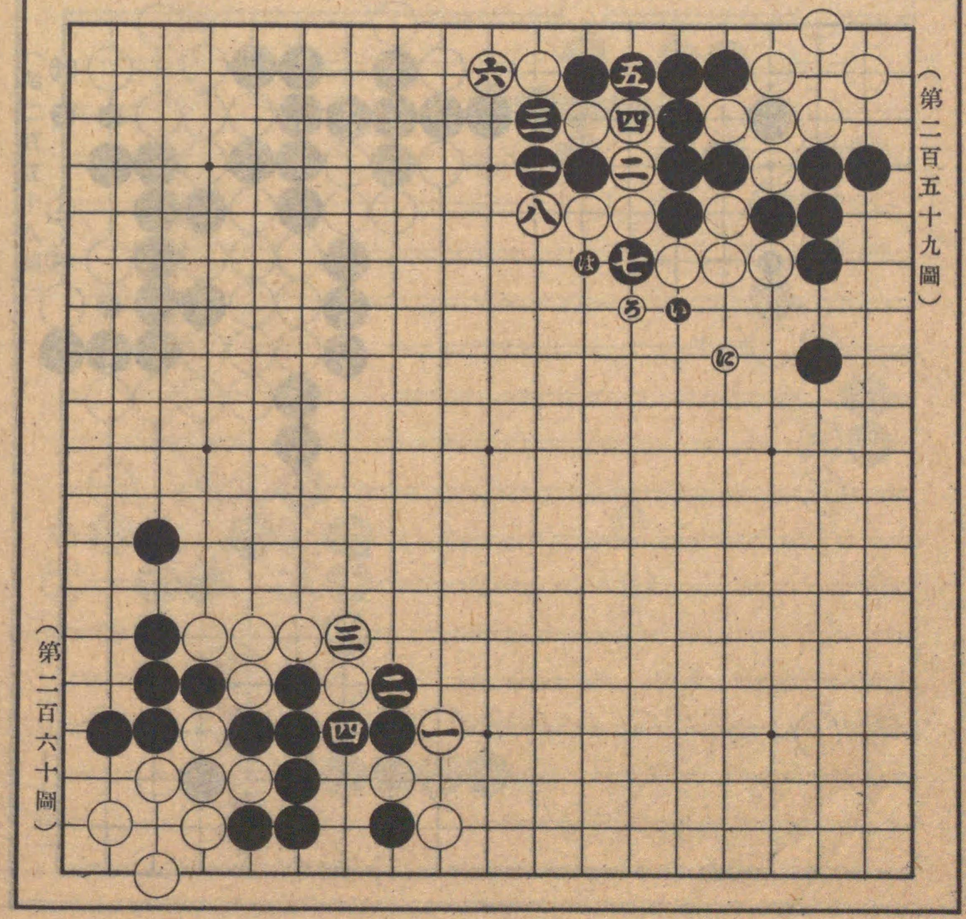
さて白いに對し想定の配置から黒ちと詰めて白りを促し、轉じて黒ぬと掛ける事になる。白の得たる四十目弱の實利に比較し、此の黒の厚壯にして雄大を極めた構圖は優劣を言ふ迄もありません。前述の九手が右邊の白の行動の自由を相當牽制して居る關係にも想到すべきである。

（第二百五十八圖）

第二百五十九圖　第二百五十二圖に於ける黒二の手で本圖の如く一と輕卒に行出したりしては大變であり忽ち黒の收拾し得ない狀態に導かれて終ふのです。

卽ち黒一白二と遮り黒三乃至白八でそれ迄である。續いて黒ぬと綽ねても白ろ及びにを以て凌がれる點は第二百五十一圖との差に心すべく、根本的には後の第三百十二圖との混同を避けねばなりません。

第二百六十圖　第二百五十一圖に於ける黒四に續いて本圖の如く白一と若し綽ねれば黒は二、四と平易に報いて逸出する。これは念の爲に掲げました。



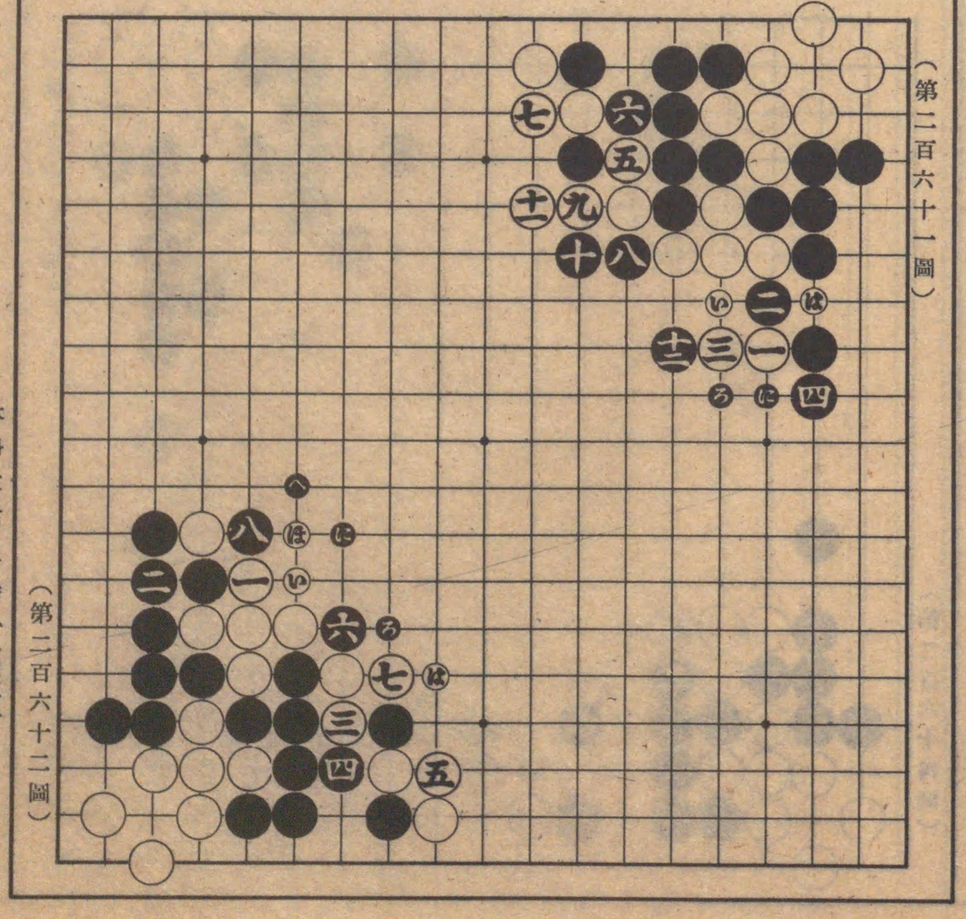
（第二百五十九圖）

（第二百六十圖）

第二百六十一圖　第二百五十一圖に於ける黒四に續いて本圖の如く一と頂け、黒の應手を問ふと共に其處に勢力を加へて置いてから矢張り五と遮らうと企てれば如何——黒は二と綽込むに限ります。白三乃至十一に次いで黒十二と頂け、以下符號の示す順序にて押潰して終ふ。

初め白一に對し黒二と綽込まずに外からへと綽ねる事も出來ますが稍事を好むものと謂ふべく、且つ其の變化は後の第二百九十六圖に外ならぬので此處には省略する。

第二百六十二圖　前圖白三の變化です。黒八に續いて符號の順序に依り簡單な征である。

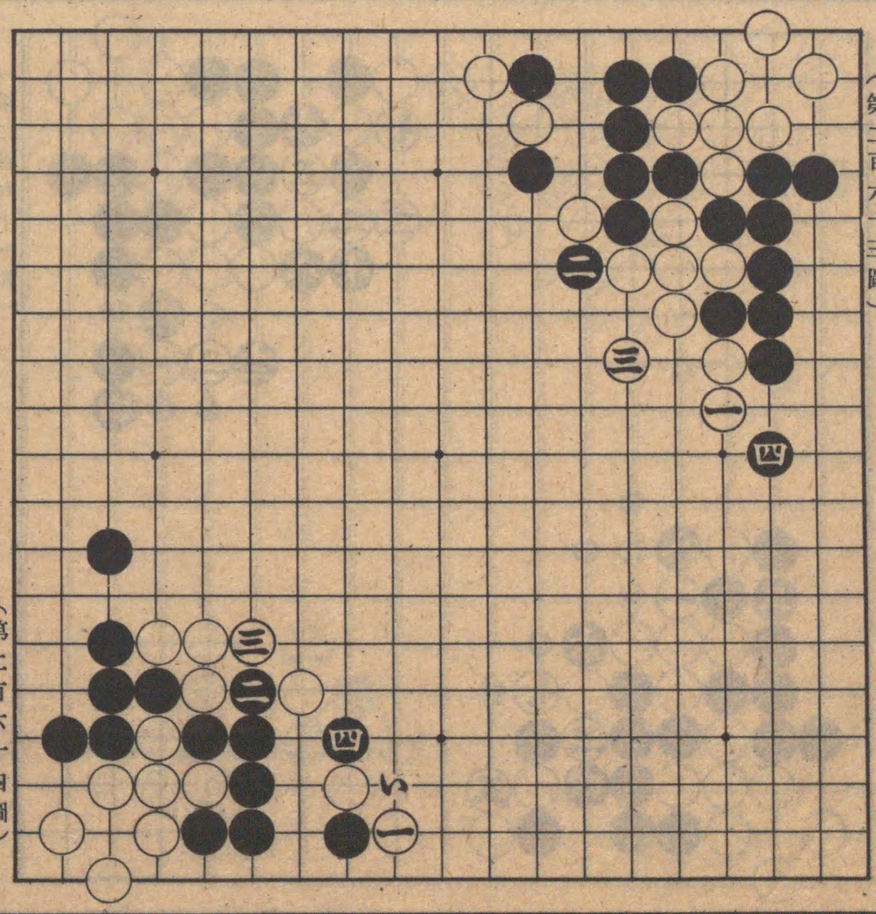


（第二百六十一圖）

（第二百六十二圖）

第二百六十三圖　前圖白三の手で本圖の如く平易に一と行びれば黒は先づ二と切りを入れ白三との交換を強ひたる後四と飛んで宜しく白は更に獲る所無き姿であります。

第二百六十四圖　白一と直ちに約へる手段の非が以上に依り明らかにされた譯である。卽ち黒は二の出を先にして四と頂越せば如何に變化しても不利は無い。既に最善の應手が確かめられた以上黒も二の手でいを切る變化などは餘計の事でありますが、研究の意味に於いては夫れも省略する譯に行きません。後の機會に讓る事とする。

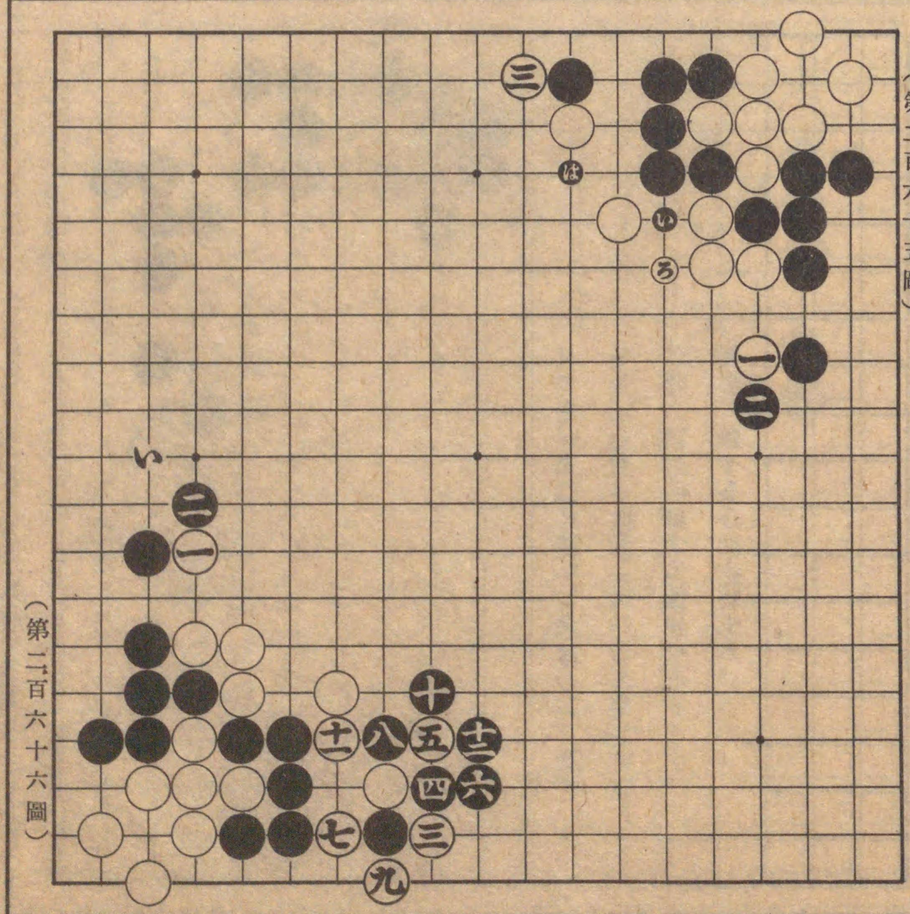


（第二百六十三圖）

（第二百六十四圖）

第二百六十五圖　白が一の頂を先にしてから三と約へる型に入ります。黒二は必ず斯く綽ねるべく、次いで白三と約へた時にも黒(い)白(ろ)黒(は)と頂越すのが最も有利である事を結局主張しやうと言ふのでありますが順序として次圖黒四と切る變化から解決して行きたい。

第二百六十六圖　黒四は以下十二迄の振換りを求め簡明を期する趣意であります。卽ち白一黒二の交換は黒の大いに得とする所である（其の交換無くば白からはいと迫る手段が有力であるのを、失つて居る）から下方は寧ろ白に讓つて紛糾を避けた譯なのです。なほ次圖に續いて——

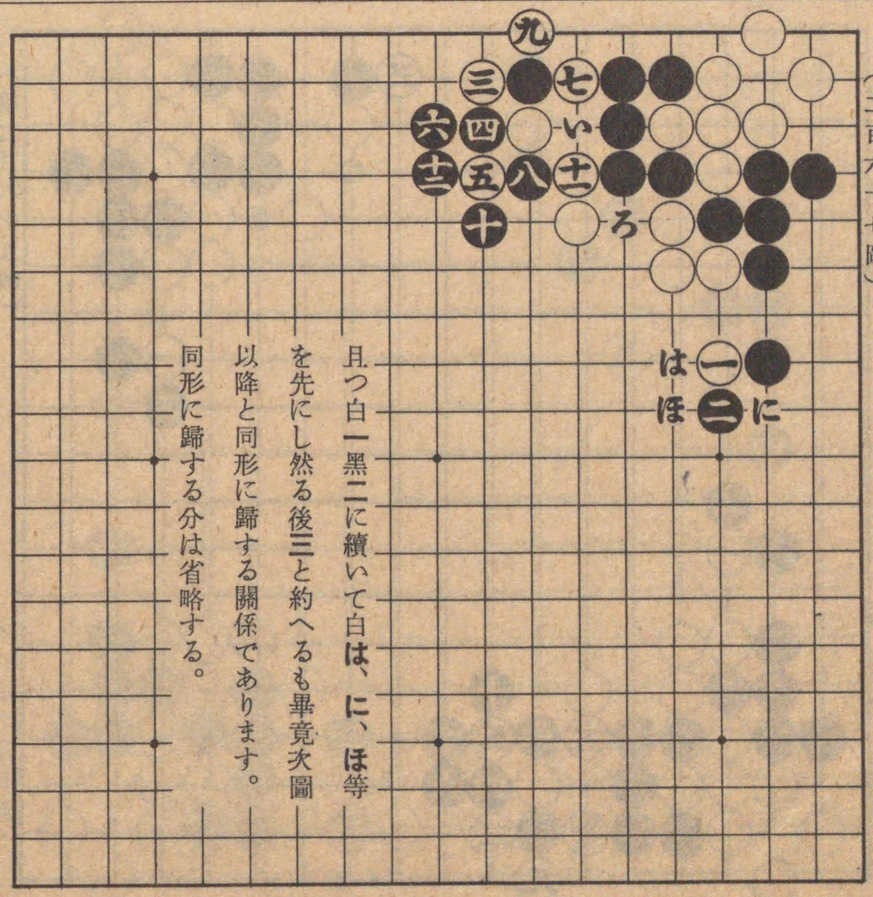


（第二百六十五圖）

（第二百六十六圖）

第二百六十七圖　黒十二に次いで白は、黒**い**及び**ろ**等の不安に備へねばなりません。それには白**い**と粘げば確實ですが更に働かせて**い**の粘に代らしむべく、白**は**と行び、又**に**を切り、或は**ほ**と綽返す手段等々何れも單純なる白**い**の粘に及ばぬ事は次圖以降に明らかです。

茲で一言注意を求めたいのは、白**一**黒**二**に續いて白**は**と行び、又**に**を切り、或は**ほ**に綽返す等を先に試みてから再び**三**と約へれば、黒は猶豫無く**四**と切つて振換つて愈々宜しい事、卽ち右方に於いて白が資本を掛ける事大なるに從ひ黒は其の利に滿足して上方は六子を捨て易い理です。

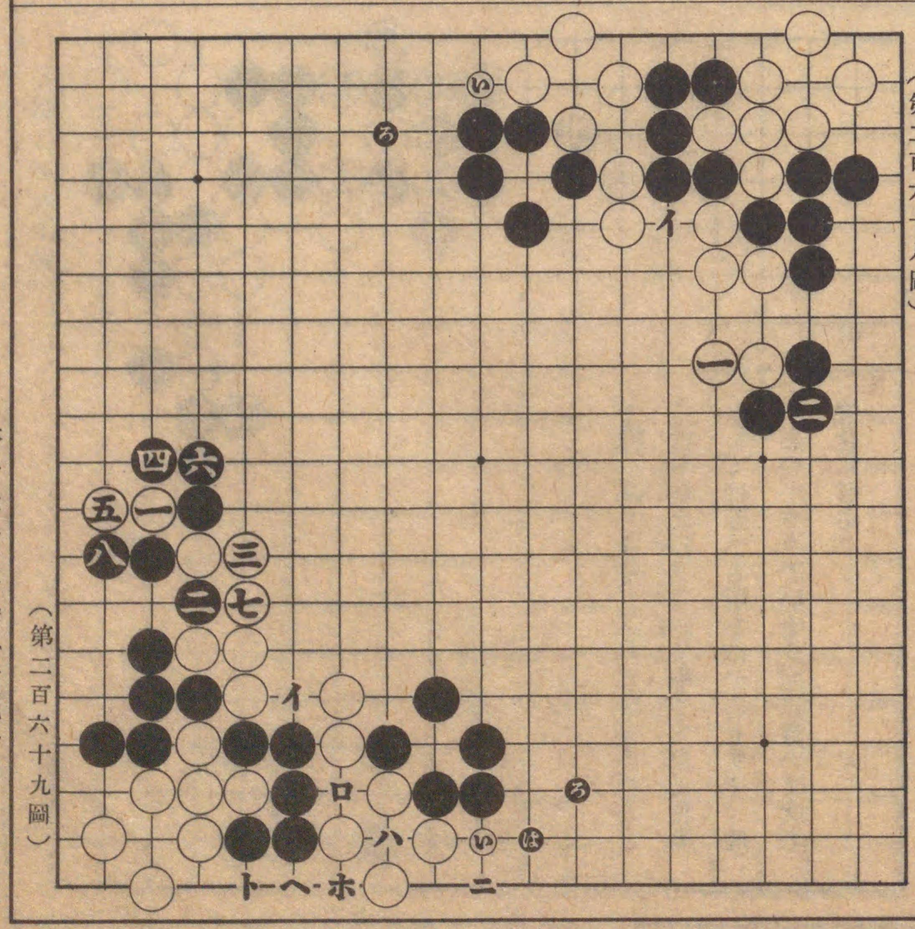


（二百六十七圖）

且つ白一黒二に續いて白**は**、**に**、**ほ**等を先にし然る後三と約へるも畢竟次圖以降と同形に歸する關係であります。同形に歸する分は省略する。

第二百六十八圖　前圖黒十二に次いで斯く白一と行びれば黒は勿論二と粘いで滿足します。なほ白⑪に對しても黒ろを想定し黒イに關する白の不安は依然解消しません。

第二百六十九圖　前圖白一の別法として斯く一と切れば黒は二乃至八を以て報い滿足する。白の堅壁が築かれた點は黒イの嚴しさを緩和して居ますが、此の儘では白⑪黒ろを假定し白の不完全が何としても否定されないのです。若し夫れ白⑪黒⑱の可能なる場合には黒ロ白ハ黒ニから放置せば更に黒ホ白ヘ黒トの劫爭を狙はれる事となる。白の堪へ得る所でありません。

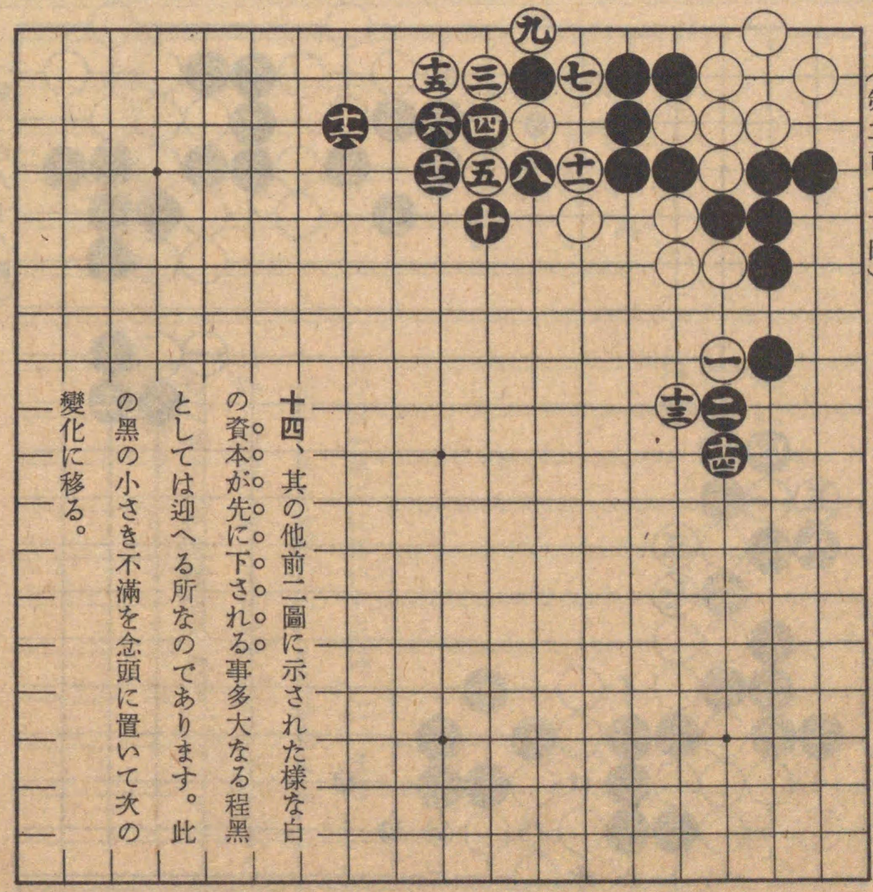


（第二百六十八圖）

（第二百六十九圖）

第二百七十圖　黑十二に次いで白十三と綽返せば黑は勿論十四と引いて宜しい。既に述べた如く白一黑二に續いて白十三黑十四と交換してから三と約へれば黑四と切つて振換るのに一層良く、結局本圖に歸するのでした。

一層良い意味は前二圖にも等しく通ずる點、本圖白一黑二の交換に留めて白三と約へた場合には黑四と切つて簡明を求めるのに、黑として幾分の不滿無きを保し得ません。卽ち第二百六十六圖以降の價値は寧ろ簡明の點に存する。重ねて言へば本圖の振換りを期するには單なる黑一白二の交換だけでなく、例へば白十三



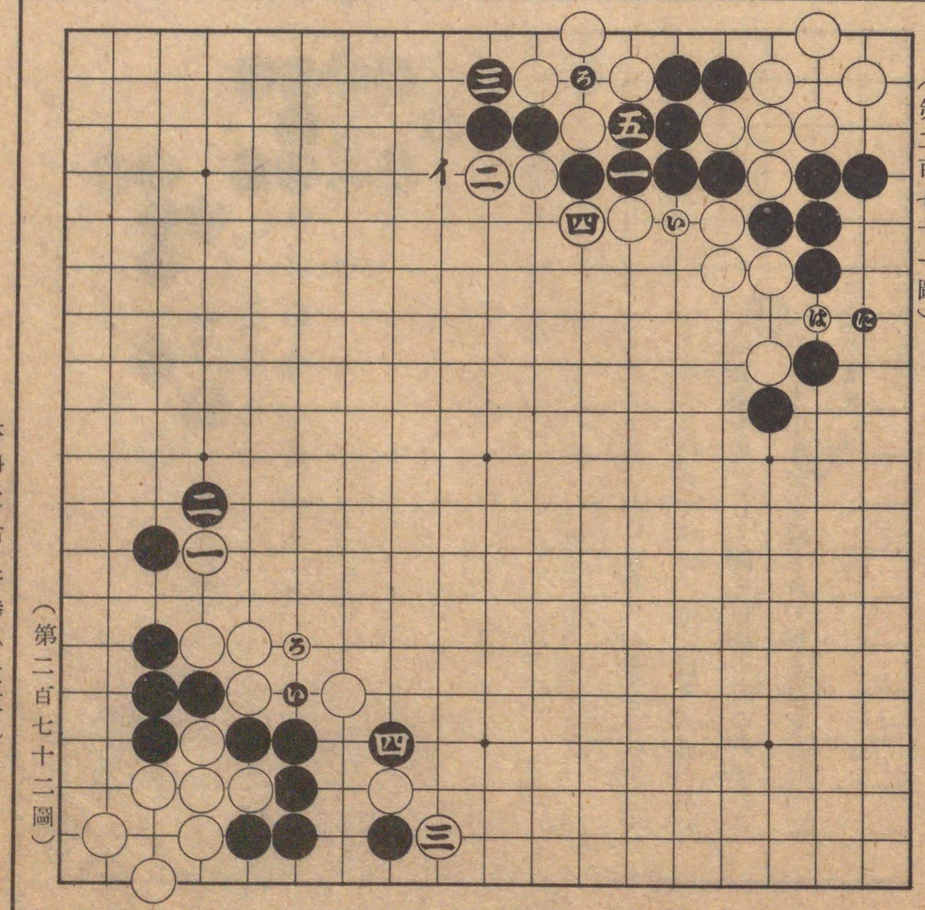
（第二百七十圖）

十四、其の他前二圖に示された様な白の資本が先に下される事多大なる程黑としては迎へる所なのであります。此の黑の小さき不滿を念頭に置いて次の變化に移る。

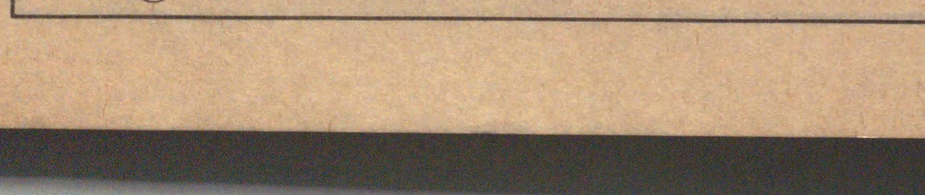
第二百七十一圖　前圖黑十と抱へる手で貪つて本圖の如く一と粘ぐ不當を念の爲に示すのです。卽ち白二乃至黑五に次いで白㋑黑㋺と提つた時、白㋩と綽込まれ黑㋥白劫提りとなつても直ちに黑の苦戰であるし、又白は劫爭の狙ひを保留して黑五に續いて單にイと行切り形勢を觀望すると言ふ態度に出る事も出來ます。

劫が殘つては黑の負擔が大き過ぎるので其の不利は疑ひありません。

第二百七十二圖　白一、三の順序に對しても黑㋑白㋺黑四を第二百六十五圖で推奨して置きましたが今度は㋑を保留して單に四と頂越す型を調べませう。前々圖で指摘した黑の



（第二百七十一圖）

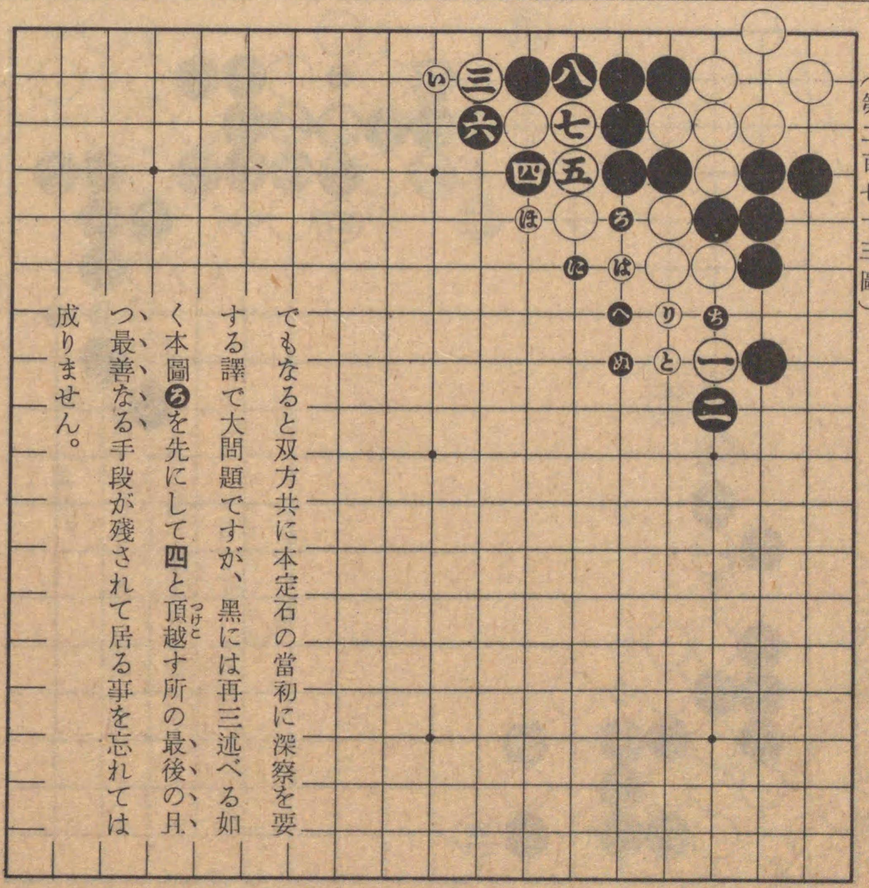


（第二百七十二圖）

小不滿を打開すべく黒い白ろ黒四に赴くに當つての第一歩であり前提と心得て頂き度い。

第二百七十三圖　白一、三に對し黒六と切つて振換りを求め簡明を期して惡くないが、右方が白一黒二の交換に留められて居る點、卽ち白の資本が少くて濟んで居る點は白に働かれた理に外ならぬと言ふ所で圖の如く四と頂越して見たのです。

白若し五と遮れば黒六と切つて八と粘ぐ。續いて白いと引いた時、黒ろ以下符號の示す順序にて征となります。白五と直ちに遮るは從つて無理である。若し又此の征關係を豫め見定めて置かねばならぬと言ふ事に



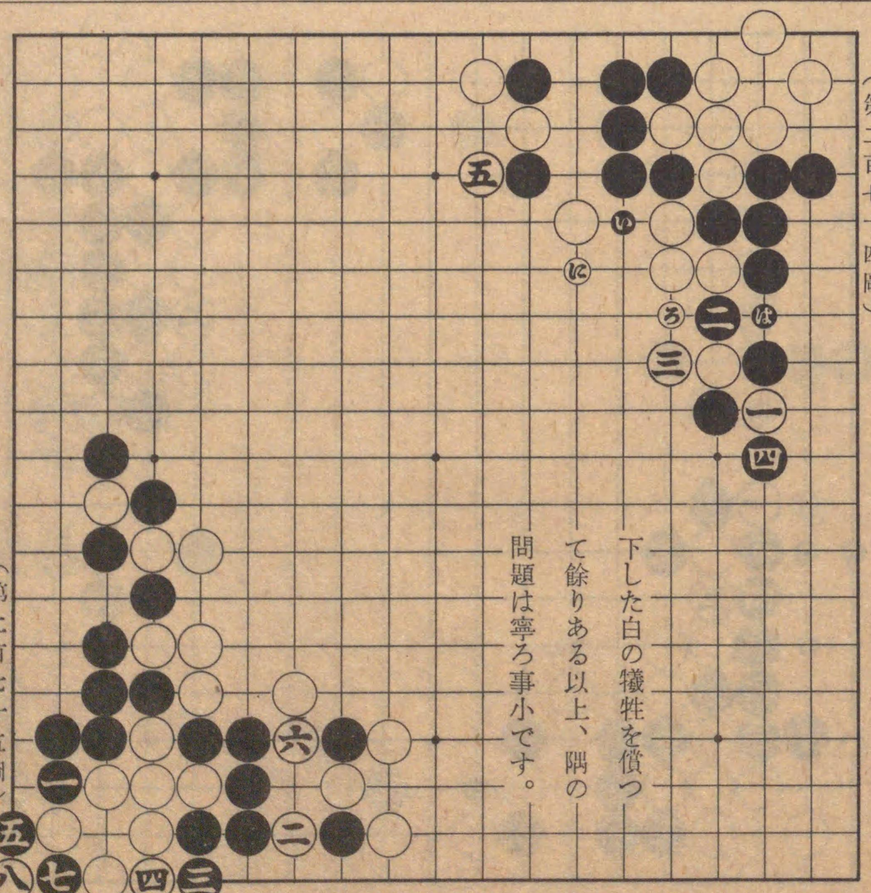
（第二百七十三圖）

でもなると双方共に本定石の當初に深察を要する譯で大問題ですが、黒には再三述べる如く本圖ろを先にして四と頂越す所の最後の且つ最善なる手段が殘されて居る事を忘れては成りません。

第二百七十四圖　前圖白五の手で本圖一と切りを入れる變化。黒の樣子を見た上で五の方の打方を決める意味の手筋ですが結論を先にすれば元來白の無理な形である。

黒二、四は然るに白の術中に陷りました。白五と外から約へられて打樣が無いのは黒いと出ても白ろ黒はの利きを以て白にと弛められるが故に外なりません。

第二百七十五圖　前圖白五に次いで斯く黒一、三と隅に迫つても白は二、六と外側から報いるべく、隅の數子には今更拘泥しない。下方に於ける黒二子の死滅と夫れに依つて得られた白の厚みの大が、初め左方に



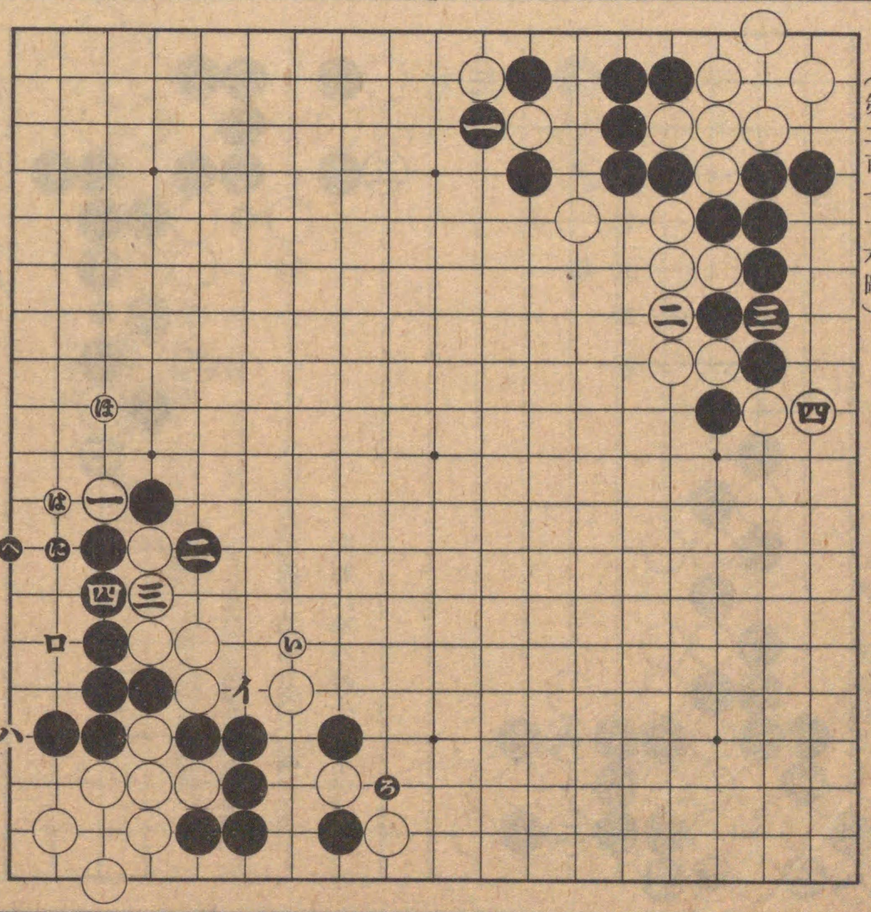
（第二百七十四圖）

下した白の犧牲を償つて餘りある以上、隅の問題は寧ろ事小です。

（第二百七十五圖）

第二百七十六圖　前々圖に於ける黒四の手で本圖の如く一と切つて抱へれば白は二、四と下ります。二の手で單に四と下るのが正著ではあるが簡單に二、四と打つても三以下の黒に凌ぎがありません。前々圖白一の宜しきに非ず、それに對する黒の應答が悪いのである。

第二百七十七圖　白一の切りに對し黒は二と當て四と粘ぐのが嚴しい筋であります。茲で白が黒イよりの出切りに備へ(い)と竝べば黒は(ろ)を切るべく續いて白(は)黒(に)白(は)の時黒(へ)と下つて活きる。(へ)はロと備へるを働かせ、隅に向つては黒ハの利きを見た好著です。



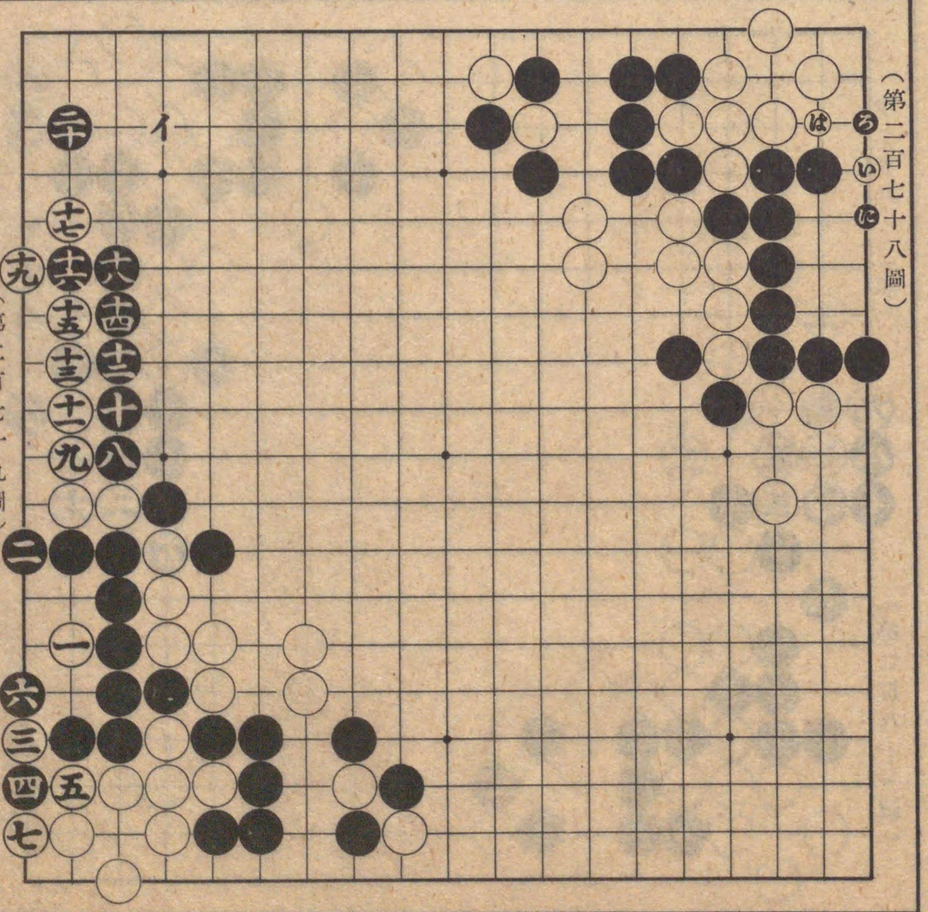
（第二百七十六圖）

（第二百七十七圖）

第二百七十八圖　前圖に於ける黒(へ)の下りで活きて居る事を示す。卽ち白(い)と頂けて來れば黒(ろ)白(は)黒(に)と應じ白は隅に補はねばならぬので悠々黒が眼形に就く餘裕は保たれる。

上方の白二子の枯死がひどい上に中央の黒二子には活動の餘地が存し立派な攻手に成つて居ます。

第二百七十九圖　前々圖に於ける白(は)と飛ぶ手で本圖一と強ひて取掛けに行けば如何。黒二乃至二十に想定の布陣黒イを加へると此の攻合ひは黒勝ちですが實際問題に於いて黒イの事は別としても此の姿で白に成算ありとは考へられません。但し黒イ無くば二十は勿論變更される。



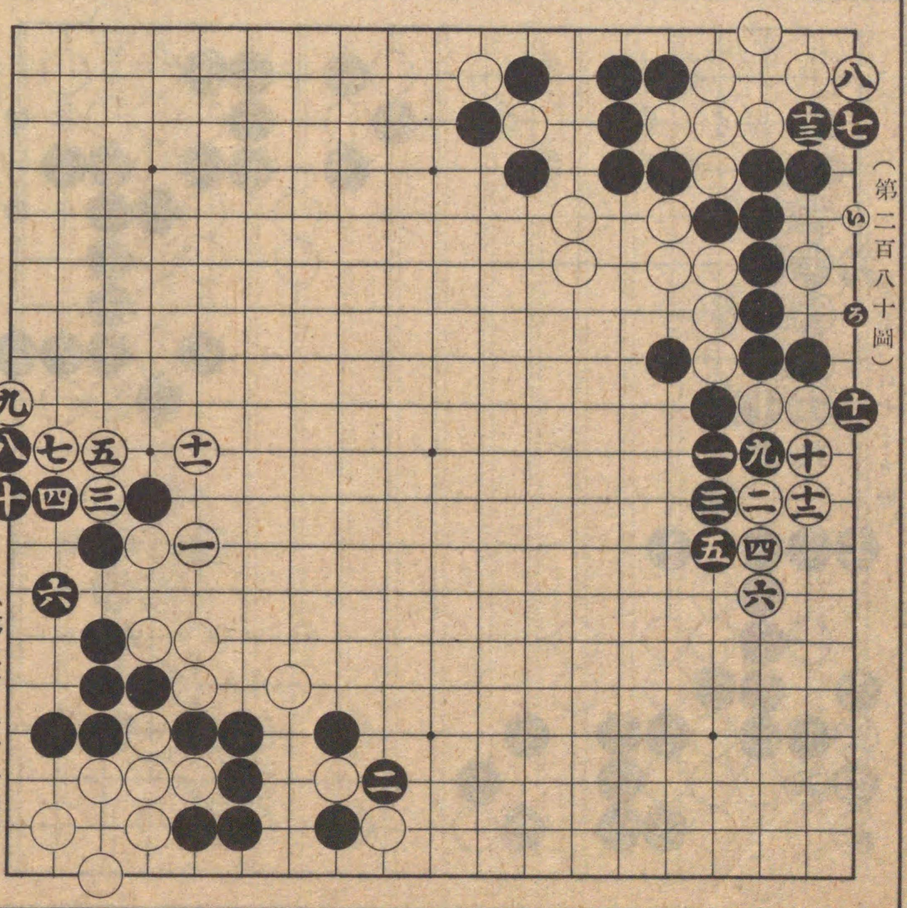
（第二百七十八圖）

（第二百七十九圖）

第二百八十圖　前圖黑二の手で斯く一と引きます。白二乃至黑十三に次いで白ろ黑ろにて持である。黑十一の綽の利く所が生命なのです。

第二百八十一圖　第二百七十三圖に於ける黑四に次いで、卽ち第二百七十四圖に及ける白一の手の變化として本圖の如く一と引いて見ます。

黑は二と切つて取合はぬのが賢明であり簡單明瞭です。續いて白三と切つて來た時、黑四乃至十と先手で治まつて良く白は十一と補ふ位のものである。なほ黑四又白五の變化は順次示される。更に本圖に就いては後の第二百九十二圖と比較する事を要します。

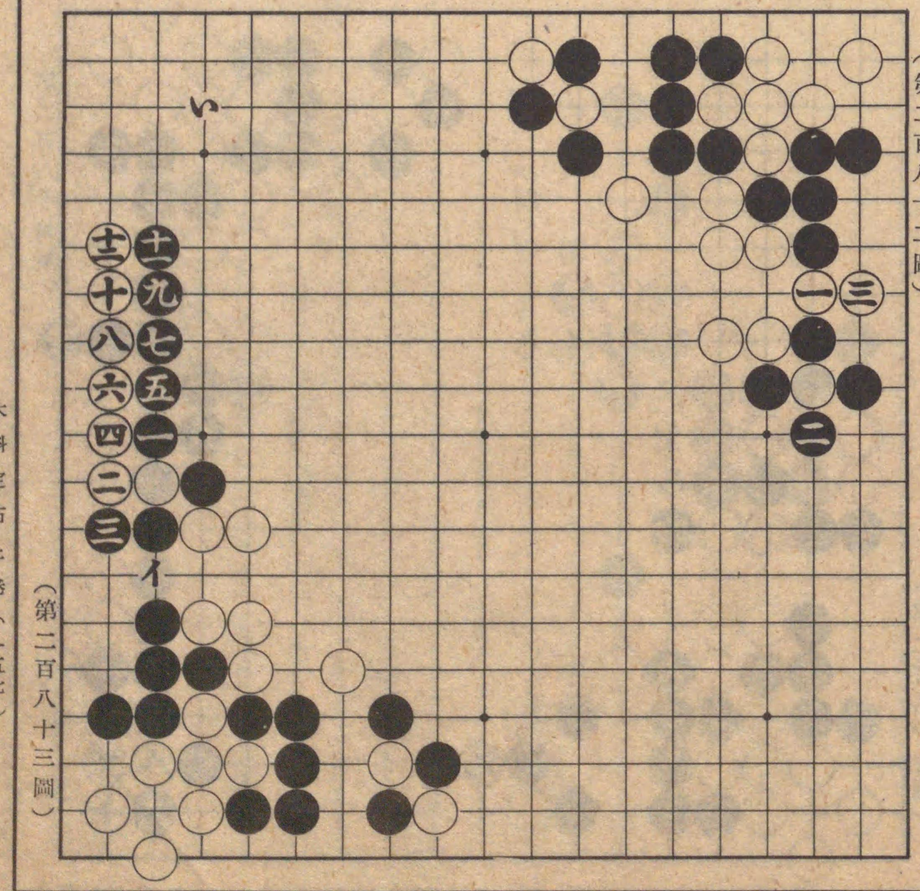


（第二百八十圖）

（第二百八十一圖）

第二百八十二圖　前圖に於ける白五の手で本圖の如く一と綽込めば黑二白三と振換り黑は先手を以て他の好點に赴いて宜しい。

第二百八十三圖　前々圖に於ける黑四の手で本圖の如く一と此の方から當てるのは白に二の手でイに綽込まれる事を意としない（綽込めば前圖に歸する）關係を以てに外なりません。其の點、本圖の一を正攻法とすべく積極的ではあるが、勢ひ複雜を免れない——白六は第二百八十五圖に於ける一と切るべく、本圖十二迄となつた時、想定布陣の黑いを加へれば續いて次圖ですが黑としては前々圖の簡明を忘れては成りません。



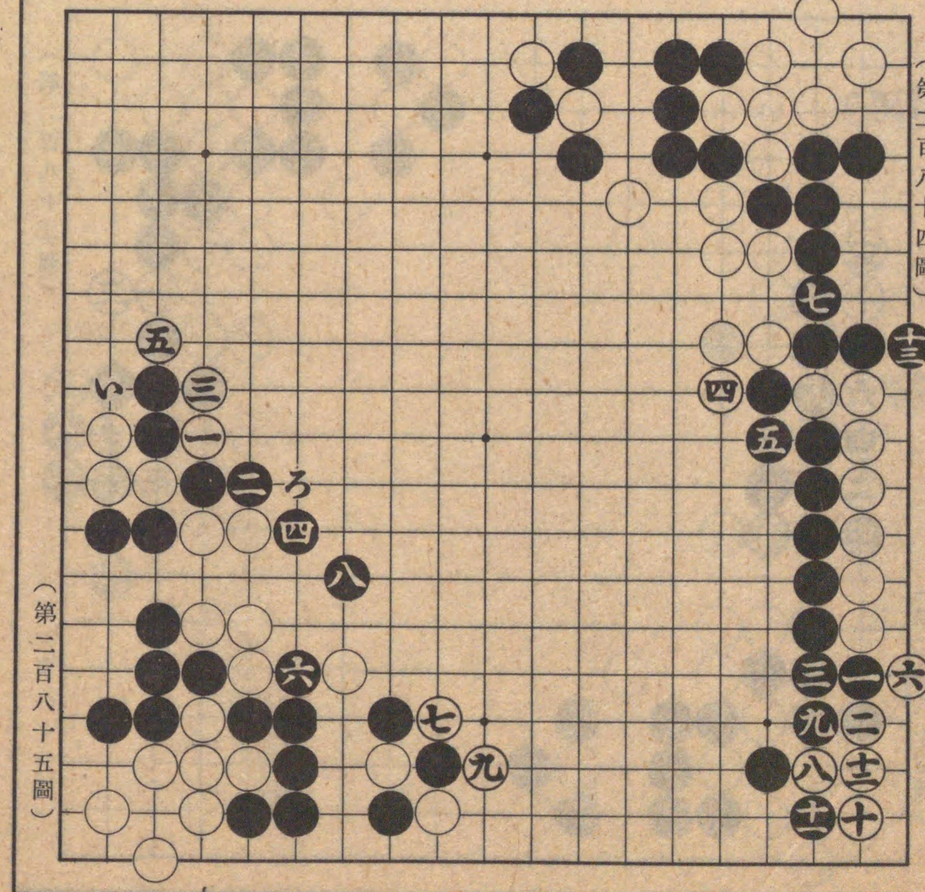
（第二百八十二圖）

（第二百八十三圖）

第二百八十四圖　前述の如く右下隅に於ける黑の配置を想定し前圖に續いて黑一と約へます。白二乃至十二に次いで黑十三と下り後手で活きても、白の萎縮と黑の外勢との對照が餘りにも著しく、白の不利たるや論外と謂はねばなりません。

第二百八十五圖　前々圖に於ける白六の手で斯く一と切る。黑四の手でいと約込む事が出來ないのは白ろの征があるからです。

白七の切りが一見無理の如くして實は此の際の妙著である。黑八と尖んで白五子を取込めば白は勿論九と打抜くべく、兩方を打つて取つた白に不滿は無い形であります。



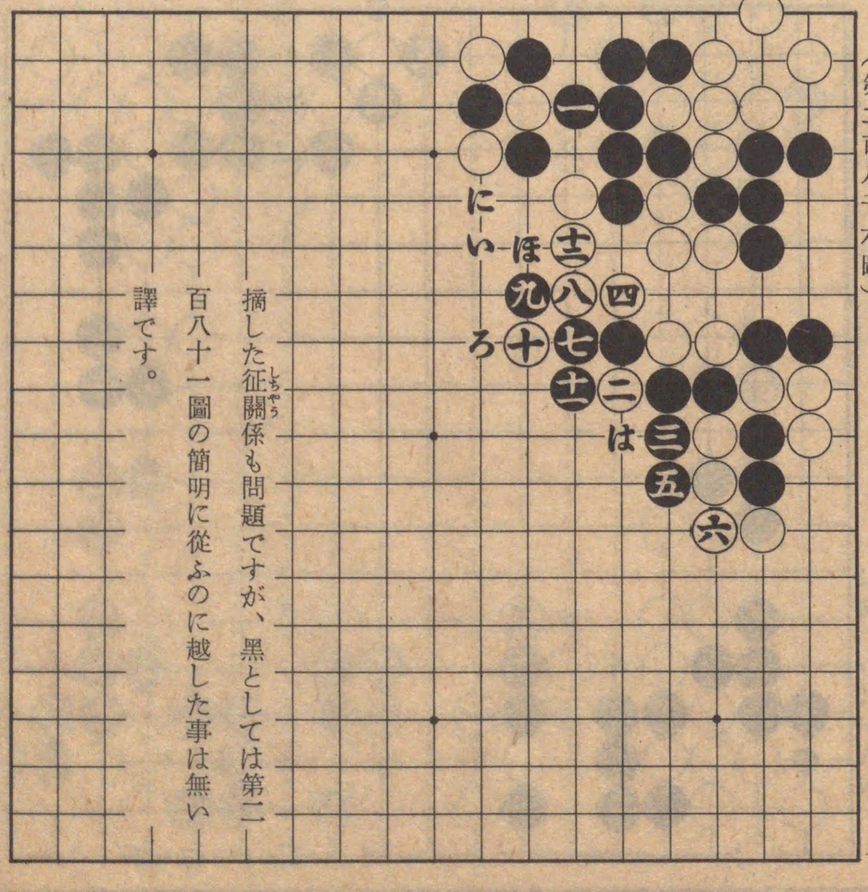
（第二百八十四圖）

（第二百八十五圖）

第二百八十六圖　前圖に於ける八の手で黑は勢ひ本圖の如く一と提らざるを得ません。然らば白二乃至十二の手順を追うて凌げて居る。凌がれては術語に所謂黑の『剩り形』であり、同時に右方の黑の一團の生死に關して來ます。

白十二に次いで黑若しいと尖めば白はろと引いて、はの行出しとにの突當りを兩睨みにすべく、又十二に續いて黑ほが成立しない所に前圖白七の效果が現れて居る。

斯くして前圖白一と切る手段があつては黑の惡い事になりましたが、畢竟第二百八十三圖に於ける黑一に端を發したのであり、勿論前圖で指摘した征關係も問題ですが、黑としては第二百八十一圖の簡明に從ふのに越した事は無い譯です。

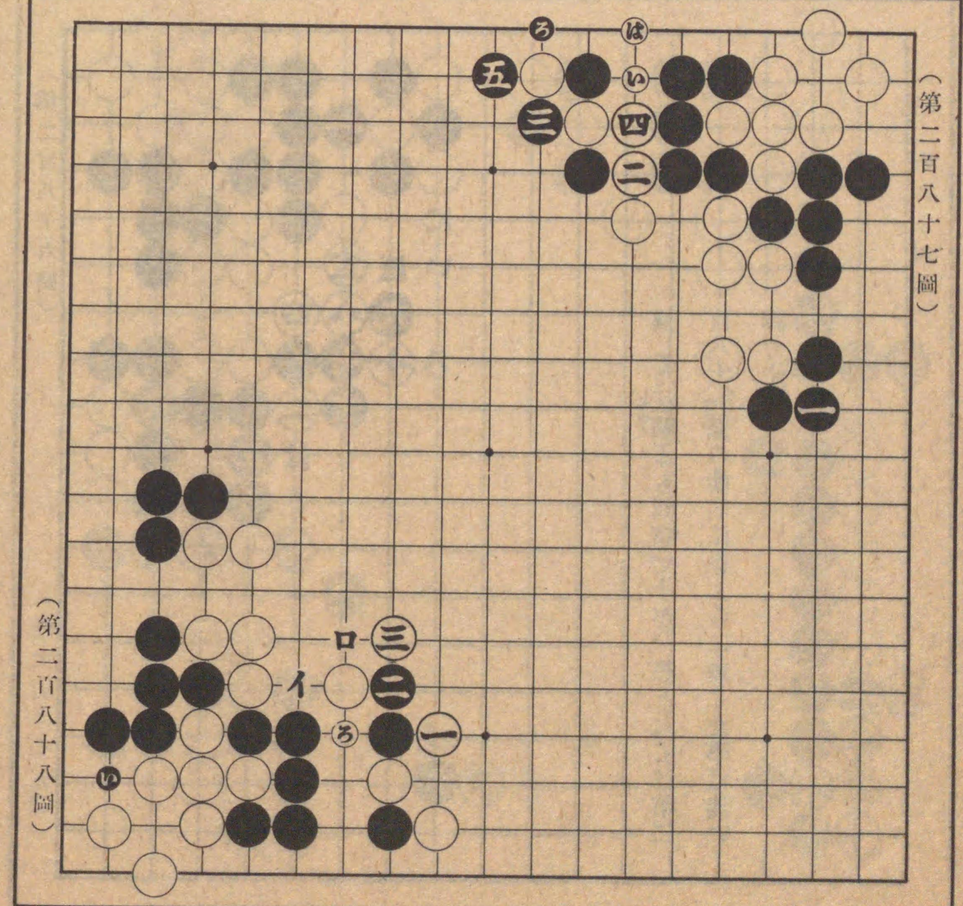


（第二百八十六圖）

第二百八十七圖　第二百八十一圖に於ける白一に對し、黒が本圖一の點を白に切られる事を嫌つて斯く一と粘ぐは消極的であり一層惡い。

白二と正直に遮つたのは然るに黒一を成功せしめます。卽ち黒三、五と振換られ白(い)黒(ろ)白(は)と五子を後手で屠つても前々圖とは逆に黒に兩方を打たれて居るからである。

第二百八十八圖　前圖白二は本圖一でなければなりません。黒二白三と約へ、續いて黒イと出れば白ロと弛める餘地がある。但し黒が二の手(い)と隅を當込んでも白は構はず(ろ)と遮り隅は劫爭として外勢の厚壯に滿足する可能性があります。



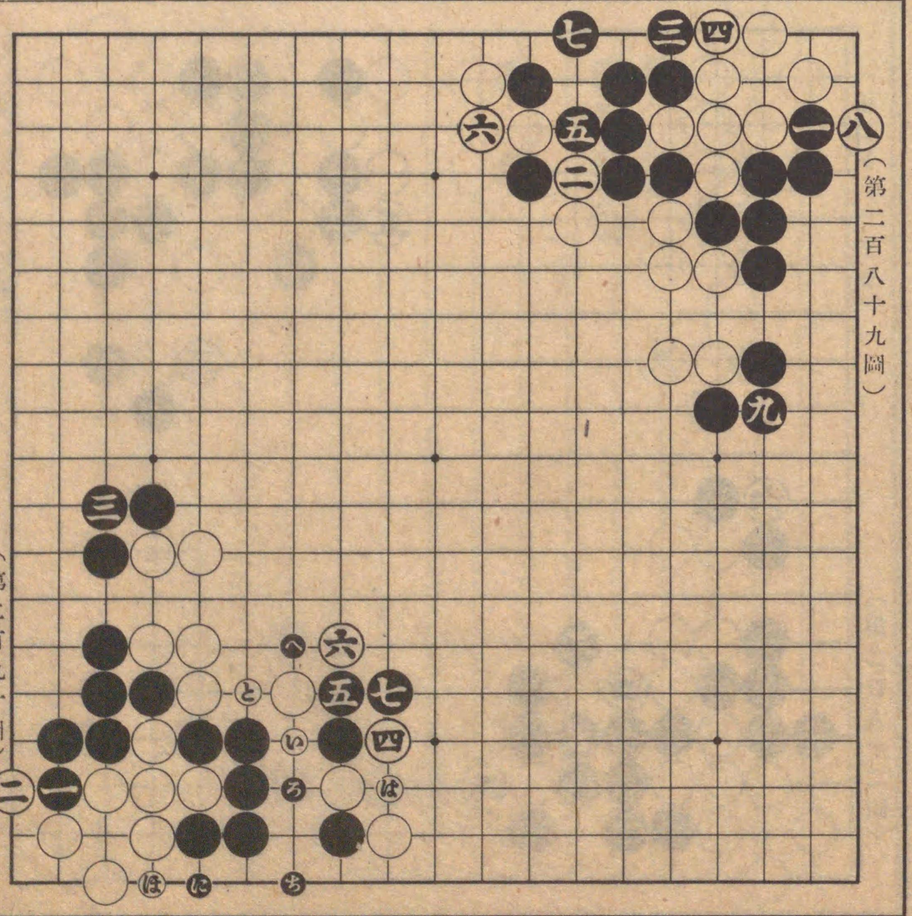
（第二百八十七圖）

（第二百八十八圖）

第二百八十九圖　前々圖に於いて黒一と粘ぐに先立つて隅を本圖の如く一と當込む餘地は存するのです。

白二と遮り黒三白四と粘げば黒も五、七と活きてから九に囘つて滿足する事が出來る。

第二百九十圖　前圖白二の變化として隅を本圖の如く二と綽ねれば黒も乃で三と悠々粘ぎます。續いて白四黒五白六と約へて來ても黒七と出で更に白(い)以下符號の順序にて黒は活路に就き得る。要するに前々圖白一の前に加はつた本圖黒一白二の交換が働く理であり、前々圖との差は黒一及び三の手順としての效果を觀るべきです。



（第二百八十九圖）

（第二百九十圖）

第二百九十一圖　然し乍ら白には猶別に打方が有る。それは第二百八十一圖に於ける一と行びる手で本圖の如く一を先にし、黒二と出るを待つて三と行びる手段です。白としては實に最善の手順を盡したものと謂ふ可きであります。

續いて黒四と綽ねた時、白五と押して黒に打つ手が無い上に何よりも白いの嚴しい切りを黒は控へて居る。

なほ後圖參照。

第二百九十二圖　前圖黒四の手で斯く一と當て白二と交換するは單に三と綽ねる形に及ばず、卽ち今度は白四黒五に次いで白六と切られ黒の不利は第二百八十一圖に比し明白。

（第二百九十一圖）

（第二百九十二圖）

第二百九十三圖　前々圖に於ける黒二の手で本圖の如く一と此處を出ても白は矢張り二と行びるのです。而して次には白いと白ろとの兩睨みとなる。黒たる者、玆に窮せざるを得ません。

第二百九十四圖　第二百九十一圖に於いて黒に打つ手が無いと言つて置きました。其の一例を示す。

黒一と若し當てれば白二と切るべく黒三白四で忽ち黒の形崩れです。

斯くては遡つて第二百六十五圖に於ける白一の頂け、次いでは第二百九十一圖に於ける白一の手順に對し黒は抵抗し得ぬのであらう乎。否々第二百九十六圖以降を見よ。

（第二百九十三圖）

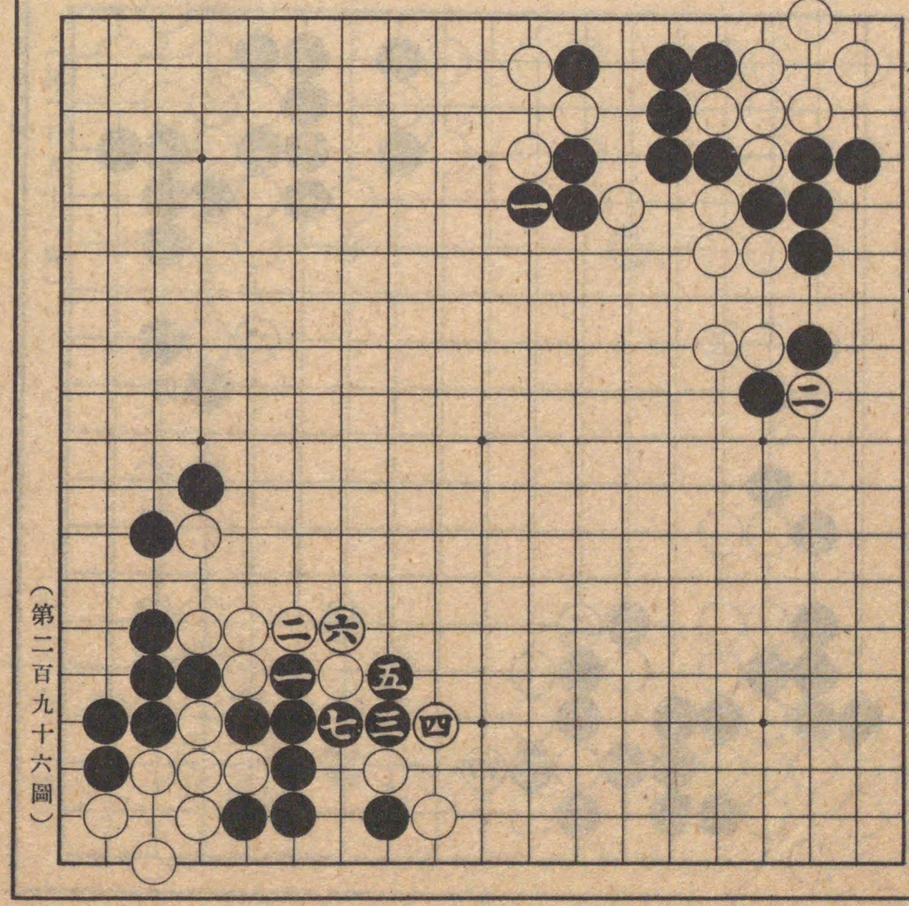
（第二百九十四圖）

第二百九十五圖　第二百九十一圖に於ける黒四の手で本圖の如く一と曲れば白は透かさず二と切ります。

これを第二百八十一圖に比し黒の劣る事は疑ひありません。白二に續く經過は第二百八十一圖以降に倣ひ此處には省略する。

第二百九十六圖　第二百六十五圖で指摘して置いた様に黒一と先づ出てから三と頂越す最後の且つ最善なる應手に入ります。

白が第二百九十一圖の一と等しく今更四と外から綽ねても、黒五、七と報いて良いのは黒一白二の交換が先に在るからに外ならない。なほ次圖以降に續說する。



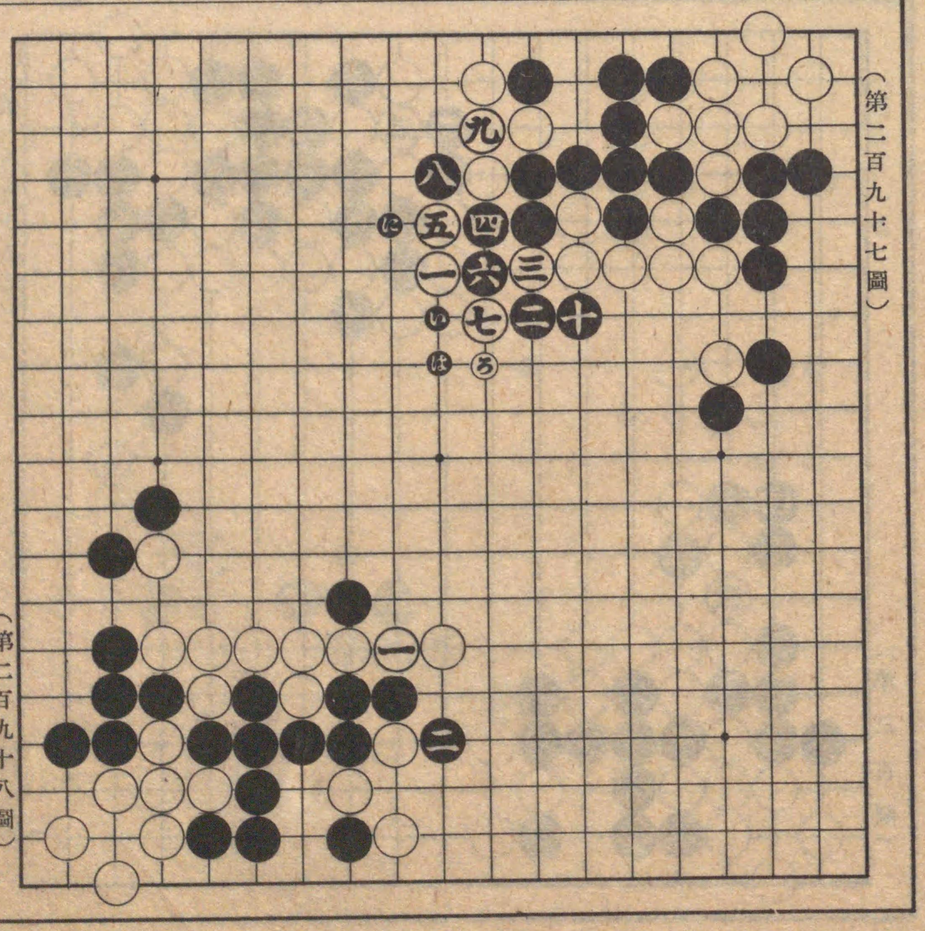
（第二百九十五圖）

（第二百九十六圖）

第二百九十七圖　前圖黒七に次いで恐しいのは本圖白一と掛けられる手ですから黒が如何にして夫れを凌ぐ可きかを明らかにする必要が有る。

白一に對し黒は二と飛ぶのが唯一の筋です。これ以外には平易なる凌ぎは無い。此の二を忘れさへしなければ宜しい譯である。卽ち白三乃至黒十に次いで黒い白ろ黒はに續く黒にも有り白の潰滅に外なりません。

第二百九十八圖　前圖に於ける白五の手で本圖の如く一と粘ぎ、中央に長壁を築いた勢力は小さくありませんが黒も二と當てゝ下邊に發展する事となり、どの點から觀ても不利は考へられない。



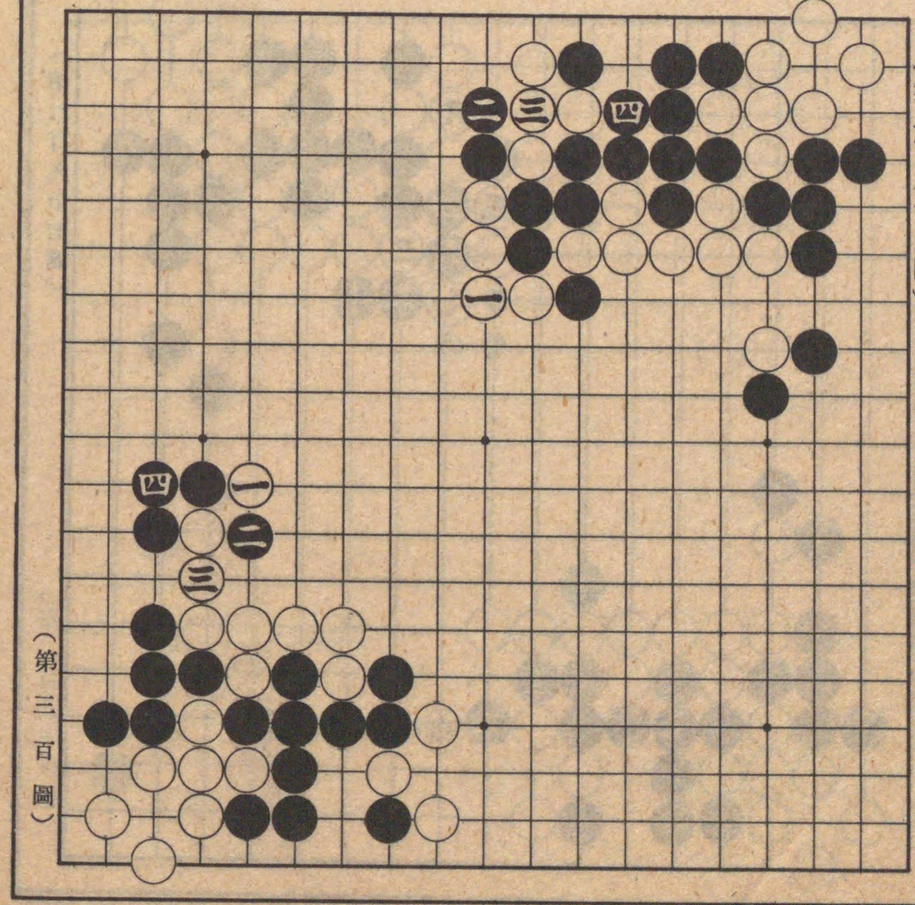
（第二百九十七圖）

（第二百九十八圖）

第二百九十九圖　前々圖に於ける白九の手の變化です。斯く一と中央を粘げば黒は二、四と打つて問題が無い。二の手で三に提り、白二と當てられるのは拙です。

第三百圖　第二百九十七圖に於いて白一と掛け封鎖を試みるのが成功しないとしても白の打方はまだ盡きた譯ではありません。

本圖白一と綽返すのは最も無難の形である。其の代りに黒二、四と報いられ、下方の黒の進出發展を防ぐ望みも失はれます。下方の黒を包圍するぞと脅しつゝ左方の黒にも壓迫を加へる嚴しい手段は無いものかと考へて次圖以降に進む。



（第二百九十九圖）

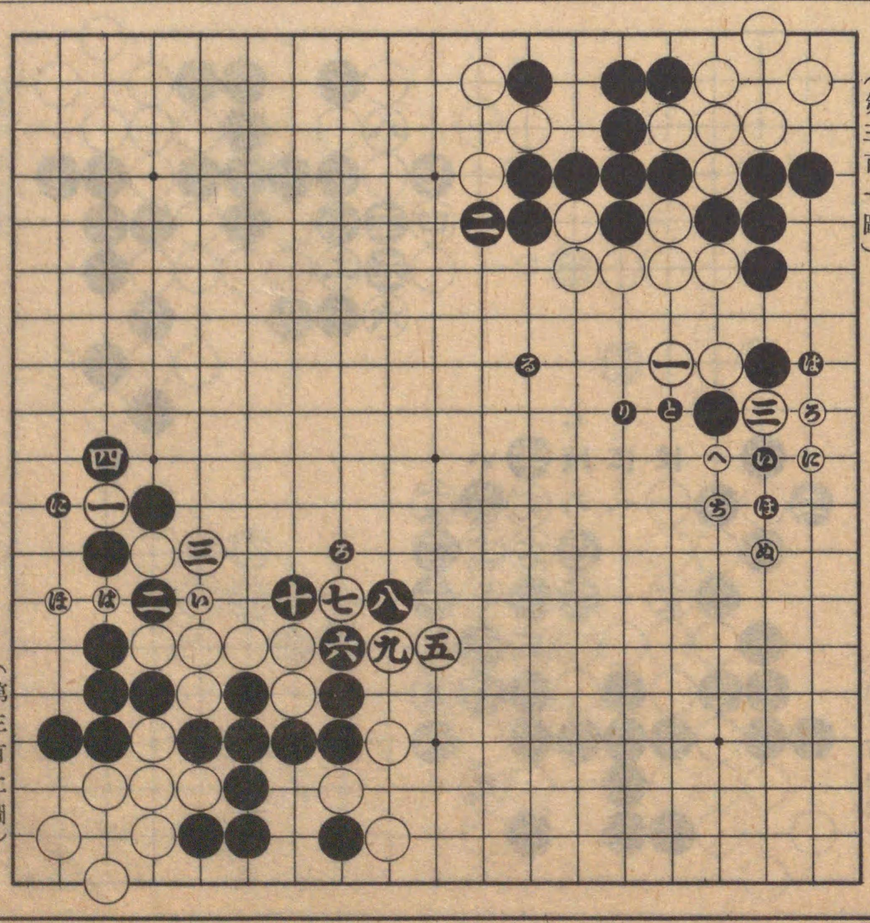
（第三百圖）

第三百一圖　白一と行びれば如何。白三の切りを恐れず黒は二と曲つて其の方の封鎖を避ければ宜しい。

白三と切つて來た時、黒い以下符號の順序に黒ろ迄となり白八子を反對に包圍し取込んで終ひます。

第三百二圖　白一と直接切違へるのが最後の手段です。黒二、四は簡明を主としました。

茲に至つて白も五と掛ける外無く黒六、八と突破して隅の五子は場合に依り捨てる事を意としません。即ち白九黒十に續いて白い以下符號の手順で振換るのです。なほ次圖に變化がある。又初め黒は二の手で三から當て白二の時いの點を粘ぐ形に從



（第三百二圖）

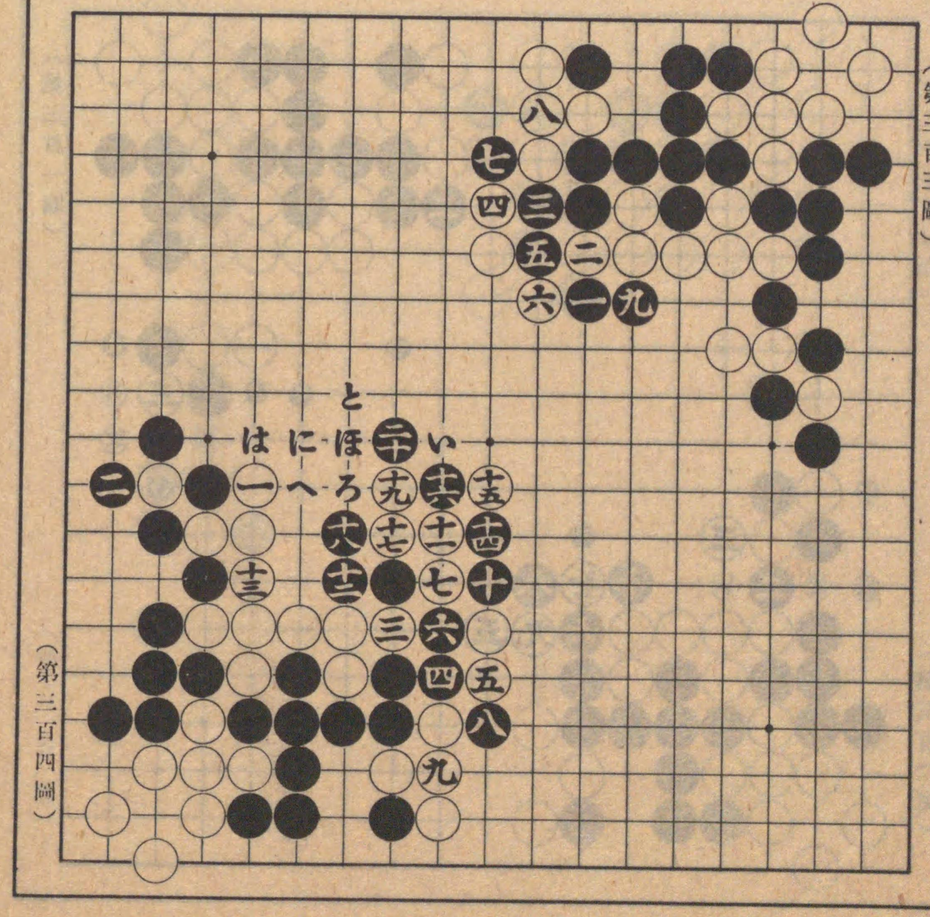
（第三百一圖）

つても悪い筈は有りませんが、本圖は何よりも分かり易い點で選ばれる。

第三百三圖　前圖黑**六**の手で斯く**一**と飛ぶ筋に依れば第二百九十七圖に歸し、圖の如く黑**九**と押すに至り白の破綻は明瞭であります。

第三百四圖　白が**三**と突破する前に**一**の當てを先にした所が前圖との差である。然し乍ら黑**二十**迄となり本圖も亦白の潰滅に終りました。

黑**二十**に次いで白**い**黑**ろ**白十六に粘ぎ黑**は**白**に**黑**ほ**と成るか、又**二十**に續いて白**ろ**黑**へ**白**ほ**黑**に**と成るか何れも白の失敗に外ならぬ事を確かめて欲しい。第二百九十六圖白**四**の非が以上に依り證明されました。



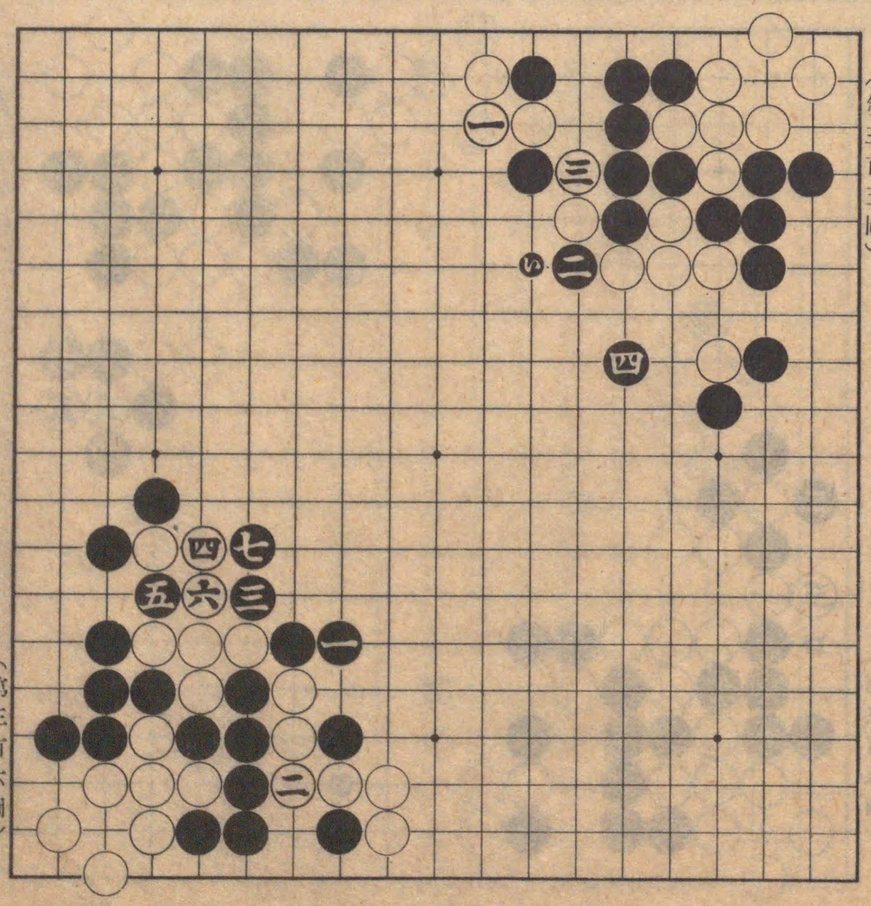
（第三百三圖）

（第三百四圖）

第三百五圖　第二百九十六圖に於ける白**四**の手の變化です。本圖の如く白が**一**と粘げば黑は先づ**二**と切つて白**三**を餘義無からしめ乃で**四**と掛ける筋が何よりも働く。黑が**い**の引きを打つて終はぬ所、味ふべきであり白は手の下し様がありません。

但し白**三**の別法は第三百七圖以降にも示される。

第三百六圖　前圖に於ける**四**の手で俗に本圖の如く**一**と引き白**二**黑**三**と運べばこれ亦紛れる所無く、結局黑**七**と押す所の征である。若し又萬一にも征關係が煩はしければ、黑は前圖**四**と單に掛ける筋に從ふ迄であります。



（第三百五圖）

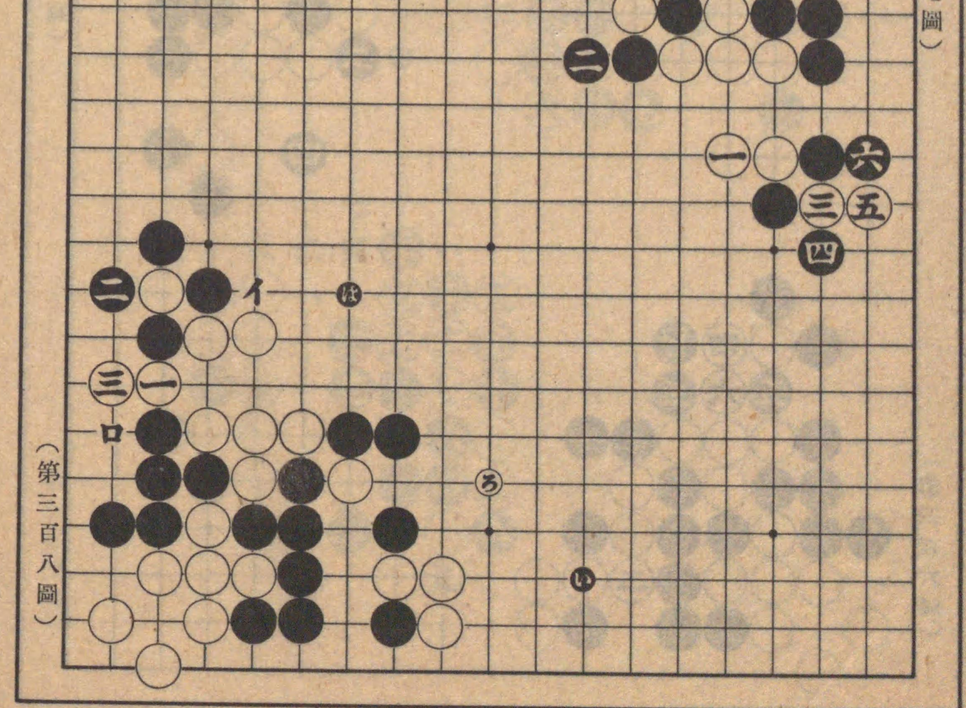
（第三百六圖）

第三百七圖　前々圖に於ける白三の手で本圖の如く一と行びれば黒は顧みずに二と行切り上方を不安無からしめて置いて白三黒四と當てる。

白五黒六に續く經過は第二百八十三圖乃至第二百八十五圖を想起しても黒の有利たるや明白です。

第三百八圖　前圖白三の手で本圖の如く一と綽込めば黒は勿論二と打抜いて白三を容るし振換ります。而して下方を黒い と迫り白ろならば黒は と封鎖の勢ひを示すも良く、又いの手で單に イを押すも悪くありません。黒はの包圍からは後に黒ロと約へ白に攻取りを強ひる様な餘力も存して居るのである。

（第三百七圖）



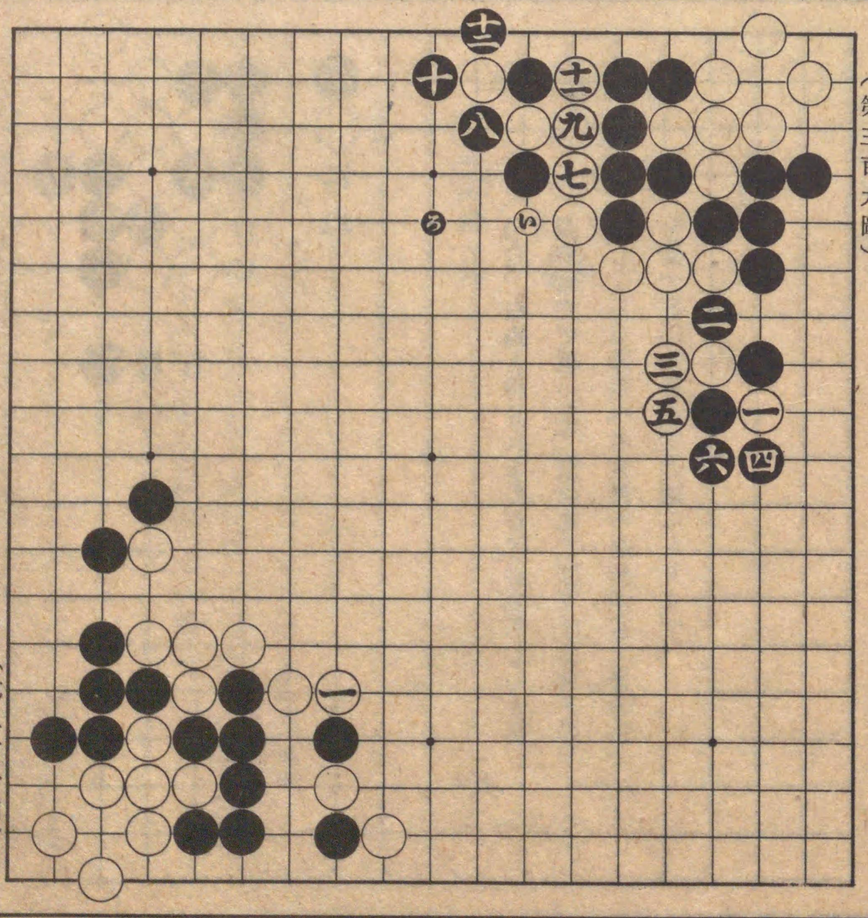
（第三百八圖）

第三百九圖　前々圖に於ける白一の手で更に本圖の如く一と烈しく切りを試みる。斯く此の方に資本を先に下せば黒は上方の六子を欣んで捨てるべく、卽ち二、四と實利の大を收め、白七乃至黒十二の結果に滿足する事、再三指摘した通りであります。續いて白いならば黒ろと應じて良く、白の重複が否定されません。

第三百十圖　白に殘された最後の手段は第二百九十六圖に於ける白四の手、從つて第三百五圖に於ける白一の手で本圖一と押す策であります。

黒に取つては是が一番恐ろしいのです。偖此邊で從來研究の跡を回顧復習し認識を確かめて置きたく思ふ。

（第三百九圖）



（第三百十圖）

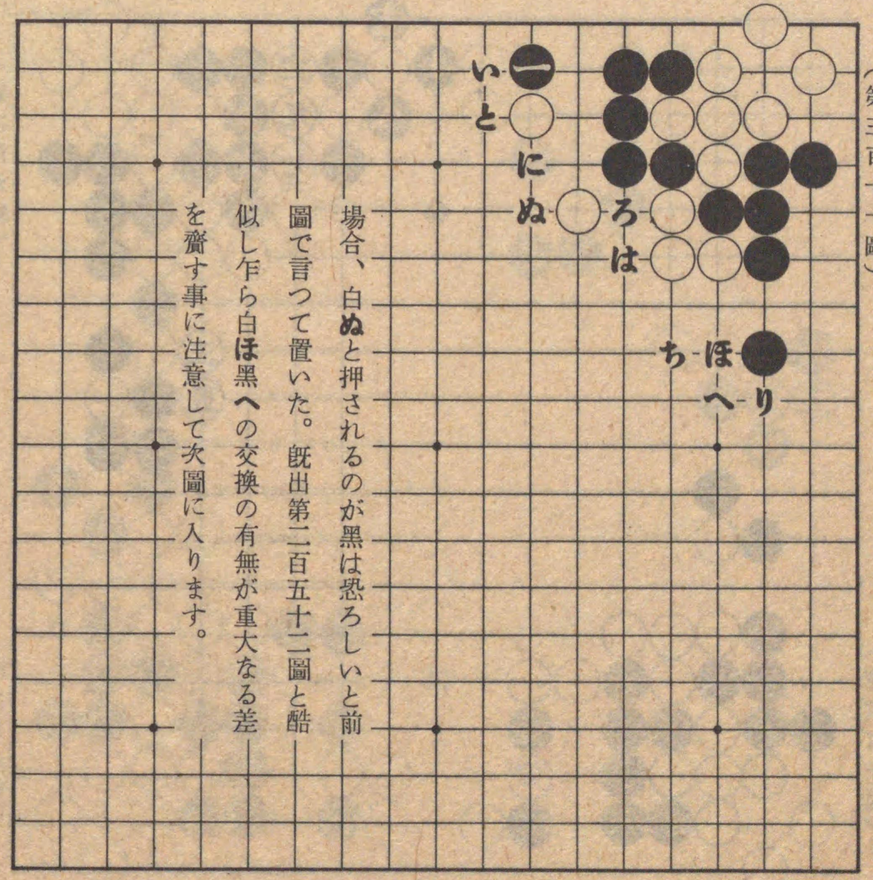
第三百十一圖　黒一の頂に對し、（1）白**い**と直ちに約へれば黒**ろ**白**は**黒**に**と頂越す。（2）白**ほ**黒**へ**を交換してからの白**い**に應じては、

イ、黒**と**と切つて振換る、

ロ、黒**に**と單に頂越す、

ハ、黒**ろ**白**は**黒**に**と頂越す。

右の内、（2）に於ける**ロ**、の場合は頂越した時に白**ち**と行びられ又**り**と切られる變化が相當複雜でありました。**イ**は簡明であり黒が惡くはないけれど白に幾分働かれる嫌ひがある。結局**ハ**、卽ち白**ほ**黒**へ**白**い**、の場合にも黒**は**を先にして**に**、が最善なりと言ふのでした。所で**ハ**の

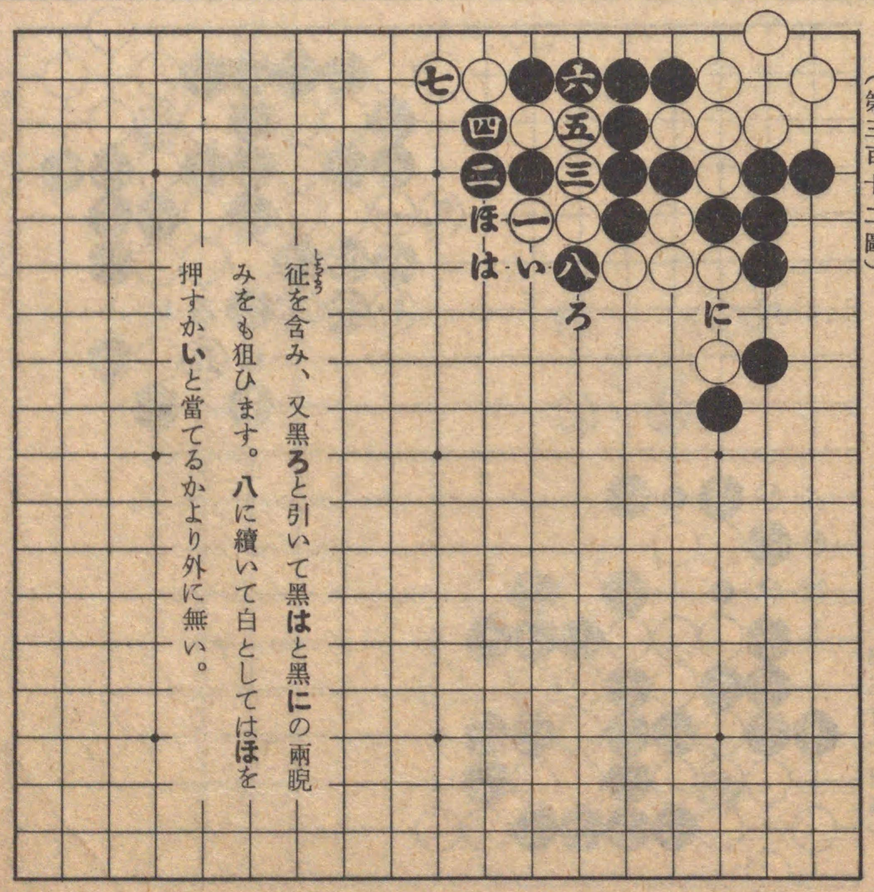


（第三百十一圖）

場合、白**ぬ**と押されるのが黒は恐ろしいと前圖で言つて置いた。既出第二百五十二圖と酷似し乍ら白**ほ**黒**へ**の交換の有無が重大なる差を齎す事に注意して次圖に入ります。

第三百十二圖　白一黒二と行出す事が出來るのは先づ第二百五十二圖の場合との著しき相違である。卽ち前圖で言つた白**ほ**黒**へ**の交換無くば本圖黒**二**は無理であり、**二**の手で**四**を切る外ありません（第二百五十二圖以降）でしたが、其の交換の有る際は**二**と行出すも**四**を切るも黒の自由なのです。何れかと言へば本圖の如く行出す方が積極的ではある。

行出せば白**三**乃至**七**は必然の運びであります。次圖に指摘する征關係其他に於いて黒若し行出すを不利とすれば**二**の手で**四**を切る型に從ふ事となる。白**七**に次いで黒**八**と切る手が頗る嚴しく、直接には黒**い**と追ふ



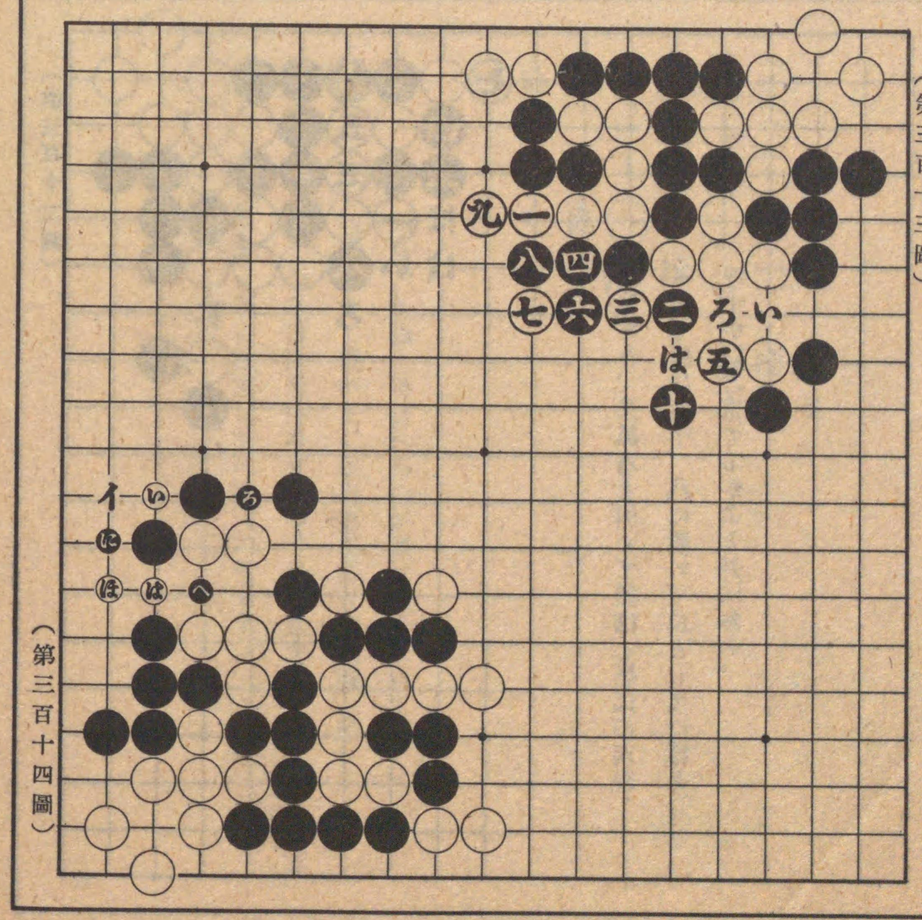
（第三百十二圖）

征を含み、又黒**ろ**と引いて黒**は**と黒**に**の兩睨みをも狙ひます。**八**に續いて白としては**ほ**を押すか**い**と當てるかより外に無い。

第三百十三圖　前圖に次いで斯く白一と押せば黒二の綽が適切です。是れに含まれる黒いに白ろ黒はの征に備へて白三、五と出た時、黒六と曲つて再び黒九の征を生ずる。白七は其の防ぎですが結局黒十と掛けられるに至り白が萬事休するのであります。試みに其の後の歸結を示せば次圖である。

なほ本圖に指摘された征關係が總べて黒に不利なる事は一般に考へられません。

第三百十四圖　白いと切つても黒ろと粘いで良く、續いて白はに黒ほに白へ迄です。但し黒はへの手で單にイに曲つても攻合ひには勝ちます。

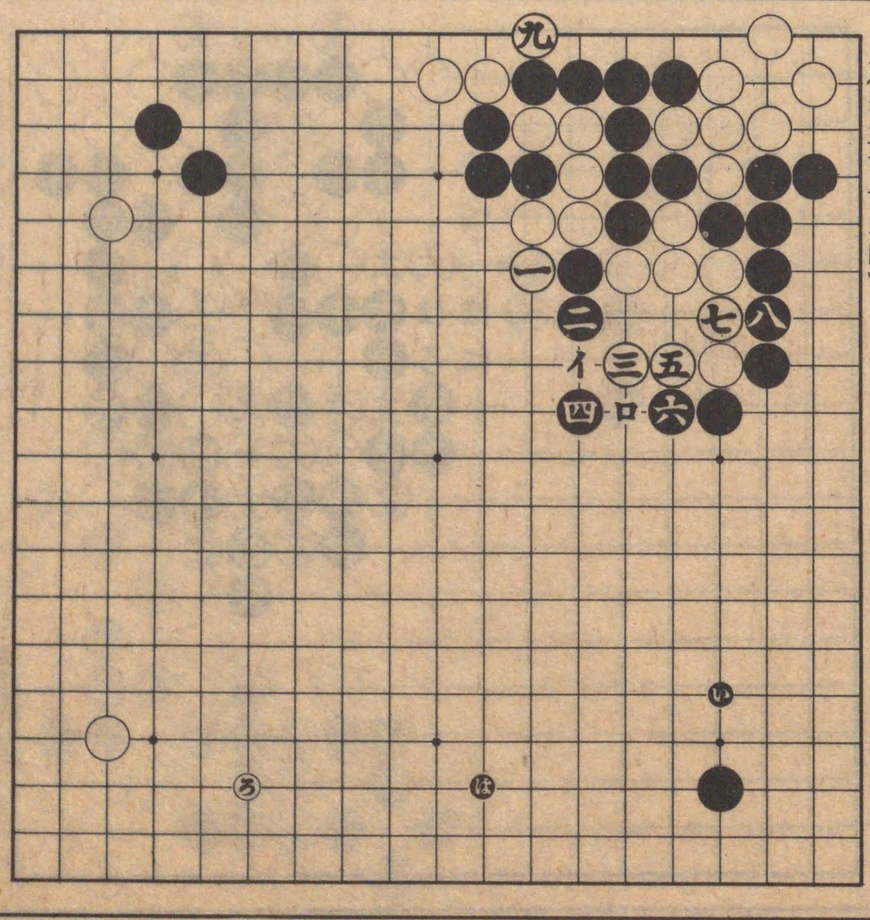


（第三百十三圖）

（第三百十四圖）

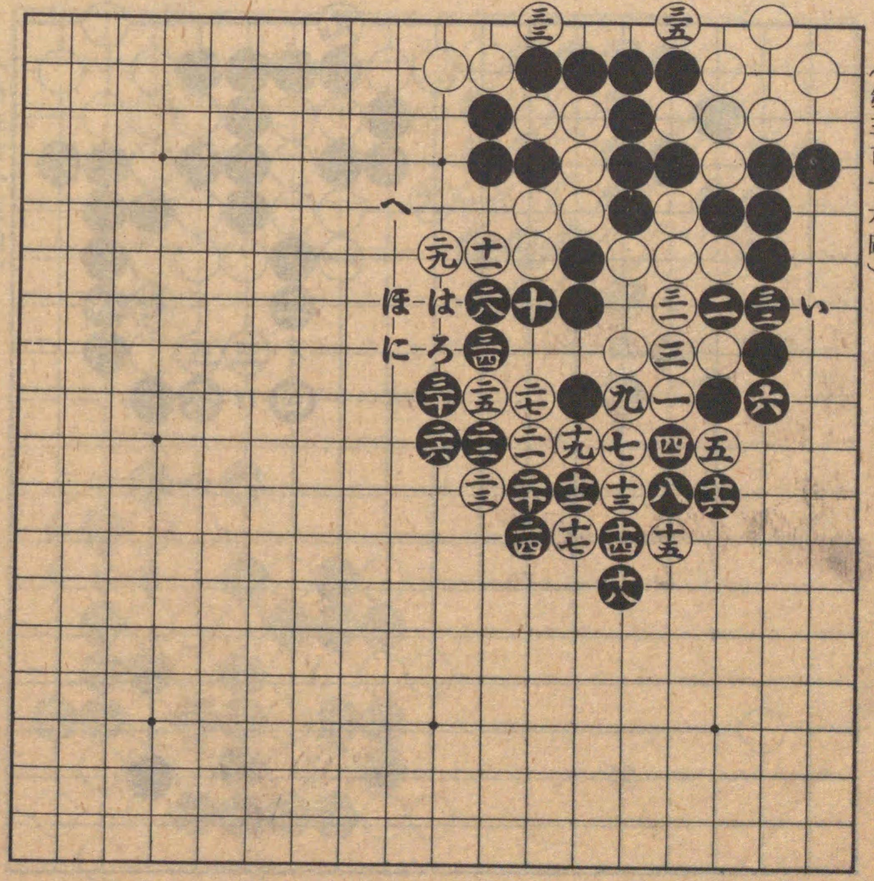
第三百十五圖　前々圖に於ける白一の手で本圖の如く一と曲れば結局上方の黒八子を纔に屠る事は可能であります。

黒二白三に次いで黒四と掛ける筋が頗る手嚴しい。白五、七は共に攻合ひの關係上已むを得ず、九と綽ねて攻合ひに勝つのですが黒イ及びロと締付けの利く結果は白の獲たる實利が三十目を超えるとは觀られざるに反し、黒の中央に於ける外勢の厚且つ壯を極めたる、寔に同日の談ではありません。例に依り想定の布陣を假れば白九に次いで黒いに白ろ黒はと運ぶものとし大勢の優劣は自明に過ぎない。



（第三百十五圖）

第三百十六圖　前圖に於ける白**五**の別法として本圖の如く**一**と腹れて打ちます。黒**二**乃至白**三一**の手順が所謂退引ならぬものである事に注意する。就中黒**四**、**十二**、**二二**等々特に嚴しい打方であり白が**五**、**十五**、**十七**、**二三**等々の切りを入れたのは餘義無いとは言へ忍ぶ可からざる形であります。結局**三三**、**三五**と言ふ事になつては黒八子を取らざるに如かず、前圖よりも數段白の劣つた結果である。又黒は**三二**の手で**三四**に突當り白**三一黒い**と受けるも良く、更に圖の白**三三**の手で**ろ**に綽出して來たならば黒**は**白に黒**ほ**と押出し次には黒**三四**と黒**へ**との兩睨みとなる。

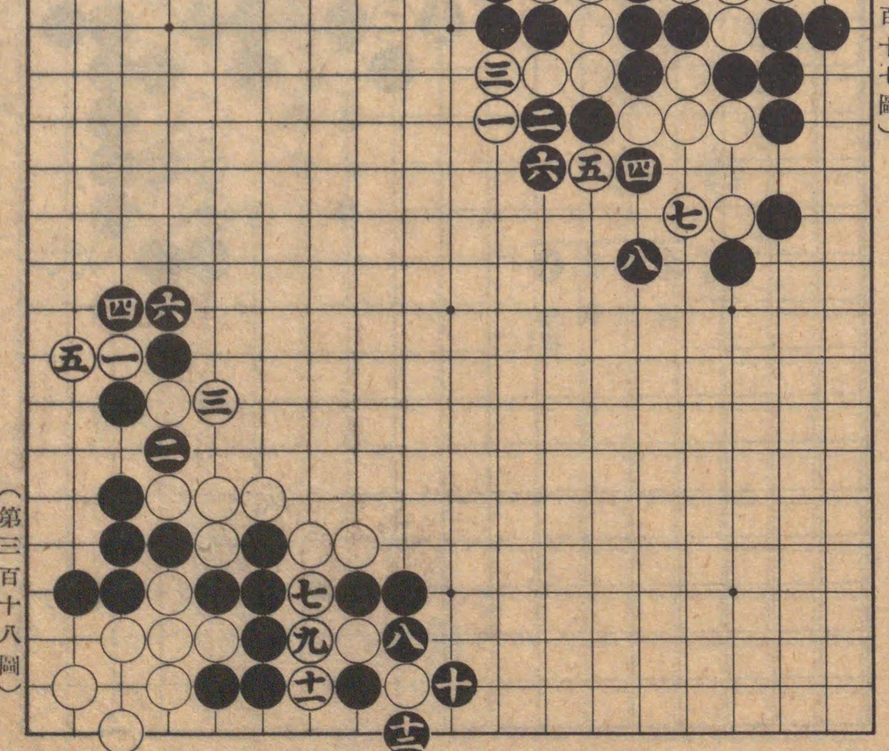


（第三百十六圖）

第三百十七圖　前々圖に於ける白**一**の手で本圖の如く**一**と尖めば一見凌げて居る様ですが、黒**二**乃至**八**にて攻合ひは白が足りず、是は全く問題外であります。

第三百十八圖　第三百十二圖に於ける白**三**の手で本圖**一**と切りを入れ其の方に勢力を下してから**七**と遮らうとする。黒は**二**乃至**六**と應じ實利を確かめた以上、既に數次指摘した様に白**七**の時黒**八**と外から切り、六子は捨てゝ**十**、**十二**と振換る迄です。

黒は**二**以下と**八**以下と兩方で利益を得て居り、後手とは言へ聊かも不滿がありません。

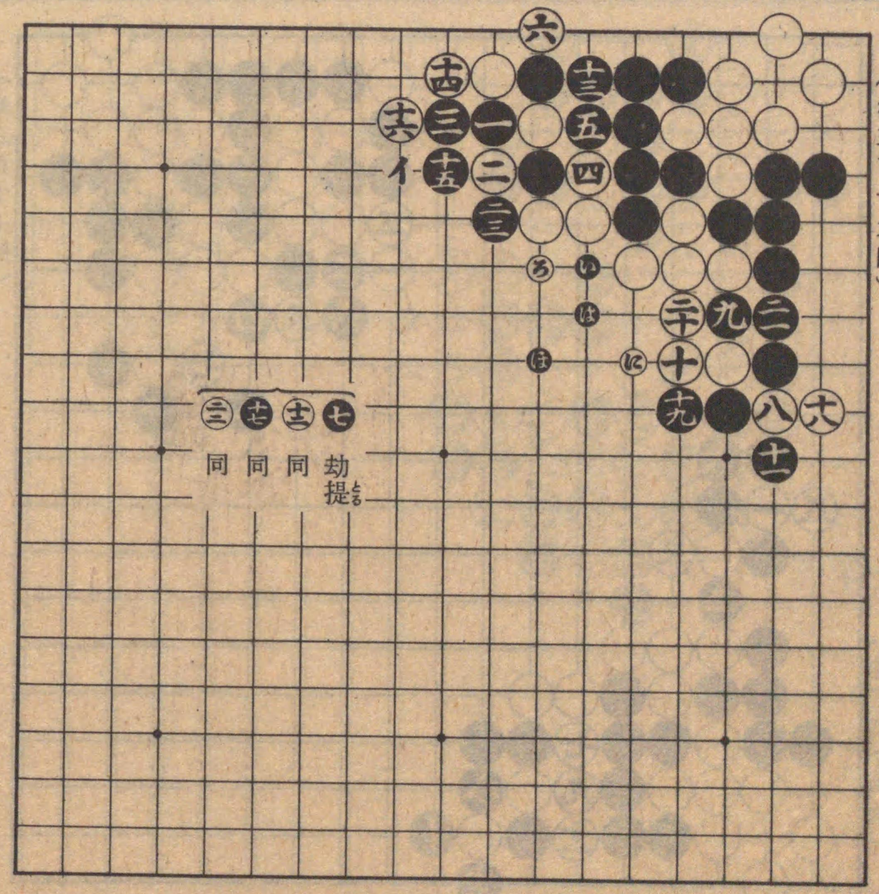


（第三百十七圖）

（第三百十八圖）

第三百十九圖　第三百十五圖以降の諸圖の如く如何に黒が外勢の厚壯を築いても白に實利を與へては萬一にも耐へられないと言ふならば、又四圍の狀勢が前揭諸圖を黒に容るさぬ樣な事が若しあるならば、第三百十二圖に於ける黒**二**の手で本圖の如く**一**と切ります。是は上方の黒數子を助けて打つ事となる。白**八**以下の應酬に既出第二百五十三圖以降との差が指摘されるのです。なほ白**十**に就いては次圖に注意します。

白**二十**に關し第三百二十二圖參照。黒**二三**に次いで白若し二子を粘げば黒**い**以下符號の示す順序で白の潰れと成る。最も簡明です。尤も黒は



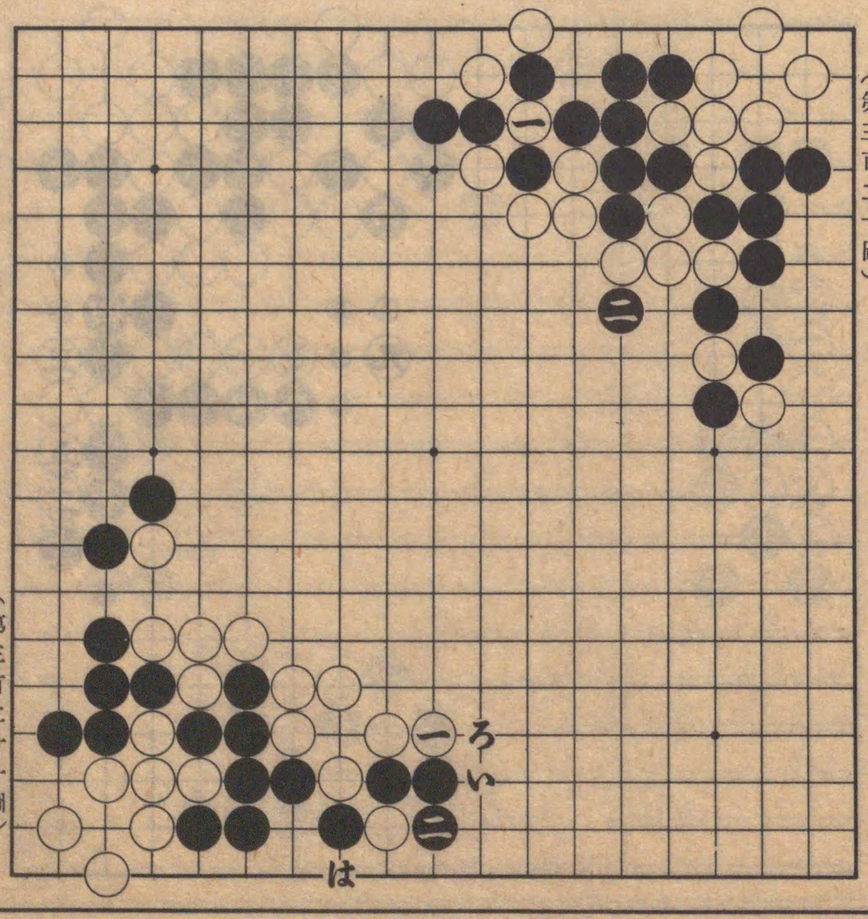
（第三百十九圖）

少しく緩いを承知ならば**二三**の手で**イ**と曲る位でも差支へありません。

第三百二十圖　前圖に於ける白**十**の手で本圖**一**と直ちに劫を提る事を急ぐと、劫立を兼ねて黒**二**と飛頂けて打たれる樣な筋があり、同時に續く白の劫立に差を生ずる意味がある。

高級戰術に屬しますが、是は念の爲に揭げるに留める。

第三百二十一圖　前々圖に於ける白**六**の手で若し本圖**一**と押すやうな事ならば黒は勿論**二**と抱へて解決を急ぎ滿足です。此の手で**い**と行びるなどは白**ろ**の押しを打たれるし、猶白**は**の劫味を狙はれる不氣味も後迄殘るのが好ましくない。

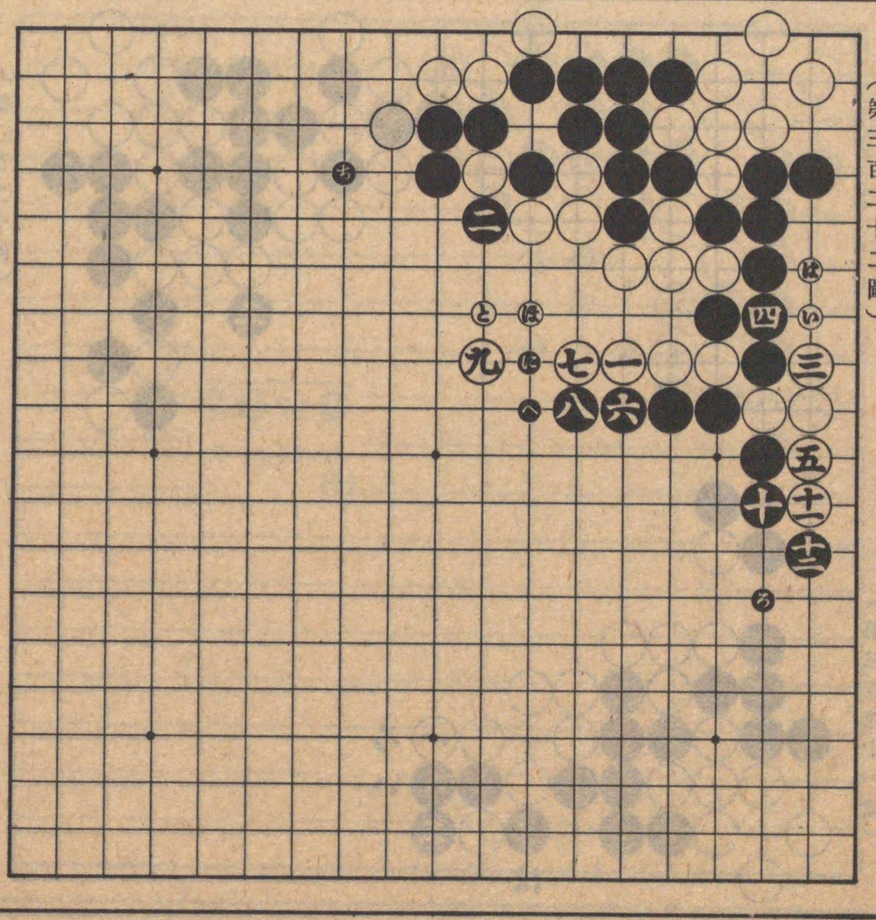


（第三百二十圖）

（第三百二十一圖）

第三百二十二圖　第三百十九圖に於ける白二十の手で本圖一と行びて打つ變化であります。此の時黑は右方の七子に拘泥せず二と劫を打拔き簡明を期して充分である。但し黑四は捨てるにしても斯く粘いで種々の利かせを殘す可き處です。以下黑十二の約へ迄、其の手順は双方共に必然の運びであります。

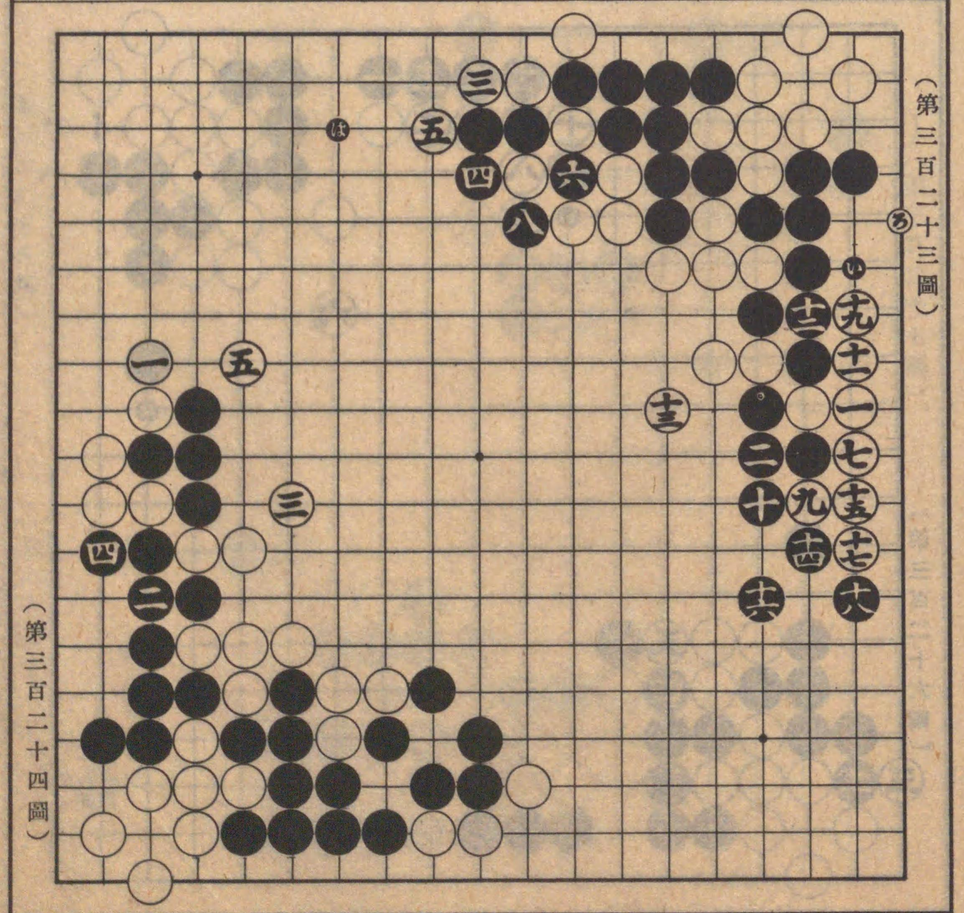
十二に續いて白ぬ黑ろの時白はと再び屈服せねばならず是を怠ると黑からはの點に約へられ攻合ひは白が足りません。斯くして白はに次いで黑にに白ほ黑へ白とを後、黑ちと飛ぶか九の一路下を押すか形勢に依り取捨して宜しい。



（第三百二十二圖）

第三百二十三圖　本圖は第三百十九圖に於ける白十四の手の變化として單に斯く一と下つて見ました。此處では黑も二と粘ぐ外ありません。

乃で白三乃至七となつた時、黑は八の手で十五に約へる事も出來ますが圖の如く平易に八と打拔いて惡くない。白九乃至十九に次いで黑い白ろで黑九子は取られるけれど、白の方は是を屠つたが故に中央は却つて不安であり想定の布石に於いて黑はと詰めて居られても得失は自ら明瞭であります。白の實利は三十目を出て居ません。まだしも白としては十一の手で十四に行び次圖の如く黑を活かして打つ方が優る位である。



（第三百二十三圖）

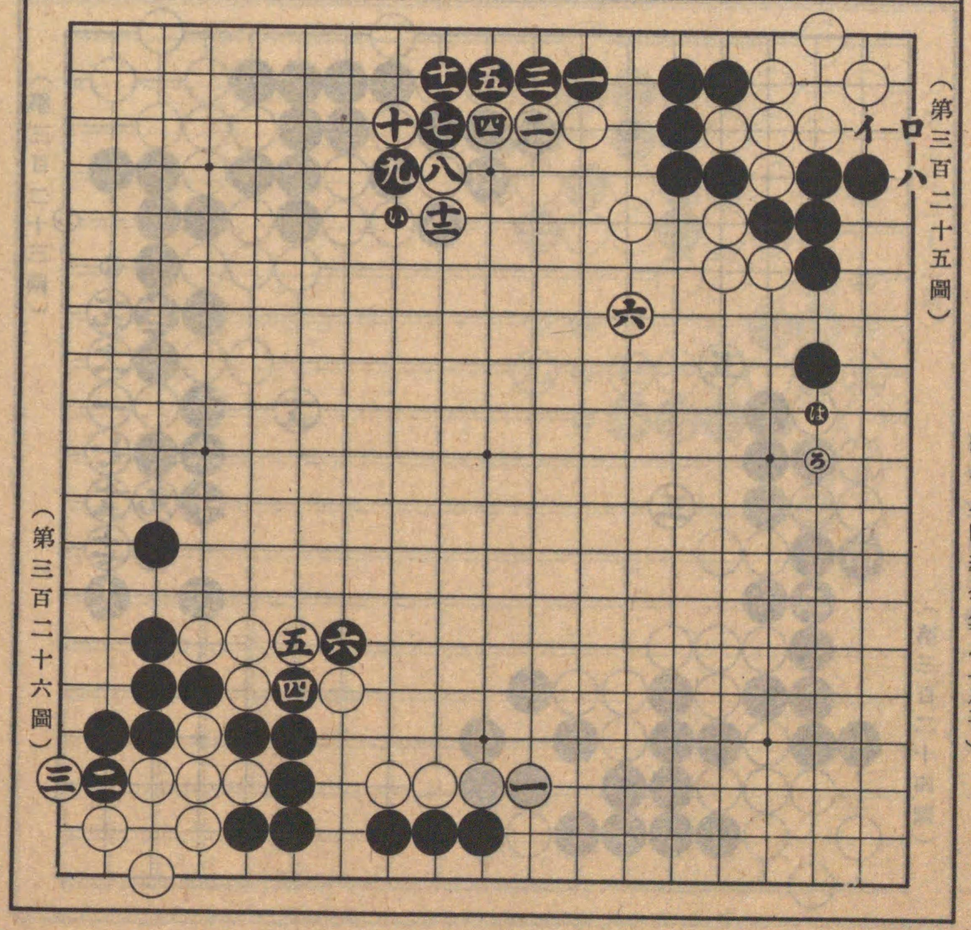
（第三百二十四圖）

第三百二十五圖　遡つて第百五十圖に於いて黒七と頂けた時、白二、四と本圖の如く穩かに引けば黒は透かさず五、七、九と二段に綽上げて行くのです。但し白六にて猶も七に引く變化には次の三圖がある。

白十以降は左上隅方面の配置にも依る事ですが十二に次いで黒(い)と押すか又九の一路左に引くかの内です。

一方白(ろ)と迫つて來ても黒(は)と突當つて置きさへすれば黒イ、ロ、ハ等が皆利いて居るので黒に不安は絶對にありません。

第三百二十六圖　白一の引きに對し黒は先づ二を利かせてから四、六と出切る。續いて次圖である。



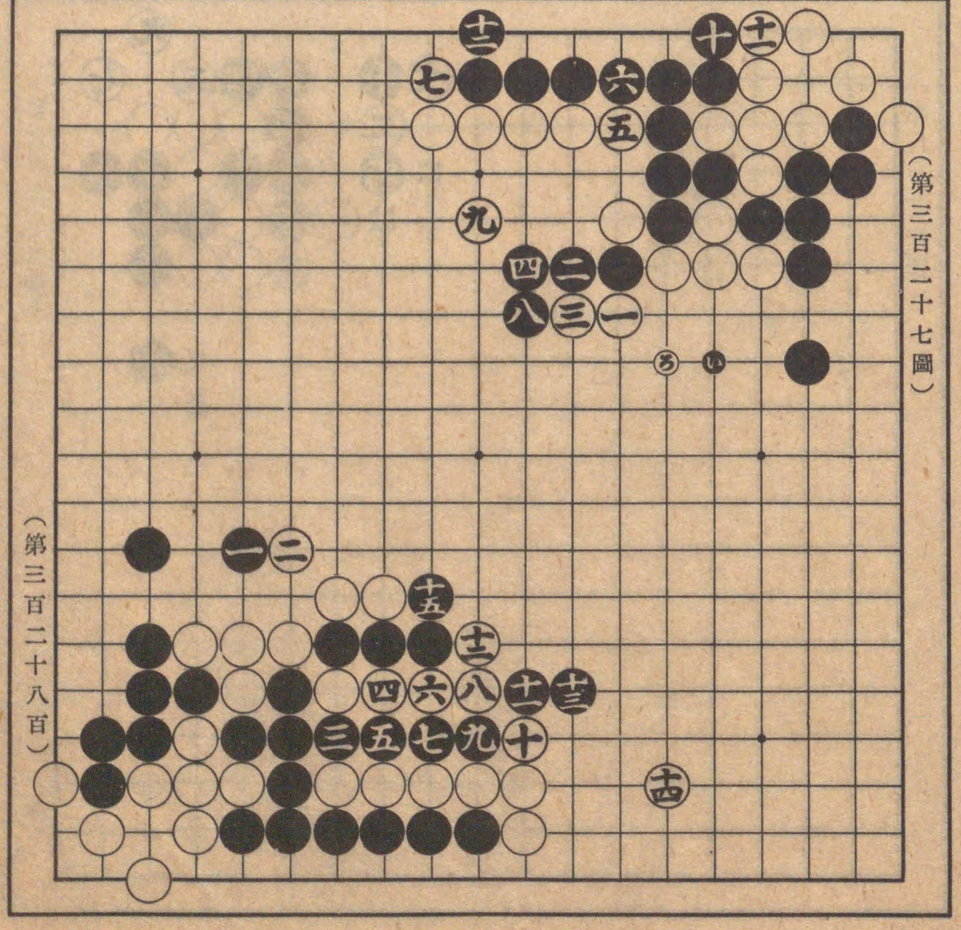
（第三百二十五圖）

（第三百二十六圖）

第三百二十七圖　前圖に續いて白一より七迄は必然の運びです。此處で黒には次圖三、五と出る打方もあるが、簡明を主とすれば本圖の如く八と曲るに限る。但し夫れに先だつて黒(い)白(ろ)の交換は了して置く方が働きます。白九は五の一路下の缺陷を補つて働かせた筋である。

黒十、十二と然しながら括きて終へば不安は白の側だけに存する事となるのが否定されません。

第三百二十八圖　本圖の如く黒三乃至十一と出切つて挑戰するのは四圍の狀況にも依る事多く兎も角も非常に力量を要するので定石として揭げる可き限りでない。



（第三百二十七圖）

（第三百二十八百）